
ゼロ戦才人 第3部 鉄の嵐

山口多聞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロ戦才人 第3部 鉄の嵐

【Nコード】

N2884E

【作者名】

山口多聞

【あらすじ】

アルビオンとの戦争も終わり、平和になったかのように見えたハルケギニア。しかしそれは東の間の平和にすぎなかった・・・

プロローグ（前書き）

ついに第3部です。ここからはさらに原作から逸脱し、ミリタリーバカである自分の趣味が爆発すると思うので、原作以外認めない人は読むことをお勧めできませんので。
では第3部スタートです。

ブローグ

その日もトリステイン王国の首都トリスタニアは、いつもどおりの朝を迎えているかのように見えた。しかし、どこか街全体を包む空気はいつもより高ぶった物であるかのように市民の多くが感じていた。

まあそれも当然と言えた。この日はトリスタニア近郊にある平賀伯爵領内の義勇軍基地でハルケギニア各国の王や国家元首を招いての観閲式が行なわれるのだ。そして市民たちが何よりも興奮したのは、今回の観閲式では一般市民向けの観覧席として、一般解放席が設けられた事だった。

これは才人の父親であり、義勇軍トリステイン方面軍司令官の才助が行なった一般市民へのパフォーマンスだった。

現在義勇軍では不足する各部隊の兵士を現地採用兵（主に平民）で賄うようになっていたため、志願兵の募集を促進する意味からこの処置が採られた。

それに対する市民からの反応は勿論好評であった。何せ先月まで行なわれていたアルビオン解放戦争で事実上の主役を演じた英雄たちの妙技を直に見られるまたとない機会なのだ。

観閲式が始められる予定は正午。そのため市民達は朝食を済ませると、次々とピクニックよろしく弁当を持って、家族で義勇軍基地のほうへと歩いていった。

一方その頃義勇軍基地では、今回の観閲式で使われる飛行機や戦

車が入念な整備を受けていた。王様たちや一般市民の前でエンストや墜落を起こしたら、それこそ末代までの恥さらしである。特にこの世界の住民は機械に対する理解力が乏しいからなおさらだった。何か起きたら全て人間のせいになれるのは目に見えているのだ。

そうならないために、今回はアントン島や「にぎつ丸」から派遣されてきた兵士たちが忙しく動き回っていた。それに混じって、現地採用の新米兵士たちも先輩兵士たちに教わりながら、慣れない手つきで整備作業を手伝っていた。

もちろん、この作業にはあらゆる武器を扱える『ガンダールヴ』である才人も行なっていた。彼の場合ルーンの力で武器の状況が把握できる。だから故障や整備不良の箇所もすぐにわかった。

整備をする兵士達は、才人から故障箇所などを指摘されると、すぐにその場所の整備を行なっていたため、効率よく整備を行なう事が出来た。もっとも、固定化の魔法を掛けられているので故障箇所は限定的な部位で、かつその数も比較的少なかったが。

そして才人はその作業を終え時間を確認すると、その場を離れて司令部内に設けられた来賓室へと向かった。この来賓室と言うのはその名の通りお客を向かえるための部屋だ。ただし、今いるのは今日観閲する予定の王族ではなかった。

来賓室の中には、話の相手をする才吉、才助と向かい合う形で2人の人影があった。1人はピンクのブロンドが特徴の美少女。言わずともわかるが才人のご主人であり、伝説の系統『虚無』の担い手であるルイズだ。そしてその隣に座るもう1人が問題だった。50歳ぐらいの中年男性。ルイズの父親であるラ・ヴァリエール公爵だ。

ラ・ヴァリエール公爵は本来はこの観閲式に出席する予定はなかったが、先週急遽参加を決めたのであった。そして彼はものすごく機嫌が良かった。

「おはようございます。ヴァリエール公爵。」

才人は部屋に入ると彼に向かって頭を下げてお辞儀した。

「おお！才人君。今日の観閲式には君も参加するそうだね。どうか我々に素晴らしい演技を見せてくれたまえ！！楽しみにしているよ！」

そう笑いながら言う公爵の表情は満面の笑顔だ。

「は、はい。」

（うう、そんな期待されると逆に困る。）

心の中でそんなことを考えるが、もちろん表情には億尾も出さず、ただ黙って1回お辞儀をすると、ピシッと敬礼を行なって返礼した。

そんな彼をルイズが心配そうに見守っていた。しかもその表情には、それとは別の不安の色がかなり濃く混じっていた。

才人は頭を切り替えて、才助に向かって言った。

「父さん、飛行機と戦車のほうは準備完了だよ。後は王様たちの到着を待つだけ。だからそろそろ行った方が良いと思うよ。」

「ああ、もうそんな時間か。貴賓席の準備も万端か？」

「うん。」

才人が頷く。

「そうか。ではヴァリエール公爵、私はこれから到着する元首の皆様方を案内する義務がございますので、失礼させていただきます。」

「そうですか。御苦労さまです。」

才助はそう挨拶を交じわすと立ち上がり、ヴァリエール公爵に一礼すると、才人を伴って貴賓室を出た。

「いやあ、あの人と話をしている間はずっと緊張しっぱなしだったよ。相手は一応公爵だからね。言葉に気をつけないとならん。」

部屋を出て歩き始めると、才助が肩の荷を降ろしたかのように言った。それに対して才人が物凄く不満そうに言う。

「父さんはまだ良いよ。俺なんかルイズの婚約者にされちゃったんだよ。あの人の前に立つと緊張どころじゃないよ。さっきも心臓が飛び出す思いだったよ。」

才人は1週間前に、ラ・ヴァリエール公爵家で起きた事を思い出していた。

「ハハハ。そうか。まあ気楽に行けば上手くいくさ。」

才助は緊張を解きほぐす意味からか、楽観的なことを言った。

「そついうもんかな？」

「そついうもんだ。じゃあ、がんばれよ。」

才助はそう言つて才人とわかれた。才人はこの後飛行機に乗るために、今来ている制服から飛行服へと着替える必要があり、更衣室へと向かうのだ。

「たく、父さんも他人事だと思つて。」

才人はぶつくさ文句を言いながら廊下を歩いていった。すると、しばらく歩いた所で彼に声をかけてくる少女が現れた。

「おはよう才人。」

「やあテファ。おはよう。」

彼の前に現れたのは、頭に赤十字のマークが入った帽子を深々と被り、看護士用の純白の服を着込んだ、美しい金髪を持つ少女だった。その姿は白衣の天使そのままだった。臨時看護婦のティファニアだ。

「才人は今からどこへ行くの？」

「飛行機に乗るために着替えに行くんだ。」

「そう言えば、才人も今日の式に出るのね。がんばってね、私や子供たちも応援してるから。」

テファはニコツと極上の笑みを浮かべた。その笑みに随分と癒さ

れる才人。

（胸も良いけど、テファの笑顔も良い！・・・ていかんいかん。こんなことを考えているのがルイズにばれたら、きつと有無を言わさず『虚無』を喰らうな。）

そんなことを考えていると、不思議に思ったテファが素直に聞いてきた。そして才人は意識を現実に戻した。

「才人、どうかしたの？」

「え！？いや、なんでもないよ。じゃあそついうわけで俺行くからもしケガした時はよろしく頼むな。」

才人がそう言うのと、テファは再び満面の笑みを浮かべた。

「うん、任せておいて。」

そして才人は足早に、更衣室へと向かった。

すると、その途中で窓の外を何気なく見ると、ユニコーンに引かれた馬車が何台も基地内に走りこんでくるのが見えた。

「お偉いさんの到着だな。」

才人はその光景を一瞥すると、そんな呟きを漏らした。

プロローグ（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

見る者と見られる者

義勇軍基地に次々と各国から招いた王達が到着した。トリステインのアンリエッタ女王、アルビオンのウェールズ国王はもとより、帝政ゲルマニア皇帝のアルブレヒト3世などハルケギニアの顔とも言うべき人物達が、ユニコーンに引かれた豪華な馬車で乗りつけ、才助に迎えられて挨拶し、今回特設された観閲席に案内されていく。

義勇軍の実力を知るアンリエッタとウェールズはそれぞれ笑顔で、才助と挨拶を交わしてくれた。アルブレヒト3世は、一応形式どおりの挨拶はしたが、婚姻を破棄されたアンリエッタが側にいるのもあるだろうが、やはり平民軍隊となめているようでどこか不機嫌そうに見下した目をしていた。まあ今回の式はそうした意識の払拭も目的の一つに含んでいた。

またロマリアからはさすがに教皇が来るということとはなかったが、その全権代理としてカイオ・ジュリオ・チェザーレと名乗る若者が来ている。彼の場合は見る物全てに興味を示していた。

ちなみに、才助はその名前に以前シェフィールドと同じような感想を抱いた。つまり彼の名前も地球上の人物名で存在し、さらに軍艦の名前でもあった。ちなみにその軍艦は第二次大戦中のイタリアの戦艦で、第二次大戦終結後に賠償艦としてソ連に引き渡されて、その後事故で爆沈したというやはり縁起が良いと言える名前ではなかったが。

閑話休題。

ほぼ予定通りにつくそれら王や代表たちとは対照的に、ガリア王

ジョゼフだけは予定の時間を過ぎても現れない。一応観閲式の始まる時間まではいくらか余裕があるから良いが、遅れるなどの報せは入っていない。明らかに無作法な行為である。

「所詮は無能王。やつに道德のわきまえなどあるまい。あのような奴ほつとけば良いのだ。」

なかなか現れないジョゼフに対して、アルブレヒト3世などはそんなことを言い始めた。もちろん、才助たちからしてみればどんなに失礼な人間でも王族に対して無礼なことはできないが。

そしてようやく彼が現れたのは、予定より30分も過ぎてからだった。もちろん、才助はそんな彼も丁重に出迎える。

止まった馬車の扉が開くと、中から青い髪が特徴な美しい男性が降りてきた。ハルケギニア内では魔法が使えないことから無能王というありがたくない名で呼ばれる現ガリアのジョゼフその人であった。

「お待ちしておりました。ようこそ我が東方義勇軍トリステイン方面軍トリスタニア基地へ、ガリア王国国王ジョゼフ陛下。私は義勇軍トリステイン方面軍の平賀才助少将であります。」

ピシッと敬礼する才助。するとジョゼフは満面の笑みを浮かべて大げさに言う。

「おお！本日は私のような者を御招待いただき感謝しております。アルビオンでの貴軍の活躍は我が国にまでとどろいております。今回その実力を直に見せていただけたとは、大変光栄です。楽しみにしておりますぞ。」

「こちらこそ、王陛下にその様に喜んでいただき大変満足であります。」

才助も笑顔でそう言い返した。もっとも、それは表面上でのことだ。才助はスパイ情報でガリア、とくに王室関係での不審な動きを掴んでおり、その中でもジョゼフに対する情報に警戒心を高めていたからだ。

「それでは、私はこれから部下たちの元へ行かねばならないので。失礼します。マルシェ兵長、ジョゼフ王陛下を席にご案内申し上げます！！」

彼は部下の兵士に命令を出すと、一端その場を離れた。

途中で後ろを1回振り返ったが、その時はジョゼフがアルブレヒト3世に先ほどの調子で何かを話し掛けている所であった。その内容はアルブレヒト3世の不快な表情を見れば、多少推し量れる物だった。

才助が向かったのは、曲技飛行に挑むために格納庫から引き出された飛行機の駐機している場所であった。今回式典での飛行に使われるのは旋回性能が高くアクロバットにもってこいの「隼」戦闘機3機と、重武装のため実弾演習で使われる「紫電改」、「疾風」戦闘機1機ずつ、さらにTBF「アベンジャー」雷撃機3機である。この内「紫電改」と「疾風」は最近になって義勇軍に組み入れられた機体だ。

2機とも既に胴体の国籍マークはトリステイン王室軍の百合マークに描きかえられている。義勇軍で使っている地球製の機体は、原

則として胴体を現在の帰属国のマークに塗り変えて、主翼を元の国のマークのままですうことになっている。

主翼のマークについて、「紫電改」は日の丸だが、「疾風」は青い三角形の中心に仏像が描きこまれた見慣れないマークだった。まあ見慣れていなくて当然だが。その国は才助たち世がいた世界にもこのハルケギニアにも無い国なのだから。

そして特徴的なのは、「紫電改」戦闘機には、隊長マークを示している黄色の線が入っていることだった。

才助は機体の側で談笑している、その「紫電改」と「疾風」のパイロットに近づいた。

「菅野少佐、グエン大尉、準備は大丈夫ですか？」

菅野と呼ばれた男は20歳代中盤と見える日本人男性、グエンと呼ばれた男は東南アジア系の20代前半の男だった。

「これは平賀少将。はい、万全です。」

「機体のチェックは終了。どこも以上ありません。いつでも飛べます。」

菅野と呼ばれた男が立ち上がって才助に敬礼した。送れてグエンと呼ばれた男も敬礼する。その敬礼はしっかりした物だった。2人が軍人、もしくは敬礼をする仕事を長年しているのがわかる。もちろん才助もそれに対して答礼する。

「それは大いに結構。」

そして手を降ろすと才助は苦笑した。

「どうかしましたか？」

グエンが聞いた。

「いや、まさかこんなファンタジーな世界で作った義勇軍司令官として、有名な343空のエースパイロットと、異世界のパイロットの方とこんな形で敬礼を交わしている事がおかしくて。しかし、お2人にいきなりこんなことをさせてしまって申し訳ない。」

すると、菅野・旧日本帝国海軍大尉の菅野直少佐も苦笑した。

「私だって今こうしているのが夢ではないかとまだ思いますよ。けど、これは確かに現実です。まあ、私としては確かに日本へ戻りたいと思えなくてもいいですが、パイロットとしての腕が活かせるなら今はそれで満足です。」

菅野に釣られるように、グエン・元メルクワット王国空軍中尉のグエン・ファン大尉も言う。

「私も菅野少佐と同意見です。本来なら行き場の無い私たちがこうして自分の居場所を用意してもらえたんですから。それに、異世界とはいえ王族の前で自分の腕を見せられる機会などそうそうにありませんし。」

2人が笑いながらそう言う姿に、才助の心も和む。

「そう言ってもらえるとこちらも救われます。では今日の曲技飛行、

よろしく願います。」

「お任せください。」

才助は2人との話を終え、その場を離れた。そして他の兵士たちの所も回り、激励していった。これも指揮官の務めであつた。そして、ハルケギニア史上でも特筆すべき観閲式が始まる。

見る者と見られる者（後書き）

御意見・御感想等お待ちしております。

予告どおり自分の趣味が爆発しております。菅野少佐についてはミリタリーを噛んでいる方ならわかると思いますが、グエン大尉の方はおそらく分かる人がいないと思います。その元ネタについてはいずれ紹介します。

観閲式

正午過ぎ、いよいよ式典が始まった。まずは総司令官である才吉が集まった王や元首たちに向けて挨拶を行なった後、用意されたポールに各国の国旗と、義勇軍の正式旗である旭日旗が掲揚された。

それに続いて最初の演目である歩兵の行進が行なわれた。

義勇軍には現在の所専門の歩兵部隊は一個中隊150名しかない。いずれもごく一部を除いては平民からの志願兵で、アルビオン解放戦争前に集められた人間だ。結局訓練が間に合わず、アルビオンとの戦争には出なかったが。

150名と言う戦力はかなり少ないが、義勇軍の財政問題もあり、兵器の生産能力も考えるとこれが限界だった。

歩兵はみな自衛隊の戦闘服を模した野戦用軍装に身を包み、肩には小銃を抱えている。もちろんこの世界で主流の火縄銃やマスケット銃ではなく、旧日本軍の99式小銃をモデルに開発した新式銃だ。ボトルアクション式だが、弾込めを一々せずに7発の弾丸を発射できる。

義勇軍歩兵の制式装備はいずれもこのハルケギニア世界の通常歩兵のレベルからすれば相当に高い。例えば相手がメイジでも、小銃によるアウトレンジ攻撃で倒せるだろうし、さらに持っている手榴弾等を駆使すれば、恐れられているエルフにも勝てる。というのが部隊内での専らの噂であった。

ちなみに頭にはもちろん、地球では常識となっている鋼鉄製のヘ

ルメットを被っている。

地球の水準から見れば、60年は後れた軍隊の姿であるが、この世界から見れば見たこともない出で立ちの軍隊である。各国の元首も、そして距離は離れているが、今回設けられた一般市民用の解放席に陣取るトリスタニア市民たちも、勇壮なマーチを背景に歩くその姿を、興味深々で見ていた。

ちなみに、バックで流れている音楽はスピーカーで流されていた。義勇軍には軍楽隊という贅沢な代物はないのだ。

歩兵の行進が終わると、続いては戦車部隊による行進が行なわれた。現在トリステインにある戦車は、そのほとんどが旧日本陸軍の戦車で、今回の行進には四式中戦車1両を含む5両が参加していた。

ただ1両だけ、一番後ろを走るM24「チャ・ファイ」戦車だけがアメリカ製だった。この戦車はアルビオン解放戦争後に発見された物である。

乗員は隊長である長田中佐を除いて全員がトリステイン内から集められた志願兵で、一部は戦争に参加している。今日までみっちり訓練を行なっていたので、行進はしっかり様になっていた。

各戦車のキューポラ（戦車の砲塔の上にあるハッチ）からは、車長が腰から上を出して、居並ぶ王たちや、遠巻きにして自分たちを見つめる群集たちに敬礼を送った。

もつとも、戦車隊の演目はこれだけではない。行進を終えると、その内の数両は走り去らずそのままその場に残る。

戦車から少し離れた場所には、訓練用の標的である空荷の馬車が数両引き出された。

「これより戦車隊による実弾発射を行ないます。皆様、射撃時の閃光と発射音にご注意ください。」

才吉がマイクからスピーカーを通して全ての人間に警告を促した。そして持っていた緑色の旗を振った。その途端。

ドドン！！

3両の戦車がほぼ同時に射撃を行なった。戦車から王達が並ぶ席までは約60m、群集たちのいる解放席までは100m程の距離をおいていたが、それでも大きな轟音と爆風が届く。

それだけでも民衆達には驚きなのに、さらにほんのコンマ数秒後には、砲弾が標的の馬車に命中した。

ドグワーン！！

木造の馬車は砲弾が命中すると、それこそ文字通りの木っ端微塵となった。凄まじい爆炎とともに、先ほどまで馬車だった部品が宙に舞う。

「おお！！」

群集からはどよめきが起こる。また王たちの間からはそこまで大きくは無かったが、歓声が起きる。鉄球の砲弾を撃ち出す事しか出来ないハルケギニアの砲弾ではこのようにはいかない。まさに地球製兵器とハルケギニア製兵器との威力の差を見せ付けるワンシーン

である。

そのためか、次の瞬間にはゲルマニア皇帝のアルブレヒト3世は渋い表情をした。トリスティンとアルビオンがこのような兵器を手に入れたことを実感し、相当な警戒心を抱いたらしい。

一方、ガリア王のジョゼフは対照的に、まるで何か面白い玩具でも見たかのように、ただ笑顔で喜んでいるだけであった。

そして実弾発射を終えた戦車はそのままキャタピラとエンジンの音を残して、場外へと出て行った。

戦車隊の実演が終わると、次はいよいよ航空部隊の出番である。才吉は再びマイクを持って言う。

「続きましては戦闘機隊による曲技飛行を実施いたします。」

才吉は、今度は手に持つ旗を青い旗に持ち代えて、それを振った。

旗を振ったのを合図として、この演習場ではお馴染みとなっているバババというレシプロエンジンの始動音が聞こえてきた。そして先ほどまで戦車が動いていた練兵場の芝生の上に、3機の「隼」戦闘機が現れ、一端止まって軽く暖機運転を行なった後、エンジンを全開にして滑走を開始した。

3機の「隼」は綺麗に等間隔に並んだまま、無事に離陸した。そしてそのまま急角度でグングン上昇していった。

今回「隼」を操縦するのは、「にぎつ丸」に乗っていた旧日本陸軍パイロットの中でも腕の良い者たちである。その動きは一系乱れ

ぬ物だった。

3機は充分な高度まで上昇すると、3機一斉に機体を裏返した。編隊での同時宙返りである。さらに、宙返りが終わると今度は3機がバラける。

そして所定の位置に達した所で、今回の観閲式のたために取り付けた煙幕発生装置を使って人工的に飛行機雲を作る。そしてそのまま動き回り、大空をキャンパスにして壮大な絵を描き出す。

お互いに飛行コースが交差する所もあり、難易度の高い操縦テクニックが必要となるが、パイロットたちは衝突することもなく、絵を描き切る。

3機が煙幕を切った時、空に出来上がったのは綺麗な五角形の星だった。その瞬間群集の中から拍手が起きた。

こうして曲技飛行は満点の成績で終わり、つづいて実弾演習のために、菅野少佐たちが乗り込んだ「紫電改」と「疾風」戦闘機が舞い上がった。

2機は先ほど戦車隊が行なったのと同じように、引き出された標的用の馬車を搭載していた機関銃で破壊し、やはり地球製の武器が持つ高い威力を、見る者全てに見せ付けた。

そして最後に、才人も乗り込んだ「アベンジャー」雷撃機が3機編隊で飛び立ち、式典会场上空を通過しながら、盛大な紙吹雪とアンリエッタ女王とウェールズ皇太子の写真が載ったビラを撒いた。

会場に詰め掛けた群衆の興奮は最高潮に達し、「トリスティン万

歳！」、「アンリエッタ陛下万歳！」のコールが起きた。

こうして義勇軍による観閲式は無事に終了した。

もっとも、それは表面上だけのことではあったが。

観閲式（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

作者はようやく原作を9巻まで読み進めました。残りも早く読もうと思っています。

ウエストウッド村 上(前書き)

ウエストウッド村 上

観閲式から遡る事3週間ほど前。才人はアルビオンの公爵となった曾祖父の才吉と、付いて来たルイズとともに、公爵領の見回りをしていた。見回りと言っても、公爵領という広い領地を見回るのである。しかも才吉は村や集落に着く度に、事細かに村の状況を村人から聞いたため、一日では終わらなかった。

1日目は何事もなく終了し、2日目も順調に見回りを進めていた。そして事件が起きたのはその日の昼の事だった。

才人たち一行は、最後の村であるウエストウッド村に到着しようとしていた。その時、突如として地響きが彼らの元に伝わってきた。

「な、何だ!？」

「何!？」

「地震!？なわけないよな。」

才人とルイズは突発事態に少々慌てる。才吉は冷静に今起きている事態分析しようとしたが、空中に浮遊しているアルビオンで地震なんて考えられない。というか地球のヨーロッパに近いハルケギニア自体、地震など滅多に起こらない。

取りあえず3人はそのまま馬を進めた。そして間もなく目的地であるウエストウッド村が見えてきたが、それとともにある物が視界内に入ってきた。

「あれって!？」

ルイズがそれを見て声を上げた。ルイズと才人には、それに見覚えがあった。

「マチルダさんのゴーレムだ!」

才人が叫んだ。確かにそれは以前『破壊の杖』をめぐる事件の時に見た、マチルダが土から作り上げたゴーレムに間違いなかった。

何かが起きているようだ。すぐに3人は馬を走らせた。だが間もなくそのゴーレムは崩れ去って元の土くれとなった。

そして才人たちが村に入った時、そこにいたのは村の端に杖を構えて立つマチルダと、恐る恐るその姿を少しはなれた所から見る1人の才人たちの同世代と見える金髪の少女、そして10人ぐらいの子供たちだった。

「一体何事だね!？」

先頭を進んでいた才吉が、馬から下りて訪ねる。

一方、少女と子供達は突如現れた貴族の一行の姿に仰天した。

「え!?!はい!?!ええと・・・」

驚きのあまり答えられないようだ。それを見てか、間もなく懐に杖を戻したマチルダが走り寄ってきた。

「これはこれは才吉さん。領地の見回り中ですか？」

「ああ。この村に立ち寄ろうとしたら君のゴーレムの姿が見えたから、何か起きたのかと思って急いで来たんだ。」

「驚かせて申し訳ありません。野盗がこの村に襲ってきたもので。幸い私のゴーレムを見ておっかなびっくりして引き上げていきましたが。」

マチルダが状況を説明してくれた。

「そう言う訳だったのか。しかし領地内で野盗か・・・本気で警察組織でも作らなきゃいけないかもしれんな。」

「!？」

才吉のセリフが理解できず、マチルダはただ不思議がるだけだった。

才吉との会話が終わると、今度は才人がマチルダに声を掛けて来た。

「マチルダさんが言っていた、お金を送っている村ってここだったんですか？」

「ええ。見ての通りの小さな村でね、子供しかいないから誰かが外からお金を送らなきゃどうにもならないわけ。」

「そういえば・・・」

才人とルイズはもう一度村を見回してみる。そこにあるのは10

軒ばかりの小さな藁葺き屋根の粗末な家だけである。これでは村と言っより集落だ。そして何かを生産できそうな物は見当たらなかった。自給自足さえ困難そうだ。

「それでこの娘がこの村の村長^こつて言ったら大げさだけど、一応最年長者で私の妹分のティファニアよ。」

マチルダが緊張して固まっていた金髪の少女を紹介する。

「え、ええと。ティファニアです。長かったらテファと読んでください。」

すると、１人で考え事していた才吉が、ようやく意識を復活させて彼女の前に出た。

「始めましてティファニアさん。私は新しくこの付近一帯を治める事となった平賀才吉です。一応公爵位を頂いております。以後よろしく。」

「こ、公爵様!!」

ティファニアが仰天した。公爵といったら爵位の最高位である。さらに才吉は彼女の手を取ると握手してきた。これはハルケギニアの世界ではありえないことである。

「ハハハ・・・そんな驚かずに、私が今の位を貰えたのは単なる偶然ですし、それに私は元は平民ですから。気楽に接してください。」

まるでご近所の人と話すような物言いに、テファの驚きはさらに大きな物となった。

「は、はあ・・・」

もうなんと返事すれば良いのか、テファはわからなくなっていた。あり得ない言葉を連発する才吉に、テファは完全に困惑していたのだ。

「まあそんなに緊張しないで。それと一応、紹介しておきましょう。曾孫の才人とその主人のルイズさんです。」

才吉に紹介されて、ルイズはすぐに。

「よろしく。」

と、答えたが。何故か才人からの返事がない。

才人がなぜ返事をしなかったのか。それは彼の意識がある物に釘付けになっていたからだ。彼の意識を奪っていたもの、それはズバリテファの胸だった。

この世界に来て、才人は随分とスタイルの多い人物を見てきたものだ。特にキュルケやシエスタはその筆頭と言えよう。しかし、目の前の少女はキュルケよりも大きな胸を持っていた。

もうそれはでかいとか大きいという言葉で説明することは出来ない物だった。既成概念を大きく超えていた。

（これはもう既成概念を超えている。こういうのを言葉で表すなら・・・革命・・・そう革命だ！！英語で言えばバストレポリューションだ！！）

そんな妄想を頭をフル回転させて考えていた。もちろん、そんな行為が長く続けられるはずがなかった。その数秒後にはご主人様からの手痛いお仕置きが待っていた。

「どこ見てんのよあんたは！！！」

「はぐわ！！！」

ルイズの見事なキックを喰らって吹っ飛ぶ才人。さらにルイズは波状攻撃とばかりに彼の体を蹴り始めた。

「こんの馬鹿使い魔が！！！」

ご主人さまからの手痛い折檻に、才人は謝る。それはもう必死に。

「ごめん、許して！！！」

しかしそんなことでやめるほど、ルイズは甘くない。というか言って悪いが胸にコンプレックス持っている彼女の前で先ほどのような行為をすること自体自殺行為と言えた。

「許さない！！！」

「うわあああ！！！」

いきなり始まったそんな風景に、テファと子供たちは啞然とし、才吉は笑い出し、そしてマチルダは才人に対していい気味というよくな視線を送っていた。

ウエストウッド村 上（後書き）

御感想・御意見等をお待ちしています。

ウエストウッド村 中

最初に予想外のグダグダが発生したものの、とりあえず場が落ち着いた所で、才吉を中心にして村で最年長のティファニアから村の状況について聞いていた。

「ふーむ、じゃあ大人は本当に1人もいないんだね？」

「は、はい。わ、私たちだけです。」

やはり公爵の前であるせいか、テファの声は心なしか上ずっていた。

才吉はそのことは無視して質問を続ける。

「それで大丈夫かね？さっきみたいに野盗が出たらまずいんじゃないかね？」

「ええ・・・まあ・・・」

そこで何故かテファは口籠ってしまった。才吉はその事については追求しなかった。こんな森の中、子供たちだけで暮らしているのだから何か訳があるのだろうと考えたからだ。

「まあ深く追求するつもりはないから、言いたくない事は言わなくていい。だが先ほども言ったとおり、子供だけでは危険もあるだろう。よかったらどうだい。ワシの屋敷にはまだ空き部屋もあることだ。そこに来ないかい？」

この申し出には、その場で聞いていた他のメンバーも仰天した。特に貴族階級出身のルイズなどからすれば、驚天動地の発言である。貴族が平民の屋敷で孤児を育てるなどハルケギニア史上あるまい。

「曾爺ちゃん、そんな簡単に言っただけ？ 子供って言ってもこの村には10人ぐらい居たよ！」

曾祖父の突然の考えに意義を申し立てる才人。

「あれだけの屋敷なら10人ぐらい大丈夫だろ？ ここに居てはせっかくの未来ある子供たちの能力も生かしきれないのではないか。だったら屋敷に来て、安全な環境の下で、最低限の教育は受けておいた方が良さそうだ。」

この世界では、日本のように小学校といった教育施設はまだない。だから平民の中には随分と文盲の人も混じっているようだ。もし識字率の調査をしたら凄惨な数値を叩き出すかもしれない。

「はあ・・・大変魅力的な申し出だとは思いますが。」

テファはまたも口籠ってしまった。それを不審に思ったルイズがたまらず声を掛けた。

「どうしてそこで黙るのよ？ こんなチャンス滅多にないことなのよ？ お言葉に甘えれば良いじゃない！？」

先ほども書いたが、貴族が平民に対してここまでの施しをするなどない。いわば破格の待遇である。だからルイズとしては素直に受け取るのが礼儀という物だ。なぜ目の前の少女が返答に困るか

理解しかねていた。

「まあまあルイズさん。そんな声を荒げずに。彼女にもそれなりの理由があるんだろう。」

その才吉の言葉に反応したのはマチルダだ。

「そうです。才吉さんの申し出は本当にありがたいのですけど。この娘には貴族の屋敷に行くのはちよつとまずい事情があるのです。」

続いてテファも言う。

「私も子供たちにはしっかり教育を受けさせてあげたいとは思いますが、私が貴方様の屋敷に入ると、厄介な事が起きるかもしれないので。」

そう言うテファの顔はどこか暗い。

「そうか。まあ私としても無理強いする必要もない。だが、もし申し出を受ける気になったら直ぐに知らせて欲しい。」

「はい。その・・・。」

テファがそこから先を言おうとした時、全員がそれに気付いた。

ブォーン！！

突然耳に入ってきた異音である。

「何かしら？」

聞きなれない音に戸惑ったのはテファである。しかし、他の4人には聞き覚えがあった。聞こえてきたのは間違いなく、義勇軍ではお馴染みのレシプロエンジンの音だった。

「エンジンの音・・・曾爺ちゃん、今日この辺りを飛行する予定の機体ってあった？」

「いや。今日は飛行訓練はないはずだが。」

戦争が終わったため、燃料の節約から現在義勇軍はなるべく航空機の飛行を控えていた。そのためこの日は飛行訓練のない筈だった。ちなみにこの燃料の問題だが、最近になってゲルマニア領内で原油の存在が確認され、購入と精製の準備に入っている所だった。

この世界では石油は昔の日本で臭水と呼ばれていたように、使用方法がよくわからない謎の物体状態だった。それを買収するというのだから、その領地の領主が首を捻ったのは言うまでもない。またそんなわけで買収する値段も地球の標準から見たら超激安値だった。もし現代日本の人間が聞いたら、泣くかもしれない。

閑話休題。

とにかく音はどんどん近づいてきた。才吉らは音の正体を確かめるため、話をしていたテファの家から一端外に出た。そして持っていた双眼鏡で空を見上げた。

ウエストウッド村は周りを森に囲まれているため、視界が少しばかり制限されている。そのため、双眼鏡を持っても中々見えない。

そしてようやく才人が発見した時には、それは村の上空に達する寸前だった。

「見えた・・・て、あれは!？」

才人の驚きの声に、才吉も急いでそちらに双眼鏡を向けた。またその他の人間も顔をそちらに向けた。

「「紫電改」・・・」

才吉が呟くように言った。

「紫電改」とは、旧日本海軍の局地戦闘機のことだ。昭和20年に実戦配備されたために生産機数は400機と少なかったが、小型で強力なエンジン、強武装、そして優れた運動性能は日本海軍最後の戦闘機としては充分すぎる性能だった。後に国会議員となった源田大佐率いる343航空隊が米軍機多数を撃墜し、優秀の美を飾ったのは特に有名である。

その「紫電改」戦闘機がなぜか異世界のハルケギニアに突然現れた。別に日蝕や月蝕が起きているわけでもないのに。

しかも。

「煙を吐いてる!!! 損傷しているみたいだ!!!」

才人が叫んだ。確かにその「紫電改」は主翼から黒煙を吐いていた。そしてそのままウエストウッド村上空を通過した。

通過した瞬間、才吉は尾翼と胴体に描かれた番号とマークを読み取った。尾翼の番号は343-15。マークは黄色のイナズマだった。

「ま、まさか・・・」

才吉は誰にも聞こえないほどの小さな声でそう言った。

「不時着するみたいだ！！行って見よう！！」

才人の声に全員が反応し走り始めた。

ウエストウッド村は先ほども書いたとおり森に囲まれている。その森を通り抜けると、ハルケギニアでは見慣れた草原が広がっていた。

才人たちが着いた時、先ほどの「紫電改」は脚を出して着陸しようとしている所だった。どうやら着陸場所を見つけるために一端旋回してきたらしい。

着陸行程に入った「紫電改」は実に綺麗な姿勢で降下してきた。危なげないその動きに、才人も才吉も着陸は無事終わると思った。だが次の瞬間少し強い横風が噴いた。

「「まずい！！」」

着陸時の横風は危険である。下手すると機体がひっくり返ってしまう。事実「紫電改」は横風を受けた瞬間機体が不安定になった。

だが才人らの心配は杞憂で終わった。次の瞬間、「紫電改」は見

事に姿勢を建て直し、無事着陸した。こんな動作が出来るのはベテランぐらいである。

才人たちはホッと安堵の息をつきつつ、機体に駆け寄った。

ウエストウッド村 中（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

ウエストウッド村 下

最初に機体へと駆け寄った才人は「紫電改」の機体、特に風防周囲を見て啞然とした。

「酷いな、パイロット生きてるのか!？」

どうやら空中戦で被弾したらしい、コックピットから尾翼にかけて無数の弾痕がある。大きさからして恐らく米軍の12.7mm機銃だろう。

また損傷はそれだけでなかった。才人は先ほど機体が黒煙を吐いているのを確認したが、その原因は左主翼にあった。翼表面の外皮が完全にめくれ上がり、装備された20mm機銃が折れ曲がり、そこから煙が出ていた。どうやら機銃が暴発したらしい。

才人はとにかく機体に上ると、コックピットを覗き込んだ。そしてまでも声を上げた。しかもそれは恐ろしさまじりの驚きの声だった。

「うわあ!!!」

コックピットの中は血だらけだった。そしてその血の源であるパイロットも血だらけだった。着ている飛行服は真っ赤に染められていた。そして着陸で力尽きたのか、パイロットはぐったりしていた。

「大丈夫ですか!?!おい!みんな手伝ってくれ!」

才人はルイズらを呼んだ。彼女らも機体によじ登ってコックピッ

トを見るなり、その凄惨な光景に目を疑った。

「う！・・・」

ルイズたちはその凄惨な光景を見るなり一瞬顔をしかめた。だが、血だらけのパイロットが命の危機に瀕していて、助けなければいけないということはわかった。

才人、ルイズ、さらに才吉の3人がパイロットを機体から引きずり出した。そしてそのまま地面に寝かせた。

「出血が激しい、急いで手当てしないと。」

才吉が言うが、あいにくと全員救急用具など持っていない。魔法で治そうにもマチルダは土系統のメイジ、ルイズは『虚無』の使い手である。ケガや病気を治すことができる水系統のメイジではない。

「手当てするって言っても、方法がないわ。」

ルイズが苦々しく言う。

「くそう。取りあえず、村まで運ぼう。」

才吉がいい、才人やルイズたちが頷く。だが、そこへ割って入った人物があった。

「待ってください！！」

テファだった。4人が一斉に彼女の方を振り向いたが、そこでルイズが1人大声を上げた。

「あ、あなたエルフだったの!？」

「え!？」

テファはハツとして頭に手をやる。この直前まで彼女は帽子を深々と被っていた。ところが、それがここまで走ってくる間に飛んでしまったようで、頭が完全に見えていた。そしてその両側についている耳は尖っていた。これはエルフの特徴だった。

エルフとは、砂漠^{サハラ}に住む亜人（あくまでハルケギニアの人間からの視点）のことで、人間よりも遥かに高い技術と、強力な先住魔法（これも人間視点）を持っている。そしてこの世界で人間が聖地としている場所を封印している、言わば人間、特に貴族から見れば仇敵だった。

その仇敵が目の前の少女の正体だったのだから、ルイズの受けた衝撃は大きかった。ちなみに事情を知っているマチルダは驚くはずも無かったし、聖地にコレポツチの興味もない地球出身の2人もテファがエルフであったところで驚きはしなかった。

「ルイズ、今は彼女がエルフだなんてことに構っている暇はない。
^{パイロット}この人を助ける方が先決だ。テファ、処置が出来るのかい？」

「は、はい。」

才人に言われ、彼女は一つの指輪を出した。

「指輪!？」

才吉が声を上げたが、テファはそれに構わずその指輪を重傷のパイロットに向けてかざした。すると、パイロットの傷がみるみるうちに塞がっていった。

「「「な！」「」」」

3人の驚きの声を他所に、テファの指輪によってパイロットの傷は完全に塞がった。

「一体それはなんなんだね！？」

才吉がテファに聞いただす。

「この指輪に付いている石は、先住魔法の力が込められているんです。その力を使ってこの人のケガを治しました。だからさっきより石が小さくなっているでしょ？」

3人が指輪を覗き込むと、確かに先ほどよりも石が一回り程小さくなっているのがわかる。

「へえ、この世界に来て大抵の事にはもう驚かなくなったけど、改めて魔法の力の凄さがわかるな。」

才人が感嘆の声を上げる。

「しかし、その指輪はどんなケガにでも効くのかね？」

才吉が尋ねる。

「はい。ケガだけじゃなく、病気にも効きます。けど、石はこれだ

けなので、多分後1、2回使ったらそれで終わりでしょうね。」

「それは残念だ。まあ、とにかく何はともあれこの人が助かって良かった。取りあえず目覚めるまで君の村で休ませてあげたいんだが良いかな？」

「はい。構いません。」

5人は取りあえずパイロットを連れて村へと戻った。機体は火災も収まったようなので、後で回収することにした。

「それにしても、どうしてエルフがこんな所に住んでいるのよ!!」
村に付いて落ちつくなり、ルイズがテファに向かって怒鳴った。

「落ち着けよルイズ。」

「これが、落ち着いていられるわけないでしょ! エルフって言うたら人間の敵なのよ!!」

「別に彼女が何かやったわけじゃないだろ。・・・それにこんな綺麗な娘こが悪いことするわけないじゃん。」

後半は小声で言ったが、地獄耳のルイズはしっかり聞き取っていた。

「何か言ったかしら!？」

鬼のような形相を浮かべるルイズ。

「いいえ、何も!」

「ならよろしい。」

そんな2人を無視して、才吉がテファに問う。

「君が屋敷に来たがらなかったのは、エルフであるからかね？」

すると、テファは小さく頷いた。

「良かったら、なんで君がここに住んでいるのか教えてもらえないかな？」

「・・・実は私は純粋なエルフではないんです。私の父は先代の王様の弟で、財務監督官をしていました。そして母はその愛人でした。父は私たちのことを世間にはれないようにしてくれていたんですが、ついに王様にばれてしまつて。父は部下の家へ私達を避難させたんです。けど、見つかつてしまいました。そして、母は殺され、私も捕まりかけました。私はなんとか逃げられましたが、父も結局処刑され、匿ってくれた部下のお家も取り潰されてしまいました。」

「なるほど・・・ではその取り潰された部下の家というのが、マチルダさん、あなたの家だったわけですね。」

才吉がテファの横に座るマチルダに向かって言う。

「そういうわけです。この娘があなたの屋敷に行きたくないのは、かつての悲劇を繰り返したくないからなんです。」

「ふーむ。だがエルフを取り締まる法律は確か無いはずだ。それに

ウェールズ国王は柔軟な発想が出来るお方だ。なんとかなると思
うが。取りあえずまた頼んでみるか。やらないよりはましだろう。」

そしてこの才吉の働き掛けはその後身を結ぶ事となるのだが、そ
れはまた追々語るとしよう。

「けど才吉さん、本当に良いんですか？ハーフとはいえエルフなん
ですよ！？」

ようやく才人との痴話喧嘩を終わらせたルイズが会話に割り込む。

「エルフだから何かね？別に襲って食うわけでもあるまい。それに
敵対的な態度を取るだけでは話が先に進まない。それに君だってエ
ルフに襲われた事があるのかね？」

「うう・・・」

才吉の正論に、ゲウの音も出ないルイズだった。

そして会話は唐突に切り上げられた、助けたパイロットが目を見
ましたからである。

ウエストウッド村 下（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

作者は昨日東京のH市へ出た際、少しばかりゼロ魔14巻を立ち読みしたのですが、驚いた。そして金がなくて買えなかったのが悔しかった。

菅野大尉

目覚めた男は最初、訳がわからないという顔をしていた。しかし義勇軍の白い制服を着た才人と才吉が彼の眠っていた部屋に入ると、すぐに2人に向かって敬礼した。

「助けていただき感謝します。自分は帝国海軍第343航空隊、301飛行隊新撰組隊長、海軍大尉の菅野直です。」

そう言ってピシッと敬礼する菅野大尉。だがそれを見ていた才人と才吉の2人は目の前の男を見て驚かずにはいられなかった。

菅野大尉と言えば、太平洋戦争中の日本海軍のエースパイロットを紹介する本には必ず出てくるほどの人間である。総撃墜数48機。部下からも大変親しまれたとされている。

彼に関する逸話は数多いが、その中でも特に有名なのは当時恐れられていた憲兵隊に喧嘩を吹っかけて、見事これを打ち負かした事である。

昭和20年、本土防空の切り札として編成された343航空隊の1飛行隊である新撰組隊長として活躍したが、終戦2週間前の8月1日、九州沖合での空中戦の最中に機関銃が暴発、部下が付き添うのを拒否して単独で基地へ向かったまま、それを最後に行方不明となった。

近年の研究では、付近を飛んでいたアメリカ軍のP51戦闘機に撃墜されたとされているが、その撃墜王が目の前に現れたのだからビックリしないほうがおかしい。

取りあえず才吉が敬礼をした。

「ああ・・・私は東方義勇軍、総司令官の平賀才吉中将です。」

才吉が若干歯切れの悪い感じに言う。これから色々と説明し納得させるのが厄介だからだ。ちなみに敬語を使ったのは、太平洋戦争中パイロットであつた才吉にとって彼は先輩に当る人間だからだ。

「東方義勇軍？」

そこで彼は才吉たちの着ている制服が、微妙に海軍の物と違っているのに気付いた。実際東方義勇軍の制服は旧日本海軍の制服の階級章やエンブレムに若干手を加えただけなので、傍目から見ると見間違えやすい。

「あ、あなたは一体何者ですか？その制服は帝国海軍のものに似ているが、違う！それに後ろに立っている女性はどうみても日本人ではありませんね？一体ここはどこなんですか？」

菅野大尉が慌て始めた。

「ここはハルケギニアという大陸のアルビオンだ。信じられないだろうが、地球とは別の世界だ。」

才吉がそう説明するが、それで彼が信じられるはずがなかった。

「はああ！！何を言っているんですか！？もしかしてここは靖国神社ではないでしょうか、天国ですか！？その後ろにいる女性はもしかして天使か何かですか！？それとも私はアメリカ軍の捕虜にでも

なつたのですか！？そうか、だから私を攪乱するために嘘の情報を！そうだそうに決まっている。」

発狂寸前の菅野大尉を才吉が慌てて宥める。

「信じられないのはわかりますが、これが現実なのです。あなたは別に戦死されたわけでも米軍の捕虜になつたわけでもありません。とにかく今は落ち着いて。」

「うつ・・・」

菅野大尉は頭を抱えて座り込んでしまった。

「信じられなくて当然です。それに他にもあなたに知らせなければいけないことがあります。・・・才人、それに他のかたも、ここはワシが説明するから、君達は外に出てくれ。」

「・・・は、はい。」「・・・」

才吉に言われて、他のメンバーはその部屋から出た。

「ねえ才人、やっぱりあの人もあんなの世界の人なの？」

部屋から出ると、すぐにルイズが尋ねて来た。

「ああ。60年以上前の戦争中に行方不明になつただけだね。そうか、ハルケギニアに流れ着いていたのか。しかしなんで俺の国の人ばかりこつちに流れてくるのかな？」

才人にもよくわからないが、実際それは才吉や才助も思う共通の

疑問だった。

「ねえ才人？」

おずおずと質問してきたのはテファだった。

「何だいテファ？」

「あの人が乗っていたの、さっきの空から降りてきたのって一体何？ 竜じゃなかったよね？」

先ほどはけが人の事で頭が一杯だったらしいが、落ち着いた所で彼女は「紫電改」の正体は何であるか気になったらしい。

「ああ、あれは飛行機って言う空を飛ぶ機械だよ。俺たちの国じゃ戦争の時にあれに乗って戦うんだ。さっきの人は敵の飛行機を48機撃墜したエースなんだ。」

「エースって何よ？」

今度はルイズが聞く。

「エースって言うのは5機の敵機を撃墜したパイロットに与えられる称号さ。」

「たったの5機？」

ルイズは少しかり気落ちしたように言ったが、実際の所5機撃墜できるというのは凄い事だ。その前に戦死したりする確率が高いからだ。そもそも初陣で死なないというのも重要だ。

まあこれについては認識の違いだから、才人は反論せず聞き流した。

「そう言えばさっきの「紫電改」、まだ飛べるのかな？飛べるんだったら乗ってみたいな。」

才人はそんなことを考え始めた。「紫電改」といったら某ボクシング漫画で有名な先生が描いた漫画にも出てくる戦闘機だ。もちろん才人も読んでいる。その中では主人公が一気に10機近い敵機を撃墜する。タ力戦法でアメリカ軍機を撃墜しまくっていた。

「ちょっと調べてみるか。」

そう言う才人は外へ向かって歩き始めて。

「ちょっと才人！どこ行くのよ!？」

ルイズが呼ぶが、それに対して止まることなく。

「さっきの飛行機の所だよ!」

と言いながら彼は家から出た。あわててルイズもその後を追った。

才人は再び「紫電改」の着陸したところまでやってきた。既に主翼の火災は収まっていた。暴発した機銃付近の主翼がめくれ上がり、操縦席付近の被弾が激しいが、それ以外は外観上特に問題なさそうだった。

才人は機体に手を触れる。すると『ガンダールヴ』のルーンが光って反応した。それとともに機体の損傷状況が伝わってきた。

（主翼の損傷は機銃と外版を取り替えれば済むみたいだな。操縦系統とエンジンには特に異常はないみたいだな。これなら使えそうだな。）

才人は修理可能と判断した。もしこの「紫電改」を戦列に加えられれば現在義勇軍が使用している戦闘機でも最強の戦闘機となる。

ただし修理するためにはトリステインまで運ばなければいけない。アルビオンに持ち込んだ機材だけでは本格的な修理はまだ出来ないからだな。

（まあそれはこれから考えることだな。）

才人はそう結論を下した。

と、そこで彼は自分の方を見つめているルイズに気付いた。経験から考えて、その視線は明らかに不愉快な気持ちを含んでいた。ルイズは最近男爵になった才人に対してかなり寛容になっているが、それでも怒り出すと機嫌を直すのに時間が掛かる。

急いで才人は彼女に近寄った。

「どうしたんだよルイズ？」

「才人……」

ルイズは明らかに怒っていた。しかし、才人にはなぜだかわからない。

「どうしたんだよ？」

才人が気軽に聞くと、ルイズは顔をしかめた。

「あんた御主人様を放って置いて、1人でどんどんいっちゃうし、その飛行機ばかりを見て嬉しそうにしていたから。ただそれが気になっただけよ。なによ、ご主人様の気持ちも知らずに。」

どうやら才人が彼女にあまり構わなかった事を快く思わなかったらしい。まあ彼女が置かれている状況を考えれば当然だった。

「あ……ごめん。そうだよな。昨日あんなこと言われたもんな。」

その才人の答えは、半分当りで半分外れだった。

才人の答えを聞いて、ルイズは軽く溜息を吐くのだった。

菅野大尉（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。
そして、自分の趣味を爆発させてすいません。

胎動

ウエストウッド村での出来事から2日後、才人たちは再び才吉たちの屋敷にいた。アルビオンでの滞在をこの日で才人とルイズの2人は切り上げ、トリステインに帰ることとなった。別に急いで戻る必要もないのだが、別にこれ以上アルビオンにいた必要もなかったからだ。

ちなみに往路は航空機の空輸を兼ねて飛行機に乗れたが、復路は連絡任務で飛んできたヘリコプターに乗る。もちろん操縦は自衛隊出身の清水中佐だ。

「それじゃあ曾爺ちゃん、体に気をつけてな。」

才人が間もなく86歳を迎えようとしている曾祖父を気遣って言った。

「抜かせ、あと20年は生きて見せるわ。」

自信満々に言う才吉。その姿を見て、実際それくらい行きそうだなと思う才人であった。

「お世話になりました。」

ルイズがペコツと頭を下げる。

「いやいや。ルイズさんも曾孫のことよろしく願いしますよ。」

才吉が頭に乗せた帽子を抑えながら言う。なんでこんな事をして

いるかというと、既にヘリコプターがローターを回しているからだ。だから声も大声だ。

「それでは出発するので扉を閉めてください。」

副操縦士の山田少佐が才人とルイズに出発を報せる。

「それじゃあ気をつけて。」

才吉が才人らの旅路の無事を祈って敬礼をする。

2人を乗せたUH60Jヘリは一路トリスティンへと向かって飛び立った。

「いやあしかし、最初才吉さんからここが異世界と聞いたときには信じられなかったが、そこに60年後の日本人がいるなんてさらに信じられないよ。」

そう言うのは、才人たちと向かい合うように座る菅野大尉だ。2日前突然このハルケギニアに現れた彼は、最初ここが異世界という説明を信じようとはしなかった。しかし、夜空に浮かぶ2つの月や、メイジが魔法を使うところ、さらに飛び回る竜を見て信じざるをえなかった。

「誰だって最初はそう思いますよ。」

才人が答える。

菅野も今まで流れ着いた人間と同じく、義勇軍への参加を承諾してくれた。最初は迷ったようだが、こちらの世界で社会基盤がない

こと、さらに帰る事が出来ないと聞かされて決めたのだ。おそらく義勇軍での階級は少佐か中佐になるだろう。

ついでに彼の乗っていた「紫電改」は後日ロサイス経由の船便で運ばれる予定だ。

「しかし一昨日まで米軍相手と戦っていたのに、今は60年後のオートジャイロに乗っている。本当に人生何が起きるかわからないよ。」

菅野がしみじみと言う。さらに彼は口には出さなかったが、向こうの世界で自分がどのように扱われたか聞いて心はより複雑だった。

「まったくです。」

才人が菅野の言葉に相槌を打つ。また、ルイズも頷いた。

「私だって才人を召喚した時はこんな事になるとは思わなかったわ。」

「そりゃあこんなこと誰も想像できないって。それにしても、どうしてこう地球の人間がこちらの世界にやって来るのかな？そこが俺すごい疑問なんだけど。」

才人の言っているとおり、地球からこちらの世界に飛ばされている物はやたら多い。しかも人間つきという場合も多々ある。アルビオン解放戦争が終わった現在、才吉はアルビオン国内でも地球製兵器を探してもらうようウェールズ国王に要請し、既にその作業は始まっていると聞いている。

「そんなこと私に聞かれてもわかんないわよ。」

伝説の系統『虚無』の担い手であるルイズでも、どうしてこんな事が起きているのか全くわからなかった。ただ彼女にもわかるのは、彼らの出現がハルケギニアに革命的な変化を起こしていることであつた。

これは彼らが感知していない事であつたが、東方義勇軍と彼らが使用する強力な火器の出現はトリステインやアルビオン以外の国々にも大きな波紋をもたらしていた。特に冶金技術に自信があるゲルマニアではこの所軍事予算が増えていた。またガリアも表には見せていないが、裏で大きく動いていた。またロマリアやエルフと言つた国々も地理的には遠く、わずかな伝聞情報しか得ていなかったが、東方義勇軍の存在に危機感を抱いていた。

これらの国々では、東方義勇軍の正体と実力を探ろうと躍起になつていた。

また社会体制の变革も著しかった。特にアルビオンではウェールズ国王の肝いりで、憲法の制定に議会の設置、メイジ、平民問わずの初等教育の実施、部分的な立憲君主制への転換が図られることとなつていた。またトリステインでも平民の地位が格段に高くなりつゝあつた。これもまた才吉らが持ち込んだ地球の政治理念が与えた影響だつた。

またトリステインではこれまでの魔法研究所に加えて、あらたに科学研究所という組織も設立されることとなっている。ちなみに初代所長には才吉の推薦でコルベールが就任する予定だつた。さらに付け加えるなら、彼はこの科学研究所で魔法と科学の融合技術进行研究し、後に地球のロケット工学とハルケギニアの魔法技術を融合さ

せたミサイル『空飛ぶ蛇君』を開発することとなる。また火薬の応用として『ハナビ』という娯楽性品を造り上げ、世の多くの人々の心を和ませる事となる。

そんな変化が起きていることも感知せず、才人とルイズは菅野とお喋りしながら、トリステインへの空の旅を楽しんでいた。

一方、空の上で楽しむ人間もいれば、地べたで真剣に仕事をしている人間もいた。アルビオン解放戦争後に、レコン・キスタを裏で操っていたと噂されるガリア（ガリア政府はもちろん全面否定）に対する不信任はトリステインやアルビオンで高くなっていった。また、自分たちの優位が崩される事を憂慮する才吉率いる東方義勇軍もこの強国の動きに神経を尖らせていた。

そこで、才吉はアルビオン、トリステイン両政府と協力して、ガリアへのスパイ作戦を実行に移しつつあった。

才人らがトリスタニアへと着いた日の夜、ガリアの首都リュティスに一番海岸線の沖合いに、突如水中から巨大な物体が出現した。ハルケギニアの人間が見たら、化け鯨とでも表現するだろうが、その正体は東方義勇軍海上部隊所属の潜水艦「呂501」潜水艦だった。

地球からハルケギニアに飛ばされ、燃料切れから動けなくなっていた「呂501」であつたが、最近になってようやく軽油の精製が行なわれるようになったので、動けるようになった。

その「呂501」が何ゆえガリアの海に出現したのか？それは間

もなくわかることだろう。

浮上すると、早速ハッチが開き、艦橋に人影が現れた。

「対空！対水上警戒を怠るな！！」

艦橋に上がるなりそう命令を下すのは、こちらに來た時からの艦長である乗田少佐だ。

「2300（ふたさんまるまる）。予定通りだな。」

彼は腕時計で時刻を確認する。そして海岸線に向けて双眼鏡を向けた。

胎動（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

裏の動き

乗田少佐が双眼鏡で海岸線を見ていると、多数の光点が現れるのが見えた。

「あれは？」

彼が悪い予想をすると、案の定艦内から無線担当の兵士が叫んだ。
「艦長！緊急です。工作員がガリア側の衛士隊に見つかったそうです。さらに上空には竜騎士が数騎いるそうです。」

今回の「呂501」の任務は、ガリア国内に潜入したスパイの回収だった。2週間前に陸路潜入したスパイは、ガリア国内の情報屋や地下組織とコンタクトを取り、そこから情報を買ってくるようになっていた。

スパイのうち1人はメイジで、今回は潜水艦と連絡が取れるようにトランシーバーを持たせてあった。そのスパイが敵に追われているようだ。

「総員戦闘配置につけ！！いずれも潜れるようにしておけ！！それと、対空対水上戦闘配置！！」

彼がそう命令を下すと、艦内から兵士たちが上がってきた。第二次大戦中の各国の潜水艦には、基本的に水上での行動中に起きる戦闘を見越して、少ないが大砲や機関銃が搭載されていた。

「呂501」も同様で、前部甲板に105mm砲を1門、艦橋後部

セイル

に37mm機関砲1門と20mm機関砲2門を積んでいた。

それら砲と機関銃に兵士たちが取り付き、防水カバーを外して撃てるようにする。そしていずれもその砲口を陸上に向けて指向させた。

現在「呂501」は陸上から500mの距離に停泊している。ここなら魔法攻撃なら届かない距離だ。逆にこちらの機銃や砲は射程内に治めている。

乗田以下、甲板上の全ての人間が海岸を注視していた。海岸には「呂501」が送ったモーターボートがいる。そのボートが上手いこと工作員を回収したら、白い信号弾が打ち上げられる予定だった。

そして数分後、海岸線に信号弾が打ちあがり、空中で炸裂した。その色は無事成功を報せる白ではなく、赤だった。緊急を報せる合図である。さらに見張りの兵士が叫んだ。

「上空に竜騎士3！ボートを攻撃している模様！！」

「海岸線に敵歩兵一個小隊見ユ！！」

ガリア軍である。陸上の歩兵はさほど脅威ではないが、空中の竜騎士に攻撃されるとちょっと厄介である。万が一タンクに穴を開けられたら潜航不能になる。

「機銃は上空の竜騎士を撃ち落せ！！砲は海岸の敵兵を撃て！！当然なくても良い、とにかく時間を稼げ！！」

乗田が命令を下すと、まず105mm砲が火を噴いた。500m

の近距離射撃だから、ほぼ水平射撃である。また着弾も直ぐだ。

数秒で、陸地に火柱が現れた。乗田が双眼鏡でその付近を見ると、多数の兵士が混乱に陥って走り回っている姿が見えた。

「よし、陸上の方はこれで良い。次は・・・」

砲を撃った事で、こちらの存在は十中八九見つかったはずだ。竜騎士が攻撃してこない筈がない。

「竜騎士3騎、本艦に突っ込んできますー!!」

上空を眺めていた兵士が叫んだ。

「対空戦闘撃ち方始めー!!」

ドドドド・・・

命令を言うのとほぼ同時に、3基の機関銃が火を噴いた。通常、闇夜での射撃はそうそう当らない。というよりも、昼間でも対空戦闘で機関銃の弾を当てるのは難しい。飛行機は300km以上のスピードで進むし、さらに機関銃の銃身が反動でぶれるからだ。

ところが、今回はそれこそあつと言う間に2騎の竜騎士を叩き落した。これはどういうことかというと、まず撃っている兵士が闇の中でも見える暗視ゴーグルを付けていたからだ。これは本来サバイバルゲームかバードウォッチングで使うようなちゃん物であるが、それでも500m以内の至近距離にいる相手を見るだけなら充分だった。

さらに、相手の竜騎士のスピードは高度を落としていることもあって150kmも出ていなかった。そんな相手を落とすだけなら、飛行機を落とすのよりは数十倍も簡単である。また相手は生身の竜である。1、2発当てただけで致命傷か、飛行不能になる傷を負って当たり前だった。20mm機銃と言ったら、当たれば鉄板に10cm代の穴を空けられる威力がある。37mm機銃などに至っては大ききだけ見ると小型の対戦車砲である。

数百年の科学の差の前に、さしもの竜騎兵も手も足も出なかった。残った1騎はこちらからの攻撃を恐れたのか、高度を上げて積極的な攻撃を止めた。

「ようし！今のうちにボートと工作員を回収しろ。」

敵の攻撃が止んだ瞬間を突いて、工作員とボートが回収された。

「艦長、収容完了しました！！」

部下からの報告が届くと、彼は直ぐに次の命令を下した。

「ようし、逃げるぞ！！急速潜航、機関始動微速前進！！」

その命令が出ると、甲板上にいた兵士が一斉にハッチから艦内に退避する。砲や機銃も栓をされ、カバーを被せられる。ちなみに微速前進とは6ノットで前進という意味だ。

「急げ！早くしないと敵に気付かれる！！」

実際もそうだが、敵に発見されている状況では、如何に早く潜る

かが生死を左右する。

「やばい!!」

こちらが逃げ始めたのに気付いたのか、退避していた竜騎士が猛然と急降下してきた。

彼は自分が最後であることを確認すると、ハッチを閉め艦内に降りた。

「急げ！見つかったぞ!!早く潜れ!!機関全速!!」

もぐってしまったはこちらの勝ちである。なにせこの時代には音響追尾魚雷どころか、潜水艦にとって脅威である爆雷や機雷さえないので。しかし潜る前に致命傷を受けたらアウトである。

「現在深度3m!!」

深度計を読む兵士が目盛りを読み上げてくる。

「早く潜ってくれ!!」

艦内の誰もがそう思った。

「現在深度8m。艦橋深度。」

すると、ガン!という音と小さな振動が艦を襲った。おそらくどこかに竜騎兵の放った魔法の直撃を受けたのであろう。

「被害報告!!」

乗田が叫ぶ。しかし、どこからも報告はない。どうやら致命傷とはなかったようだ。そして。

「現在深度15m。全没しました。もう大丈夫です。」

その報告と共に、乗員全員が安堵の息を漏らした。

「ようし、後はトリステインに帰るだけだが、全員気を引き締めていけ！速力6ノット、深度30を維持しろ！」

そういう乗田大尉の声にも、どこか安心感が含まれていた。そして彼は収容した工作員の元へと向かう。

今回収容した工作員は先にも述べたが2名、メイジと平民1人ずつのチームだった。

「お役目御苦労さま。艦長の乗田です。」

彼は2人が休んでいる部屋まで行くと、敬礼して挨拶した。もちろん、相手も返礼する。

「トリステイン軍ガリア潜入班のヘンリーです。お世話になります。」

そして彼は持っていた鞆から麻袋を手渡した。

「入手した情報です。」

乗田はそれを受け取る。

「確かにお預かりしました。トリステインに着くのは夕方です。それまではゆっくりとお休みください。」

「はい、感謝します。」

乗田が受け取ったガリアに関する情報は艦長室の金庫に収められ、トリステイン到着後には一端コピーをとられ、その後原文は王室へ、コピーが義勇軍に渡されることとなっていた。

アルビオン解放戦争が終わってから3週間ほどしか経っていないが、こうしたトリステインとアルビオンによるスパイ活動は活発になっていた。

裏の動き（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

やっと潜水艦が出せた。ちなみに作者としては今回のシーンを書きながら映画の「ローレライ」や「U571」、さらにアニメの「紺碧の艦隊」や漫画の「サブマリン707」を頭に思い浮かべていました。

マニアックですいません。

昼下がり

才人たちがトリスタニア郊外の義勇軍飛行場に到着すると、その視界にある物が飛び込んできた。

「あれえー!」

現在この基地には数が増えた飛行機や戦車、その他もろもろの車両を格納するための格納庫が立ち並んでいるが、その格納庫の一つの前に、見慣れない機体が止まっていた。

「あれは、確か陸軍の四式戦じゃないか。」

才人の後ろから降りた菅野大尉も声を上げた。

彼の言う陸軍の四式戦というのは、旧日本陸軍の四式戦闘機「疾風」のことだ。現在の富重工である中島飛行機が設計、生産した戦闘機で、その高性能から大東亜決戦機と名付けられて短期間で3000機近い数が大量生産された。ところがデリケートなエンジンに悩まされ、結局あまり活躍できなかった悲運の機体であった。

その「疾風」が何故かハルケギニアの義勇軍飛行場に置かれていた。

「おかしいな、4日前には無かったはずなのに。それにあのマーク、どこの国だ？」

その「疾風」の胴体と翼に描かれていた国籍マークは日の丸でもなければ星でも、青天白日旗でもなく、青い正三角形に黄金の仏像

という、見たこともない物だった。

才人は不思議そうな表情をした。というか実際不思議だった。すぐにもどうしてあんな物が存在するのか父親の才助に聞きたい所であったが、今はルイズと一緒になので、取りあえずトリスタニアにある才吉の家まで出る事にした。菅野は基地の司令部で入隊のための手続きをとるので、ここでわかれた。

才人とルイズは基地に置かれていたサイドカーを借りて、トリスタニアへと向かった。このサイドカーは地球から持ち込んだバイクに、ハルケギニアで造った側車をつけた改造品だ。

才吉たちは現在も、物資輸送などを目的に、新月を利用して地球とハルケギニアを往復しているわけであるが、以前までは軽飛行機一機のみをこれに使用していた。しかしこれだけではいくらピストン輸送しても運べる物資の量はタ力が知れている。さらに地球で何かを買い入れるにしてもその資金を生み出す方法がなかった。

そこで才吉と才助は自衛隊時代のコネを使って中古の飛行機や退役パイロットを雇い入れてなんと輸送部隊を編成していた。このおかげで、輸送できる物資の量が飛躍的に増え、最近は地球から様々な機械製品に工作機械、またこちらで売りさばける衣服などを運んできていた。もっとも、こちらに運ぶだけではまだ赤字なので、地球に戻るときはそれらで得た利益を金や銀、銅に代えて運ぶ。そしてそれを売って地球の金銭に換金する方法を取った。なにせ今地球ではレアメタルの価値が高騰している。それはもういい商売になる。

ただし才人には、どうやって才吉たちが自衛隊のレーダー網を潜り抜けているのかとか、たまに運ばれてくる武器を見てどうして銃刀法違反で捕まらないのかなど疑問だらけだった。

一度だけ才吉に聞いてみた事があつたが、「知らない方が身のため。」と言われて、それ以来聞いていない。

まあとにかく、その様な方法で地球から運ばれてくるバイクや車（車の場合はもちろん解体されて持ち込まれる）によって、義勇軍の保有車両は飛躍的に増えつつあった。また燃料も、昨日ゲルマニアから輸入した原油の第一陣が精製所に持ち込まれたという報告が来たため、ようやく自由に使えるようになった。

そういうわけで、才人とルイズもサイドカーを使って移動できることとなつたわけだ。

「それじゃあルイズ行くぜ。しつかり捕まっているよ。」

エンジンを吹かし、ゴーグルを掛けた才人が側車に乗ったルイズに声をかける。

「ええ。」

ルイズもゴーグルを掛け終え、出発準備を終えた。才人はルイズの準備が終わつたのを確認すると、才人はブレーキを解除してサイドカーを出した。

基地からトリスタニアの市街地までは約5 kmである。10分もあれば着く距離だ。しかし、才人は一端街の外を迂回する。市街地は狭く、人を跳ねかねないからだ。

道行く人は馬も使わずに走っていくサイドカーを見て一瞬仰天するが、直ぐに側車に描かれた義勇軍のマークである旭日旗と、ハル

ケギニア語で描かれた「東方義勇軍」という文字を見て納得した表情をしていた。

「気持ち良いわね。」

ルイズが前から来る心地よい風を受け、そんな感想を漏らした。

「そうだな。それに戦争も終わったし、周りの感じもなんとなくか、戦争中とは変わった感じがするしな」

才人がそんなことを言うと、ルイズも頷く。

「そうね。」

実際道行く人たちから受ける雰囲気や表情は、戦争中や戦争前に比べてかなり穏やかな物となっている。みんな戦争が終わって平和が来た事を実感しているようだ。

「このまま平和が続けば良いよな。」

「けど、ガリアが不審な動きを見せているんでしょ？」

ルイズが先日才吉から聞いた話を言った。

「そうらしいな。俺はこっちの人間じゃないからガリアについてはそんなに知らないけど、ただ大きな国ってことは聞いている。」

「大きいだけじゃないわ。軍勢力も凄いのよ。アルビオンの軍艦が戦争で随分沈んじやったから、多分今はハルケギニアで一番強いと思うわ。」

「そうか・・・」

そのアルビオン軍の軍艦の多くを沈めたのは、才人ら義勇軍だった。現在アルビオン軍は再建を開始してはいるが、国内の改革に費用を食われているため最低限のレベルでしか進んでいないのが現状だった。

「それにね・・・私は戦争が起きないかも心配だけど、やっぱり女王になるかもしれないことのほうが気になるわ。」

「確かにな。けどまだ発表まで1か月はあるんだろ？絶対に決まったってわけじゃないんだからか。」

先日才吉から言われたウェールズ国王からの重要な情報。それはアルビオンに嫁ぐアンリエッタ女王が、その代王位を親友であるルイズに譲る考えを持っているという内容だった。

もちろんこれは決して突飛とは言える発想ではない。メイジはほぼ全員血縁的な繋がりがある。だからメイジの中、特に位の高い公爵家の人間から選出するのは間違っていない。だからアンリエッタが親友かつ公爵家出身のルイズを指名してもおかしくなかった。

しかしルイズにとっては例え代王位でほんの数年間のことであっても物凄くインパクトのある出来事には違いない。胃が痛くなって当然である。

「姫様もなんで私なんかを指名するのかしら？」

「信頼されているんだろ？そんだけ。」

その素っ気無い返答に、ルイズも怒る。

「もう、ご主人様の大きな悩みに、そんな素っ気無い返事しないでよ！」

「悪い。けど俺自身の問題じゃないし。まあお前がどんな肩書き持とうが、俺はお前の使いまで、お前を守るだけだ。」

才人にそう言われて、ルイズは不思議と怒る気がなくなった。

「そ、そう。」

「ああ。・・・ごめんな、こんなことしか言っただけで。」

すまなそうにして才人が言った言葉に、ルイズはボソッと呟いた。

「謝る必要なんてないわよ。」

その小さな声は、バイクの走行音にかき消された。

昼下がり（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

公爵からの手紙

才助の家に着いた才人とルイズは、彼の出迎えを受けた。

「おお才人にルイズさん、アルビオンから戻ったんですね。お帰りなさい。」

「ただいま父さん。」

才人は早速先ほど基地で見た「疾風」の事を聞いてみる事にした。

「ねえ父さん、基地で「疾風」を見たんだけど、あれ一体どうしたの？」

「ああ、あれは2日前の夕方突然現れたんだ。いやこっちも驚いたよ。夕立が終わった所でいきなり着陸してきたからね。しかも見たこともない国籍マークだったからな。」

やはりあのマークには才助も驚いたらしい。

「それで一体どこの国のなの？」

そう才人が聞くと、才助の表情が少し堅くなる。

「いやね、乗っていたのはグエン・ファンと名乗った東南アジア系の人間だったんだが、彼が言うにはあの「疾風」はメルクワットという王国の物らしい。」

「メルクワット!？」

才人が首を捻る。才人の記憶が正しければ、東南アジアの国にその様な名前の王国などなかったはずである。

「俺も最初そう聞かされたときは凄い不思議だったが、彼の乗っていた「疾風」は本物だったし、それに地図も貰ったんだが。」

才助はポケットに入っていた紙を取り出し、才人に見せた。

「なんだこりゃ!？」

その地図に描かれていたのは、インドシナ半島の地図であるが、その中心部に国境線が引かれて囲まれている部分があった。しかしこんな所に国は無かったはずである。

「多分俺たちの地球や、ハルケギニアとも違う世界から現れたんだろうな。しかしアルビオンでもあの菅野大尉が乗った「紫電改」が現れたとすると、これは異常だ。理論上は平行世界は交わる事が無いのに、交わりすぎだ。アニメなんかの話だが、空間異常でも起きているのかもしれないな。」

才助が仮説を建ててみるが、それを実証する方法などありはしない。

「まあとにかく、今は彼にも義勇軍に入ってくれるよう頼んでいる所だ。なんでも彼は仏印軍（フランス領インドシナに駐屯したフランス軍）との戦闘で11機を撃墜しているらしいからな。パイロット1名が貴重な今、彼が入ってくれるだけで戦力が一気に高くなる。ただし、整備の人間には迷惑かけるだろうけど。」

その言葉に、才人も苦笑いするしかなかった。

飛行機やパイロットがただ単に増えれば良いと言うのは素人考えだ。例えば今義勇軍で使っているゼロ戦と「隼」は機体の寸法やエンジンこそほぼ同じだが、スロットルの向きや機関銃の発射ボタンの取り付け位置が違うし、エンジンも機体への取り付け部に違いがあった。だから同じ手順で整備が出来ない。さらにその他の機種だとエンジンが全く違うし共通の部品も少ない。もし固定化の魔法で部品の劣化を防げなかったならば、今ごろ飛行機の半分は動けなくなっていただろう。

「とにかく、今のところは世界が崩壊するようなことはなさそうだから大丈夫だけだな。」

そう言っただけで、もし世界が崩壊するようなことになったら洒落にもならない。

「まあこの話題はここまでにしておこう。ルイズさんもそろそろ我慢の限界だろう?。」

そう才助が言うと、それまで話についていけずただ立っているしかなかったルイズがドキッとした。

「え!?!いえ、そんなことはありません。」

だが実際の所退屈であったのは事実である。

「そうですか。けど話題を変えなければいけないのは事実なので。あなたに渡す物もあるし。」

するとルイズはキョトンとした。

「私にですか？」

一体才助が何を自分に渡すのか、ルイズにはまったく予想できなかった。

才助が彼女に手渡したのは一通の手紙だった。

「あなたのお父さん、ヴァリエール公爵からの手紙です。昨日学院からこちらに転送されてきました。アルビオンに送ると行き違う可能性があったので、うちで預かっていました。」

ルイズは受け取ると、早速封を開けて手紙を読み始めた。そして読んでいくうちに、その表情が段々と憂鬱な物へと変わっていった。

「どうしたんだよルイズ？」

それに気付いた才人が声を掛けてみる。すると彼女は手紙を一通り読み終え、溜息を吐いた。

「夏期休暇で帰れなかったから家へ帰って来いって書いてあるわ。」

別に子供と顔を合わせたい親なら普通に思うことである。

「なんだよ？別に普通じゃないか。それとも、そんなに家へ帰るのが怖いのかよ？」

するとルイズは首を振った。

「怖いわけじゃないの・・・お前にも身を固めて欲しい。婚約をし
るって言ってきたのよ。」

その言葉に、才人の表情が驚愕の物へと変わる。

「何!？」

才人も本当にビックリである。というかビックリというよりハン
マーで殴られたぐらいのショックを受けた。乙女心に疎い彼である
が、ルイズとはお互いに好きであると内心では思っていた。それな
のにルイズが別の人間と結婚するような事態になったら大変どこ
ろの話ではない。

「まあそれが普通じゃないのか?なんでもこの世界じゃ20歳前に
結婚するのが当たり前らしいからな。ヴァリエール公爵がルイズさ
んに婚約してもらったのも不思議じゃないさ。」

ルイズや才人の気苦労を他所に、才助は笑いながら言った。

「父さんはどうしてそんな風に笑えるんだよ!？」

才人としては、その父親の態度は奇妙な物であった。なにせこち
らの世界にきてこの方、才助、そして母親の瑞江はルイズが才人と
いずれ結ばれる人間と言って憚らなかった。実際そのような態度を
ルイズに取っていた。それなのに、ルイズが別の誰かに取られるか
もしれないのに笑うのは不自然である。

「まあちよつとな。とにかく2人とも学院に休暇届出しているの今
日までだろ?だったら早く学院に戻った方が良いと思うぞ。」

結局、会話はそこで打ち切りとなり、とにかく才人とルイズは釈然としないまま（出来る筈がない）再びサイドカーに乗り込んで魔法学院へと向かった。

学院に着くと荷物を部屋に置き、2人はオスマン学院長に休暇届を出しに行った。既にアルビオンへ行ったので、授業をそろそろ受けねばならぬはずであるが、オスマンは何もそれについては言わず、休暇届に判を押した。しかも嬉しそうに。

「それでは2人とも良き旅を。」

そう言つてオスマンは2人を見送ったが、その表情と言葉の意味を2人は全く理解できなかった。

2人が出て行った後、才助とオスマンは全く同じ行動を取った。それはヴァリエール公爵から彼ら自身へ直々に書かれた手紙を取り出し読んだ事であった。

その書面は貴族の挨拶だけに色々と飾り言葉がつけられていたが、要約するとこうだ。

「我が娘ルイズと、サイト・ヒラガ男爵の婚約に協力されたい。」

2人の知らぬところで、大いなる力が働いていたりするのだった。

公爵からの手紙（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

ちなみに、「疾風」とそのパイロットについては市販の作品からのパロディです。

元ネタはこれです。

「超音速ドラゴン伝説」川又千秋著 双葉社

ヴァリエール家へ 出発編

オスマン学院長から休暇許可を貰ったルイズと才人は、その日の内に一端トリスタニアへと戻った。そのままヴァリエール公爵領へ向かうことも出来たのだが、ゲルマニアとの国境地帯にあるのですぐ出発しても馬車では2日近く掛かる距離だった。そこで、一端両親の家で一泊させてもらい、翌日義勇軍の飛行機を借りて出かける事にした。

夕方トリスタニアへ着いた2人は、まず才人が才助に飛行機を借りる許可を貰った。

「お前本物の軍隊だったら公私混同だぞ!？」

と言われたものの、才助は笑いながら直ぐに許可を出してくれた。実際の所、公私混同甚だしい行為である。まあ一応ヴァリエール公爵への顔見せの意味もあるから、それなりの手土産を持っていくという言い訳も立つとは言えるが。

一方、ルイズはその間に明日才人と共に帰ることを手紙に書いて伝書フクロウを使って両親に報せた。

その後2人は、才助と才人の母親である瑞江と4人で夕食をかこみ、楽しい一時を過ごした。

そして翌朝、才人とルイズは瑞江に別れを告げて、義勇軍基地から飛行機1機を借りてヴァリエール公爵領へと向かう。ちなみに2人が基地へ向かって出発した時には、才助は基地へと出発した後だった。

基地へ着くと、2人はサイドカーを預けて格納庫へと向かった。

アルビオン解放戦争後、ガリアやその他の国の工作員による破壊工作を恐れて飛行機が置かれている格納庫へ部外者が近づく事は厳しく禁じられていた。もし近づいたら完全武装の警備兵に逮捕されるから取調べが待っている。しかし、才人は義勇軍の軍服を着ているから捕まるようなことはない。

格納庫へ行き、整備班長を呼び出して才助から渡された許可書を見せた。整備班長は、旧日本陸軍出である40代後半ぐらいの、いかにも叩き上げという感じの男だった。

「整備班長の白井大尉です。お話は既に平賀司令から窺っています。平賀少佐にルイズ女史。」

白井大尉がそう言って敬礼してきたので、才人も返礼で敬礼をする。またルイズは敬称を付けられて少しばかり表情を良くした。

「平賀才人少佐です。よろしくお願いします。」

才人が名乗ると、整備班長は才人の顔をまじまじと見て、感心したような顔をした。

「ほう。司令の息子さんとは聞いていましたが、随分とお若いんですね。」

実際才人は若い。まだ17である。この歳だったら普通の軍隊では少年兵だ。どんなに上手く昇進しても下士官が限度である。それなのに才人の階級は佐官である。これが親の七光りによる物だった

ら侮蔑の対象だろうが、才人はそれに見合っただけの活躍をしているのだから、感心されて当然である。

だが当の才人はあまり嬉しくはなかった。

「まだ17です。それと、敬語は使わなくても良いですよ。自分の方が年下ですから。」

才人としては、敬語を使われるのはなんとなく恥ずかしかった。しかも相手は自分の倍ぐらいの人生経験のある人間であるのだ。

しかし、白井は。

「それは無理ですよ少佐殿。階級が上の人間にぞんざいな口調など出来はしません。そりゃああなたは若いでしょうが、ちゃんと見合っただけの活躍をなさっている。しかも男爵様と来ていますからね。歳の差なんて関係ありませんよ。」

軍隊内では、階級の差は絶対である。特に旧日本陸軍では厳しかった。ちなみに日本陸軍では上官に殿をつけるが、海軍では侮蔑の対象としてつけなかった。

「はあ、そうですか。」

なんとなく釈然としないものの、これは意識の差と才人は割り切る事にした。

「わかりました。それじゃあ早速飛行機に乗りたいんですが、どれが使えますか？」

才人としては出来るだけ2人乗りの飛行機を使いたかったが、あくまで私的な飛行であるからわがままを言える立場ではない。

しかし白井が発した言葉は驚くべき物だった。

「どれでも好きな機体をどうぞ。整備は完了していますので。」

この言葉に、才人は面食らった。

「え！？だって訓練とかで使うんでしょ？そんな安易に言って良いんですか？」

「ええ。戦争も終わって全機を稼働させることなんてありませんからね。訓練は機体の半分使うかどうかなので。1機ぐらい好きに使ってもらっても影響はありませんよ。固定化の魔法をかけてもらってからは、整備も随分楽になりましたから。」

義勇軍では戦争が終わった現在、特に定期的に行なう任務などはない。一応協定では王室から派遣要請が来れば、トリステイン、アルビオン内での地上攻撃、遭難者捜索や救助を行なう事となっているが、今のところその要請が来た事はない。そのため、飛行部隊のやることと言ったら新兵や今いるパイロットの訓練任務以外には特にない状況である。

そんな状況だから、気軽に飛行機を貸せる状況にあるのだろう。

「それで、どれを使いますか？」

「それじゃあ、2人乗りが良いので、襲撃機を貸してください。その方がルイズも良いだろ？」

「ええ。」

ルイズとしても1人乗りの機体に押し込められるよりは2人乗りの方がありがたいにきまっていた。

「わかりました。」

まもなく整備兵の手によって、格納庫から99式襲撃機が1機引き出され、暖機運転を開始した。その間に、才人は機体の説明を受ける。

「一応緊急出撃に備えているので、機銃の弾薬とロケット弾が装備されています。安全装置が掛かっているので大丈夫ですが、着陸の際は暴発の危険もあるので注意してください。それとゼロ戦とはスロットルの向きが逆です。機銃の発射も把柄レバーではなくボタンなので、注意してください。」

「わかりました。」

そして暖機運転が終わった所で、才人とルイズの2人が乗り込んだ。2人ともそれぞれの荷物を機内の空きスペースに入れ、座席に座った。『ガンダールヴ』の力で飛行機のことが瞬時にわかる才人はもちろんだが、すでに何度も飛行機に乗っているルイズも手際よく乗り込んでベルトをつけた。

それを見て、整備兵達は感心していた。

「それじゃあルイズ、出発するぞ。いいか？」

「ええ。大丈夫よ。」

無線機越しに会話しながら、2人はお互いの準備が終わった事を確認しあった。

才人は両手を振って、車輪止めを外すよう指示した。車輪止めが外され、整備兵が退避したのを確認すると、才人はエンジンの出力を上げて滑走路へと機体を進めた。

「ようし。」

舵とエンジンの動作確認を済ませ滑走路の端に出ると、才人はゴーグルを下ろし、スロットルをフルパワーにした。もちろん、『ガンダールブ』の力が働いてくれたおかげで操作を間違えるなどという事はない。

機体は勢い良く走り始めた。そして、数百m走った所で十分な風を受け、フワリと浮き上がった。ロケット弾や機銃を満載しているので少しばかり重かったが、離陸に支障をきたすような物ではなかった。そしてそのままグングン高度を上げていく。

離陸は無事成功した。才人はコンパスと地図を使い、一路ヴァリエール公爵領への最短飛行をする。予定では約2時間のフライトであった。

ヴァリエール家へ 出発編（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

明日は英語のテストがあるので、更新がしばし止まるかもしれませんが
せんでござ承ください。

ヴァリエール家へ 到着編

ヴァリエール家への飛行はいたって順調な物だった。この日は天気も穏やかで飛行に支障は無く、また雲もあまりないため、地上に延びている街道をはつきりと確認できたからである。

2人は無線機越しにお喋りをしながら、空の旅を楽しむ。そうしている間に、時間はあつと言う間に過ぎ、到着予定時間まで30分を切った。その時である、ルイズが地上にある物を見つけた。

「あれ？」

無線機越しにルイズが発した疑問の声に、才人も直ぐに反応した。

「どうしたルイズ？」

「今街道に馬車が走っているのが見えたのよ。」

別にそんなことは珍しくないはずだ。ハルケギニアではごく一般的な光景である。

「それで？」

「うん。ちょっとしか見えなかったけど、あれはうちの馬車よ。多分お姉さまが乗っているんだわ。」

才人はその言葉で、ルイズにお姉さんがいたことを思い出した。

「確かお姉さんって、首都の魔法研究所で働いているんだっけ？」

アカデミー

才人は以前ルイズから言われたことを思い出し、確認してみた。

「そうよ。」

「アカデミーか・・・ちょっと会う時に厄介だなそれは。」

才人はそう言って眉をひそめた。一体彼のこの言葉が何を意味するのかというと、実は義勇軍とアカデミーは仲が悪い、ほとんど犬猿の仲であると言ってもよい。

以前だったら、両者の仲はそこまで酷くなかった。というよりもお互い無関心で、僅かに石油を錬金するのに少しばかり技術交換を行なったのみだった。その仲が一拳に険悪になったのは、アルビオン戦争後の政策改編で行なわれた科学研究所の設置と、それに伴うアカデミーに対する予算縮小である。

これはアカデミーの研究員からしてみれば屈辱以外の何物でもなかった。彼らにとって、自分たちこそがトリスティン国内で最先端の研究を行っていると自負していたのだ。ところが、東方から来たという、どこの馬の骨ともわからぬ連中である義勇軍が魔法を一切使わぬ武器で戦って勝利をおさめたおかげで、やはり異端の学問とも言つべき科学分野の研究が大幅に（というか今まではほとんど行なわれてこなかった）拡充される事となったのだ。

それ以来、とにかくアカデミーの研究員は科学研究所の職員と、それを後押ししている義勇軍を露骨に敵視するようになった。しかし周囲の視線はアルビオンとの戦争を勝利に導いた義勇軍側に肩入れするため、その義勇軍を敵視するアカデミー職員の周囲からの受けは余計に悪くなる一方だった。それが余計に彼らの怒りを募らせ

ていた。

「そのお姉さんに会って大丈夫かな？俺義勇軍の制服着てきちやつただけど。」

今の才人の素直な心境である。

「そう言えばアカデミーとは最近仲が悪かったわよね・・・なんか私も憂鬱になってきたわ。」

ルイズの声が曇った物となる。

「なんでお前まで憂鬱になるんだよ？」

「実は私・・・お姉さまには頭上がらないのよね、昔から。使い魔が義勇軍の人間なんて言ったらただじゃすまないかも・・・」

このセリフは才人を驚かせた。

「へえ、お前にも頭が上がらない人がいるんだ。」

「どういう意味よ!？」

ルイズが普通に怒った。

「そのまんまだよ。」

才人が冗談めかして言う。

「この犬!」

ルイズが才人に怒る時に使う常套句を言うが、こちら多半ば冗談のように言った。お互いそれなりに意思疎通が取れているのである。

「そんな怒るなよ。まあなんにしろ、穏やかに最後まで行って欲しいよ。」

才人が言うと、ルイズも頷いた。

「同感。実家に帰ってまでごたごたは御免だわ。」

しかし世の中ことが上手く行けば苦労しない。2人は知らなかったが、今回そもそもが2人を正式に婚約させるためにヴァリエール公爵から呼ばれているのである。ごたごたが起きないという方がおかしい。

そんなこんなで30分後、2人を乗せた99式襲撃機はヴァリエール家上空に到達した。

「お前の家、でか！」

それが才人が最初にルイズの実家を見た時の感想である。こないだ訪れた才吉の屋敷もそれなりだったが、こちらの方が一回り大きそうだ。さらに敷地内にはそれなりに大きな池まである。

ルイズが才吉の屋敷を見て、「まあまあ」と評したのも頷ける。

「驚くのは後にして、早く降りましょうよ。」

実家に帰って来た喜びからか、ルイズがせかす。

「はいはい。どこか飛行機が下りられそうな広くて平らで、普段は人がいない場所ってあるか？」

「そうね。裏の練兵場ならお父様が使う以外にほとんど誰も使わないわ。」

この世界のメイジと同様、科学にはとことん疎かったルイズだが、才人とともに飛行機に乗っていれば、どんな土地が着陸に適しているか慣れで分かって来る。

「わかった。」

才人は屋敷の裏手に針路を向けた。ルイズの言った通り、そこには開けて整地された空間が広がっていた。見た限りは着陸できそうである。

「ようし、着陸するから注意しろよ。」

「わかってるわ。」

才人は機体を降下させた。出発前に言われた通り、ロケット弾と機関銃弾を満載しているから少しばかり機体は重い。いつもゼロ戦を操っているように着陸させると、失速してしまう可能性があるから、いきおい操作は慎重な物となる。

しかし『ガンダールヴ』の力が発揮されているし、また才人自身も何回も飛行機を操縦しているからそこまで心配するようなことはなかった。99式襲撃機は危なげなく着陸し、400m程滑走したところで無事止まった。

「着陸成功。」

才人は機体を練兵場の端に止めると、エンジンを切ってゴーグルを外した。そして直ぐに外へ出て後部座席の風防を開けた。

「あら、才人がこんな気の利いたことをしてくれるなんて珍しいわね。」

「父さんから言われてるんだ、ルイズの実家に行くならちゃんと気を配れって。さ、お嬢様。」

才人は手を差し出してルイズが機体から降りるのをエスコートする。

「ありがとう。」

まんざらでもない表情、むしろ笑顔でルイズはその手を握り、機体から降りた。

それが終わると、才人は車輪に機内から出した車止めを噛ませ、さらに機内に積まれていた二人の荷物を降ろした。そして最後に風防を閉めて機体から降りた。

丁度その作業が終わったところで、屋敷の方から使用人が数人走ってきた。その手には、何かしらの武器が握られていた。どうやら飛行機で降り立った2人を不法侵入者と見なしたらしい。

「お前たち、一体何者だ!？」

先頭を走ってくる執事姿の男が誰何してきた。だが、まもなくその態度が急変した。

「あ！？ルイズお嬢様！し、失礼しました。お帰りなさいませ。」

使用人たちが恭しく頭を下げた。才人はその光景に、ルイズがお嬢様であることを改めて理解した。

「そちらの男性はどなたでしょうか？」

使用人たちが才人について聞いてきた。

「この人は平賀才人。私の使い魔よ。そしてこないだのアルビオン解放戦争を勝利に導いた東方義勇軍の少佐よ。ついでに言えば、アンリエッタ陛下から男爵位をもらっているわ。大切なお客様として丁重に扱って頂戴。」

すると、使用人たちは驚きの目で才人を見た。

「そうでしたか。どうぞ、こちらへ。お荷物をお持ちします。」

「いや、そんな別に良いですよ。」

「いいえ、ルイズ様のお客様、男爵様に失礼のないようするのが我々使用人の努めですから。」

前回才吉の屋敷を訪れた時は、使用人と会うことが少なかったために、ここまで色々されなかった。そのため、才人は改めて、自分が貴族になったのを自覚したのであった。

ヴァリエール家へ 到着編（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

ヴァリエール家へ カトレア編

才人とルイズの2人が屋敷に着くと、主であるヴァリエール公爵が笑顔で2人を出迎えた。

「お帰りルイズ。そして才人君、いやサイト・ヒラガ男爵。ようこそ我が屋敷へ。私は心から君の来訪を歓迎するよ。」

両手を広げてやたら大げさに歓迎するヴァリエール公爵の態度を怪訝に思いながら、才人は被っていた義勇軍の帽子を取り、頭を下げた。

「お世話になります。」

ハルケギニアに来たばかりの才人だったら、とてもこのような態度を採れはしなかっただろう。こうした動作は貴族であるルイズや、年長者である才吉や才助から教えられて身につけたものだ。

「うむ。まあ着いたばかりで立ち話もなんだ、使用人に命じて一端部屋に案内させよう。荷物を置いて少し休憩したまえ。2時間ほどしたらまた呼びに行かせる。」

こうした言葉に、ルイズも気になり始めた。

（才人は貴族になったとはいえ土地無しの男爵よ。それに平民出身だし。それなのに、お父様のこの扱いは何か気になるわ。）

ルイズがその理由を考えようとすると、ヴァリエール公爵はルイズの方へ顔を向けた。

「お前も部屋に行って少し休みなさい。」

ルイズは思考を中断せざる得なかった。

「あ、はい。・・・そういえばお父様、お母様は？」

「ああ、カリ　又は所要があって出かけているよ。まあ今日の夕方には帰るはずだ。それにエレオノールも首都から帰って来る予定だ。」

「そ、そう。」

姉が帰宅するという部分に、少しかり憂鬱さを覚えながら、ルイズも部屋に移動した。

才人は案内された部屋の広さに驚いていた。

「広い！」

外見だけでなく、ヴァリエール家の屋敷は内部も大きかった。

「本当に貴族って言うのはすごいんだな。」

つくづくそう感じる才人である。自分自身も今は貴族なのであるが、特に屋敷や土地を貰ったわけではなかったで、その実感はめったに湧かなかった。しかし、今日この屋敷に来て受けた待遇は、彼にその実感を湧かせていた。

「今は俺もその貴族なんだよな。1年前だったら想像さえ出来なかったのに。」

1年前の才人といえば、日本の東京にいるありふれた1高校生に過ぎなかった。しかし、数奇な運命が彼を異世界に呼び出し、いまや彼を貴族位にしまっている。さらに、ハルケギニアでの生活が長くなるほど、こちらの方が故郷であるように感じられてくる。

「今じゃ考えることは地球よりこっちのことだもんな。特に・・・」

才人は口をつぐんだ。そこから先を言うのは自分自身でも恥ずかしかったからだ。

「ま、ハルケギニアに骨埋めても最近の良いと思えるようになったしな。」

素直な彼の感想である。なにせ今の彼は社会的には高い地位であり、さらに家族もこちらの世界に来ている。しかも地球とは限定されるものの行き来は可能と来ている。これまでこちらの世界に飛ばされた人間たちが帰る方法を見つけられず、ひっそりと暮らしていたのに比べれば破格の生活である。

そんなことを考えていると、部屋の扉がノックされた。

「どうぞ。」

「才人。」

入ってきたのはルイズだった。一端着替えたので格好はいつも着

ている魔法学院の制服ではなく、ワンピースだった。

その格好に新鮮さを感じつつ、才人は答える。

「何？」

「ちいお姉さまに才人を紹介しようと思って。今暇でしょ？」

ルイズの言うちいお姉さまは、ヴァリエール家次女のカトレアのことだ。もちろん才人はルイズに彼女について聞かされたことがある。

「ああ。そう言えば、お姉さんが2人いたんだっけ？」

「そうよ。」

才人はルイズに案内されてカトレアの部屋へと向かった。部屋に着くと、ルイズが扉をノックした。

「誰？」

中から若い女性の声が返ってきた。

「私よ、ルイズ。」

「どうぞ。」

ルイズが部屋の扉を開けた。そしてそこに現れた光景に才人は啞然とした。部屋の中には凄まじい数の動物がいて、さらに植物も植えられていた。さながら動物園か植物園である。動植物園と言った

方が良いかもしれない。

「ええと。ここは動物園？それとも植物園？」

「まあ誰だって最初見たら驚くわよね。お姉さまは動物や植物が大好きで、こんな風になっちゃったわけ。」

それにしてもやりすぎだろ！というぐらい動物がいるし、植物が植えられている。目を白黒させて驚きつつも部屋の奥へと進む才人に、声が掛けられる。

「ごめんなさい、驚かれたでしょう。」

才人が声のしたほうに顔を向けると、そこに1人の女性がいた。歳は20前後、ルイズと同じピンクのブロンドがルイズと姉妹であることを物語っている。目はルイズより穏やかな感じだが、それ以外はかなり似ていた。

「才人、この人が私の下のお姉さまよ。」

「カトレアよ、始めまして。」

カトレアの自己紹介に対して、才人も自己紹介をする。

「始めましてカトレアさん。ルイズの使い魔で、オストラント東方義勇軍少佐の平賀才人です。こちらの読み方からすればサイト・ヒラガです。よろしく。」

才人が頭を下げると、カトレアは笑顔で言う。

「あらあら、随分と礼儀正しい使い魔さんだこと。けどルイズ、お父様から聞いていたけど、本当に人間を使い魔にしたのね。」

ルイズにとって、もうこれまでに何十回も言われた事を口にするカトレア。

「ええ。」

そして、カトレアは予想外の言葉を口にした。

「で、あなたはルイズの恋人さんでもあるわけね。」

この発言に2人が顔を赤くして大いに驚いたのは言うまでもない。

「ちょ、ちょっとちい姉さま！？いきなり何を言い出すのよ！！」

ルイズが慌ててカトレアに詰め寄る。

「あら違ったの？2人が随分と仲良くしているように見えたから、ついそう感じて。」

カトレアは相変わらずにこにこしながら言う。それに対して、ルイズも才人もお互い顔を見合わせてしまった。実際のところ2人の関係は悪くない。というかかなり良好だ。なにせここ数週間、2人はかなりの時間を一緒に過ごしている。もちろん主人と使い魔の関係もあつたろうが、2人とも無意識の内にお互いをパートナーとしていた部分も大きかった。

そのため、2人はカトレアの言葉に驚きはしたものの、正面切手批判することは出来なかった。ただお互いに見つめあうだけだった。

それを見て、カトレアはまたも微笑んだ。

と、いきなり彼女は表情を崩した。そしてゴホゴホと咳をした。

「だ、大丈夫ですか？」

才人が慌てて声を掛ける。

「ええ。大丈夫。生まれつき私は体が弱くて。こんなの日常茶飯事なの。心配しないで。」

カトレアはそう言って微笑むが、その顔色はどこか悪い。

「医者には掛かっていないんですか？」

するとカトレアに変わってルイズが言った。

「それがだめなのよ、お姉さまの病気はどんな水魔法でも治癒しないのよ。これまで国中の医者呼んで見てもらったけど、みんな匙を投げたわ。」

この世界にも不治の病があるのかと思いながら、才人はあることを思い出した。

「けど・・・」

その先は言えなかった。急に部屋の外が慌しくなった。使用人が動き回っているようだ。

「何だろう？」

すると、ルイズが少しばかり憂鬱そうに言った。

「お姉さまが帰ってきたみたい。」

ヴァリエール家へ カトレア編（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

ヴァリエール家へ 婚約編

その日の夕食の席上、才人はルイズの上の姉であるエレオノールと、母親のカリ 又と初めて顔を合わせた。母親のカリ 又は才人に対して友好的に接してくれたが、問題は姉のエレオノールだった。流石に両親の前であつたからか、義勇軍の制服を着ている才人に掴みかかるような事はしなかったが、あからさまに敵意を含んだ視線を向けてきた。

そして、騒動が発生したのは夕食が終わった後、食後のお茶を飲みながらお喋りをしている時である。場の空気が大分和んだ所で、ヴァリエール公爵がある話題を切り出した。

「さて、話は変わるが、ルイズも今年で16だ。父親としてはそろそろ身をかためるか、最低限婚約者を決めておいて欲しいところだ。そこで、今日はお前にその話を持ってきた。」

ついに才人とルイズの2人にとって重大事であるルイズの婚約についてだ。2人の顔に緊張が走った。

「あ、あのお父様。お父様はもうその婚約相手をお決めになったのですか？」

ルイズが恐る恐る聞いた。

「もちろんだとも。そうじゃなければお前をわざわざ学院から呼び出したりはしない。もちろん向こうの親御さんとも話はつけたし、母さん、カリ 又も賛成してくれている。」

公爵は笑顔で言う。また隣に座る夫人も頷いた。一方のルイズは言葉につまりながらも、真剣な表情で公爵に向かって言葉を紡ぐ。

「あ、あのお父様。その件なんですけど・・・」

この世界では家父長制がまかり通っている。父親の言う事は絶対だ。もちろん婚約についてもだ。だから、ルイズの父親に対する言葉も言いにくいものとなる。

「なんだ？反対か？」

「ええと・・・その・・・」

ルイズは実に言いにくそうに言う。すると、気の強いエレオノールが介入してきた。

「ちびルイズ。あなたまさかお父様の言うことに楯突く気なの？」

「お、お姉さま・・・いや、その絶対にそういう訳じゃ。」

その鋭い視線と言葉に、ルイズはそれ以上言えなかった。そこで、逃げる形で公爵に質問をした。

「で、ではお父様。そのお父様がお決めになった私の婚約者って一体誰でしょうか？」

ルイズは心の中であることを考えていた。もしこのまま自分の望まぬ婚約をさせられるのなら、勘当覚悟で絶対に断るべきではないのかと。そして自分自身が決めた相手の所へ行くべきではないのかと。

だからはっきり言ってこの質問の意味は確認だけのかかなり小さい物だった。しかし、公爵の言葉は予想外のものだった。

「お前も良く知っている男性だ。歳はお前と一つ違い。もちろん貴族で、先ごろアルビオンでの戦争における殊勲を認められ、アンリエッタ陛下から男爵位を頂いた人間だ。」

この言葉に、ルイズは大いに引っかかるものがあった。

（今回の戦争で殊勲を認められて男爵？）

それは彼女の隣に座る使い魔の少年と同じである。ルイズの心にもしかしたらという気持ちが生じた。それなら父親の才人に対する厚遇も納得いく。

さらに公爵が続ける。

「その男性の家は最近になって貴族になったばかりだが、曾祖父が公爵。父親が伯爵でそれなりの領地も持っている。充分お前に見合う家柄だと思うぞ。」

ここまで来ると、もはや確定的だ。

「ええと、もっと具体的に言って欲しいのですが？」

確認の意味をこめて、ルイズが続けて質問をした。すると、公爵と夫人の顔がよりにやけた。

「そうだな。実はその人物は今ここにいます。というよりも、お前の

隣に座っている。」

ルイズの隣に座っているのは才人1人しかない。ということは、才人とルイズはお互いに顔を見合わせた。

「え！じゃあまさか！？」

「そうだ。そこにいる平賀才人男爵が、お前の婚約者だ。」

この公爵の発言から30秒ほど、その場を沈黙が支配した。ルイズは突然のことに顔を真っ赤にしながら口をパクパクと動かし、寝耳に水だった才人はただ驚いて硬直し、エレオノールは明らかに狼狽し、カトレアは嬉しそうに微笑んでルイズの方を見ていた。

そして沈黙を破ったのはエレオノールだった。

「お、お父様！一体どういことですか？なんでその男がちびルイズの婚約者なのです！？」

先ほどの言葉を棚に上げた発言であるが、彼女としては、義勇軍の人間が自分の親戚になることが我慢いかなることなのだろう。ただ父親相手であるせい、その言葉は怒りよりも焦りと困惑が強く含まれている様に見えた。

「なんだ？お前は不満なのか？」

「だって・・・その男は義勇軍の人間なんでしょう？」

先ほど自分が言ったことを棚に上げて、エレオノールは正直な気持ちと言った。

「確かにそうだが、家柄から見てもなんの問題もないと思うが？それに彼は実際にルイズの使い魔としても有能だと私は思っているが。」

「うう．．．しかし、魔法も使えない平民の成り上がり貴族にすぎない人間なんでしょう？いくらちびルイズの相手とはいえ．．．」

父親に言われても、やはり釈然と出来ないらしい。それほどまでに、彼女の義勇軍への不信感は大きかったわけだ。だから、彼女を見ていた才人はこう思った。

（俺たち。本当にアカデミーから嫌われてるんだな。）

義勇軍司令官の才吉は、兵士たちにこの世界の人々といざこざを起こさないよう厳命している。例え起こしても、義勇軍側に非がある場合はきつちりと賠償を行なっている。この辺りも、義勇軍がトリスタニア市民に好かれている理由の一つだった。しかし、それは貴族にはあてはまらない。

「エレオノール。お前の言いたい事もわからんでもないが、それとこれとは話は別だ。彼がお前に何かしたわけでもあるまいし。」

結局、エレオノールは齒噛みしながら、父親の言葉に屈し、その後は何も言わなくなった。

「話を元に戻そう。それでルイズ。婚約を受け入れてくれるな？」

公爵がルイズに念押しの質問をする。もちろん、ルイズには断る気はない。むしろ才人との恋愛関係を公式に認められるので嬉しい。

「は、はい。けど、才人の意見も聞かないと。」

ルイズとしては、才人を疑っているわけではないが、やはり彼の気持ちは気になる。だがそれは杞憂だった。

「俺は構いません。むしろ、ルイズの相手に認められて、嬉しく思います。俺はルイズのことが好きですから。」

顔を赤らめ、照れながら言う才人。それを見て、ルイズは満面の笑顔で彼に抱きついた。

「ありがとう才人！！」

「うわ！！」

いきなり飛びついたために、バランスを崩しそうになる才人。だが、なんとか彼女を受け止める。

「これからは婚約者としてお願いね。」

ルイズの笑顔に、才人の顔はさらに赤くなった。

「ああ。・・・それにしても、さっきの話からすると、うちの両親も知っていたんですか？」

才人が公爵に向かって行った。

「もちろんだ。他に学院長のオスマン氏も知っている。」

それでようやく才人とルイズは、才助やオスマンが笑いながら快くルイズの休暇届を認め、2人に飛行機を貸してくれた理由を理解した。

とにかく、こうして2人は正式な婚約者となったわけだが、もちろんこれで終わりではない。才人とルイズは数日間、ヴァリエール家で過ごす予定なのだ。それが一体どのような結果を生むのか、2人は知らない。

そして幸せそうな2人をじっと見つめるエレオノールは何かを企んでいるようであった。

ヴァリエール家へ 婚約編（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

ヴァリエール家へ 模擬戦編

才人とルイズにとって衝撃的とも言えた婚約から一夜開けた。2人は朝、顔を合わせるたびにお互い顔を赤くした。まだ結婚すると確実に決まったわけでもないのに、お互い気恥ずかしく感じていたのだ。ヴァリエール公爵は2人一緒の部屋で過ごしてはと提案したが、さすがに2人ともそこまでする勇氣はなく、断っている。

もつとも、才人にとって困った事も発生した。やたらヴァリエール公爵がかまってくるのだ。それこそ本当の息子のように。才人は大いにげんなりさせられた。

ヴァリエール公爵が嬉しいのには理由があった。それは才人がルイズの婚約者として正式に決まったということもあったが、それとほぼ同じ程度理由として義勇軍との武器援助交渉に関する物だった。

実はこの1週間前、ヴァリエール公爵は一度トリスタニアへ赴き、才助と武器の購入に関する交渉を行なっている。

義勇軍が製造、使用している武器の購入に関しては、これまでヴァリエール家のみならず、その他の領主や王軍からの交渉が持たれてきた。しかし才吉と才助はことごとくこれを断っている。理由は武器の流出を防ぎ、自分たちの優位性を崩したくないからだ。

しかし、公爵は粘り強かった。何度断つてもやってきた。結局これに負ける形で、才助はアンリエッタ女王、厳密には現在政治を仕切っているマザリ 二枢機卿に武器売却の許可を取った。トリステイン王家との協定で、武器売却に関しては王室に許可を取ることが

決められていたからだ。

そして返答はYESだった。ヴァリエール家へのアンリエッタの信頼と、その領地がゲルマニアとの国境に接していることがその理由だった。

こうして義勇軍からヴァリエール家への武器売却が正式に決まった。ただし、武器が国境を越えたりすると一大事なので、公爵には厳重な保管体制の構築を交換条件とした。そして先日正式な協定が結ばれ、小銃100挺、手榴弾200個、その他音響閃光弾にヘルメットを始めとする装備の提供が決まった。また近代戦術を教える軍事顧問の派遣も同時に決められた。

こつこつ背景があつたわけである。

この日の昼、才人は公爵からの提案で模擬戦を行なう事になった。2人はそれぞれ着替え、屋敷の裏にある練兵場へと出た。

「貴君がどれほどの鍛錬を積んでいるのか、今ここで見せてもらいたい。実戦さながらでいくぞ。君も遠慮なくやりたまえ。」

公爵が向かい合う形で立った才人に向けて言い放った。ちなみに彼の格好は言葉どおり、実戦さながらの装備に身を包んでいた。

対する才人は制服を脱いで、持ってきていたラフな格好で対峙する。もちろん非武装ではなく、手には久々に仕事をもらえたデルフを握り、またポケットや腰には各種の飛び道具を忍ばせていた。

その2人を、ルイズ、エレオノール、カトレア、さらに物見高い手空きの使用人たちが見守っていた。

「あんな平民出の成り上がり貴族なんて、お父様が直ぐに捻り倒してしまっただけだわ。どうせ一撃でやられるのが落ちよ。」

そう見物人の列の先頭で才人に対して辛らつな言葉を言うのは、もちろん義勇軍憎しの長女エレオノールだ。さすがに父親や才人の目の前でこのようなセリフを言いはしないが、今は2人が聞いていないだけに言いたい放題だ。

一方、自分の使い魔であり婚約者を侮辱されたルイズもすかさず姉に反論する。

「才人はそんなじゃないわ。確かにお父様も強いけど、一方的に負けはしないわ。」

すると、エレオノールがルイズの頬をつねった。

「口答えするの？ちびルイズ？」

「痛い！痛い！」

子供のころから何百回と行なわれてきた光景が繰り返され、カトレアはその光景を見ながら笑う。

「お2人とも、仲良く喧嘩するのも良いですが、始まりますよ。」

そう言われて、エレオノールは手を離した。

「ふん。」

「ひどいわお姉さま。」

ルイズが悔しそうに言う。だがその内心では、この理不尽な暴力を振るう姉に目にも物を見せてやると思っていた。

（お姉さま、才人の強さを見て私の使い魔の実力を思い知るといいわ！）

『虚無』の担い手であることを公に出来ない彼女にとって、使い魔こそがその代弁者だった。才人に対する彼女の期待は大きい。

そして模擬戦が始まった。

最初に打って出たのは公爵だ。杖を構え詠唱を終えると、才人に対して強力な風魔法を放った。その余りにも高い威力に、使用人たちの中には才人が死んでしまうのではないかと心配したぐらいだ。

しかし才人はそれをデルフによって無効にする。

「喰らい尽くせ！」

「まかせとけ！」

阿吽の呼吸でデルフを構えた才人は、もちろん全くの無傷である。

いきなり始まった高度な戦いに、使用人たちから驚きの声が上が
るが、もちろん戦っている2人はそんなこと気にしていられない。

公爵は続けて第二撃を放っていた。彼は才人と以前にも模擬戦をしているから、第一撃をよけられる事ぐらい予想済みだった。

それに対して才人は『ガンダールヴ』の力を如何なく発揮し、素早く動いてよけ、懐に忍ばせていた音響閃光弾のピンを抜いた。

その動きの意味がわかったのは、ルイズと公爵だけだった。公爵はマントで目を覆った。そしてルイズは見物人たちに叫んだ。

「皆目を閉じて！耳を塞いで！」

「は！？」

「え！？」

あまりに突然のことだったので、反応が遅れた。その直後、才人は公爵のそばに音響閃光弾を投擲した。そして閃光弾は凄まじい光と、強烈な音を発生させた。

「うわ！！」

「キャ！！」

それを見ていた見物人達は一時的に視力を奪われ、さらにその後はキーンという耳鳴りに襲われた。

「だから言ったのに。」

逸早く防御したルイズは目や耳を一時的にやられた見物人たちを見てつぶやいた。

その間も2人の戦いは続く。一時的に公爵の動きを止めた才人は一気に距離を詰めた。近接戦では魔法はほとんど役に立たない。詠唱している余裕もなく、無防備な姿を敵に晒してしまうからだ。

公爵は杖を捨て、持っていた剣を出して才人に受けて立った。

「まだまだ。」

公爵は50代とは思えない力を発揮する。さすがに戦なれしているだけある。

「あんまり使いたくなかったけど。」

才人はかち合っていたデルフを公爵の剣から放し、間合いを取った。そして素早く腰に掛けていた拳銃を取り出して撃った。

バン！

その瞬間、見物人達は目を疑った。まさか銃で撃つとは思わなかったのだ。しかも、その銃弾は公爵の心臓に寸分違わず命中した。衝撃で公爵の体もよろけた。

「あ……あ……」

エレオノールやカトレアは驚きのあまり声が出なかった。彼女らから見れば、才人が公爵を銃殺したようにしか見えなかったからだ。一方、ルイズはというと。

「才人ったら……デルフがまたネチネチ愚痴を言う事になるわね。」

悠然とその光景を見守っていた。

「ちょっとルイズ、お父様が撃たれたのに何のんきな事を！」

エレオノールが叫ぶ。しかし。

「大丈夫よ。だって才人が撃つたのは本物の弾じゃないもん。」

「え！？」

エレオノールが心底驚いたような顔をした。そしてルイズが指さした方を見ると、確かに公爵は倒れもせず立っていた。そして負けを認めたように剣を地面に突き刺した。

「いやあ。今回は完敗だな。」

そして公爵は盛大に笑った。それに対して、才人は手を横に振った。

「いえいえ。拳銃を使えたから勝てただけです。まだまだ公爵には及びませんよ。しかし痛い目にあわせてすいません。」

才人が撃つたのはゴムで出来た模擬弾で、当ると弾け飛んでしまう物だった。しかし衝撃は来るから当然痛い。

だが公爵は至極ご満悦だった。

「実戦さながらだからこれで良いんだよ。まあとにかく、今回は君

の勝ちだ。大いに誇りたまえ。」

「ありがとうございます。」

そして2人は堅く握手した。それを見た見物人たちから拍手が送られた。そしてルイズは悔しそうな顔をするエレオノールに得意げな顔をするのだった。

ヴァリエール家へ 模擬戦編（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

作者よりお知らせ、このシリーズでは才人たちを中心に書いていくせいで、原作キャラの登場率が低いという作者自身困った現象が起きています。そこで番外を書くべきと考えたのですが、いったいどのような話にするのか、誰に焦点を当てるのかなど、皆さんの忌憚なき意見が欲しいです。

ちなみに作者は現在10巻半ばまで読んでいます。

ヴァリエール家へ 突発事態編

ヴァリエール家に才人が滞在して3日目。この日は朝からちよつと気まずい物となった。何故かといえば、それは昨日の午後に起きた出来事に原因があつた。

昨日ヴァリエール公爵との模擬戦に勝利した才人は、昼食を終えてから今度は長女のエレオノールの挑戦を受けた。そして、その挑戦を受けて戦い、あっさりと彼女を打ち破った。そこまでは良かった。問題はその後に起きた。エレオノールはよほど悔しかったのか、部屋に引きこもってしまったのだ。そして夕食になっても出てこなかった。

さすがにこれには、才人とルイズも悪いと感じてしまった。公爵と夫人は、「気にすることはない。」と言ったが、どうにも後味が悪い。才人は最初謝った方が良いと考えた。

しかし、どう謝ったものか判らない。なにせ、彼女は正々堂々と戦って負けたのだ。才人には本来落ち度はない。それで謝るということは、はつきり言つてただの同情だ。逆効果になる可能性が高かつた。

そして結局何をして良いものかわからないまま、朝食の時間を迎えたわけだが、エレオノールはまだ出てこず、部屋で食事をとつたため、才人とルイズは彼女に会うことが出来なかつた。

結局朝食が終わると、才人とルイズは他にやることもないので、屋敷の裏手にある池でボート遊びに興じていた。

緊張していた心をとぎほぐし、楽しい時間をしばらくすごした2人であったが、しばらくして屋敷の方が慌しくなったのがわかった。

「なんだろう？」

「さあ？何かしら？」

2人とも首を傾げた。

そして2人が見ていると、屋敷の入り口から数騎の馬が走って出て行くのが見えた。遠くからなので詳しくはわからなかったが、明らかに武装しているのがわかった。

「あれ多分お父様だわ。武装していたみたいだから、領内で何か起きたかもしれないわ。」

領主の役目の一つには、領内に出る亜人や野盗を退治するというものがある。どうやら公爵はそれで出動したらしい。

そしてそれを裏付けるように、5分ほどして使用人が池の方に走ってきた。才人とルイズは話を聞くために、ボートを一端岸につけた。

「近くの村が盗賊の襲撃を受けたようです。旦那様はエレオノール様と一緒に出て行かれました。」

するとルイズが首を傾げた。

「なんでお姉様まで？」

「さあ？いきなり付いて行くといい始めまして。私にもわかりません。」

使用人の方も理由まではわからないらしい。

「まあ野盗ごときなら、すぐに倒して戻ってこられるでしょう。旦那様は、お二人は気にせずゆっくりしていて欲しいと仰っていました。」

使用人は笑顔でそう言ったが、はつきりいつて穏やかな話ではない。そしてルイズの表情は何か思いつめたような物となった。

「どうしたルイズ？」

才人がそれに気付き聞いてみる。

「ううん・・・ちょっと、なんだか胸騒ぎがして。今までこんなことなかったんだけど。お父様たちなら盗賊ぐらいすぐに倒せるはずなんだけど。なんか心配なの。」

ルイズがそう言うと、才人も何故か心配になってきた。

「あの、公爵はどちらの村へ向かったんですか？」

才人が尋ねると、使用人が不思議そうな表情をする。だが相手が男爵では質問に答えなければならない。

「はあ？ここから東へ行つた、国境に近いスオミという村ですが、それが何か？」

「いえ、なんでもありません。ありがとうございます。」

「左様ですか。では私はこれで。」

そして使用人は伝える事を伝えて去っていった。それを確認すると、才人はルイズに問い掛けた。

「じゃあ行くか？」

「ええ。」

顔を見合つて頷くと、2人は行動に移った。

2人は一端部屋に戻る。そして手早く飛行服に着替えると、裏の練兵場の片隅に止めた99式襲撃機に乗り込んだ。まる2日間外に置きっぱなしだったが、固定化の魔法をかけてあるから特に不具合が出るとは思えない。それでも才人は機体とエンジンを簡単にチェックする。

「才人、悪いわね。ただの私の思いすごしとは思っただけど。」

後ろからルイズが話し掛けてきた。

「別に良いって。それに俺も少し気になるから。」

会話しつつ、才人は機体の周りを回って外見上の異常がないことを確認する。

「ようし、異常なし。」

確認を終えると、車輪止めを引き抜きコックピットに入る。すでに手馴れた物で、ルイズの方は先に後部座席に座ってベルトをつけていた。

「コンタックー!!」

才人はエンジンをかけた。950馬力の空冷エンジンは特に整備をしていないにも関わらず、調子よく回り始めた。そして才人はそのまま暖機運転に入る。

「燃料は・・・大丈夫か。」

才人は燃料系の針を見たが、未だ8割ほどがタンク内に残っている。

不思議な事であるが、固定化の魔法をかけると機体が劣化しなくなっただけでなく、燃費やエンジンの出力が幾分上向きになっている。

5分ほど暖機運転をしたところで、才人は無線機でルイズに言う。

「ようし、じゃあ行くぞ。」

「ええ。」

この時になって、ようやく使用人たちが気づいてこちらに走ってくるのが見えた。才人はそれに構うことなく、スロットルを押して機体を滑走させた。

「それじゃあちよつと出かけてきます。」

聞こえるわけも無いのに、才人はさういうと呆然とする使用人たちに手を振った。後部座席のルイズも風防越しに手を振った。

2人に乗せた99襲撃機はそのまま何事も無く空中へと浮かび上がった。そして公爵たちの後を追うように、一路東へ向けて飛んでいった。公爵たちの出発に遅れる事50分ほどだった。

一方その頃、公爵たちは既に目的の村に到着していたが、そこで彼らを待ち受けていたのは予想もしない敵の反撃だった。

「一体どういうことだ!？」

公爵が地面に伏せながら、自分たちに攻撃してくる連中の方を見た。

ここに来るまで、公爵は相手がせいぜい十数人程度の小規模な盗賊と考えていた。ところが村に着いてみれば、敵の数は十数人どころではなく、百人近い大集団だった。しかも、かなりの数のメイジが含まれていたのに加えて、持っている装備も銃等を含めてハルケギニア世界での最高水準の物だった。

「エレオノール、大丈夫か？」

公爵は隣で同じように地面に伏せるエレオノールに問い掛けた。

「ええ、大丈夫です。」

だが2人、さらにお付きの人間も全く身動きが取れない。攻撃しようにも、相手は魔法と銃で絶え間なく攻撃してくるので、反撃も思うように出来ない。それどころか、徐々に相手に四方を囲まれつつあった。

「お父様、一体あの連中は何者でしょう？」

これまでに現れた野盗とは全く違う敵の動きにエレオノールも困惑気味だった。

「わからん。格好は明らかに盗賊の類だ。だが、動きがまるで訓練されている兵隊だ。」

実際公爵の予測は的を射ていた。この時彼らが戦っていたのは、国境を越えてきたゲルマニア軍だった。しかし、彼らがそれを知るのは、まだずっと先のことである。

ヴァリエール家へ 突発事態編（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

ヴァリエール家へ 戦闘開始編

ヴァリエール公爵と娘のエレオノールが遭遇している状況は最悪だった。1対1、もしくは数人程度の相手なら、スクウェアクラスのメイジである公爵1人だけでも充分対処できるが、相手が100人の集団となると話は別だ。しかも、メイジと銃で武装した兵士の連合で、その動きも軍人であるために隙がない。

「もう、なんでこんなことに。」

エレオノールは悪態をついた。それは今の状況をふくめて、最近悪い事ばかりが続く事への悪態だった。

最近の彼女はとにかく運から見放されていた。所属しているアカデミーは、『東宝義勇軍』が後押しする科学研究所の創設で予算と人員を大きく削られ、完全に冷や飯食い扱いとされてしまった。加えて、それに対するお返しとばかりに、ルイズと婚約し、父親に模擬戦で勝って自惚れている（これは彼女の偏見）義勇軍の男に果し合いを挑んだら、わずか1分で逆にやられてしまった。

彼女としてはまさに大恥をかかされたのである。その汚名返上とばかりに父親の野盗狩りに付いてきてみれば、逆に包囲されてしまった。

「エレオノール、大丈夫か？」

公爵が自分の隣に這いつくばる娘を気に向け、声をかける。

「はい。ですが、このままではいけません。なんとか反撃を。」

「そうしたいのはやまやまなんだが、さすがに相手が百人もいてはな。おまけにメイジと銃士兵の連合で隙がない。」

相手は円陣となつてじわじわと包囲網を狭くしてきている。公爵とエレオノールの実力なら20人ぐらいなら軽く吹き飛ばせる。しかしその間に後ろから魔法が、銃撃を喰らう可能性大だ。

「でも、このままじゃ・・・」

後5分もあれば相手は2人に襲い掛かってくること間違いなしだ。そうなったら、終わりである。2人は早急に対応策を練る必要に迫られていた。

ヴアリエール公爵たちが向かった村は、馬で1時間もあれば着ける場所だった。時速300kmで飛ぶ飛行機なら10分も掛からない。才人は飛び立つと一端高度を取り、その後地図に記された場所に向けて旋回した。

視界が確保されると、才人とルイズは地上を見回しながら目標の村を探しはじめたが、まもなくそれは必要のないことであるのがわかった。森の中に煙が立ち昇っているのが確認できたからだ。しかも激しく燃えているのが窺えるとす黒い煙だった。

「才人！あっち！」

「わかってる！！」

才人は操縦桿を倒してフットバーを蹴り、機首を煙の方向へと向けた。

「それにしても、どうしてあんな盛大に煙吐いてるんだ？」

別に才人は火災の専門家ではないが、直感的に空に立ち上っている煙の色が濃すぎるのはわかった。

2人の心に、自然と不安が生まれた。

「才人急いで！お父様とお姉さまが！」

「わかってる。」

才人はエンジンをフルスロットルに吹かした。

もう時間がなかった。公爵は座して死ぬ道よりも、打って出て死ぬ道を選んだ。

「やむをえない。こうなったら撃たれることを覚悟で出る。何もしいないよりマシだ。エレオノール、お前は伏せていなさい。」

公爵はエレオノールにはそのままにいるよう指示した。娘を想っていることである。しかし。

「お父様！それはいけません。だつたら私も！」

エレオノールが反発した。

「だめだ。今相手が攻撃してこないのはこちらが反撃しないことで様子を見ているからだ。こっちが撃てばすぐにお返しが来る。だからワシが立ち上がったって攻撃し相手を引き付けるから、お前は好きに他の者と逃げる！」

もちろん、そんなことを許すエレオノールではない。

「嫌です。貴族としてそのような振る舞いをするわけには行きません。」

「しかしだな・・・」

その時、2人の耳に音が入ってきた。

最初は遠くのほうからブーンという虫の羽音みたいな物だった。

「何？」

聞き覚えのない音に、エレオノールは顔を上げ、周りを見回した。そして彼女らを囲んでいた野盗らも、音源を探そうと辺りを見回した。だが、音源らしき物はざっと見渡しただけでは見当たらない。

唯一その音の正体がわかった公爵は、不敵に笑って呟いた。

「ワザワザ来てくれたのか。まったく頼りになる婚約者だ。」

まもなく、数人が空に現れた物体に気付いた。そしてそれからほどなくして、凄まじい音が辺り一面を覆った。

ドガガガ・・・

野盗らのほんの数m先の地面が抉られ、土煙が舞い上がった。

才人は燃える村と、円陣に広がっている人間の影を認めた。それと同時に、機銃とロケット弾の安全装置を解除した。

「おいおい、冗談じゃないぞ。100人はいるぞ！ルイズの親父さんたちマジで大丈夫か！？ルイズ、攻撃するけど急降下や急旋回をするかもしれないから、しっかり捕まっているよ。」

無闇に人を殺すことを才人は嫌っている。しかし、目の前で命の危機に瀕している人がいる以上、助けなければならない。

「わかったわ。才人、お父様とお姉さまを助けてよね。」

「ああ！」

才人は機体を降下させた。機体はぐんぐん目標に近づくが、距離が近づくに連れて地上の状況もわかってくる。

野盗はざっと数えて100人ほど。円陣になって数人の人間を囲んでいるのがわかった。恐らく、囲まれているのが公爵たちだ。

才人は反射的に、まず敵の公爵たちに対する包囲を解くために、機銃を発射した。99式襲撃機には両翼に127mm機銃が1基ずつ装備されている。しかも、元々装備していた物に代わって、今は才吉が現代から持ち込んだより優れているM2重機関銃に交換さ

れていた。

「喰らえ!!」

才人は機銃を野盗の直ぐ側の地面に撃ちこんだ。直接狙わなかったのは、やはり人を殺す事への抵抗があったからだ。

ドガガガ・・・

2基の機銃がリズムカル、かつ重々しい音を立てて発射される。空中には数発に一発の割合で混ぜられた曳光弾が、鮮やかな光の線を作る。

この1撃目が、先ほどエレオノールたちが見た攻撃だった。

400km近い速度で飛んでいる飛行機から機関銃を発射できるタイミングはほんの数秒だ。だが、それで充分だった。

凄まじい轟音を発し、かつ高い威力でミシンの目のように地面を挟ることなど、ハルケギニアの常識からいえば魔法でも銃でも出来ない。さらに、飛行機など見たこともない野盗たちは、その発するエンジン音だけで浮き足立ってしまった。

その瞬間を見逃すようでは歴戦の戦士とはいえない。

公爵は反撃を開始した。

「よし！エレオノール、攻撃しろ!!」

エレオノールに叫び、立ち上がった。

「はい!!」

公爵とエレオノールは立ち上がり、呪文を詠唱した。そして注意を疎かにしていた野盗たちの一箇所に魔法を叩き込んだ。

その一撃で、20人近い野盗が吹き飛んだ。それは包囲網に穴を開けたことを意味した。

「走れ!!」

公爵とエレオノール、そしてお付きの人間2人は全力で走り始めた。

一方、不意打ちを受けた野盗たちは、すぐに我に帰ると、公爵たちを狙い撃とうとした。しかし、その時には旋回してきた才人らの第2撃が加えられた。

ヴァリエール家へ 戦闘開始編（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。
外伝も更新中です。

ヴァリエール家へ 終結編

旋回を終えた才人は、今度はロケット弾の発射ボタンに手を掛けた。

ロケット弾は片翼に3発ずつの計6発を搭載しているが、操縦席からの操作で2発ずつの発射と全弾発射を選択出切る。才人は、2発発射モードに設定した。

彼がやろうとしているのは相手を殺す事ではない。ヴァリエール公爵たちの脱出掩護と敵を追い払う事なのだ。

照準器を除き、敵がない場所でおかつ敵からそんなに離れていない場所を狙う。もっとも、ロケット弾攻撃だと、どこへ撃ち込もうと相手に被害が出る可能性が高い。

よく戦争映画などで、砲弾や爆弾の爆発によって倒れる兵士のシーンがある。直撃でなくても、爆圧による内臓破裂とか、また爆弾や破壊した物の破片が凄まじいスピードで襲い掛かってくること、人間は充分死ぬか傷つくからだ。

ロケット弾は地面についた瞬間には信管を作動させる。だから、確実にロケット本体の破片は辺りに飛び散る。この世界の銃弾や砲弾が、ただの丸い形をした塊から考えると、凄まじい威力を備えている武器なのだ。

一歩間違えが、公爵たちも巻き添えにしかねないので、才人は慎重に狙いをつけた。もっとも、それもほんの数秒の間の出来事だが。

丁度良い所で、才人は発射ボタンを押した。

「行け！！」

パシュ！！

先ほどの機銃とは比べ物にならないほど軽い音と共に、2発の口ケツト弾が主翼から白い煙を残して飛び出した。

公爵とエレオノールたちは、敵の包囲網に出来た穴からなんとか逃げ出そうと走り始めた。だが、後ろに回った敵はがら空きの彼らの背中へ、今にも攻撃をかけようとしていた。

彼女がもう一度杖を振るおうとしたとき、何かが自分の頭上を飛びぬけた。細長く、尻尾の部分からは炎と煙を引いていた見たこともない物体だ。

「あれは？」

その物体は、さらに後ろの野盗集団の頭を掠めるように飛び去ると、その後方10mほどの地面に突き刺さり、そして爆発を起した。

ドグワ ン！！

爆風が野盗らを薙ぎ倒した。エレオノールにも爆風と熱波が襲いかかってきたが、体を傷つけるほどの物ではない。

エレオノールは直ぐに我に変えると、公爵のあとを追って再び走り始めた。野盗連中は、いきなりの空からの攻撃に浮き足立っていた。

一部のメイジや銃を持った兵隊が、果敢にも空に向かって撃ちはじめたが、時速150km程度しか飛べない飛龍を見たことがある程度のハルケギニア人にとって、時速400kmで飛ぶ襲撃機に当たるのは逆立ちしても無理だ。

銃弾も魔法も、襲撃機を捉えることは出来ず、ただむなしく空気を割くだけだった。

才人は舌打ちした。

「まだやるのかよ？早く撤退すれば良いのに。」

無用な殺生はしたくないだけに、連中にはとっと引き上げて欲しいのが才人の本音である。しかし、野盗らは動きこそ鈍ったものの、逃げ出す素振りは見せない。

「もう一撃かける必要があるか・・・ルイズ、悪いけどもう一度付き合ってくれ。」

「え、ええ。」

急旋回を連続したからだろうか、ルイズの声はどことなく苦しそうだった。それでも彼女は弱音を吐かない。公爵たちを助けたいと強く願っているからだ。

もつとも、その前にルイズの身体が根を上げるかもしれない。才

人もそれに気づく。

「早く片付けないと。」

敵よりも先にルイズがG（重力加速度）で参ってしまうかもしれない。

才人は思い切って4発のロケット弾全てを打ち込む事にした。さらに、機銃掃射も同時に行なう。幸い今なら公爵たちも既に退避済みであるし、敵もバラけているから被害も最小限度で済むだろう。

「行くぞー!!」

才人は3度目の降下に入った。

攻撃態勢に入った襲撃に向かって、敵も銃や魔法で攻撃してくるが、いずれも射程が短いせいで届きもしない。

「照準良し・・・撃て!!」

才人は発射ボタンを再び押した。

再び発射音と発射煙を残してロケット弾が飛び出した。

才人は発射後も直進飛行を続けた。

4発のロケット弾が敵の鼻先の地面に着弾し、爆発すると才人はそのまま機関銃の発射ボタンを握りしめた。重々しい発射音を立てて、機関銃弾が発射される。

この連続攻撃にさすがに肝を潰したのか、ついに敵兵の中から脱走者が出始めた。こうなると、もう止められない。

旧ソ連軍は第二次大戦中、戦場から逃げてくる味方を撃つだけの督戦隊なる部隊を配置し、兵士が戦場から後退する事を許さなかった。そのため、多くの兵士たちが戦場で戦い続けることを強要された。

しかし、今回は逃げる者を遮る者はない。上官が後ろから止めようと声を荒げるがそんな物で止められるはずがない。

さらに残った者たちも、才人がもう一回攻撃態勢に入ると、再び攻撃を受ける恐怖に打ち負けて、ついに先に逃げ出した者の後を追うこととなった。

実際には、既にロケット弾は使いきっており、才人はブラフで降下したのであるが、敵兵にそんなことを見抜く力などなかった。

「終わったな。」

逃げ出す敵兵を見ながら、才人は戦闘が終わった事を確認した。

「お父様たち大丈夫かしら？」

ルイズが彼らを気にかけて言った。

「多分大丈夫だよ。近くの森へ逃げ込むのを見たから。とりあえず、一端着陸しよう。」

「そうしましょ。」

才人は機体を降下させた。

才人が村の近くの平原に機体を降ろすと、すぐに近くの森の中から、避難していた村人らが出てきた。傍若無人に暴れ回っていた敵を追い散らした才人らに向けて、彼らは歓喜の声を上げて出迎えた。

その村人らを掻き分けて、公爵らもやってきた。

「お父様！お姉さま！」

ルイズは父と姉の無事を確認すると、急いで座席から這い出し、二人のもとへと走り始めた。

「無事で良かった。」

「ああ、お前たちのおかげで助かったよ。」

少し遅れて、機体のエンジンを止めた才人も走ってきた。

「大丈夫でしたか？」

「おお！才人君。ああ、このとおり大丈夫だ。君の助けがなかったら今ごろどうなっていたかわからなかったよ。感謝するぞ。」

「いいえ、俺は当然のことをしてだけです。」

べた褒めの公爵に対して、エレオノールの方はいまだ苦虫を潰し

たような表情をしていた。自分が蔑んだ相手に助けられたことを認めたくないのだ。

だが、実際に助けられたのだから、感謝の言葉を言うというのが貴族としての矜持とも言えよう。

「感謝するわよ。」

エレオノールはただ一言そう言った。

その後、公爵と才人たちは戦場となった村の村人たちから話を聞き、さらに残された遺留品などの調査を行なった。

村人の話では、幸いにも死傷者は出なかったらしい。しかし、村の8割が焼かれるという文字通り壊滅的打撃を被っていた。公爵は領主として、村の復興を支援することとなる。

一方、襲ってきた敵については、軍人のように訓練された人間ばかりであったから、ゲルマニアの正規軍である可能性が高かった。しかし、敵が落としていった銃や剣は刻印などが削られていたため、それを証明する証拠となるような物は一つとしてなかった。

こうして、謎の野盗襲撃事件は幕を閉じた。

この2日後、才人とルイズはトリスタニアを経由して魔法学院へ戻るのだが、才人が自分の婚約話と共に、この事件に付いて詳しく両親に報告したのは言うまでもない。

ヴァリエール家へ 終結編（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

ストーリーや兵器、人物などなんでもかまいません。

波紋

才人とルイズが魔法学院に帰ると、どこでどう知ったものか、いきなりギーシュやモンモランシをはじめとする生徒たちが、2人の婚約を祝ってきた。

「才人、ルイズとの婚約おめでとう!」

「2人とも羨ましいじゃない。それにしても、あんたたちの方が早いなんて驚きだわ。」

この予想外の事態に対して2人が大いに驚き、かつ大いに恥ずかしがったのは言うまでもない。

「なんでお前らそのことを知ってるんだ!？」

才人の問いに、ギーシュが平然と答えた。

「何でって言われても、君たちのことは今や学院中の話題だよ。君は本当に学院内の話題をさらってばかりだね。本当に羨ましいよ。」

ちなみに、震源地はどうやらオスマン校長で、そこから教師へと伝わったようで、さらにその教師が生徒に口を滑らしたことで伝染したらしい。

まあいざればれる事であった。しかし、しばらくこの事が同級生（実際には学院の全生徒）の話題の的となってしまう、ルイズと才人はほぼ毎日赤面することとなる。

一方、祝福する者もいれば罵声をかけてくる者もいる。その多くは才人を成り上がりとしてバカにする貴族連中であつたから、才人もルイズもそんな人間の言葉に耳を貸しはしなかった。もし力に訴えて来ても、2人は簡単に返り討ちにした。

2人、というより才人にとつてもっとも深刻な問題であつたのがメイドのシエスタであつた。彼女は才人が好きであつたから、ルイズとの婚約が彼女に与えたショックは大きかつた。

「サイトさんとミス・ヴァリエールのバカ！！裏切り者！！2人なんか×××！」（放送禁止用語を連発）

開口一番こう叫ばれた。本来これは平民が貴族に対して侮辱したのだから、大変なことである。というか人として言つてはいけなない事を連発にしているのだからもはや侮辱どころではない。

しかし、才人もルイズも怒りはしなかつた。というより怒れなかつた。逆に申し訳ない気持ちだつた。

才人はシエスタが以前から自分のことを好きであるのは承知していたことだし、ルイズもライバルであると認めていた。そして才人とルイズの仲は学園にいる間ほとんど進展していなかつた。だからシエスタは自分こそ才人さんの本命という自負を持っていた。

それなのに、実家に帰つて父親から婚約するように言われた途端、2人も受け入れてしまったのだから、まさにシエスタには寝耳に水、ルイズに才人をネコババされたような物だ。もしかしたら空が落ちてきたぐらいのインパクトがあつたかもしれない。

そついうわけで、才人もルイズもシエスタが怒るのは当然のこと

とわかっていたから、一応謝るくらいはしておこうかなと思ったが、この翌日シエスタは1ヶ月に渡る長期休暇を申請して学院から出て行ってしまい、謝りようが無かった。

ちなみに、シエスタがどうなったかについては、外伝に書く予定である。

ところで、学院に戻ったことで、才人とルイズはある人物と必然的に顔を合わせることとなる。ゲルマニアからの留学生で、ルイズの先祖代々からのライバルであるキュルケだ。

彼女も、2人に会うなり。

「2人とも婚約おめでとう。結婚式には呼んでね。」

と言ってきたわけだが、ルイズの方は言いたいことが山ほどあった。先日ヴァリエール公爵領を襲った野盗のことである。

その後の調べで、野盗連中はゲルマニアのしかもツエルプストー領、すなわちキュルケの実家の領地から侵入した可能性が高まった。だからルイズのキュルケに対する怒りはいつもの200%だった。

「キュルケ!! あんたね……」

ただし、もともとこうした罵詈雑言を言われるのに慣れきっているキュルケはルイズの10分間に渡る怒りの言葉の波状攻撃を受け、表情1つ変えず聞いていた。

「……というわけで……ゼエゼエ……一体どういうことなのかしら!?!?……ゼエゼエ……」

最後には喋りすぎて息を切らしながら、ルイズはキュルケに対しての言葉の攻撃を終えた。

一方のキュルケは先ほど書いた通り、全くダメージなど受けてないわけであるが、気になることを喋り始めた。

「ふーん。まあそれについては私も詳しい事なんか知らないと言えないわね。それに言っておくけど、家がなんでトリステインに戦争しかけるようなことしなきゃいけないのよ？・・・あ！ただ実家から届いた手紙に気になることが書いてあったわね。」

「「気になること？」」

「そう。なんでもね、2週間前に帝軍が突然やってきて、今週突然家の領地で演習するって言い出したのよ。」

「な、何だって！！（何ですって！！）」

2人とも驚いた。つまりは野盗襲撃事件と活動期間が一致するのだ。

「普通だったら王家の直轄地でやるから、お父様たちも不思議に思っただらしいわよ。」

「キュルケ、その演習って一体どんなのだった！？規模は！？具体的な場所は！？」

才人が詳しい事を聞きだそうと、連続して質問した。

しかし、キュルケは手を両手に広げて言った。

「さすがにそんなことまでは手紙に書いてなかったわよ。」

まあ確かに。娘との手紙のやりとりで、そこまで具体的なことを書く必要などないだろう。才人は少しばかり落胆した。

「そうだよな。」

「あ、けどね、確か手紙には、なんでも相当な額の代金が出たって書いてあったわ。だからお父様たちも受け入れたらしいけど。」

その言葉に、才人もルイズもますますそのゲルマニア軍の動きに怪しさを感じてしまう。相当な額を代金として払ったという事は、そこまでしてしなければならぬ演習であったということだ。

「まあ私にわかるのはそれくらいかしらね。」

結局キュルケから聞き出せたのはこれだけであつたが、先日の野盗事件にゲルマニアの王室が絡んでいる可能性が高くなったことは確かであつた。

とにかく、才人とルイズにはそれ以上調べようなどあるはずがなく、キュルケから聞いた事をそれぞれの親に伝えただけであつた。

こうして野盗事件については、その後2人の記憶から徐々に消えていく事となるのだが、これが後のハルケギニア全体を巻き込んだ大戦争の出発点である事に、2人が気付くことはなかった。

そしてそれから観閲式直前までの2人は、魔法学院で久しぶりに穏やかな日を過ごしていたの（一応休日はトリスタニアへ出ていたが）であるが、平和や安寧は中々長くは続いてくれないのだった。

観閲式の2日前、ルイズと才人はそれぞれ王室から城へ来るようにという通知を受けた。早速2人は魔法学院からトリスタニアの王城へと向かった。ちなみに移動はバイクであるから馬より断然早い。2人ともその日の内に城へと着いた。

衛士に案内されて城の中を進み、指示された部屋に入ると、そこには2人を呼んだアンリエッタ・トリステイン王国女王。その隣にはまもなく彼女との婚儀を発表する予定のウェールズ・アルビオン国王、そして2人の先客が待っていた。

その先客とは。

「曾爺ちゃん!!」

「お父様!!」

才人とルイズがほぼ同時に声を上げた。

そこにいたのは、アルビオンにいる筈の才吉と、先日会ったばかりのヴァリエール公爵だった。

波紋（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

本編でわずかに触れましたが、外伝の次回ネタはシエスタ編で行きます。ちなみに、ようやくあの店が出ます。

歴史に残ったパーティー

観閲式が終わった日の夜、トリステイン王国首都トリスタニアにある宮殿では、盛大なパーティーが行なわれていた。このパーティーは最初単なる王族の顔合わせの社交の場という意味しか持たされていなかったが、夕方ウェールズアルビオン国王と、アンリエッタトリステイン女王の結婚発表と、トリステイン王室への代王（摂政）就任の発表によって、それらを祝う場となった。

玉座に座っている結婚する当事者の2人は笑顔満面で幸せそうであつたが、その隣に座らされ、代王に指名されたピンクのブロンドの少女はがちがちに緊張して立っていた。

そして彼女の婚約者は、心配そうにその姿を見つめていた。

「あいつ本当に大丈夫か？」

ワイングラスを片手に持ち、義勇軍の白い制服を着たその青年、平賀才人は今回代王という役目を押し付けられ、今にも倒れないかと心配するぐらいに緊張しているルイズを見て言った。

「とても王様つて器じゃないって本人も言ってたもんな・・・」

これは実際にルイズが言っていた言葉だ。

「そんなこと言うな。お前婚約者だろ、彼女の事しっかり支えてやれよ。」

そう才人の肩に手を置きながら言うのは、父親である才助だ。彼

も今は義勇軍の制服を着ている。

「父さん・・・そうだね。けど、本当にルイズが代王になるとは思わなかったからさ。」

2週間前、王宮に呼び出された2人はウェールズとアンリエッタから正式にルイズを代王に任命することを申し渡された。そしてその発表を、義勇軍の観閲式が行なわれる日に行なう事も。

一応その可能性はあると考えていたものの、本当になるとは思っていなかっただけに、才人もルイズも聞かされた時は本当にビックリであった。

「せっかくだからあなたたちの結婚式も一緒にしましょうか？」

アンリエッタが笑顔でそう提案してきて、側そばで後見人として立っていたヴァリエール公爵が承諾しそうになり、慌てて才人とルイズが「まだ早い！」と言って止める場面もあった。

彼らにしてみれば、ルイズが代王に選ばれたというだけでも大事なのに、さらに結婚式の話まで持ち出されてはたまらなかった。

とにかく、ルイズはその時アンリエッタから王室の紋章が入ったマントを渡され、才人はウェールズから「婚約者として彼女をしっかりと支えて欲しい。」と言われた。

その後今日まで、学校のことやら実家の事やらいろいろ調整する事があり、ごたごたしたが、アンリエッタが正式にアルビオンに移動する来週から、ルイズは宮殿に入る事となっている。

もちろん、彼女は帝王学その他国を治めるのに必要な知識は、貴族として最低限の物しか学んでいないから、しばらくは勉強漬けになるだろう。

才人は婚約者の身であるから、宮殿に入る事はかなわない。そのためしばらくは義勇軍基地での暮らしになりそうだ。

もつとも、ヴァリエール公爵はしきりに式を挙げるように言ってきているから、才人が宮殿に入るようになる、すなわちルイズの夫となる日もそう遠くはないかもしれない。

だが、才人にしろルイズにしろいきなり期間限定とは言え王族になるのだから、混乱して当然だった。しかもルイズも才人も、王族というのは肩身が狭いというイメージを持っているから憂鬱な気持ちが続いて当然だった。

そんな本人たちとは裏腹に、今回のパーティーにももちろん出席しているルイズの両親、ヴァリエール公爵とカリ。又夫人は笑顔でパーティーの参加者に挨拶回りをしており、また同じくパーティーに招かれている才吉と才助は昼の観閲式を見て、義勇軍に関心を持った貴族や軍人らの話の相手をしていた。

「俺たち一体どうなるんだろう？」

そんな呟きを漏らす才人。

1年前まで日本で普通に高校生をしていたのに、曾祖父が購入したゼロ戦ごと異世界に飛ばされ、そこで少女の使い魔（しかも伝説の）となり、さらに後続して現れた両親たちや他の地球から来た人たちと2度の戦争に出兵して勝利し、ついには王族の一員になると

誰が想像しえたであろうか。

「王族にまでなったんだから、これ以上は何も起こらないよな？」

ふと冗談交じりでそんなことを考えてみるが、実際現実はその言葉どおりにならなかった。それどころか今この瞬間が、ハルケギニア史上最大の大戦への準備期間であるとは、才人には全く想像もつかなかった。

才人がいろいろと考えを頭の中で巡らせている間もパーティーは進んでいき、集まっていた各国の王たちは今回結婚するウェールズとアンリエッタには笑顔で祝いの言葉を、代王になるルイズには健闘の言葉を掛けていった。

もつとも腹の中に抱えている物と、表情がまったく違うのは古今東西政治を司る者つかさどの常だ。実際、今回の観閲式とアンリエッタ達の結婚に対して大きく警戒心を抱いた人間もいた。それがゲルマニアのアルブレヒト3世であり、ガリアのジョゼフであった。

彼らはアルビオン解放戦争時から、その勝利の原動力となった謎の軍隊、『東方義勇軍』に大いなる関心と警戒心を持っていた。加えて、その後その『東方義勇軍』が駐留する事となったトリステインとアルビオンが非常に距離を近づけると、その警戒心はさらに高まりを見せた。

彼らにとって、本来は小国であるトリステインとアルビオンが軍事的に誇大になることを望むことでは無かった。

そして今回の観閲式で『東方義勇軍』の圧倒的な実力を直に確認じかし、さらにはウェールズとアンリエッタの婚約によりさらに距離を

詰めるであろうトリステインとアルビオン両国に対する警戒心はマックスに達していると言っても過言ではなかった。

もつとも、ジョゼフの場合は警戒心もさることながら、興奮も大きかったことは確かであろう。そして彼はこの1カ月後、ゲルマニアのアルブレヒト3世と秘密裏に交渉を持ち、共同でのトリステイン、アルビオン攻撃をもちかけることになるのだが、それはこの時点では未来の話だ。

パーティーは数時間に渡って行なわれたが、最終的にアンリエッタからルイズへ王冠が引き継がれ、そして一同に帰したハルケギニアの王たちの記念撮影で幕を閉じた。

記念撮影はハルケギニア世界にはない習慣であるが、歴史的瞬間を後世に残すべきという才吉の提案で行なわれた。もちろん、この撮影は才吉が持っていたカメラで説明を行なってから行なわれた。

撮影のために1列に並んで座った、トリステイン代王ルイズ、アルビオン国王夫妻ウエルズ・アンリエッタ、ガリア国王ジョゼフ、ゲルマニア皇帝アルブレヒト3世。

彼らが並んで撮られたこの写真撮影は、ハルケギニア史上初めての公式写真撮影であり、そしてハルケギニアをもっとも大きく動かした人々を写した写真として後の世に伝えられ、必ず歴史の教科書に載る事となる。

ハルケギニアの歴史は大きく動いていた。そしてその動きはこれまでになく激しい物だった。

歴史に残ったパーティー（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

作者近況・・・連載作品が6作品になり、どれを更新しようか迷う毎日。そして大学のほうはテストがいよいよ近づいてきている毎日。朝鮮語が、英語が・・・がんばらねば。

宴は終わり・・・

後の世のハルケギニアの歴史書では、義勇軍の観閲式が行なわれ、アルビオンのウェールズ国王とトリステインのアンリエッタ女王が結婚したこの日を歴史的な日と称することとなるが、さらに後にある事実が判明すると、よりその意味合いが濃くなる。

この日、義勇軍の観閲式を見に来ていたのは何も王族やトリスタニア市民だけではなくた。義勇軍の働きに刺激されて興味を持った貴族も少なからずいた。

その1人に、魔法学院でルイズの同級生であつた『雪風』の2つ名を持つタバサもいた。彼女は親友のキュルケやアルビオン解放戦争に従軍したギーシュ、マリコル又たちとともに才人からこの式典を観にこないかと誘いを受けていた。

そして彼女はその申し出を受けてやってきた。本来だったら、彼女の性格からして軍隊の式典などまったく興味ないものであつた。才人も誘いこそしたが、まさか彼女が来るとは考えていなかった。そんな彼女がやってきたのである。

彼女がわざわざ観閲式を見に来た理由、それは義勇軍の実力を推し量ることだった。以前タルブ戦の時に、遠景からゼロ戦の実力を彼女は見ていたが、その後作られた『東方義勇軍』の実力は風聞でしか知らなかった。

そしてこの日見た観閲式の光景は彼女の想いを満足させてくれる物だった。戦車という名の、強力な大砲を持って馬も無く動き回る鉄の箱。自分の使い魔の竜よりもはるかに高速で動き回り、強力な

武装を施した飛行機という機械。それらはハルケギニアのあらゆる兵器よりもかけ離れた水準を持っていた。もちろんメイジが操るどんな魔法よりもである。

彼女は普段から表情一つ変えない事で有名である。この日もそうであった。ただし、夜泊まったトリスタニアの宿屋で一言こう呟いた。「彼らに頼もう。」

観閲式の翌日、才人は父親の才助と共に義勇軍基地にいた。この所ずつといっしょにいたルイズは、王宮で即席の王族としての勉強を受けているためにいない。

その事に若干の戸惑いを覚えながらも、才人は父親や他に数人の人間と一緒に格納庫内に置かれたある機体を見ていた。

アルビオン解放戦争が終わって2ヶ月も経っていないが、ウェールズ国王が率先して協力してくれたおかげで、アルビオン大陸に散在していた地球製の兵器などが次々と発見され、ここに持ち込まれている。

具体的にどんな物が発見されたかというと、米軍のM24チャファイター軽戦車、北朝鮮軍のマークが付いたポリカルポフPO-2練習機、そして韓国軍のマークが付いたT6テキサン練習機と言った物だった。

M24軽戦車は第2次大戦時に開発された軽戦車で戦後は日本の陸上自衛隊にも供与され、映画「ゴジラ」にも出演したそれなりに日本人から見たら馴染み深い戦車だ。ただし発見されたのは砲塔に

白い星を描いた米軍の物で、塗装からしてヨーロッパ戦線で使われていた物のようだ。

Po-2練習機はソ連で開発された複葉の練習機で、最高速度130kmという低速機だが実用性は高く、戦争中は夜間爆撃に使われてドイツ軍を脅かした。

ちなみに、この機体は整備員からパイロットまで全て女性で編成された夜間爆撃隊で使用され、ドイツ兵から「夜の魔女」と呼ばれました。

発見された機体には北朝鮮軍のマークが付いていたから、どうやら朝鮮戦争中に夜間爆撃機として使われた物らしい。

T6テキサンも同じ練習機であるが、こちらは単葉風防付きで最高速度も350km以上出る。また主翼には77mm機関銃が装備されていて、ロケット弾も取り付けやすいから小改造で、即攻撃機として使える便利な機体だ。

この機体もエピソードには事欠かないし、日本の自衛隊に供与されたから日本人にもそれなりに馴染み深い。特にゼロ戦に似ているということから多くの映画で改造されるか塗装を変えるかして出演している。ちなみにその中でも有名なのは「トラ・トラ・トラ」だ。

もっとも見つかった機体に描かれていたマークは日の丸ではなく大極旗と英語で描かれたKorean air force、つまりは韓国軍のマークであつたが。そのため旧日本軍出身者は複雑そうな表情でそれを見ていた。

これらいずれも乗っていた人間は既になく、最低でも100年以

上前にこちらの世界に飛ばされた物らしい。ただしやはり最後まで望みを捨てなかったのか、固定化の魔法はちゃんと掛けられていた。

この内2機の練習機は、新たにパイロットを養成するのに大いに役立ちそうだ。これまでは機材がなかったので、整備兵しか養成していなかったが、これでパイロットの養成も出来る。

ちなみに初めての飛行練習生の中に、黒髪の美少女がいたとかいなかったとか・・・

しかし、この時才人たちが注目していたのはここまでで紹介した機材ではなかった。彼らが今見ているのは、真っ白な機体である。先日アルビオンから運び込まれたばかりの機体だ。

機首寄りにある操縦席部分はなんとなくコブラかアパッチ戦闘ヘリを思わせる部分があるが、プロペラは機体の上ではなく主翼に2基ついている。ただし、その主翼は固定翼ではなく可変翼だった。

そして何より才人らの興味を引いたのは、真っ白な胴体に黒字で描かれた『海上自衛隊』の文字である。明らかに戦後造られた物だ。しかもコックピットには多数のコンピューターの表示盤が設置されていた。

「これが保管されていた村の住人によると、現れたのは約80年前。乗っていた人間は20年前に他界しているらしいが、幸いにも彼は後の時代に同胞が来るかもしれない事を予想したのか、文章で機体やここに現れた経緯を詳しく残してくれているので、こいつの正体はすぐにわかった。」

才助がかなり古ぼけたメモ帳らしい物を見ながら言う。

「こいつは正式名MV/SA-32J、愛称はうみどり。海上自衛隊が200X年に制式採用したVTOL機で最高速度は400km。行動半径も400km。武装は20mmバルカン砲1基に、爆弾倉内にはミサイルも搭載可能だそうだ。ただしだ・・・」

そう言っ て彼は機体の方をちらりと見た。

機体は戦闘の途中で飛ばされたのか、操縦席の前部座席はベイルアウトされていてなくなっていた。また20mmバルカン砲も基部に弾痕があり、配線が断線しているようだった。

「これに乗っていた、つまりはメモを残した佐竹一尉によると、これに乗せていたイージス護衛艦はみらいと言うらしいが、そんな艦は俺たちの世界には計画艦も含めてない。というか命名基準からして考えられない。」

その言葉に才人も頷いた。

「たしか今海自にあるイージス艦って、こんごう、きりしま、ちよukai、みようこう、あたご、あしがらだったよね。」

イージス護衛艦の命名基準は、現在山岳からつけられている。だからみらいという時を表す艦名などは存在しないはずだ。

「その通りだ才人。しかも、その艦は太平洋戦争中にタイムスリップして、戦闘に参加して、このうみどりはさらにそこから飛ばされてきたらしい・・・だからこいつは最低でも俺たちの知っている世界から来た物じゃないな。」

才助はこの機体を見ながらそう結論付けた。

「じゃあこれ動かせないのかな？」

才人は少しばかりがっかりしながら言った。使えれば相当面白そうな機体だからだ。才人のいた地球では、VTOL機はまだ実戦配備されていなかった。

「わからない。なにせ現代兵器はコンピューターの塊だからな。例え故障してなくても、旧軍機ばかり使っている俺たちに扱えるか大いに疑問だ。だからこそわざわざ清水中佐と山田少佐を呼んだわけだよ。」

今回才人とともにその機体を見ていたのは自衛隊出身の2人だった。

「とりあえず調べてみないとわかりません。ただし戦力化できれば、これまでの機体よりはるかに大きな意味を持つでしょう。」

清水中佐はそう結論付けた。

「とにかく、こいつの調査は君たちに任せる。」

才助は2人にこの機体の調査を命じた。

と、その時。

ジリリリ・・・

基地内の非常ベルが鳴り始めた。

宴は終わり・・・（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。そして趣味丸出しですいません。

うみどりの元ネタは、多分わかる人も相当いるんじゃないかと思いますが、一応書いておきます。

ジパング かわぐちかいじ作 講談社

タバサ来訪 上

「何だ！？」

突然なり始めたベルに、弾かれるように全員格納庫から出た。そして才助が近くにいた兵士を呼び止めた。

「おい！何が起きたんだね！？」

その兵士は、自分に声を掛けたのが司令官にである事に気付き、慌てて敬礼した。

「は！基地内に竜が侵入したそうですが、自分にもまだよくわかりません。現在確認中です！失礼します。」

そしてそのまま兵士は持っていた小銃を持ち直して走っていった。これでは状況がほとんどわからないに等しい。

結局才人らはとりあえず基地の入り口に向かって走り始めた。義勇軍基地の正門は、トリスタニアから続いている道作られている。そして案の定、正門と少し距離を置く場所に兵士らが銃や手榴弾を持って集まっていた。

そこで才助が再び兵士に声をかけた。

「おい！状況を報せろ！！」

「あ！司令官！はい、侵入したのは竜1匹とその竜に乗った少女1人です。杖を持っているためにメイジと思われ、警備兵が念のため

サイレンを鳴らしました。」

「少女!?!」

才人も才助も驚きの声を上げた。

ちなみに、少女相手にしては物々しい対応に見えるが、相手がメイジなら話は別だ。

義勇軍では定期的に王軍と戦闘訓練を繰り返している。そのほとんどは近代兵器を駆使する義勇軍の勝利に終わっている。5対1でも負けたことがない。しかし1週間ほど前に行なわれたマンティコア隊との訓練では、負けはしなかったが1個分隊（30名）が全滅という大損害を受けた。もちろん訓練なのであくまで判定だが。

この原因は、この時マンティコア隊に査察の名で加わっていた『烈風』カリンという前隊長の存在だった。これまでの勝利からメイジを見下し、正面から挑んだ分隊が彼女の風魔法で吹き飛ばされたのだ。

才人も後に知って驚いたが、この『烈風』カリンこそ、ルイズの母親であるカリィヌだった。1人で1個連隊も相手に出来る実力があるという彼女の前に、いくら近代装備を持つとはいえ、不用意に正面から挑んで勝てるはずがなかった。

ただし、この戦いは義勇軍にとっても衝撃であったが、『烈風』カリンにとっても大きな衝撃となった。何故なら、この分隊全滅を見た残る分隊は、無線（分隊に1から2個配備されている）で連絡を取りながら徹底的なアウトレンジ、狙撃戦に移行したのである。

またこのときマンティコア隊も、義勇軍を平民軍隊と見下していた部分があり、マンティコアを連れていなかった。それが逃げ道を無くすという事態を生み出してしまった。

義勇軍が使っている小銃用スコープの有効距離はせいぜい200〜300mで、近代的な戦闘なら役に立つ物ではない。しかしせいぜい50〜100m程度の魔法の射程で戦うこの世界では充分過ぎた。

義勇軍はマンティコア隊との距離を取りながら、狙いをつけると連続射撃を行なった。この射撃は『烈風』カリンが持っていた常識を徹底的に打ち砕いた。義勇軍のT1型小銃はボルトアクション式とはいえ、射撃速度はこの時代の銃より遥かに早い。60人の分隊から放たれた銃弾は約300発。しかも兵士達は先ほど分隊を全滅させ、しかも男装して目立つ格好をした彼女に狙いを集中させた。

結果、射撃の音が止んだ時には『烈風』カリンは数十発のペイント弾を受けて頭から足まで真っ赤になっていた。もちろん判定は戦死である。

さらに義勇軍は容赦なく、混乱しているマンティコア隊に音響閃光弾を連続投擲して、パニックを起こさせ、その隙に制圧している。

結局この演習では義勇軍が1個分隊全滅、対するマンティコア隊が全滅という判定を受けた。

義勇軍にとっては初めての大損害であった。このため、これ以後メイジ相手の近接戦闘対処法の研究が進められることとなる。またマンティコア隊にとって、負け知らずの『烈風』カリンですら勝てない義勇軍の実力を再認識する事となった。

ちなみに、後に公爵が語る所に寄れば「数日間、カリ　又がやたら静かだったから、逆に不気味だった。」と言っているので彼女に与えたショックが如何に大きかったかを物語っている。

とにかく、この演習以後才助は、全兵士に相手を見下す事を厳しく禁止した。

閑話休題。

そういうわけで、兵士達が少女とはいえメイジ、しかも竜を従えているのだから警戒して当然だった。ただ、銃を構えたもののそれ以降はどうしたものか判断がつかず、こう着状態になっていた。

そんな中、兵士たちをかき分けて少女の顔を見た才人は素っ頓狂な声を上げた。

「た、タバサ！！」

そこにいたのは、間違いなく魔法学院で顔見知りとなっていた青い髪が特徴の少女、『雪風』の2つ名を持つタバサだった。

才人は彼女に走り寄った。

「タバサ、なんでここにいるんだ！？」

才人が聞いただと、彼女はいつもどおり表情一つ変えずただ一言。

「この隊の責任者に会いに来た。」

とだけ言った。

とりあえず、才人はこの物々しい状況を鎮めることにした。

「皆さん、彼女は敵じゃ有りません。銃を降ろしてください。そして持ち場に戻ってください。」

かなり低姿勢な言い方だったが、兵士達は才人が着ている少佐の服を見て、次々と銃を降ろして、その場を去っていった。

それを確認すると、才人は再び彼女の方を見た。

「ええと、タバサ。その責任者って言うのは、司令官でいいのかな？」

するとタバサはこくと小さく頷いた。

どうして彼女がこんな所にやってきたのか、才人には皆目見当がつかなかったが、取りあえず父親に会わせる事にした。

「父さん！」

少しはなれた場所で2人のやり取りを見ていた才助を呼ぶ。

「おう、話は終わったのか？」

「いや、そういうわけじゃなくて、タバサが父さんと話をしたいって。タバサ、知っているかもしれないけど俺の父さん。ここの司令官だ。」

才人が才助を紹介した。すると、才助はタバサの方をじっと見た。タバサも彼の顔をじっと見た。

「ほほう、・・・いいでしょう。では司令官室に移動して話をしましょうか。それでよろしいでしょうか？」

才助の言葉にタバサはまたも無言で頷いた。

「息子も同席させてよろしいですか？」

この問いにも、彼女は頷いて答えた。

「良い。むしろ一緒に聞いて欲しい。」

「わかりました。そういうわけで才人、お前も来い。」

「え！？」

才人は訳がわからないまま、父親とタバサの話し合いの席に付いていく事になった。

そして3人は司令官室へと移動した。現在義勇軍の司令部の建物はトリステイン王室の協力もあって、しっかりした建物が出来上がっている。ただし、司令官室と言っても人が3、4人が入れるかどうかの狭い部屋だ。実用性を重視し、その他の部屋を広く設計した結果だった。

だから才助は一度、

「来賓室の方がよろしいですか？」

と提案したが、タバサは。

「ここがいい。」

と言ったため、この狭い司令官室での話し合いとなった。

才助は司令官席に座り、向かい合う形で才人とタバサが立った。タバサは椅子に座るかという才人の勧めも断った。

そして話し合いの準備が終わった所で、才助が挨拶する。

「ようこそ、『東方義勇軍』トリステイン方面軍へ。司令官の平賀才助少将です。心からあなたの来訪を歓迎します。ガリア王弟の娘、シャルロット・エレヌ・オルレアン殿下。」

それを聞いて、才人は「え！？」と声をあげ、タバサは表情を少しばかり厳しい物にした。

タバサ来訪 上（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

今回2話連続更新しましたが、これは外伝の方の話を書くのに必要だったのでこうしました。

タバサ来訪 中

「父さん、今なんて？」

才人が驚愕の表情で尋ねる。

「だから、そこにいるお嬢さん、タバサさんはジョゼフガリア王国国王の姪であるシャルロット殿下なんだよ。お前もこっちに来て大分経ってるんだから、ガリアのことくらい知っているだろ？」

その言葉に、才人は頷く。実際既にハルケギニアに来て7ヶ月以上経つのだ。ガリア王国の情勢も自然と耳に入って知っていた。

3年前、先王が崩御した事によりガリアでは王位継承の問題が発生した。その時王を継ぐべき立場にあった直系の王子は長男のジョゼフ、そして次男のシャルルがいた。

ジョゼフは幼少の頃から現在に至るまで魔法が出来ないために『無能王』というありがたくない名で多くの人間から呼ばれている。一方のシャルルは魔法も出来、人柄も良く次期王は彼になるというのが専らの話だった。

ところが、先王が死に際で次期王の名として挙げたのは、何故かジョゼフの方だった。そしてここからガリア王国の歴史は大きく狂い始めた。

ジョゼフが王位に就いて間もなくシャルルが不審死するという事件が起きた。これ以後ガリア国内の政治情勢は一気に不安定なものへとなった。政治勢力がシャルルの王位を望んだ王弟派と現王派に

わかれてしまったのである。さらにジョゼフのワンマン的な政治政策もかなりの反感を買っているらしい。加えてタバサの従姉妹にあたるイザベラ王女の傲慢さも王弟派の反感を余計に買っていた。

才人はそうした事実を既に知ってはいた。しかし、まさかそのガリア王国の王族がこんな近くにいるなんて想像外だった。

「なんで知っているの？」

タバサが才助に視線を向けなおして言う。どちらかというときつけるに近い。

それに対して才助は表情を崩すことなく言った。

「我々は現在ガリアを始めとする諸外国の情報を積極的に収集しています。情報は何よりの武器ですから。そうした情報を提供してもらっている相手の中には、各国の反政府勢力もかなりの割合で混じっています。ガリア王国内の王弟派もその一つです。彼らからあなたの情報を得るのは造作も無い事でした。」

「そう。」

「そしてあなたが接触してきた理由も大体は予想できます。恐らくは軟禁されているであろう、お母さんの救出ですね？」

すると、タバサは明らかに表情を驚愕の物へと変えた。

「その様子だと。凶星ですね。私はジョゼフ王を倒すのに協力して欲しいという可能性も予想していましたが、今のあなたの状況からしてそれは無理でしょうね。」

才助の言う事は間違っていない。今のタバサは表向きこそ自由であるが、軟禁された母親を人質に取られて手も足も出ない状態だ。おまけに例え助け出した所で行き先がない。これではジョゼフを倒す事など夢のまた夢である。

「まあとりあえず、話は聞きましょう。」

才助に促され、タバサは自分の身の上話と今日ここに來た理由を告げた。

ジョゼフが王位に就き、父親が死んで間もなくして母親は自分の身代わりとなつて毒を飲んで心を壊されてしまったこと。現在その母親は軟禁されて事実上の人質であること。タバサ自身は表向きたんなる留学生としてトリステイン魔法学院に入学したものの、時折北花壇騎士団の一員として、命がけの危険な任務に駆り出されていることなどを語った。

「そこであなた達の力を貸して欲しい。アルビオン軍を3日で打ち破った程の力なら、ジョゼフを倒す事ぐらい出来るはず。もしかしたら壊れたお母様の心を治せるかもしれない。お願い。」

タバサは言い終えると、才助に向かって頭を下げた。

才助はその話をただじつと聞いていたが、傍らで聞いていた才人は呆然としていた。

まさか目の前の少女がそんな重い物を背負って生きているなど信じられなかった。才人にとっては大昔の歴史の中で習うか、アニメや漫画の中で見るだけのことだと思っていた話なのだから。

そしてそれとともに心の中で湧きあがってきたのは、猛烈な怒りだった。こんな少女に重いものを背負わせ、なおかつ命の危険が伴う任務を押し付けるジョゼフを始めとするガリア政府が許せない存在に思えてきた。ただでさえ、『レコン・キスタ』の一件から胡散臭いと考えていた相手なのだ。

そしてタバサが頭を下げた瞬間、その想いはピークに達した。

「父さん、なんとかして助けてあげようよ。いくらなんでも酷すぎる。タバサとタバサのお母さんが余りにも可哀想だ。ジョゼフを倒すのは無理でも、お母さんを助けてあげるのなら直ぐに出来るよ。タバサの言うラグドリアン湖なら飛行機で目と鼻の先だ。直ぐに助け出せる。」

机をバンと叩いて訴える才人。

しかし、それを見つめる才助の表情は変わらない。

「落ち着け才人。ことは子供の喧嘩じゃないんだぞ。」

才助が才人を諫める。

「確かに人としてならば、すぐにもシャルロット殿下とお母様を助けるのが道理だろう。しかし、ことはそう単純じゃない。助け出そうとすれば国境を越える事となる。それはガリアに対する不法入国になるし、トリステインとアルビオンに対しても協定違反となってしまう。」

政治や国際問題というのはいつの時代も複雑かつ厄介な代物であ

る。感情や道理だけで対処してはならないのだ。

「もしシャルロット殿下の要請どおり動けば、それはガリアとの戦争になることを意味している。俺たちがいるとはいえ、トリスティンはガリアの数分の1しかない小国だ。数の暴力で潰されることだつてありえる。例えば戦争に勝つても、多くの犠牲者を出す可能性が高い。お前は一時の感情で、大戦争を起こす気か？その責任を持てるのか？」

そう、ほんの些細な行動が後に大戦争を引き起こした事実地球上でも多々ある。

才人たちはあくまで他所の世界から来た居候だ。そんな彼らの都合で戦争を起こすなどあつてはならない。もつとも、実際のところ彼らのせいで戦争の種は蒔かれているが。

そして才人にとっては婚約者のルイズに多大な迷惑をかける事になる。王位に就いて間もなく戦争を起こし、トリスティンが敗戦国になるようなことがあればそれこそ深刻である。

「シャルロット殿下に対しては酷な言い方だが、今の状況で俺たちがガリアに楯突くような行為は出来ないって言うことだ。」

これは遠まわしな要請拒否だ。そう言った才助の表情が少しばかり苦々しい物となった。彼も内心忸怩たる想いなのだ。

「そう・・・」

タバサはいつも通りそう一言呟いた。しかし、その声にはどこか残念の想いが含まれていた。

「ちよつとタバサ。まだ助けられないって決まったわけじゃない。父さん、なんとかならないのかな!？」

「そうは言うがな・・・俺だつて助けてやりたいよ。しかしな・・・助けてやるにしても、俺たちがやったという証拠を絶対に残してはいけない。加えて救出したシャルロット殿下のお母さんをガリアの追っ手に見つからないようにしなければいけない。」

つまりはガリアに、義勇軍が原因で戦争を起こさせる証拠を絶対に掴ませないというのが命題となる。

「しかし助け出すのはともかく、ガリアの追っ手を撒くことなんて・・・ハルケギニアにいるかぎり連中はどこまでも追ってくるんじゃないか？」

才助はそこで口籠ってしまった。

そして才人は何気なく部屋の窓の外を見た。ちょうどその時、滑走路を訓練中の「隼」が滑走していく所だった。

それを見て、才人は閃いた。

「これだ!！」

「!？」

突然叫んだ才人に、他の2人が目を丸くした。

タバサ来訪 中（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

タバサ来訪 下（前書き）

読者数3万人突破！！皆様の応援心より感謝します。

タバサ来訪 下

「なんだよいきなり？」

才助が突然叫んだ才人に怪訝な顔で言う。

「いいアイディアを思いついたんだよ。」

そんなに良い考えなのか、その声は心なしか大きい。

「取りあえずもう少し声を小さくしろ、誰かに聞かれたらどうするん」「手遅れよ。」

「え！？」「」

割り込んできたその声は才人にとって大いに身近な人物の声そっくりだった。そして彼らがその声に反応して扉の方を見ると、扉が開いて声の主が入ってきた。

「「ルイズ（さん）！？」「」」

なんと入ってきたのは、王宮で勉強中であるはずのルイズだった。その彼女、何故が見慣れた魔法学院の制服でも、王宮内で着るよう指示された豪華なドレスでもなく街娘が着るような地味な服を着て、しかも顔がわからぬようにフードを被っていた。

「お前なんでここに！？」

才人が素っ頓狂な声を上げた。まあいるはずのない人間がいれば

当然である。

「あら、言わなかったけ？今日の午後はお忍びで色々な所に挨拶回りするって。」

「あ！そう言えばそんなこと言ってたな。けど、その格好じゃお前が女王様ってことわからないんじゃないか？」

才人の素直な疑問である。

「大丈夫よ。」

そう言つて彼女はフードを脱ぐ。するとアンリエッタから渡された王家の人間である事を示すマントが現れ、さらにどこからか王冠を取り出して頭の上に乗せた。

「どう？これなら女王様に見えるでしょ？」

得意げに言うルイズ。

「はいはい。」

才人は自分を無理矢理納得させた。

「それで、才人のお父様に挨拶に来たんだけど、なんでタバサがいるの？それになんでさっきあんたは叫んだわけ？」

「ええと、タバサ、言っちゃって良いかな？」

才人がタバサに尋ねると、彼女は何も言わずただ頷いた。今や代

王とは言えトリステインの女王となった彼女に喋れば、計画を止められてしまうかもしれないのだが、隠せば余計怪しまれると彼女は考えた。また、彼女は彼女なりにルイズを信用していたのだ。

そんな事には気付かず、才人はタバサから説明されたことを、今度はルイズに説明した。

「実はな・・・」

説明を聞き終わると、ルイズは少し渋い表情になった。

「なるほどね、マザリ 二枢機卿からガリアは油断ならない国って何度も聞いたけど、そんなことがあったのね。けど才人のお父様が言うように、助けたくても助け出せないわね。戦争を起こすわけにもいかないし。」

ルイズにとって、戦争をすることは自分を信頼して代王に任命したアンリエッタに対する最大の裏切り行為だった。

「けど才人には何か考えがあるようですよ。お前の考えたことって一体なんだ？」

才助が先ほど聞きかけて聞けなかったことを才人から聞き出そうとする。

「ええとね、ようはタバサのお母さんがトリステインに助け出された証拠を消せば良いわけなんだろ。」

「そうだ。しかし、ハルケギニアにいるかぎり連中はどこまでも追って・・・」

そこで才助は今自分の言った言葉の盲点に気付いた。ハルケギニアにいるかぎり……

「ああ！なるほど、なんてこった。その手があつたか！なんで気付かなかつたんだ！？」

騒ぎ始めた2人が一体何を考えているのか、ルイズにもタバサにも全くわからなかった。

「あの、一体どういうこと？」

ルイズの問いに、才人が得意げに答える。

「だから、ハルケギニアにいるかぎり連中は追ってくるってことだ。それならハルケギニアの外の世界へ連れて行けば良いんだ。」

「ハルケギニアの外？……ええ！まさか、あんたの故郷に連れて行くってこと！？」

ルイズにも2人が何を考えているのかわかった。

「そう、地球へ連れて行くんだ！」

なるほど、それは盲点だ。おそらくハルケギニアの人間では考えられないことだ。というかハルケギニアの人間で異世界の存在を知っているのはほんの一握りの人間だけだ。

「けどタバサのお母さんを向こうの世界へ連れて行っちゃって大丈夫なわけ？」

ルイズは以前地球へ行った時のことを思い出す。しかしその地球は月よりも遠い異世界だ。得体の知れない、ハルケギニアの人々にとつては未知の場所なのだ。さらに常にいつ行き来が出来なくなるかもわからないという状況である。

「ルイズさんの言うとおりだ。万が一こちらに戻ってこれなくなったらどうしようもないぞ。」

才助も心の中で湧きあがる心配を口にした。

もしかしたら2度と帰ってこれられない。そんな場所へ戦争を起こさないためとはいえ、ガリアの王族を連れてつてもいいものか。

「それについては、タバサが決めることだよ。どうするタバサ？前のお母さんを助けてあげる事は出来るけど、一端俺たちの国へ連れて行くことになる。それでも良いかな？」

タバサは才人の問いに少しばかり考え込んだ。今の3人の会話から推測して、才人の故郷の国へ母親を避難させれば、もうガリアの追つてはこれないらしい。しかしその分リスクも発生するようだ。

（けど、お母様を助けられるなら・・・）

タバサは決断した。

「構わない。お願いする。」

そしてタバサは再び才助に向かってお辞儀した。

「よし、そうとなれば早速準備だ。父さん、次の新月はいつだっけ？」

「丁度1週間後から始まる。才人、それまでに具体的な計画を練るんだ。ただしだ、これはさっきも言ったとおりガリア側に義勇軍が関わっている証拠を一切残さないようにしなきゃならないから、慎重にな。」

そして今度はタバサに方に向き直って言う。

「シャルロット殿下、時間がありません。才人にお母様が軟禁されている建物の具体的な位置、部屋の配置、その付近のガリア軍の状況などを教えてやってください。」

その言葉にタバサが頷く。

「私も出来る限り手伝う。というか手伝わせて。」

ルイズがそう言った。

「お前、仮にも女王様なんだろ。良いわけないだろ。」

才人が呆れたように言うが、ルイズは意に介さない。

「あら、使い魔の行動に責任を持つのも御主人の仕事よ。それにこのところ女王の勉強ばかりで退屈している所だったし、あんたの故郷にもまた行ってみたいし。」

あっけらかんと言うルイズに、才人は本当に呆れ返った。

「お前本当に女王様かよ？」

こんなお転婆のお姫様では、重臣たちもさぞ苦勞しそうである。

「とにかく、私も一緒にやるからね。」

そして才人にしか聞こえないように言った。

「それに、『虚無』がついていれば怖い物なしでしょ？」

こうしてタバサの母親の救出、ならびに地球への脱出作戦が動き出した。タイムリミットは1週間。その間に才助が機体の確保と、地球での受入先の手配。才人が救出部隊の長としての計画立案。タバサがその支援。ルイズは代王の位を利用してガリア国内に関する情報を集める。

計画は順調に進んだ。ただし、アクシデントとして才人がタバサを尋ねて魔法学院に行き、彼女と計画の打ち合わせをしている場をキルケに見られてしまった。さらに、その場を通り掛ったギーシユとマリコルヌ、モンモランシにもばれてしまった。

そして彼らが計画を漏らさない代わりに出してきた条件は、自分たちにも手伝わせるであった。才人はそれを飲まざるを得なかった。

もちろん、翌日にはこの件で才助とルイズから雷を喰らう事になったが。とにかく、そんな感じで1週間はあつと言う間に過ぎ、いよいよ決行日となった。

タバサ来訪 下（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

原作キャラを出そうとして、多少強引で御都合主義的な話になっていますが、どうかお許しください。

救出作戦発動 上

タバサの母親を救出する作戦の準備期間である1週間はあつと言
う間に過ぎ去り、いよいよ決行の日となった。トリスタニア郊外に
ある義勇軍基地では、飛行服姿の才人が父親の才助と最後の打ち合
わせを行っていた。

「いいか才人。もし向こうに着くまでに何か不測の事態が起きたら、
構わず作戦を中止しろ。シャルロット殿下も無理してまでしなくて
良いと言っている。作戦を執行しても細心の注意を払え。とにかく
ガリアにつけこまれないように証拠を残すなよ。」

「わかつてるよ父さん。大丈夫、かならず成功させてみせるよ。」

才人が自信たっぷりで言うが、才助は気を引き締める意味で言っ
た。

「あんまり図に乗るなよ。もし何か起きても、俺達は助けにいけな
いんだからな。」

今回の作戦を義勇軍が行なっている事を悟られないために、才人
たちが行動を起こして以後は才助たちは何も手出しをしないことにな
っていた。例え才人たちが危機に陥ってもである。

「肝に命じとくよ。それにしても良い具合に御詔え向きの機体が手
に入ったね。」

そう言って、才人は今回の作戦に用意された機体を見た。そこに
止まっていたのは1機の双発の水陸両用飛行艇だった。

グラマン・グース飛行艇。グラマンとあるとおり、アメリカ製の機体で主に沿岸警備隊で使用された。日本にも海上自衛隊に供与されている。

この機体もアルビオンで発見された地球製兵器の一つであったが、他の機体よりも一回り大きかったため、輸送に手間取り3日前にようやく到着したのであった。

ちなみに、今は国籍表示も尾翼のマークも全て消し去り、機体全体が真っ黒に覆われている。さしずめ冷戦時代のスパイ機である。

「ああ、今回の目的地が湖の近くで本当に良かったよ。」

タバサの母親が軟禁されているのはラドグリーン湖湖畔にある、旧オルレアン邸だという。当初はたった1機しかないヘリでの救出も考えられたが、飛行艇が手に入ったおかげでその必要もなくなった。

「こっちも久しぶりに出番が貰えて本当に嬉しいぜ。」

突然会話に介入してきたのは、最近近代兵器に押されて出番がなかったお喋り剣のデルフだ。

「まだ使うかどうかはわからないけどな。」

水を指すように言う才人。

今回の作戦では義勇軍につなげられる恐れのある近代兵器は極力使わないこととなっていた。そのため才人が持っているのは、武器

と言うのも怪しい音響閃光弾だけだ。だから久しぶりにデルフを引っ提げていく事になった。

「けど、相棒としては使わないに越したことはないだろ？」

「まあな。とにかく何かあったらよろしく頼むぜ、デルフ。」

「任せとけ、相棒！」

久々の出番に、デルフの心は高鳴っているようだ。

そんな2人（？）の様子を見ながら才助が再び会話に加わる。

「それとだ、お前の友達納得してくれたのか？」

「うん、まあ・・・」

才人の言葉がどこか歯切れの悪い物になる。

さて、今回の作戦には話を聞きつけたギーシュとキュルケたちも付いてくる予定だった。ところが、ここで問題が発生した。グース飛行艇はパイロット2人に客席6人が定員である。コックピットに才人とルイズを乗せるとしても、残る6人では絶対に定員オーバーとなる。

まず案内人であるタバサは絶対に乗らなければならない。また歸りにタバサの母親と、一緒に暮らしているという執事の分も必要だ。だから残り3人分となる。（実際にはタバサの妹と称するイルククウという女性が乗る事になったので2人となった。）

そして、その2人分の席を巡って言い争いになったものの結論はでなかった。そこで才人の提案でじゃんけんで決めることになり、その結果キュルケとギーシュが残り、マリコルヌとモンモランシはお留守番となった。

2人とも不満たらたらだったので、才人が「俺の国に連れてってやるから。」と言ってその場を取り繕った。

「結局ギーシュたちを地球に連れて行く事になっちまったよ。」

才人が憂鬱そうに言う。

「実はな才人。正直言いづらいんだが、今回地球へ案内する人は他にもいるぞ。」

「ええ!!」

ただでさえ地球へ行った経験のあるルイズを含めて9人も連れて行かなければいけないのに、さらに人数が多いとなると厄介であるいや、厄介どころの話ではない。

「一体誰が？」

「コルベール先生だ。」

この言葉に、才人はほっとした、科学への見識が深い先生なら、むしろ地球を見せた方がよい。さらにルイズたちを上手く纏めてくれるかもしれない。

だが、次のことばで才人の甘い考えは吹っ飛んだ。

「それと・・・お忍びでだが、ウェールズ国王とアンリエッタ王妃も一緒に来る。」

「はあああ!!!」

流石に才人は叫び声を上げた。

「え!?なんで!?というか2人とも来ちゃって良いの?」

2つの王家の王がお忍びとはいえ、4日近くも、場合によっては永久に政治の空白期間を作るなどバカげている。

「仕方がないんだ。2人とも王室の仕事が忙しいから、そこから抜け出せられる絶好の機会だと考えたらしい。しかも、連れて行かなかったら義勇軍への支援を減らすって言ったもんだから。まあただのブラフとは思うけど、こっちもお世話になってばかりだからね。断るに断れなかったんだ。」

どういう経緯があつたか知らないが、とにかく才吉も才助もウェールズとアンリエッタの要請を断れなかったらしい。

ちなみに、総計すると12人もの人間を向こうに運べるのかという疑問符が自然と湧くが、輸送手段については問題ない。義勇軍が地球との物資輸送に、新たに輸送飛行部隊を作ったのは以前も記している。その内訳は大体1回あたり双発のビジネスプロペラ機が5から6機だ。これらの機体は物資なら500kg程度、人間なら7、8人乗せられる。それが一晩あたり2往復するのだ。

だから運ぶのは問題ない。問題は向こうでの案内人や宿泊場所で

ある。タバサの母親は才吉の知り合いがやっている小さな病院に収容する予定だが、その他の全員を、才人の祖父である才蔵の家で養うのは、はっきり言って無理がある。かといって地球の常識を知らない人たちをどこかの宿に泊まらせるわけにもいかない。

正直才人の頭は痛い。

「まあ、あんまり気にするな。それにメールしたところじゃ、智恵も帰ってきているらしいから。」

「え！？智恵姉さんが？」

「そうだ。それと泊まる場所も父さんが確保してくれているらしいから。・・・まあとにかくだ、お前はとりあえず作戦を成功させて来い！」

才助の言葉に、才人はとりあえず今は作戦に集中する事にした。

「了解！！」

2人は互いに敬礼した。

「それじゃあ行くぞ皆！乗ってくれ！」

時間になり、才人は集まっていたメンバーに声をかける。

「ラドグリアン湖までしっかり頼むぞ才人！」

「頼りにしているからね。」

「お兄様、頼りにしているのね！」

まずギーシュとキュルケ、さらに謎の美女イルククウが乗り込んだ。続いてルイズが乗り込み、3人にベルトなどの注意をする。

最後に残ったタバサは、才人と向き合って言った。

「よろしく頼む。」

普段どおりの仏頂面というタバサだが、その言葉にはどこか深い感謝の念が含まれているように、才人には思われた。

そして2人も飛行艇に乗り込んだ。

「それじゃあ、出発！」

まもなく陽が沈むその時間、才人たちはトリスタニアを出発し、一路ラドグリアン湖へと向かった。

救出作戦発動 上（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

今回の話は、作者がちょっとばかり困った話です。それは、地球行き的人数が多すぎるという難問です。ですから、改訂して人数減らすかもしれないのであしからず。

それとテストが近くなったので、更新ペースが落ちる可能性大です。読者の皆様にはご迷惑をおかけします。

作者近況・・・意を決してN Kの映像の20 紀を購入。60
00円もしたけど・・・

救出作戦発動 中

ラドグリアン湖へ向かう飛行艇の機内は、作戦前の緊張から沈黙が支配・・・していなかったりする。才人やルイズと言った人間は静かにして落ち着きたかったのであるが約1名、やたらお喋りな女性が目まくっていた。

「キユイ！イルククウ、こんな風にお空を飛ぶなんて始めてなのね！」

タバサの妹と自称する彼女だ。外見はどうみても17、8歳に見えるのだが、精神年齢はどうみても10歳前後の子供だった。

緊張感を微塵も感じさせず大いに喋りまくり、周りの搭乗者を呆れさせている彼女に、隣の座席に座ったタバサが、自分の背よりも大きな杖で一撃を加える。

バシ！！

「痛いよね！！お姉さま何するのね！？」

「うるさい・・・静かに・・・」

いつもどおりの口調で簡潔に言うタバサ。それに対してイルククウは明らかに不快な表情となった。

「ええ！！私もつとお喋りしたいのね！！」

タバサに抗議するイルククウ。すると、女たらしのギーシュが彼

女の肩を持つ。

「まあタバサ、そんな目くじら立てる必要もないだろ？むしろ緊張をときほぐすのには良いんじゃないかい？」

だが、タバサは厳しい口調で言い切った。

「そういうことは言わないで・・・調子に乗る・・・」

そのどこか恐怖を感じさせる言葉に、ギーシュはそれ以上何も言わなかった。またイルククウもお喋りを止めざるを得なかった。

そんな一行を見ながら、操縦席の2人はあの謎の女性について話し合っていた。

「あの人本当に一体何者だ？タバサにいくら聞いても話してくれないし。」

「私もわかんないわ。学院にいた時も見たことないし・・・けど外見と中身が明らかにアンバランスよね。」

「同感。」

2人とも女性の正体がわからず首を捻っていた。

それを見て、面白そうに言う物体があった。

「お二人さん、お困りのようだね？」

操縦席の後ろに持ち込まれたデルフだ。

「なんだよデルフ？もったいぶったような口調で？」

「まさかあんた、あの女の正体がわかったの？」

すると、デルフは嬉しそうに言い返した。

「そのまさかだよ。　　というか前から知ってた。」

「じゃあ教えてよ。」

ルイズがデルフに向かって言う。だが、ここの所出番がなかった彼がそうそう簡単に言うわけがない。人間？　　こういう時は卑屈になりがちだ。

「教えてくださいだろ？」

「「な！！」」

2人とも心の中で「この野郎！！」とおもいつきそう思った。特にルイズは今や代王とはいえ、女王なのだ。そんな人間に刃向かって来たのだ。

だが、ルイズはこんな狭い場所、しかもキュルケたちが見ている前で暴れる訳にはいかない事をちゃんと心得ていたようだ。彼女も成長したものである。

「「お願いします。」」

才人とともにそう言った。恐らく重臣たちが見たら、世も末だと

泣くだろう。

「じゃあ教えてやるぜ。あいつはな、韻竜なんだよ。あのちっちゃい嬢ちゃんの使い魔のな。」

その言葉が2人に与えた衝撃は大きかった。

「ええ！！」

ハルケギニア生まれのルイズはもちろんのこと、この世界に来て半年以上経って色々勉強してきた才人にも、韻竜が何であるかはわかっていた。

韻竜とは既に絶滅したとされている知能の高い龍のことだ。しかも、四系統の魔法とは異なる、先住魔法を操るとされている。

それがこんな身近にいたのだから驚いて当然だ。しかも、タバサの使い魔のシルフィードというから、驚きも2倍だ。

「え！けど、どうみても人間だぜ！？」

才人が常識的な疑問を持つ。

「先住の魔法には、自分の姿かたちを変える術もあるんだ。多分それで姿を変えてるんだろ。もっともあのちっちゃい嬢ちゃんは正体を気付かれないように、ピリピリしているみたいだけだな。」

ルイズはその言葉で、タバサの機内での行動に納得した。

「なるほどね。確かに韻竜ってばれたら大変よね。下手するとアカ

デミーに連れて行かれちゃうかも。タバサがボロを出さないように気にするのわかるわ。・・・けど韻竜を召喚するなんて、タバサもやるわね。」

使い魔はその主人の能力や実力に大きく左右される。だから韻竜を召喚したタバサの実力は並外れているという事になる。

「まあ嬢ちゃんにはかなわないけどな。」

デルフが簡潔に言った。この言葉に嘘偽りはない。ルイズは『虚無』の担い手であるし、しかも彼女が呼び寄せた才人は『ガンダールヴ』である。おまけに地球からの人間をさらに呼び寄せるきっかけとなった。

だが、ルイズは何故か誉められているのに喜ばなかった。その態度に、デルフは疑念を持った。

「どうした嬢ちゃん？」

尋ねてみたが、それ以上は会話出来なかった。

「2人ともお喋りはそこまで。ラドグリアン湖が見えた。着水する。」

何時の間にか機体はラドグリアン湖上空に到達していた。才人は始めての着水なので、慎重に機体を降下させた。

ラドグリアン湖はトリステインとガリアの国境に位置する大きな湖で、水の精霊が住むとされている。タバサの母親が軟禁されていた

るオルレアン邸はガリア側の湖畔に位置していた。

才人はタバサから貰った地図、そして陽も沈みわずかに残った明るさに浮かぶ風景を頼りに、グース飛行艇を着水させた。

初めての着水だけに、才人も相当緊張していたが、グース飛行艇は何事もなく着水する事が出来た。才人は座礁しないか気をつつつ、機体をぎりぎりまで岸に寄せた。そしてそれ以上は無理だと判断した所で、機体を止めて積んであった錨を沈めた。

「ようし、着いたぞ。皆降りてくれ。」

才人は操縦席から出て機体のハッチを開ける。

「俺とルイズはボートを使うから、タバサたちは先に行つててくれ。気をつけてな。」

「わかった。」

飛行艇から岸までの距離はおよそ50m。タバサにキュルケ、そしてギーシュにイルククウは魔法を使つて対岸まで飛ぶ。それが出来ない才人とルイズはゴムボートを膨らませて岸へと向かう。

ボートには船外機のエンジンが付いていたので、楽に岸まで行く事が出来た。

2人は先に陸に上がっていた4人と合流し、オルレアン邸へと急いだ。

オルレアン邸に着くと、才人らの目にバツテンを入られた家紋

が入ってきた。これだけで、タバサの家族がガリアで一体どのような処遇を受けてきたか良くわかる。

「お前本当にひどいめにあつたんだな・・・」

才人は目の前の少女が本当に重いものを背負っていると実感した。

「そうなのね。お姉さまは・・・」

才人の言葉に刺激されてイルククウが何か言おうとしたが、タバサが制した。

「お喋りは後。さっさと行く。」

「そうね、いつどこから敵が現れるかわからないし。さっさと終わらせましょう。」

タバサとキュルケの言葉に従って、一行は屋敷の中へと入った。

オルレアン家に使える執事のペルスランは一行の来訪に心底驚いたが、すぐにタバサから事情を説明されて理解した。

そして才人の手を握って、泣きながら言った。

「ありがとうございます。我々を助けていただけるとはなんて。本当に感謝いたしますぞ。」

「時間がありません。タバサのお母さんを早く。」

「わかりました。」

救出作戦はもっとも重要な部分にさしかかった。

救出作戦発動 中（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

作者近況・・・テレビで放送していた「眼下の敵」に大感動しました。

救出作戦発動 下

タバサの母親は心を失っている。いわば精神崩壊、錯乱している状態である。だから無理に連れ出そうとしても暴れる。そこで、モンモランシに調査してもらった眠り薬を飲ませて眠らせ、その後はタバサの『レビテーション』を使って飛行艇まで運ぶことになった。

その間に執事のベルスランが、当座の生活に必要な物をまとめる。もつとも服とかそういう物は向こうで調達できると才人が説明したので、持ち出した量は少なくて済んだ。

才人とルイズは屋敷の外で、ガリア側の兵士が来ないか警戒していた。しかし、闇に包まれた湖畔の屋敷は静かそのものだった。

「静か過ぎるな・・・」

才人がつぶやく。それにルイズも頷いて言う。

「静かだと逆に怖いわね。」

2人には、この静けさがまるで嵐の前の静けさのように感じられた。

だが結局彼らが警戒した敵は現れず、タバサの母親とベルスランは無事屋敷から離れる事が出来た。

そのあまりに呆気ない事態に才人は、

「あのキス力救出作戦だつてこんな簡単じゃなかったぞ!？」

とわかる人にしかわからないセリフを吐きつつ、再び飛行艇に乗り込み、全員を乗せてトリステインへ向けて出発した。

こうして救出作戦は呆気ないほど簡単に完了した。

もっとも、実際は幾つかの要素が混ざり合つて今回のようなことになったのであるが、才人がその事を知ることになるのは、ずっと後のことだ。

実際この時何が起きていたかというところ、まず才人らが国境を越えたにも関わらずガリア兵が現れなかったのは、慎重に動いた才人らがガリア側の人間に見つからなかったのもあるが、地方の兵士たちの士気や規律が緩んでいた事が大きかった。現王派と王弟派の確執がこのような場所に影響を与えていたのだ。仮に才人らが発見されていたとしても、兵士達が間に合った可能性は低かった。

また士気も規律も良かった王家直属の各騎士団も、この時はそれどころではない事態に直面しており、才人らの行動に気付く事は出来なかった。

いや、実際には気付いていた人間もいた。ジョゼフの使い魔であるシェフィールドと、主人のジョゼフ自身だ。彼らはオルレアン邸に取り付けたマジックアイテムによって何者かが侵入し、タバサの母親を連れ去ったことが直ぐにわかった。

しかしトリステインとの国境近くで起きた事態よりも、より近い場所で起きたそれどころではない事態のほうが、彼らにとってもよ

り大きな懸案ごとになったのだ。

ちなみにそれどころではない事態というのは、後にわかることになるのでこの場では省略させていただく。

とにかくそういうわけで、才人らは無事タバサの母親を救出することに成功し、また帰り道も何事もなく飛行して、首都トリスタニア近郊の義勇軍基地まで舞い戻った。

帰りは深夜の着陸となったが、滑走路にはカンテラによる着陸灯がつけられていたから、難しくないとはいわないまでも、無事着陸することができた。

着陸すると、すぐに父親の才助がやってきた。

「作戦は無事に成功したらしいな。」

「ああ。タバサのお母さんとその執事さんをちゃんと助け出してきたよ。」

「ガリア軍にはばれてないだろうな？」

才助が一番気になる問題を言った。

「多分ばれてないよ。とりあえずガリア兵に接触する事はなかった。」

すると、才助は安心したように言った。

「そうか・・・なら良い。じゃあ皆さんに乗り換えて貰ってくれ。」

「わかった。そう言えば、ウェールズ国王とアンリエッタ姫は？」

2人がいる雰囲気はなかった。

「2人とも既に先の便で出発した。残ってるのはお前たちを運ぶ機体だけだ。」

才人を見ると、確かに双発の小型機が2機だけ止まっていた。いずれも機体真っ黒に塗装している。

とにかく、才人は全員に飛行機を乗り換えるように言った。ところが、ここでちょっとした問題が発生した。

「ええ！まだ元に戻っちゃいけないの!？」

イルククウことシルフィードがだだをこねたのだ。ちなみに彼女の正体については、既に才人が口を滑らせて他のメンバーにも知れ渡っていた。

「ああ。じゃなきゃ飛行機に乗れないだろ？それに向こうには竜がない。だからお前がそのままの姿で現れたらパニックになっちゃう。」

才人が諭すように言うが、シルフィードは人間形態でいるのがよっぽど嫌なのか文句を続ける。

「やなのねやなのね!!!この体は窮屈で動きにくいのね!!!早く元に戻りたいのね!!!」

なおもだだをこねるシルフィード。その頭に、ご主人からのきつい一撃が加えられる。

バコン！！

「痛いのね！！」

「うるさい。そして文句言わない。それが嫌だったからこそで留守番。」

「ううー・・・」

精神年齢が低いシルフィードは全くタバサに勝てないらしい。

「とりあえずこれで決まりだな。なら2人ともあっちの飛行機にさっさと乗ってくれ。」

「わかった。」

「わかったのね。」

シルフィードはしぶしぶタバサの後ろをついていき、飛行機に乗り込んだ。

そしてお留守番していたモンモランシ とマリコルヌも乗り込み、いよいよ出発となった。

才人は飛行機に乗り込むと、パイロットに挨拶する。パイロットは50過ぎくらいの男だった。

「平賀才人です。地球までよろしくお願いします。」

「機長の天沢だ。短い旅だが宜しく。」

2人は握手した。

「天沢さんは元自衛隊？」

「ああ。元戦闘機のパイロットだ。君のお父さん、平賀一佐に現役時代お世話になった間柄だね。自衛隊を退役してからは飛行機にはもう乗っていないかったんだが、こうして再び乗せてもらえて感謝しているよ。」

「そうですか。」

「ああ。さあ、出発だ。」

「はい。」

才人も座席に座ってベルトを締めた。その直後、機はエンジン出力を上げて滑走し、夜空へと舞い上がった。そしてそのまま急上昇して新月で隠れている月へと向かう。輪郭がわずかに見えるだけだが、特殊なメガネを使えばなんとか識別できる。またハルケギニア側ではもう一つの月が出ているおかげでそれがなくともわかる。

そして数分後、一瞬機体の外が光に包まれた。

「わ！」

「キヤ！」

突然のことにタバサとシルフィードが声を上げた。もっとも光に包まれたのは1、2秒の事で、すぐに外には元の夜の暗闇が現れた。

才人は視線を眼下にやる。ハルケギニアの夜を飛ぶと、時折集落から発する小さな光が見えるだけで、地上はほとんど真っ暗である。

しかし今眼下には眩い街の光が見えていた。地球の、日本の夜の光景だった。

それを始めてみる人間は声を上げた。

「綺麗・・・」

「とても綺麗なのね。」

驚く2人を他所に、機体は徐々に高度を下げていく。そして10分もしないうちに飛行場の滑走路に着陸した。ハルケギニアを飛び立って30分もしないうちに到着した。

着陸すると、そのまま滑走して駐機場に行き、そこで完全に停止した。

止まると直ぐに才人が機体後部の扉を開けた。開けると直ぐに冷気が機体の中に入ってきた。

「寒！あ、そうか。今もう2月だっけ。」

向こうの7ヶ月とこちらの時間では少ばかり時期がずれる。加

えて、ハルケギニアの冬はそこまで寒い物ではなかった。

「まあいいや、皆降りて。」

才人に促されて他のメンバーも降りてきた。

「」「寒い!!」「」

他のメンバーの第一声である。

（防寒具が必要だな）

真面目にそう思う才人だった。だがその前に全員のほうに向き直って言った。

「ようこそ地球へ！皆を歓迎するよ。ここからは皆が客だ！」
ゲスト

救出作戦発動 下（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

何か起こると期待していた皆様へ。呆気なく終わらせてしまっ
て
すいません。

地球訪問 序章

「やつほー、才人！お帰り！」

才人が皆に歓迎の言葉を言った直後、背後から若い女性の声が掛けられた。才人はその声がした方に振り返り、そして声を上げた。

「姉さん！」

現れたのは、才人より3つ年上の姉である智江^{ともえ}だった。（もちろんオリキャラ）

「久しぶり。」

「久しぶり。父さんがアメリカから帰ってきたって言ってたけど、本当だったんだ・・・」

一方、その姉弟のやりとりを見て、ハルケギニアから来た一行は素直に驚いた。

「才人！あなたお姉さんがいたの？」

「そんなの初めて聞いたぞ！！」

先ほどまでの寒さはどこへやら、ルイズたちは突然現れた才人の姉に驚愕した。

「ああ、そうだった。皆にはまだ言ってなかったな。紹介するよ、俺より3つ年上の智江姉さん。ついこの間までアメリカに留学して

「ただ。」

「平賀智江よ、よろしくね、異世界の皆さん。・・・それと才人、はい、コート。」

智江が才人にコートを渡す。

「サンキュー、姉さん。」

コートを羽織った所で、才人は逆に智江にルイズたちのことを説明する。

「姉さん紹介するよ。そこにいるピンクのブロンドの娘が俺のご主人様のルイズ。赤い長身の娘がキュルケ、青い小さい娘がタバサ、隣の方がシルフィード、金髪の娘がモンモランシ、それにそっちのキザっぱいのがギーシュで、ぽっちゃりしているのがマリコルヌ。」

最後の男子2人の説明は、明らかに見下した感じであつたが、2人とも怒れなかった。一度は才人の姉への驚きから吹っ飛んでいた寒さが、じわじわと答えはじめていたからだ。特にミニスカートという格好の女子陣は震え始めていた。そしてそれを見て智江は直ぐに理解した。

「ええと、とりあえず皆さんにもコートを羽織ってもらおうかしら？」

全員がその言葉に賛成した。

5分後、滑走路脇の格納庫の中で、用意されたコートを羽織、温

かいココアを飲んで一行はようやく落ち着く事が出来た。

「ああ、生き返った。」

モンモランシ が心の底からそう感じて言った。最初はココアの色を見て、「何これ？」とルイズたちとともに訝しんでいたが、飲み始めると甘い味が気に入ったのか、おいしそうに飲んだ。

「それにしても才人、君の国がこんなに寒いなんて聞いてないぞ！？」

不平を言うのはギーシュだ。

「ごめん、2月の真っ只中ってことすっかり忘れてたよ。今が日本の一番寒い時期なんだ。」

ギーシュにとりあえず謝っておく。そして才人は、姉の方に顔を向けた。

「ところで姉さん。ウェールズ国王やアンリエッタ姫、コルベール先生は？」

「うん！？・・・ああ、先に来た3人ね。大丈夫、お爺ちゃんが先に家に連れてったわ。」

「そう、なら良かった。」

3人ともどうやら無事に着けたらしい。とりあえず一安心である。

「まあ、それは良いとして。」

すると、智江が立ち上がってタバサの方へ向かって言った。

「それで、確かタバサさんだっけ？あなたのお母さんは病院に移すことになっているけど、どうする？お母さんに付いて行く？それとも私たちと一緒にお爺ちゃんの家泊まる？」

タバサの母親は、才吉の知り合いの病院で診てもらうことになっていた。そして彼女の答えは簡潔だった。

「お母様と一緒に行く。」

「私もお姉さまについていくのね！！」

タバサに続いてシルフィードも元気よく答える。

「そう。じゃあ、タバサさん以外の皆は私たちと一緒に来てもらうことになるわね。」

予定では、一端才人らは祖父である才蔵の家に仮泊することになっていた。

「それじゃあ皆さん、私に付いて来て。タバサさんもとりあえず一端家まで来てもらっわ。そこから今度は病院まで送るから。」

タバサはコクンと1回頷いた。

「決まりね。」

そして一行はそのまま格納庫の裏口から、飛行場の駐車場へと出

る。もちろん、タバサの母親と執事のベルスランも一緒に連れて行く。

駐車場には1台のマイクロバスが止まっていた。20人ぐらいの人間が乗れるやつだ。

「それじゃあ皆さん、これに乗ってね。」

そう言つと、智江は運転席へと回つてエンジンを掛けた。彼女が運転するらしい。才人は念のため姉に聞いておく。

「姉さん免許持ってたっけ？」

すると智江は明らかに不快な表情をした。

「失礼ね、ちゃんと持ってるわよ。しかも国際ライセンスよ。なめないですよ。」

「ごめんごめん。」

才人は姉に非礼を詫びると、ルイズたちを案内した。

「それじゃあ皆、乗って。」

ところが、ルイズを除く全員が怪訝な表情になっていた。

「ねえ、これ本当に走るの？」

キュルケが胡散臭そうな口調で言つ。

「馬がないのに走るなんて、やっぱり信じられないわね。」

モンモランシ もそう言う。

「僕もちよつと信じられないな。」

マルコルヌも首を傾げながら言う。

まあ馬車しか見たことのないハルケギニアの人間にはそう思えて至極当然だろう。実際には才人の乗ったバイクを何度も見ているはずだが、それでも実際乗ってみたいと信じられないらしい。

才人が安心させるために、前に進み出て言った。

「大丈夫、ちゃんと走るよ。」

「そうよ、心配なんかいらないわよ。さ、乗りましょう。」

先陣を切ってルイズが乗り込み、他のメンバーも怖々とした感じで乗り込んでいく。全員が乗り込んだ所で、最後に才人が乗り込んだ。

「姉さん、全員乗ったよ！」

「じゃあ行くわよ。」

自動ドアなので、智江がドアを操作して閉める。それをみて何人が驚きの声を上げたが、このくらいの事で一々何か言っていたらキリがないので、才人は何も言わなかった。

バスは夜の街を走っていく。道中でルイズを除くハルケギニアから来た面々は、町の風景を見て騒ぎっぱなしだった。

「夜なのに凄く明るいわ!!」

「道がすごく広い!!」

「才人、あの道端に立っている棒は一体何かね？」

「才人、あの3つ目の光っている物は一体何？」

皆が口々に言う物だから騒がしくてしょうがない。しかも半分以上がなんらかの質問だった。さすがにこれには答えないわけにはいかず、才人は一つ一つ質問に答えていく。

「ええと、あれはだな・・・」

そんな感じで、バスの中は深夜にも限らずとても賑やかだった。

そしてバスは才蔵の家に到着した。ここでタバサとその母親、ベルスランを除く全員が降りた。

「それじゃあ後任せたわよ!」

姉の言葉を背に受けて、才人はルイズたち一行を家の中へと案内した。

才蔵の家は2つの家族が住めるようになっていいるからそれなりに大きい。ただし外観は典型的な普通の住宅だ。それもハルケギニアから来た人間には奇異に見えた。

「ただいま。」

才人がドアを開けた途端。

「すばらしい！すばらしすぎますぞー！」

中から中年男性の叫び声が聞こえてきた。そして才人たちにはその主が直ぐにわかった。

才人は全員に靴を脱いで上がるように指示すると、先陣を切ってリビングに入った。そしてそこには予想通り、先に着いたウェールズ国王とアンリエッタ姫、そしてコルベールが祖父夫妻に向かい合う形で椅子に座っていた。

そしてコルベール以外の全員が一樣に憔悴しきった顔をしていることから、どうやらコルベールが色々と大声を上げて聞きまくった話まくったりしたらしい。

才人はそんなコルベールを見て、苦笑いするのであった。

地球訪問 序章（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

地球訪問 1日目早朝編

とりあえず才人をはじめとするハルケギニアから来た一行は仮眠を取る事になった。時刻は深夜2時である。それに加えて、全員救出作戦をしていたから眠っていない。だから疲れている。

コルベールはまだまだ何か喋りたいようだったが、実際ウェールズ国王やアンリエッタ姫も疲れているのだから、賛成せざるを得なかった。

才人の祖父である才蔵とその妻の礼子は、普段からメールを使ってハルケギニアにいる才吉や才助とやり取りをしている。だから今回才人が連れてくるメンバーの人数もわかっていたので、家には人数分の布団がちゃんと敷かれていた。

最初は床で寝る事に面食らい、不満を言っていたメンバーもいたが、眠気に勝てずそれぞれ床についた。ルイズをはじめとする女子陣は空いていた智江や才助夫婦の部屋に、そしてギーシュら男子陣は才人の部屋で寝る。ちなみに才人も皆の事を気にして、床で寝るついでに言えば、ウェールズ夫妻は客間で、コルベールは才蔵の部屋でそれぞれ眠った。

才人も全員が眠ったのを確認すると、目覚し時計をセットして布団の中に入った。

数時間後、目覚ましがセットされた時間に鳴り始めた。

ジリリリリ・・・

「う・・・」

才人は目覚し時計の鳴る音に反応したが、寒い冬の朝である。人間中々起き出せないものだ。ハルケギニアで既に半年以上暮らしている才人であったが、日本で染み付いた生活習慣が甦ってしまったのか、以前そうしていたように布団を深く被りながら手だけ出して止めようとした。

しかし。

「なんだ!？」

「うるさい!!」

才人の部屋で一緒に眠っていたギーシュとマリコル又は目覚し時計など知らない。その2人は飛び起きてしまった。さらに悪い事に、この時才人は床で寝ていた。

次の瞬間才人は腹に掛かる凄まじい重さに襲われた。

「べふ!!!!」

さすがに寒いのも忘れて才人は飛び起きた。

「げふげふ・・・一体何だっと言うんだ!？」

才人はむせながら言った。

「あ、ごめん才人。」

踏んだのはマリコルヌだった。

「全く、気をつけるよ!!」

マリコルヌを睨みつける才人。

「けど、いきなりうるさい音が鳴り始めたから。」

「一体さっきのは何かね？」

才人は起き上がり、時間が過ぎて鳴り止んだ目覚し時計を手にとつて説明する。

「これだよ。こいつは目覚し時計って言って、セットした時間になると自動的に音が鳴り始めるんだ。」

説明が終わると、2人は感心した表情になった。

「へえ、君の国にはそんなものがあるのか。便利そうだね。」

「とりあえず寝坊はなくなるだろうな。」

「まあ、ギーシュが言うような目的であるんだけどね。・・・とにかく目も覚めたことだし、リビングへ行くか。」

時刻は午前7時を少し回った所である。才人の経験ではそろそろ朝食が出来ている時間である。

才人は2人と一緒にリビングへ移動した。

3人が2階の才人部屋から1階のリビングへ降りると、既にそこにはコルベールがいた。

「いやあ諸君、おはよう。」

「おはようございます先生。寝むれましたか？」

才人は一応聞くが、聞かなくてもわかった。なぜならコルベールの目の下にはクマが出来ていたからだ。

「いやあ、今日からのことを考えると眠れなくてね。結局一睡も出来なかったよ。」

その割には随分と元気そうである。

「そうですか。」

2人がそうやって話していると、才人の祖父である礼子が4人に聞いてきた。

「朝食どうされます？先に食べますか、それとも他の方が起きてから一緒にしますか？」

すると、コルベールが代表して答えた。

「ああ、それでは他の方と一緒にします。まさか国王陛下より先に食べるわけにはいきませんから。」

「わかりました。それじゃあ才人、あんたも手伝いなさい。」

礼子が才人を手招きする。

「はいはい、お祖母ちゃん。」

才人は礼子について台所に入ろうとした。それをギーシュが引き止めた。

「ちょっと待った才人!？」

「何だよギーシュ?」

「僕達はどうしていれば良いのかな?」

その言葉に、才人は考え始めた。

「そうだな・・・お前たちじゃ新聞読んでもどうにもならないだろうしな。」

異世界を行き来すると、自然と言葉はわかるようになるのだが、文字はわからない。だから地球の文字を彼らが見たところでわからないだろう。もっともわかったところで、彼らがその内容を楽しむ物があるか才人には疑問だったが。

「この時間じゃ、テレビはニュースばっかだよな。」

才人はテーブルの上に置いてあったテレビのチャンネルを持って電源を入れた。

瞬時に画面がつく。その途端ギーシュとマリコル又は驚愕の表情

になり、コルベールは歓喜の表情になった。

「うわ！」

「なんだねこれは？」

驚く二人を他所に、コルベールは1人喜び才人の向かって聞く。

「これが話しに聞いていたテレビかね！！すごい、こんな綺麗に鮮明に映し出しているとは・・・学院長から『遠見の鏡』を見せてもらったことがあったが、それよりも綺麗に見えるよ。」

「まあハイビジョンですから。ちなみに、原理については俺にもよくわかりませんが・・・ああ、やっぱりニュース以外やってないな。」

才人がカチカチとチャンネルを変えてみるが、コルベールやギーシュたちが興味を持ちそうな番組はやっていなかった。

その様子をコルベールは興味深げに、他の2人はまるで狐に化かされたような表情で見っていた。

「だめだ、何にもやってない・・・で、おい、お前ら？」

才人はテレビを消して、放心状態の2人に声を掛けた。2人は才人の声で我に帰った。それとともに質問を浴びせた。

「さ、才人今のは？」

「これは一体なんと言うマジックアイテムなんだね？」

ギーシュが地球では間抜けな、ハルケギニアでは極一般的と言える質問をした。才人は笑いながら答えた。

「こいつはテレビって言って、簡単に言えば、遠くの風景や音を見れる機械だな。魔法は一切使っていない。」

すると、コルベールが言う。

「うーん、本当に君たちの世界の科学は進んでいるみたいだね・・・才人君！！私はこの4日間の内に、出来る限りの知識をハルケギニアに持って帰ろうと思う！！」

コルベールの顔は、希望で満ち溢れていた。

才人は彼を地球に連れて来て良かったと、素直に感じた。

一方、ギーシュら2人は、テレビがマジックアイテムではない事に動揺こそしたが、それでどうやって動いているのかという疑問を口にはしなかった。2人とも考えてもわからなかったからだ。下手に考えすぎるよりも、これはマジックアイテムでない不思議な物と自分に言い聞かせることにしたのだ。

そして彼らの興味は、テレビの下にある物に映った。

「才人、この綺麗な絵が描いてある箱はなんだい？」

マリコルヌが一つを取り上げて言った。

「それは映画やアニメのDVDだよ。なんならなんか見てみるか？・

・「風のナウカ」、「天の城ラピュ」、「紅の」、「スタジオリは父さんが大好きなんだよね。古い戦争映画とかは曾爺ちゃんや爺ちゃんのだな・・・あ、これなら良いかな？」

「「「？」」」」

才人が手に取ったのは、「母たずて三里総集編」だった。

そして約1時間後、ようやく起きてきたルイズたちがリビングに入って見たのは。

「ええと、コルベール先生にギーシュにマリコルヌ・・・一体何やってるの？」

画面を食い入るように見つめ、感動の涙を流している3人の姿だった。

地球訪問 1日目早朝編（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

地球訪問 1日目朝食編

ルイズたち女性陣、さらにウェールズ国王夫妻が起きた所で、一同は朝食を摂る。全員併せて12人もいるから、平賀家のリビングは満員電車とは言わないまでも、かなり賑やかなものとなった。

朝食自体はトーストに目玉焼き、サラダと言ったごくごく簡単な物であったが、ここでも好奇心旺盛なコルベールが1人、あるもの見るもの全てに興味を持ち、才人らに質問しまくった。

「才人君、あのパンを焼く機械、短時間で火を使わずお湯を沸かす機械、それに捻るだけで火が出る機械はそれぞれ一体どのようなものかね!？」

朝っぱらから1人マイモードでハシャギまくるコルベールを見て苦笑しながら、才人は食事を摂る手を止めて簡単な説明をしておいた。

その様子を横目で見ながら、今やトリステインの代王となったルイズは隣で仲良く食事を摂るウェールズ夫妻に声を掛ける。

ウェールズとアンリエッタの2人は、見知らぬ土地に來ているというのに、そろって満面の笑顔を浮かべて、それこそ幸せ一杯と言った感じだ。アンリエッタとは付き合いが長いルイズも、中々見たことのないアンリエッタのその表情に少々驚いていた。

「姫様、とても嬉しそうですね?」

「ああ、ルイズ。ええ、私とても嬉しいのよ。だって結婚したと言

うのに、私たちこれまで2人静かに外に出かける機会なんて無くて見ず知らずの国とはいえ、ウェールズ様と2人こうして外に出られただけでも本当に嬉しいわ。」

アンリエッタの言葉に嘘偽りはない。アルビオン解放戦争が終わってからまだ2ヶ月しか経っていない。アルビオン国内の混乱は収まりつつあるが、あの戦争で多くの貴族が爵位剥奪や追放されている。そのためそれら貴族たちの資産や土地の処理だけで膨大な量となった。他にも軍備の再建や、新しい政治制度や法制度の整備などの国内の改革と言った事業も進められており、ウェールズとアンリエッタは多忙であった。

ウェールズは才吉からのアドバイスを受けて、アルビオンを議会制度を取り入れた初歩的な立憲君主制国家にした。このため、王の権限はこれまでより小さくなり、彼もこれまでより暇になると思っ
ていたらしい。

しかしハルケギニアにおいて、王権は神より賜った神聖な物である。いきなり今の日本の様な政治権限を全て取り上げた象徴制では反発を誘発する恐れがあった。そこで新法では、王にも参政権と被参政権を付与するといつかかなりおかしい内容が盛り込まれた。

そしてこれから政治を取り仕切るべく立ち上げられた内閣において、ウェールズは全閣僚から首相に推薦されてしまった。

本来は公正な選挙をやって決めるべき所であるが、未だ国内の混乱が収まっておらず、しかも選挙制度を敷くまでに時間が掛かるためとして、初代首相は臨時政府の閣僚から推薦されて選ばれることとなった。その結果、閣僚達は戦争を勝利に導き、なおかつ若く有能なウェールズを指名してしまった。

こうして現在アルビオン王国国王兼首相となったウェールズと、その妻アンリエッタは多忙なのであった。

「それに別世界なら、さすがにうるさい重臣たちも付いて来られないからね。」

アンリエッタの言葉を受けて、ウェールズが言った。

「でも大丈夫なんですか？国王夫妻が国を空けてしまつて。」

ルイズが自分のことは棚に上げて、少し呆れた様に言った。

「それを言ったらあなたもでしょ、ルイズ？」

アンリエッタも少し呆れ顔だった。

「大丈夫だよルイズさん。ちゃんと身代わりとして、王宮の倉庫にあった『スキルニル』を置いてきたから。」

ウェールズが得意げに言う。『スキルニル』とは、血を吸うとその人間の容姿と能力を複製できる古代の魔法人形だ。彼らはそれを身代わりに置いてきたらしい。

ウェールズの言葉を聞いて、ルイズが少しばかり驚く。

「ええ！実は私もそうしてきたんですよ。」

なんとルイズも同じ方法で城を抜け出していた。彼女はアンリエッタから引き継いだ公務をこなしつつ、ここ数日如何に混乱少なくて

城から抜け出すかを考えていた。そこでひらめいたのは、魔法学院時代に授業で習った『スキルニル』のことであった。

彼女も王宮の倉庫から見つけ出し、それを置いてやってきたのであった。

もしこのことを重臣たちが聞いたら。

「そんなことに知恵を使っている暇があったら、公務に精を出してください！！」

と目をひん剥く可能性120%だ。アンリエッタから「ルイズのことしっかり支えてあげてね。」と託されたマザリに枢機卿もさぞ胃を痛めていることだろう。実際、彼が胃を痛めて倒れるのはこの後何回も起きている。本当にご愁傷様である。

ただこういう所が、この後意外と国民からおもしろい王族として3人とも親しまれることになるのだから、世の中何が幸いするかわからない。

「とにかく、異世界とは言えアンリエッタと新婚旅行できる機会を得られたこと、才吉さんたちには本当に感謝しているよ。」

「私もです。一体どんな物が見られるのか本当に楽しみです。」

ウェールズとアンリエッタの2人は、一応才吉から簡単なこちらの世界の説明を受けていた。その分楽しみも倍増していた。

一方、アンリエッタたちが話に花を咲かしている一方で、才人は

祖父である才蔵から呼ばれた。

「ハルケギニアから来てもらった皆さんについてだが、とりあえずウェールズ国王陛下とアンリエッタ殿下は俺と礼子で案内する。」

この言葉に、才人は別に異議はなかった。本来なら2人は国賓待遇である。だからほぼ同数で案内したほうが良いだろう。

しかし、次の言葉を聞いて才人はあることにきづいた。

「そして、残った方々は才助と瑞江さん、そして智江に案内してもらう。」

何故か自分の名前がない。

「あれ爺ちゃん、俺は？」

「お前にはあることを頼みたい。広島に行つて欲しい。」

「え！？なんで広島？」

突然の事に、才人は少し狼狽する。

「広島にいる俺の友人に会つてきて欲しい。そいつは大学で物理学を教えているんだが、独自に次元についての研究もしている。だから異世界のことは是非とも報せておきたいんだ。別に資料だけを郵送しても良かったが、あいつは自分の目で見ないと信じない性質だから、実際にハルケギニアへ行っていたお前が行った方が良さと思つてな。」

その言葉に、才人は納得した。

曾祖父の才吉、父親の才助がそれぞれ軍人稼業についたのに対して、才蔵は大学で歴史学を研究する道を選んだ。その結果彼の友人には大学で色々なことを研究している人間が多い。

「別に行っても良いけど、爺ちゃんの友達ってことは、また風変わりな人なんだろうな。」

才人に言わせれば、才蔵の友人で研究者と言うのはマッドサイエンティストを表すらしい。

「やかましい。」

「けど、父さんたちだけで全員案内できるのかな？」

人数が多い上に、地球のことなど全くわからない人間ばかりである。才人は少し心配になった。

「まあ6人に対して3人だからなんとかなるだろ。」

才蔵がなんとなく根拠の薄い、楽観的なことを言った。

とりあえず、当面の方針はこうして決まった。

才人はルイズにそのことを伝えたのであるが、彼女はそれなら自分も才人に付いて行くといい始めた。ルイズにしてみれば、東京は一度見たことのある街だ。だから今回はべつの場所を見てみたかった。

まあ才人としても、別に連れて行ってはいけないということはないので、才蔵に許可を貰って広島へルイズを連れて行く事にした。

こうして彼らは3つのグループに別れて行動することとなった。

地球訪問 1日目朝食編（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

作者近況。昨日戦争・平和論のテストがあつたために4日ほど更新を停止しました。今後もテストがあるため、更新が滞る可能性がありますので、ご了承ください。

最近読んでいる「中国的天空」という本に感動しています。

地球訪問 1日目出発編

朝食を終えた一同は、まず着替えた。ウェールズやアンリエッタ、ルイズが来ている王族の服はもとより、ギーシュたちが着ている魔法学院の制服は現代日本では目立って仕方がない。1人や2人ならなんらかのコスプレ集団で通せるだろうが、さすがに複数人いると怪しさを爆発させている集団である。

だから才人たちはハルケギニアの服に身を包んでいた全員に有無言わず着替えさせた。

「着替えるなんて面倒くさいな。」

「別にこのままで良いじゃない。」

などと当初は文句を言っていたマリコルヌやモンモランシといった面々も、「着替えなきゃ外に連れて行けない。」と才人に言われてしぶしぶ着替えたのだった。

しかしいざ着替え終わると、

「この服、着心地良いわね。」

「ずいぶんと動きやすいな。」

と誉めていた。

中世レベルの科学技術しかもたないハルケギニアでは、現代日本の服に多用されているようなポリエステル、ナイロンといった化学

繊維はもちろん存在していない。その結果、上記のような感想が出たわけだ。

全員が着替えを終えると、いよいよ出発となった。

ここでまず一行は2グループに分かれる。ウェールズとアンリエッタは才蔵夫妻の車に乗り込み、各地を回る事になっていた。

「それじゃあ。」

「お先に失礼します。」

別行動を採る一行に手を振って挨拶すると、2人は出発していった。

才人やルイズたちがそれを見送ると、一同で最年長の才助が言った。

「それでは、我々も出発します。いいですか、絶対に1人でどこかへ行かないで下さいね。それから・・・」

才助が地球のことを全く知らない一同に、注意事項を説明する。この説明は全部終えるまで5分ほどかった。一から教えたのだから仕方がないといえば仕方がない。

「・・・以上です。とにかく、私と瑞江、智江の3人から絶対に離れないで下さい。もし何かわからないことがあったら、私たち3人に気軽に聞いてください。わかりましたね?」

「・・・はい!」「」

コルベールを始めとするハルケギニアから来た一行は、才助の言葉に元氣よく答えた。

「よし。それじゃあまず、我々は最寄の駅まで移動します。そこから列車に乗って一端東京駅まで出ます。」

予定では、一行は最寄のＪＲの駅から快速電車に乗って一端東京駅へと出る。そこで広島へ向かう新幹線に乗る才人とルイズを見送り、才助たち残りのメンバーは山手線か京浜東北線で秋葉原へ向かうことになっていた。

しかし、才助の言葉の意味を理解できた人間は少なかった。

「駅？」

「列車？」

ハルケギニアでは聞きなれない単語に、一同の多くは首を傾げた。

「まあ、百聞は一見にしかず。見ればわかりますよ。とにかく、出発しましょう。」

こうして才人らも出発した。

先に出発したウェールズ国王夫妻を乗せた才蔵の車はしばらく地道を走った後首都高速に入り、そこから都心へと向かった。

ウェールズ夫妻の驚愕は、まず車が高速道路に入るところから始まった。

才蔵の車はETCをつけていたから、速度を落としたもののそのままバーが閉じているレーンに入った。それを見て、ウェールズたちは。

「ぶつかる!?!」

と声を上げた。

しかしその瞬間バーが上がり、さらに車についた機械から、「通行できます。」という女性の声が流れ、2人とも仰天してしまった

「い、今のは?」

ウェールズの驚きが含まれた質問に、才蔵がごく普通に答える。

「今のはETCと言います。車に付いている機械から発せられる電波に反応して、バーが自動的に上がったんです。ああ、電波と言うのは目に見えない電気の波です。」

その説明をしている間に、車は高速道路へと上がる。時刻は朝の10時過ぎ。ラッシュアワーは過ぎたが、まだその名残から車は多い。その光景もウェールズたちを驚かせた。

「随分と車が多いんですね?」

今度はアンリエッタがした質問に対して、才蔵は先ほどと同じように答える。

「ええ。我が国の車の普及率が高いですから。詳しい数は忘れましたが、一世帯に一台はあるはずです。」

それまたウエールズたちには驚きの言葉であつた。馬なしで動く車の存在を、彼らは『東方義勇軍』の所有する車両を見て知つていたが、その数は少なく、とても貴重な存在だつた。またハルケギニアでは現段階では生産が不可能と言つのも聞いていた。それなのに、彼らの本国ではその存在は家族に1台あるくらいに当たり前存在だと言つのである。驚かない方が無理である。

また、そこからウエールズはある考えに辿り着いた。

「才蔵さん・・・1世帯に1台の車があつてこれだけの数が走つていると言つ事は、この国の人口はどれほどなのですか？」

「現在日本の人口は1億2千万人です。」

その返答に、2人はまたしても仰天してしまった。

「1億!!!」

それはハルケギニアに住む人間の観点からすれば、桁違いの数である。なにせハルケギニア最大の国であるガリアでさえ総人口は1500万人なのだ。ハルケギニア全て併せても1億を越える事はまずない。

「付け加えるなら、この星全体で60億以上の人間が暮らしています。」

「「！！」」

それは止めとも言える言葉だった。もはや、ウェールズたちは驚きを通り越して啞然としてしまった。とにかく何もかもがハルケギニアとは桁違いなのだ。

「もはや言葉も出ないよ・・・なるほど、こんな世界から来た『東方義勇軍』が使う武器が凄まじい威力を発揮する理由も頷けます。」

1分ほど沈黙してのち、何事かを考えたウェールズはそう言った。しかし、それに対する才蔵の答えはウェールズの予想した物とは違っていた。

「そうですね。しかし、家の父たちがハルケギニアに持ち込んで使っている兵器の多くは、我々の目から見れば60年から30年前の旧式兵器です。」

その言葉は、ウェールズの予想を裏切りはしたが、別の意味でおかしな感覚を覚えさせる物だった。

「ちょっと待ってください。60年前で旧式なんですか？」

これは錬金魔法を持ち、科学技術がほとんど進歩していないハルケギニアの感覚と、日進月歩で技術が進む地球との感覚のズレだった。

「ええ、ハルケギニア世界のお2人には意外でしょうが、我々の世界ではその科学技術が1年の内に大いに進歩します。作った途端旧式と言うことだってザラじゃありません。」

「うーん・・・」

またもやウェールズは考え込んでしまった。

そうこうしている内に、車は大分都心へと近づいていた。

「お2人とも右手を御覧下さい。新宿の高層ビル群が見えますよ。」

その言葉に、2人とも体を車の右側に寄せた。そして視界内に、今や東京のシンボルにもなっている都庁舎をはじめとする高層ビル群が見えてきた。

「うわあああ・・・」

これまで最も高い建物では、王宮しか見たことのないアンリエッタは、空高く聳え立つそれらビル群に圧倒される想いだった。

「これは・・・すごい・・・」

ウェールズはアンリエッタとは別の意味で感動していた。

「これだけの物を造り上げる技術力・・・魔法を使ったところで今のハルケギニアには到底あるまい・・・例えあっても、実際に造り上げることは出来ないだろう・・・いやはや、あのコルベールという人が感動するのわかる。」

そんな2人をルームミラーで眺めながら、才蔵は高速道路を降りるべく、車を出口へと向かって走らせた。

地球訪問 1日目出発編（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

本来なら今日は外伝の方を書くつもりでしたが、アイデアに困ったのと、こちらが長引きそうだったので書ける方を書きました。それにしても、レポート一つ終わらせてもまだテスト6つにレポート1つ残っています。さらに、来月行く原水禁の打ち合わせにも出なければいけない。小説書けるかな・・・

ハルケギニアでの異変 上（前書き）

本来は地球での続きを書くべきでしょうが、なんとなく先にこつちを書きたくなったので。作者の身勝手に付き合わせて申し訳ない。

ハルケギニアでの異変 上

才人たちがタバサの母親を助け地球へ向かった丁度その日、ガリアでも大きな異変が起きていたが、トリステインでもある大きな異変が起きていた。そしてその異変を最初に感知したのは、『東方義勇軍』だった。

その日、トリステインの北西500kmの海上を、義勇軍海上部隊所属の航空機搭載上陸強襲艦「にぎつ丸」が走っていた。2ヶ月前のアルビオン解放戦争では洋上から艦載機を発進させ大活躍した同艦は、この時期制式に軍艦として義勇軍に編入されて、未知の海域の調査を行っていた。

ハルケギニアでは、風石を使用した飛行船が使われているせいか、海上を動く船の活用状況が、中世ヨーロッパよりも低い。そのせいか、遠洋航行技術の開拓が遅れていた。それがさらに、沿岸から遠く離れた海域の未調査という結果に繋がっていた。

科学技術と同様、これも魔法とそれに併せる形で存続している封建制度による弊害と才吉たちは見なしていた。そこで、才吉たちは王室からの許可を貰って、戦争も終わってやることなくった「にぎつ丸」とその艦載機を使って調査を行っていた。

ちょうどこの時、「にぎつ丸」は2回目の調査を終えて帰還途中だった。この時点で、彼らは5つの未確認の島の存在を確認していた。

これらの島の中には、大量の石油や鉄、金等を初めとする地下資源を含んでいる場所や、軍港や飛行場を整備するのに有望な場所も

あり、既に王室からの許可が出されて開発がスタートした場所もある。

ちなみにこうした島はいずれも無人島で、発見されたその日の内にトリステイン、またはアルビオン領として編入されている。ただしその価値が高いことから、まだ国際的には秘密にしていた。だから、発見後から1年間は地図にも乗っていない幻の島だった。

才吉らの思惑では、これを弾みにしてさらに遠洋の開拓を考えていた。既にそれを見越して、新型艦船の建造も秘密裏に行なっているのだが、その説明はいずれすることしよう。

さて、調査を終えてトリステインへ帰還途中だった「にぎつ丸」に異常が起きたのは、日付が変わって、日の出ももうすぐという時間だった。

「うん!？」

それに気付いたのはレーダー手だった。「にぎつ丸」には地球から持ち込んだ市販品のレーダーが取り付けられていた。本来は漁船用の物だが、それでも太平洋戦争中のものに比べれば感度は良かった。そのレーダーに光点が現れた。

レーダー手は直ぐにその事を艦橋に伝えた。

「こちらレーダー手、レーダー画面上に不審な船影4を確認。位置本艦の西、距離30km。」

この時艦橋には、船長の安田大佐がいた。彼は伝声管を通してレーダー手からの報告を聞くと、不信感を覚えてすぐに聞き返した。

「この海域に他の船がいるのは不自然だ。ゴーストじゃないのか？」

ここはトリステインの沖合500kmの海上である。航路はないからこの世界の船が走っている可能性は皆無に近い。しかも影が4つというのも理解できない。この世界の船の運用術に複数の船を組んで使うのは、海軍以外にはない。しかしトリステインの海軍がこんな海域で演習するなど聞いていない。そもそもこんな遠洋まで出てこない。だから安田は、それをレーダー手の見誤りか、レーダーの故障かと考えた。

しかし、すぐにレーダー手から反論がなされた。

「それはありません。影ははつきりしていますし、今も反応は続いています。距離28kmまで接近。」

「そうか・・・ようし、距離10kmまで接近して確認する。もしかしたら飛行船が海上に不時着しているのかもしれない。それだったら救助を行なう。もしどこかの海軍艦艇だったら信号を使って連絡をとろう。万が一海賊とかの類だったら艦載機と艦載砲をもって攻撃しよう。総員戦闘配置！！」

ジリリリ・・・

艦内に総員戦闘配置を報せるベルが鳴り響き、兵士達が一斉に自分たちの持ち場に走り始めた。

ちなみに「にぎつ丸」にも、少数ながら新たにハルケギニアで募集した新兵が配備されている。配備されて間もない彼らは、ただどしい動作で、配置に就く。

「機関室配置よし!!」

「中央部高角機銃群配置よし!!」

「船尾艦載砲配置よし!!」

最後の部署から連絡が入るまでに、およそ10分を要した。その結果に、安田は顔をしかめて、自嘲気味に言った。

「戦争中だったら絶対に沈められているな。」

今が平時であることに感謝する安田だった。

総員配置が終了した時、15ノットで走る「にぎつ丸」は、不審な影との距離を23kmにまで縮めていた。

「艦長よりレーダー手。不審な船影に動きは?」

「ありません。止まったままです。」

「そうか・・・」

と、そこで新たな報告が入ってきた。その送り主は無線室だった。無線機のないこの世界では、無線の価値と言ったら義勇軍同士で使う以外にはない。そのため、無線室に兵は配置されているが、戦時でもない最近はほとんど開店休業状態だった。

その無線室から久しぶりに報告が入る。

「こちら無線室。申し訳ありません、見逃していました。モールス信号の受信を確認！！内容は日本語です。発信源は恐らくレーダーに映っている不明船からです。」

その報告に、安田は仰天した。

「何だと！！何で気づかなかったんだ！？」

安田は伝声管に向かって怒鳴りつけた。

「すいません。昨日から調子が悪くて調整してしまして、先ほどようやく復旧させた所です。」

どうやら手違いか何かで、艦橋への報告がなされなかったようだ。

「はあ・・・まあいい、その内容を読め。」

無線手が読み上げた内容は、予想外の物だった。

「読みます。発海上自衛隊朝鮮派遣艦隊旗艦「おおよど」。宛舞鶴自衛艦隊司令部。我想定外の事態に直面す。返信されたし。・・・これだけです。」

「海上自衛隊だと！！」

安田はその名前を才吉から教えられて知っていた。日本の敗戦から数年後に、アメリカの命令の下で作られた日本の海を守る防衛組織で、帝国海軍の正統な後継組織と。

その海上自衛隊の艦が、どうして今こんな所に現れたのか安田に

はさっぱり理解できなかったが、とりあえず接触してみることにした。

「無線手、返信だ！我、『東方義勇軍』所属「にぎつ丸」なり、貴艦隊代表者と会談を行ないたい。これより合同せんとすだ。」

「了解！！」

無電が打たれる。その返答は5分後に帰ってきた。

「返信です。会談了解す。合流されたし、です。」

「わかった。」

それから30分ほどして、「にぎつ丸」の視界内に、レーダーで捉えた4隻の艦船が確認された。

「目標は巡洋艦級1、大型駆逐艦1、同小型2です。」

見張りの兵士からの報告を確認するべく、安田も首から提げている双眼鏡を使って見る。報告どおり、確かに1万t級の巡洋艦に、2000t級の駆逐艦、そして1000t級の駆逐艦が見えた。

そして安田の顔は再び驚愕の物となった。

「あ、あれは！？「大淀」に「陽炎」型の駆逐艦、そして「松」型の駆逐艦じゃないか！？」

彼が確認した艦影は、かつてこの世界に来る前、瀬戸内海で何度も見た帝国海軍の艦艇の姿だった。

ハルケギニアでの異変 上（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

作者近況・・・レポートをなんとか終わらせました。しかしテストが・・・けど小説も書きたい・・・という二律背反する事態に直面中です。

ハルケギニアでの異変 中（前書き）

なんとか根性で書きました。おそらくこれがテスト前最後の更新です。もしかしたら土日にも息抜きで書くかもしれませんが、あまり期待しないでください。

ハルケギニアでの異変 中

「にぎつ丸」の目の前に現れたのは、艦橋や艦体の特徴的な形から見て間違いなく旧日本帝国海軍の艦艇だった。ただし、安田艦長がこの世界にやってくる10年以上前、太平洋戦争中の日本で見た海軍艦艇とは微妙に印象が違っていた。

まず主砲塔や高角砲、さらに機銃の形が無骨な形のものとなっていた。またマストに取り付けられているレーダーアンテナもかなり多い。何より艦体の色が旧日本海軍の軍艦色ではない、明るい灰色に近い色で、また白い文字で艦首には艦番号、艦体側面には「おおよど」、「ゆきかぜ」、「さかき」、「かえで」と平仮名で艦名が記入されていた。

これら近代的な艦艇を持つ国などハルケギニアにはない。となればまた地球から飛ばされてきたと考えたほうが妥当である。しかし、安田が才吉に聞いた限りでは、創設期の海上自衛隊は駆逐艦以上の艦艇を保有していなかったはずである。

「一体どういうことだ？」

安田には、もうわけがわからない。とにかく、相手の話を聞けなかった。

「信号手、巡洋艦に向けて信号。会談を本艦内で行ないたいが宜しいか、そう伝える。」

すぐに信号手が信号機を操作して、発光信号によるモールスで安田が言った内容を伝えた。そして直ぐに巡洋艦の艦橋横の信号機が

点滅した。

「り、よ、う、か、い。了解です。」

相手は安田の提案に応じてくれた。

数分後、巡洋艦から内火艇（艦載用のモーターボート。ランチとも言う）が海上に降ろされ、向かってきた。それにあわせて、安田はタラップを降ろさせ、自分もタラップのある場所へと移動する。

「にぎつ丸」のタラップの所までやってきた内火艇はそこで停船し、乗ってきた人間が数人、足早に昇ってきた。揺れる艦のタラップでそうした動作が出来ると言う事は、相手が海で長く働いている人間である事を示していた。

最初にタラップを昇りきった男は、黒い旧日本海軍の物でも、また『東方義勇軍』の物とも違う制服を着ていた。そして、その服は安田が才吉から見せてもらった本に載っていた自衛隊の制服その物だった。

その海上自衛隊の制服を着た男が合計5人、「にぎつ丸」に乗艦してきた。

安田は直ぐに、艦長として彼らに敬礼と挨拶を行なう。

「ようこそ、トリステイン王国『東方義勇軍』海上部隊所属、強襲上陸艦「にぎつ丸」へ。艦長の安田大佐です、皆様の来艦を歓迎いたします。」

すると、乗り込んできた5人の男で、もっとも年長と思しき男が

答礼した。

「歓迎感謝いたします。私は日本国海上自衛隊、朝鮮派遣艦隊司令の小林武海将補です。」

海将補は少将に当たる階級であることを思い出した安田は、小林が手を降ろしてから、少し遅れて手を降ろした。

それと同時に、小林が安田に向かって質問する。

「それでは早速ですが安田艦長。一体ここはどこで、そしてあなた方は何者ですか？あなたが着ている服は、旧海軍の物に似ているが少し違う。それに、先ほどトリステイン王国と言いましたね。私の記憶ではそんな国は無いはずだ。しかしあなたはどうみても日本人だ。一体何がどうなっているのですか？」

どうやら状況を把握できていないのは、向こう側も同じことのようにうだ。

「それについては我々も同じことです。まあ、長い話になるのは確かです。とりあえず、艦内の会議室でお話をしたいのですが、よろしいですか？」

とにかく吹さらしの甲板上で立ったまま話をするなど相手に失礼である。安田は小林たちを会議室へと案内することにした。

「よろしいでしょう。ただしそちらの素性が判らないので、こちらで武器の携帯をお許し願いたい。」

武器を持たれるのは少しばかり困るが、断れば先に進みそうにな

いので、許可する事にした。

「わかりました。ではこちらへ。」

安田は小林らを連れて、艦内の会議室へと移動した。

会議室へと移動すると、小林が他に乗り込んできた4人について紹介した。

「部下を紹介します。巡洋艦「おおよど」艦長の佐伯一佐、航海幕僚の内海二佐、通信幕僚の水野二佐です。」

一方、「にぎつ丸」の側からは飛行隊長で「隼」のパイロットである有紀中尉、航海長の坂東大尉が会談に臨んだ。

先に口を開いたのは安田の方だった。

「まず、どうしてあなた方がこの海域に現れたのか教えていただきたい。それと、朝鮮派遣艦隊と申されましたが、それについてもお教え願いたい。」

この質問に答える形で小林が、話し始める。その内容は多岐に渡ったが、要約すると以下のような物となる。

彼らは前年に起きた朝鮮半島での戦争で米軍の支援要請を受けて、昭和24年3月19日に舞鶴軍港を出撃。朝鮮半島の元山沖^{ウォンサン}で、北朝鮮側の軍艦の動向を見張る予定だった。ところが、出港してまもなく全ての電子機器が使用不能となったという。さらに光る波に吞まれ、気付いたらこの海域にいたという。

「とにかく、いきなり電子機器が利かなくなつてこちらも困りましたよ。さらに復旧して正常に作動し始めたものの、無線もラジオも一切が傍受不可能となりました。とりあえず無電を発進しつつ、夜が明けたら水偵（水上偵察機）を発進させる準備させていたら、この艦からの電探波と無電を傍受したわけです。」

「なるほど・・・しかし、昭和24年と言われましたね？確か海上自衛隊の創設は昭和29年（実際にはそれ以前に警備隊が組織されていた）のほうでは？それに朝鮮戦争が起きたのも昭和25年と聞いておりますが？」

その安田の言葉に、小林達が明らかに戸惑いの表情を見せた。認識のずれがあるのは明らかだった。

「あの宜しければ、あなたが知っている太平洋戦争終了後の歴史を教えてください。」

小林達に問われ、安田は才吉から習った太平洋戦争が終わつてから数年間の歴史を言った。その途端、自衛隊側の数人が叫んだ。

「そんなバカな!？」

「バカなと言われても・・・では、あなたの方はどうなんですか？」

「我々の方は・・・」

小林が語り始めたが、今度はそれを聞いて「にぎつ丸」側の人間たちが驚愕した。

小林の言う所では、まず日本の降伏日時が8月15日ではなく1週間早い8月8日であり、原子爆弾は広島に落とされたものの、長崎には落ちていない。またソ連軍の侵攻により満州と樺太を失ったのはそのままだったが、千島列島は守備隊の奮戦で日本領として維持されたこと。そしてその後日本軍は一時的に解体されたものの、ソ連の南進を警戒したアメリカ政府とGHQ総司令官ニミッツ元帥の命令により、復員輸送が一段落した昭和23年に陸上自衛隊、海上自衛隊、航空自衛隊として再編成されたという。

「歴史が全く違う・・・では、朝鮮戦争が始まったのは？」

「昭和23年の5月です。」

安田らが習った歴史より実に2年近くも早い。

「そうですか・・・」

「では、今度はこちらから質問させていただく。ここは一体どこで？あなた方は何者だ？」

その問いに、安田達はここが異世界のハルケギニアという地であり、自分達はかつて地球から飛ばされ、今はハルケギニア内のトリステインという小王国のために、他の地球から来た人間たちと協力して『東方義勇軍』を組織していることを説明した。

普通だったら信じられない話だったが、小林は物分りが良い人間のように、部下たちが半信半疑の表情である中言った。

「異世界ですか・・・にわかには信じがたい話ですが、昨夜から起きている異常事態を考えれば納得出来ない話ではありませんね。しか

し、そうなる和我々はどうするべきか・・・」

自衛隊側の人間は顔を見合わせたものの、上官の言ったことに反論はしなかった。

「とりあえず、一端どこか港に寄港しましょう。このまま海上に漂ったままというわけにはいかないでしょ？」

安田の提案に、小林は頷いた。

「そうしましょう。」

とりあえず暫定的な方針は決まり、小林達自衛隊の人間は一端艦へ戻った。

1時間後航行の準備が整い、5隻は針路を北西にとって航行を開始した。

そして安田は、アルビオンに向けて無電を送らせた。その内容は以下のとおり。

「平賀才吉義勇軍総司令官は、大至急ハシラ島に來られたし。」

ハルケギニアでの異変 中（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

作者が最近になって知ったことなのですが、海上自衛隊は当初瀬戸内海で沈んでいた軽巡「大淀」の再生を考えていた時期があったそうです。また、アメリカから空母の貸与も計画にあったそうです。

ハルケギニアでの異変 下（前書き）

朝鮮語のテストが終わって心に余裕ができたので、投稿しました。

ハルケギニアでの異変 下

ハシラ島。後にこの島の名は、トリステインとアルビオン両王国の北大西洋（便宜的に付けられたハルケギニア西側に広がる大海の呼称）進出の拠点として知られることになる。

「にぎつ丸」が最初に遠洋調査で発見したこの島は、周囲30kmからなるそれなりに大きな無人の火山島で、島の東側に標高1000m級の死火山が聳え立っており、そしてその山の麓で行なつた地質調査では、島の地下に金や銀をはじめとするレアメタルが相当量存在しているのが確認されている。

この島は発見後ただちにトリステイン王室へその存在が報告され、トリステイン領に編入されている。ただしこの時期不安定と行かないまでも、きな臭くなっていた外交関係を考慮して、アルビオン以外の国にはまだ発表されていない。

そしてこの島の管理は、現在『東方義勇軍』に委託されていた。本来なら大量の金を埋蔵するこの島を王室が放っておくのは不自然な事であるが、これにはちょっとした理由があった。

この島に眠っている大量の金銀の存在は、確かに小国であるトリステインには魅力以外の何ものでもない。しかし、如何せん位置がトリステイン本国から遠過ぎた。飛行船、そして数少ない海上を航行する通常型の船舶でも、トリステインから600km近く離れたこの島へ運行するのは難しかった。つまり、今のトリステインやアルビオンには、この島で金銀を採掘しても輸送する手段がなかったのだ。

ハルケギニアにおいて、遠洋航海可能な船が登場するのは、この1カ月後にゲルマニアのツエルプストー領内で竣工する近代型の鋼鉄蒸気巡洋艦「ビフレスト」と姉妹船の「ヨッソハイム」まで待たなければならなかった。

飛行船の多用による遠洋航海技術の未発達が、ここで仇となつてしまつたわけだ。そのため、やむなくトリステイン王室は、金銀の採掘量を定期的に報告、ならびに一定の金額を王室に納めることを条件に、『東方義勇軍』に管理を任せた（というか任せざるをえなかった）のだつた。

『東方義勇軍』では、幹部会議でこの島の開発を進めるとともに、その名をハシラ島（柱島）と名付けた。柱島とは本来日本の瀬戸内海にある島の名で、かつては海軍連合艦隊の停泊地として知られた。

才吉たち義勇軍首脳陣がなんでその名をこの島につけたかという、島の東側には大きな湾があり、義勇軍独自の軍港として使用する事を決めたからだ。実際このハシラ島のクレ軍港は、後にハルケギニア随一の海軍基地として整備される事となる。

もつとも、この時点でハシラ島は発見されてから1ヶ月も経つてなく、少数の人間が上陸して金銀の採掘準備と、港の整備を始めたばかりだつた。

『にぎつ丸』の安田船長は、そのようやく人の手が入ったばかりのハシラ島のクレ港に、現れた自衛艦隊を誘導したのであつた。

約100kmの航海を終えて、湾に入つた5隻はそれぞれ投錨（錨を降ろすこと）した。

そして投錨して間もなく、港の方から1隻のボートが現れた。それを見て、安田は一言呟いた。

「我が総司令官の御登場だ。」

彼の言った通り、そのボートには、先ほど「にぎつ丸」から発信された緊急報告を受けてやってきた、『東方義勇軍』総司令官の平賀才吉大将（この度昇進）が乗り込んでいた。

ボートが近づくのを見ながら、安田はすぐに信号担当の兵士に命令する。

「各艦に発光信号を頼む。代表者は我が艦に来て欲しいと。」

命令は直ぐに実行され、10分後には各艦から内火艇が下ろされて、艦長をはじめとする上級士官が「にぎつ丸」に集まってきた。彼らは乗り込むと、ただちに会議室へと通された。

先ほどやってきた艦隊司令官の小林海将補はもちろんのこと、今度は従えている駆逐艦の艦長もやってきたので、自衛隊側の人数は8人に増えていた。

一方の義勇軍側は総司令官の才吉をはじめとして5人であった。

会議はまず、才吉の自己紹介から始まった。

「はじめまして、『東方義勇軍』総司令官の平賀才吉大将です。ついでに言っておきますと、旧帝国海軍中尉で、海上自衛隊の退役海将補です。」

その言葉に自衛隊側参加者に動揺が走るが、小林だけは表情一つ変えず直ぐに答えた。

「海上自衛隊朝鮮派遣艦隊司令官の小林海将補です。ついでに私は旧帝国海軍では中佐でした。」

挨拶を終えると、すぐに小林が才吉に質問してきた。

「それでは平賀大将、単刀直入に聞きます。先ほどそちらの安田艦長からお話を聞きましたが、ここが異世界であると言うのは本当でしょうか？確かに昨夜から無線の傍受不能などの異常事態に我々は陥っていますが、簡単に信じられる話ではありません。私は艦隊全乗員1300名の命を預かっています。今後の方針を決定する上で私には正確な情報を得る義務があります。」

すると、才吉は深く頷いて答えた。

「小林海将補、私も同じ軍人として、そして多くの部下の生命に責任持つ者としてあなたの気持ちは良くわかります。もちろん、私はあなたがたへ十分な情報を提供する準備があります。」

才吉は連れてきた副官に指示して、映像投影機の準備をさせた。

準備が終わり、部屋の灯りが落とされて流されたのはこちらの世界に来て撮影したハルケギニアに関する映像だ。そしてそれが終わると、才吉たちの日本での戦後に関するDVDの歴史番組が流された。

その映像を、自衛官達はただじっと見ていた。そして映像が全て終わり、部屋の灯りが点くと、お互いに何かを喋りはじめた。おそ

らく、映像の真偽について話し合っているのだろう。

「ふむ、映像は大変興味深い物でしたが。あれだけではやはり信憑性に乏しいですな。」

小林がまだ半信半疑と言った顔で言う。軍人は用心深い生き物だ。早々簡単に信じてもらうのは難しかった。これが夜なら2つの月を見せれば良いのだが、生憎と今は早朝だった。そこで、才吉は最終兵器を投入した。

「わかりました。マリー三等兵曹、入ってくれ。」

才吉が声を上げると会議室の扉が開き、義勇軍の女性用制服を着込んだ金髪の少女が入ってきた。

「紹介します、我が軍の飛行兵であるマリー・スカルフスキー三等兵曹です。」

すると、自衛官たちがざわめいた。女性の軍人の出現に、素直に驚いたのである。

「マリー三等兵曹です、よろしく。」

マリーはピシッと敬礼した。

「マリー兵曹、君は確か簡単な魔法が出来たね？」

才吉の問いに、マリーが頷いた。

「はい。母親がメイジでしたので。」

「じゃあ、何か簡単な魔法を実演してみてくれないかね？」

「わかりました。」

才吉の言葉に応えて、彼女は服の中から杖を出し、詠唱を始めた。そして、机の上に置かれた灰皿に向かって、小さな火の玉を放って見せた。

「「「おお!!」「」」

自衛官たちがどよめいた。

「どうです？これが魔法です。マリー兵曹、ありがとう。もう行って良い。」

才吉に言われて、彼女は一礼して退室した。

一方、彼女の魔法を見た自衛官達は呆然としていたが、小林海将補はなんとか言葉を紡いだ。

「いやあ、信じられない。しかし、見た限り何の仕掛けもないようだった。本物以外の何物でもないな。・・・どうやら、ここが異世界と言うことは信じざるを得ないようだ。」

他の自衛官たちも、どうやら信じてくれたようだ。

「しかし、困った。我々は自衛艦隊司令部の命令を受けて、朝鮮半島に向かっていたのに。今後どうするべきか・・・」

「なんとか戻れないのか？」

「それよりも、燃料や食料をどうするんだ？」

別の問題で悩み始めた自衛官たちに、才吉は一応言うておくことにした。

「小林海将補。言うておきますが、この世界から元の世界に戻る方法はありません。唯一月蝕を使う方法がありますが、今の所私のいた21世紀の日本へしか出られていません。つまり、帰還する方法はないと断言して良いでしょう。」

その言葉に、小林は声を荒げた。

「それでは困る！私は良いとしても、乗員たちの中には家族を日本に残してきた者は大勢いるんだ！彼らになんと言えばよい！？」

「お言葉ですが、これまでに地球からこの世界に飛ばされた者の多くが、結局帰ることも叶わず、この世界に骨を埋めました。先ほどの女性兵の父親も、地球から迷い込み、5年前に死んだポーランドのパイロットでした。そのような人間がこの世界にはたくさんいるのです。決してあなた方だけの問題ではありません。そして我々が出来るのは、あなた方への補給と、その代償としての協力要請だけです。」

「ううむ・・・」

才吉の本音としては、彼らには自分たちに協力して欲しかった。しかし、これまでと違い、彼らは大規模な部隊だった。一筋縄ではいかない。

「待ってくれ！それは直ぐには決められない。我々は自衛艦隊司令部の指揮下で動いているのだぞ！？」

「そうだ。我々は憲法で国民の意思の下で動くことを義務とされているのだぞ！」

別の自衛官が声を張り上げた。どうやら、彼らの世界の憲法にも文民統制があるようだ。

ちなみに、当初日本国憲法には文民統制はなかった。ところが、9条の改定を知ったソ連が急遽付け加えるよう求めたきたので加えたのである。ここでいう9条の改定と言うのは、1項と2項を逆にして、解釈によっては軍の保持を可能にしたことを指す。

閑話休題。

自衛隊側の言葉を聞いていた才吉も声を張り上げた。

「ここは異世界です。その司令部も消滅した今、あなた方が従うべき上層部はないわけです。つまりあなた方は独自に自分たちで判断して動いてもらう以外にないのです。」

指揮系統を失った軍隊はこういう場合困る。上の命令で動く組織であるから、その上を失うとどう動くべきなのか判断できなくなるのだ。

「つまり、私に課せられた責任は途方もなく大きいわけか？」

小林が頭を抱えながら言う。

「そうなりますね。あなたが艦隊の最高指揮官ですから。そして注意しておきますが、今やあなた方の法律や規律も、異世界であるここでは無効といえます。我々としてはあなた方が暴走してもらうのが一番困る。とにかく、規律と秩序を保ってください。」

才吉は強く念を押した。万が一映画版「戦国自衛隊」みたいになつたら大変である。

「・・・わかった。とにかく、艦隊に戻って乗員たちに事情を説明しよう。平賀將軍、とりあえず今日はこれまでにして欲しい。詳しい事は明日以降再び会談を持ちたい。」

「そうしましょう。しかし、あなた方の燃料や食料にも限界があるでしょう。交渉はなるべく早く纏めたほうが良いと思います。」

「・・・」

結局、この日の会談は一端切り上げられた。

この後3日間、才吉は小林らと会談を行なった。この間に、小林達は艦隊乗員に現状を伝えたわけだが、問題が出ないはずが無かった。やはりと言おうか乗員による反乱が起きた。結果鎮圧のために13名の死者を出してしまった。その犠牲の上で、小林たちは義勇軍との協定を結んだ。

こうして義勇軍は新たに有力な海軍力を手に入れたわけであった。

ハルケギニアでの異変 下（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

作中でちらつと出てきた「ビフレスト」と「ヨツンハイム」という蒸気艦は、吉岡平作「北海の墮天使」に登場した北欧の小国トルステイン公国の戦艦からとっています。

そして2隻はゲルマニアで建造されていますが、一応トリステインの軍艦です。

地球訪問 1日目乗車編（前書き）

読者数が5万人を突破していました。本当にありがとうございました。

地球訪問 1日目乗車編

再び場面は地球に戻る。広島に向かうため、才人とルイズは一端中央線の快速で東京駅へ向かわなければならぬ。残るメンバーは父親の才助たちに秋葉原をはじめとする数箇所の場所を案内してもらったが、秋葉原へ行くには中央線の普通列車に乗るか、東京駅で乗り換えて山手・京浜東北線に乗る2つの方法がある。

そこで、才助が「折角だから色々な物を見てもらおう。」という意見を出したので、残ったメンバーも見送りながら東京駅へついていき、そこから秋葉原へ向かう事にした。

東京駅へ出るために、才人らは最寄のJRの駅から中央線の快速電車で東京駅へと向かう。駅に着いた途端、ハルケギニアから来た一行は見る物、聞く物全てに興味深々となった。

自動券売機、自動改札機、ホームの電光掲示板、放送装置、カラー写真が印刷されたチラシなどなど、列車に乗る前から、彼らは驚き、混乱しっぱなしだった。

自動改札機では切符を取り忘れて鳴ったブザーにギョーシュが腰を抜かしたり、ホームに上がれば聞こえてくる女性の声の案内放送に全員がキョロキョロ辺りを見回したり、エスカレーターに乗ったモンモランシが降り場で転びそうになったりと、才人らを冷や冷やさせた。

そんな中でも一番はしゃいでいるのは、やはりコルベールだった。

「いやあ凄い！！凄すぎる！！動く階段に、文字が浮かび上がる板、

大掛かりな建物、これらが魔法を一切使わずに出来ているなんて・
・これまで生きてきた中でこれほど驚き、感動したことはありません
ん！！」

現代日本では、多少変なことをしても周りは無視する傾向にある
が、さすがにあまりに大声で叫ぶものだから、目立つ。

「先生、感動したのはわかりましたから、とりあえず静かにして下
さい。他の人に迷惑です。それに駅員から怪しまれます。」

さすがに才人がたしなめた。

「そうかね、いや、すまない。」

一行がホームに上がった時、列車はいなかった。そのためホーム
からは2本のレールが見えていた。

「才人、この鉄の棒はなんだい？」

ギーシュがレールを見て聞いてきた。

「これはレールって言って、この上をこれから乗る列車が走って
く
るんだよ。」

才人はそう説明したが、ギーシュは腑に落ちない顔となった。

「この板の上を？」

ハルケギニアには鉄道というものはない。鉱山などで簡単なト
ッ
コは使われているようだったが、ギーシュはそう言うものは見た

ことないらしい。だから想像に限界があるようだ。

「まあ実際にみればわかるよ。」

ちょうどその時、ホームに列車の入線を告げる自動放送が流れ始めた。

「間もなく、1番線に中央線特別快速東京行きが参ります。危ないですから、黄色の線の内側までお下がりください。」

放送から30秒ほどして、警笛を鳴らして列車が入線してきた。ステンレス製の車体にオレンジのラインが入った最新型車両だ。

それを見て、ルイズを除く一行はまたも仰天してしまった。普段自分たちが見慣れた馬車よりも大きな物体が、走ってきたのだから当然と言えば、当然と言える。

さらに10両編成と言うその長さもインパクトを増させていた。これが路面電車や2両ぐらいの短編成の電車だったら反応も違っていただろう。

「さあ乗るぞ！」

チャイムと共に扉が開き、才人らは列車に乗り込んだ。既にラッシュアワーは過ぎていたが、車内は東京を走る鉄道だけあって既に座席は埋まっていた。

「席は空いてないな。悪いけど皆立つたままで頼むな。」

「ええ！なんで貴族の僕達が立たされなきゃいけないんだよ？」

と愚痴を言うのはマリコル又だ。

「一応来る前に言っただろ、ここは地球。ハルケギニアとは違う。メイジはいないから貴族とか平民っていう区別はないんだ。20分もすれば着くから我慢しろ。」

才人は来る前にこちらのことについて説明してあった。だからマリコル又以外のメンバーはいやな顔こそしたが、ここはハルケギニアではないということで割り切っていた。

結局マリコル又もしぶしぶ従った。

そうしている間に、チャイムが鳴って扉が閉まり列車は動き出した。動き出したので、当然モーター音やレールの継ぎ目を通る音、走行による振動が伝わってくるわけだが、それに対しても驚きの声が漏れる。

「随分と静かだね。」

「振動もない。」

列車の振動は、馬車に比べれば遥かに小さい。音も最新型のインバーター車両だけあって静かだった。

そんな一行を乗せた列車は速度を上げていく。乗り込んだ列車は特別快速であるからぐんぐん速度を上げる。そして次々と駅を通過していく。

才人に見ればもう何度も見慣れた光景だ。しかし、ハルケギ

ニアの一行にはやはり刺激の強い光景だった。

「速い！！」

「馬よりもずっと速いわ！！」

「さすがに竜には及ばないみたいだけど、陸の上をこんなに速く走れる物があるなんて驚きね。」

ギーシュやモンモランシ、キュルケらが感嘆の声を上げる。

しかし、彼らは10分後にはさらに驚くことになる。列車は徐々に東京の中心部へと近づき、いよいよ新宿に到着するところには、東京の象徴とも言つべき高層ビル群がまじかで見られる。

その光景は、コルベールにとって生涯忘れられないものとなる。

「いやあ本当に素晴らしい！！あんな高い建物を魔法なしで組み上げるなんて。いや、魔法が使えても無理でしょうな。いやはや、これはもう科学に関しての次元が違いすぎる。」

コルベールが地球とハルケギニアのあまりにも違う技術の差に溜息を吐く。

「これから追いつけば良いのです。確かに技術はすごいかもしれませんが、それにしだって積み重ねに過ぎません。ハルケギニアでも技術をしっかりと積み重ねていけば、いつか東京並みの街並みが造れますよ。もつとも、良い面ばかりではありませんが。」

コルベールの話に付き合っていた才助がそう言った。

「それは、以前見せていただいた様な武器につながる技術も発達していると言つことですか？」

「いいえ。それも問題ですが、それ以上に深刻な物が環境問題です。東京は確かに立派過ぎる都市ですが、反面空気や水が相当に汚れてしまいました。最近はかなり改善していますが、そうした悪い点があるのも事実です。ハルケギニアでは是非ともそうした点がないよう科学を発展させて欲しいのです。」

「なるほど。」

2人はいつのまにか、熱く議論を行なっていた。

そんな感じで、一行を乗せた列車は何事もなく、10分もしない内に東京駅のホームへと滑り込んだ。

ハルケギニアから来た一行は、まるで1つの街のように大きな駅の構内を見て、もはや驚きを通り越して啞然としていた。

そんな一行を他所に、才助は才人に新幹線の切符を貰う分と、広島での滞在に必要な金を渡していた。

「それじゃあな才人。ルイズさんとはくれぐれもはぐれないようにな。」

「わかつてるよ。」

「それとだ。」

才助がものすごく真剣な表情で言う。

「それと？」

「ルイズさんと2人だけでの旅行だ。しっかり楽しんでこいよ。」

その言葉に、才人は苦笑してしまった。

「はい。それじゃあ父さんたちも、皆をよろしく頼むな。」

「ああ、任せておけ。」

才人は才助に友人たちのことを託すと、ルイズの手を引いた。

「さ、行こうぜ。」

こうして2人の旅が始まる。

地球訪問 1日目乗車編（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

作者は昨日テストが終わり、先ほどレポートを出し終えました。
夏休みに入ってもしくはしくは忙しいのですが、なるべく早く更新しようと思っています。

地球訪問 1日目王様と姫様の東京観察編

才人とルイズの2人が広島へ、その他の一行は秋葉原へと向かっている頃、先に出発したウェールズ国王とアンリエッタ姫の2人は霞ヶ関の官庁街を車の中から見ていた。

「あちらに見えるのが外務省、外国との交渉や様々な諸問題を取り扱っている所です。その向こうは・・・」

運転する才人の祖父である才蔵が、視界に入ってくる建物のを1つ1つ説明していた。

「随分といろいろなお役所があるんですね？」

アンリエッタが興味深そうに言う。政治レベルが中世に近いハルケギニア世界では、一応大臣という役職はあるが、それぞれに独立はしていない。実際地球でも、例えばイギリスの場合外務省が設置されたのは1783年と比較的最近のことだ。

もともと、そもそも現在ののような近代的な政治システムが確立したのもここ200〜300年の間のことだ。地球のヨーロッパでは長い間ローマを中心とするキリスト教教会が政治に介入していた。その教会権力が衰退し、主権を持った国々が独自に動くようになった象徴的な出来事が、30年戦争の講和条約となった1648年のウェストファリア条約なのだ。

ハルケギニアの場合、まだウェストファリア条約の段階にも来ていない。

「我々の世界では、外務や国防、国内で起きている様々な問題がそれこそ山ほどありますから。それぞれが分担しないととてもやっていられません。」

「しかし、これだけの役所で働く人間もバカにならないはず。その人材を育成する制度も整備されているというのか・・・」

ウェールズが真剣な表情で言う。

「御推察の通りですウェールズ陛下。我が国の憲法は読まれましたか？」

「ええ、以前才吉さんから翻訳してもらったのをいただきました。あれを読んだ時は正直頭を金槌で殴られたような気がしましたよ。法の下の平等、生存権、社会権・・・我々が逆立ちしても考え付かないような、それでいて全ての人々の理想とも言うべき内容には驚かされました。」

ウェールズは頷くと、どこことなく興奮した様子でそう言った。

「そうですね。それで、その中には義務教育についても書かれていたはずですが？」

才蔵の質問にウェールズが頷いた。

「ええ。読みました。」

「我が国では親の義務として、子に小学校で6年、中学校で3年の教育を受けさせる義務があり、公立学校ならその間の学費は無償です。ですから、我が国の子供はよっぽどの事情がある子を除けば、

9年間の間、基礎的な教育を無償で受けられるわけです。だから我が国の識字率はほぼ100%を達成しています。さらに義務教育ではありませんが、より専門的な知識を学べる高校、大学もあります。

教育制度も、ハルケギニアでは発達していない。大半が貴族であるメイジは一応魔法学院に通って魔法と貴族のマナーなどを学ぶが、それ以外の専門的な学問を行なう場所はない。あっても小規模な私塾だ。平民に至っては寺院などで文字を習うのが関の山と言った有様だった。

「我が国でもようやく小学校を設立したばかりです・・・この国のような高度な教育機関を作るにはまだまだ時間が必要です。」

「ですが出来ない事はありません。実現できるか出来ないかはあなたたち次第です。」

現在アルビオンとトリステインでは才吉らの助言を入れて、とりあえず都市部を中心にして小学校を作った。ただしまだ初歩的な段階なので4年制と短い。これは両国が戦争が終わったばかりと小国であるという事情からだった。もっとも、「平民に教育などする必要がない！」と考えている貴族が牛耳っているハルケギニアでここまで出来れば上出来と言えた。

アルビオンとトリステインは才吉らが地球から持ち込んだ様々な政治制度や哲学書を研究し、あらたな国づくりを行っていた。しかしそれらの多くは、これまで貴族が持っていた特権を脅かすものだった。

そうした制度を採用できた理由としては、まずアルビオンでは内

戦で旧来の貴族の多くが軒並み爵位剥奪などに遭って政治権力を奪われ、代わりに政府の中心となったのが、若く柔軟な発想が出来る人間ばかりであった。さらに戦争によって貴族の権威が失墜したこともあった。

一方トリステインでは、『レコン・キスタ』のシンパ狩りでまず内通者が多かった旧勢力が大きな打撃を受け、さらにその後のアルビオンとの戦争で平民のみで構成される「東方義勇軍」が戦争を勝利に導き、さらに銃士隊が活躍した事で平民の発言力が大きく増した事が理由としてあった。さらにアンリエッタが女王時代に行なった国内の腐敗を取り除く運動で、あくどい事をしていた貴族の多くが爵位降格や剥奪に遭ったことも大きく影響していた。

この2国において、今まさにメイジたちは自分たちが魔法という力の存在にあぐらをかいて、自分ちの成長をなおざりにしていた報いを受けることとなった。

こうして2国は現在かなりのスピードで、様々な面で発展しつつあった。ただし、厳密には保守派を完全に駆逐しきっていないトリステインの方が遅れ気味である。

ウェールズは地球からもたらされて制度の中で、教育面や福祉面に大きな関心を寄せたが、アンリエッタのほうは少しばかり違っていた。

「憲法に付いてですが、私はあの9条に感動しました。戦争の放棄と軍隊の不保持・・・本当に感動しました。」

戦争を禁止し、軍隊の不保持を謳った憲法9条は、確かに戦争が国際問題解決の手段として使われているハルケギニア世界の人から

見れば、驚天動地かつ新鮮な物だろう。ちなみに、彼女は現在の地球を取り巻く戦争は違法とする風潮なども併せて説明されている。

「そうですか。しかしながら、我が国では軍という名こそついていませんが、自衛隊と言う軍と言ってよい組織を持っています。」

すると、アンリエッタはキョトンとした表情になった。

「え！？どういうことですか？」

「実は9条にはカラクリがあるんです。当初9条では1項と2項が現在の逆でした。つまり最初に軍隊の不保持を、次に戦争の放棄を謳っていました。」

「なんで逆にしたんですか？」

アンリエッタが至極普通の質問をする。

「それが味噌なんです。いいですか、現在の9条の2項には最初に前項の目的を達するためと書かれています。ですから、1項で書いた戦争、すなわち侵略以外の国土の防衛のためなら軍隊を持って良いとも解釈できるようにしたのです。これは当時の政治家たちが日本が再び軍隊を持てるようにした策だったのです。」

「まあ！！それじゃあ意味ないじゃないですか！！」

アンリエッタは驚きを隠せなかった。それに対して才蔵は苦笑しながら言い返した。

「人間は愚かな生き物なんです。一度手に入れた力を容易に手放す

事など出来ないのです。そう言うところはメイジだろうとそうでな
かろうと同じでしょう。」

これらの会話で、場は少ばかり暗くなってしまった。そこで、
助手席に座っていた才蔵の妻である（つまり才人の祖母である）礼
子が言った。

「あなた、そんな固い話ばかりでは折角地球に来ていただいた2
人に悪いでしょ。」

「ああ、そうだな。・・・じゃあ政治関係はここまでにして、お台
場にも行きますか。」

「「お台場!？」」

ウェールズとアンリエッタが首を傾げる。

「行けばわかりますよ。」

才蔵は交差点に差し掛かったところでハンドルを切り、霞ヶ関か
らお台場へと行き先を変更した。

そしてこの後、ウェールズとアンリエッタの2人はお台場にある
ショッピングモールや球体展望台が有名なテレビ局の野外イベント
で楽しい時間を過ごすこととなる。

地球訪問 1日目王様と姫様の東京観察編（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

地球訪問 1日目広島到着編

昼下がり、才人とルイズが乗り込んだ新幹線のぞみ号は、東京を出発してからおよそ四時間かけて、何事もなく広島駅へと到着した。

「やっと着いた。」

列車から降りてホームに立つなり、才人は体を伸ばす。

「着いたのは良いけど、これからどうするのよ？」

隣に立ったルイズが同じように体を伸ばして聞いてきた。2人も昨日の疲れが出たのか、約4時間の乗車時間中の9割を寝て過ごした。そのため、新幹線の醍醐味とも言える時速200kmでの車窓を眺める機会はなかった。もっとも別にそれが目的と言うわけではなかったため、2人にとって別段問題はない。

「ええと、ちょっと待って。」

才人は才助から渡されたメモを読む。そしてさらに時刻表を出してルートの確認をする。

「爺ちゃんの友人が住んでいるのは、江波っていう所らしいから・・ここからだ」と路面電車かバスだな。まあ折角広島に来たことだし、路面電車で行くか。」

江波は市の中心部から少し南へ行った所である。

「路面電車？」

ルイズは地球（日本）に来るのはこれが2回目である。だから電車や車といった物を見ても驚きはしない。それでも何年も暮らしたと言っわけではないから、わからない物は沢山ある。路面電車と聞いてもわかるはずがなかった。

「まあ見ればわかるよ。そんじゃあとつとへ行こうぜ。」

才人とルイズは、路面電車の乗り場目指して歩き始めようとした。しかし。

「その前にどこかでお昼にしない？朝から何も食べてないわよ。」

ルイズからそう言われ、才人はまだ昼食をとっていなかったことを思い出した。

「それもそうだな、じゃあ折角広島に来たんだし、お好み焼でも食ってくか。」

「お好み焼き？確か才人のお母さんが作ってたわよね？」

お好み焼きは、既に才人の母親がハルケギニアに持ち込んでいた。ホットケーキとは違うその味に、現地では中々好評である。

「うーん、あれは関西風っていうんだ。けど、ここ広島のお好み焼は一風変わってるんだ。とにかく、そうと決まれば行こうぜ。」

そういうわけで、2人は駅ビルの中のお好み焼き店で昼食をとった。余談だが、トリスティンの代王様であるルイズは、それなりに広島風のお好み焼きを気に入ったらしい。

腹を満たした2人は、今度は路面電車の乗り場へと向かった。

広島路面電車は他都市の路面電車が廃止に追い込まれる中で存続した数少ない路線である。そして現在も市民にとってかけがえのない重要な移動手段だ。

ちなみに余談であるが、広島路面電車はあの8月6日の原爆投下で街同様大損害を受けた。当時徴兵された男に代わって運転手や車掌を務めていた広島電鉄家政女学校の女学生たちも多数が死亡、または負傷した。しかし彼女ら含む生存者の努力によって、8月9日には一部区間で復旧し、打ちひしがれた多くの市民に希望を与えたとされている。

その路面電車の乗り場は駅の南側の広場にあり、ひっきりなしに単車や連接車の車両が市内に向けて発車していく。世界遺産の宮島へ向かう路線、広島港へ向かう路線、市内を横断する路線、そして才人たちが乗り込む江波へ向かう路線がある。

2人が電停に着いた時、生憎と江波行きの列車はまだ来ていなかった。しかし発車頻度が高いために、数分ほどしたところで列車が入ってきた。茶色に塗られた旧式車両だ。よく見ると、車体の側面には昭和44年、大阪市交通局より移籍というエンブレムが貼られていた。

電車は乗車ホームに止まり、ドアが開いた。

「さ、乗るぞ。段差があるから気をつけて。」

最新型の車両なら地面との段差がほとんどないのだが、旧型車両

だと段差がある。才人はルイズの手を持って彼女が転ばないように気を遣った。

「ありがとう。」

2人が乗ると、列車はすぐに動き始めた。続行運転しているために、乗客は以外に少なく、2人は座席に座る事が出来た。車内の床は木で出来ており、時代を感じさせる物だった。

「この電車は、八丁堀、原爆ドーム前を通ります、江波行きです。運賃は大人150円、子供80円です。」

行き先と運賃に関する車内アナウンスが流れる。

「大人150円、と言う事は300円か。」

才人はポケットから財布を出して、小銭があるか確認しておく。

一方ルイズは、走り出した電車の窓から外を眺めていた。初めてみる街の光景に、興味津々である。同じ日本の都市でも、東京とはまた違う景色に彼女は胸を躍らせていた。

電車は信号や、短い間隔で設置された電停で頻繁に停車するものの、徐々に待ちの中心部へと近づいていった。

「うわあ！すごい！」

ひっきりなしに走り去る車、ハルケギニアにはない高い建造物。通りを歩くたくさんの人々の姿。その通りもトリスタニアとは比べ物にならないくらいに広く、綺麗に整備されている。

そして電車は市のもつとも中心部へと進む。

見る物全てに興味津々といった表情をするルイズに対して、才人も初めてみる路面電車からの風景に新鮮味を感じていた。

電車は港へ向かう路線との分岐点を通過し、デパートをはじめとする高い建物が立ち並ぶ街の繁華街にある電停に停まり、お客を乗せると再び動き出した。そして次の電停の案内が流れるのだが、そのチャイムの音はそれまでの物と違って少し重い物が流れた。

「次は原爆ドーム前です。」

そのアナウンスに、才人は少しばかり顔を顰めた。

「才人、どうしたの？」

「いや、ちよつとね・・・」

別に才人には広島市の原爆で死んだ親族はいない。しかし、ミリタリーを通して戦争を調べれば、自ずと原爆と言う事実には必ずぶち当たる。そしてそれがいかなる物であったのか知る事にもなる。いや、そもそも日本人なら一度はその悲劇に必ずふれることになる。

そして電車は原爆ドームの真ん前を通過する。当然、ルイズも近代的な町の真ん中にモニメントとして残されている、その鉄骨がむき出しでボロボロに崩れた廃墟に視線が行った。

「才人、あの廃墟がさっき言っていたゲンバクドームって言うの？」

「ああ。」

電車は数秒でドームの横を通り過ぎ、Ｔ字の形が特徴的な相生橋を渡っていく。そして今度は平和公園の光景が視線に入ってくる。冬と言うこともあって、木々の葉は枯れているのが印象的である。

「才人、あの島は一体何？」

「あれは平和記念公園だよ。．．．もし時間に余裕があったら、ルイズにも是非見てもらいたいね。」

「？」

ルイズは才人が真剣にそう言った意味を、この時は理解できなかった。

その後１５分ほどして、２人を乗せた電車は終点の江波に到着した。才助から渡されたメモに寄れば、その友人が住んでいるのは歩いて３分ほどの所だった。

「それじゃあ行くか。ルイズ、ちゃんとしてこいよ。はぐれとエライことになるからな。」

「わかった。」

２人は歩き出した。旅はまだ始まったばかりである。

地球訪問 1日目広島到着編（後書き）

御意見・御感想おまちしています。

ようやく更新できました。今回の話は、3日前まで出かけていた広島旅行で見て来た様子をかなり含ませて見ました。

次回はちょっと戻って、タバサのことを書こうかなと思っています。

地球訪問 1日目治療編 上

さて、時系列は少しばかり戻る。ラドグリアン湖湖畔のオルレア
ン公邸から無事に救出されたタバサの母親は、地球到着後当初の予
定通り才助の知り合いが経営する病院に収容された。

その病院は本当に小さな病院で、建物の規模としては診療所と言
った方が適していた。しかし、施設や医療器具はしっかりしていて、
数部屋だけだが入院患者用の個室も用意されていた。今回この内の
一部屋を借りて、タバサの母親の治療が行われる事になっていた。

「始めまして、院長の横山です。」

病院へ着くと、白衣を着た60代前後の男が挨拶してきた。

「タバサです、お母様をよろしくお願いします。」

「ええ、魔法の薬に対してどこまで治療できるかわかりませんが、
精一杯やらせていただきます。お2人が泊まる部屋も用意してあり
ますので、ごゆっくりお休みください。」

と、ここでタバサは気になった。才人に聞いた限りでは、こちら
の世界には魔法は存在していないと言う。そんな世界の人間がこう
もあっさり魔法を認めてくれるものかと。もちろん才人や才助が連
絡しているであろうが、それでも彼女には気になった。さすがその
聡明さを讃えられたオルレアン公の娘で、様々な任務をこなしてき
た百戦錬磨の騎士だけある。

「1つ聞いて良いですか？」

「どうぞ。」

「この世界では魔法はないと聞いてきました。けど、あなたはさも当然のように言いました。魔法に付いて不審に思わないのですか？」

すると、横山は笑った。

「平賀の言っていた通りだ。本当に賢い娘さんだ。実はですね、私は異世界、つまりあなたの方の世界に行ったことがあるのですよ。」

「？」

横山の話によるとこうである。現在才吉を長とする『東方義勇軍』では地球から様々な物を、新月を利用してハルケギニアに運び込んでいる。そしてそれは物に限らず、知識を持った人間にも及んでいると言う。その対象者は技術者もいれば、彼のような医者もいると言う。

「私も平賀から誘いを受けて向こうへ行っただですよ。私は既に半ば隠居生活に入っていて、一時は田舎にでも籠ろうかと考えていたんですけど。最初は半信半疑で行きましたが、さすがに本当に異世界があるなんて驚きましたね。向こうへは1ヶ月ほど行って、義勇軍兵士と衛生兵への教育をしていました。だからハルケギニアについては多少なりとわかっています。」

「・・・」

さすがのタバサも驚かずにはいられなかった。まさか異世界の人間がこうも頻繁に自分たちの世界と行き来しているなんて、予想外

もいい所だった。

「この病院は3ヶ月前に一端閉じたんですが、今回のために薬も機械も揃えましたので、どうか御安心ください。それと他に入院患者も外来患者も来ませんから、お母様の治療にこちらも専念します。」

「よろしく頼みます。けど、あなただけで大丈夫ですか？」

現在タバサの母親は精神崩壊状態である。1人の医者で治療できるのかタバサには気になった。

「ああ、御安心を。息子が手伝ってくれますので。今は寝ているので、また朝にでもお会いさせます。とにかく、今はまだこんな時間なので、ゆつくりお休みください。」

時刻は午前2時。あたりは真っ暗で、しかも冬であるので寒い。

タバサと執事のベルスランの2人は、お言葉に甘えて休ませてもらう事にした。

ちなみに、シルフィードは、「気分が悪いのね。」と言ったまま眠ってしまった。どうやらやたら電波が飛び交っているこちらの世界に来たためになんらかの影響が出たらしい。

タバサがあてがわれた部屋に入ってまず驚いたのは、部屋の気温がエアコンによって快適な温度に保たれている事だった。もっともハルケギニアにも石炭や薪で焚くストーブや暖炉があるから部屋を温かくする技術はある。だからタバサが驚いたのは、そうした物なしで温められている部屋だった。

もっとも、彼女は驚かされたものの疲れていることもあり、その

後すぐに眠ってしまった。

明けて朝になった。タバサは起きて直ぐに横山から彼の息子を紹介された。

「紹介します、息子のストークです。こちらが異世界からのお客さんのタバサさんだ。王族だから失礼の内容にな。」

彼女が引き会われた人間は、金髪碧眼の青年だった。

「初めましてタバサさん、横山ストークです。」

「髪？」

彼を見て、いつものようにタバサが簡潔な質問をした。

これまで会ってきた異世界人が皆黒髪だったので、金髪の人間に出会ったのはタバサにとってとても驚きだった。

「ああ、僕はアメリカ人の母との間に生まれたダブルなので、髪も目も日本人離れしているんです。」

「歳？」

目の前の青年が予想以上に若かったので、タバサは彼が母親の治療をちゃんと出来るのか気になった。ちなみに、父親の歳に比して若すぎるという印象は持たなかった。別にハルケギニア、特に貴族では子供に対して父親がかなり歳を喰っているということは珍しくなかった。

「歳は19です。ああ、若すぎると言いたいんでしょう？けど安心してください。アメリカで飛び級して大学は卒業しましたから、医師免許もちゃんともっています。」

医師免許と言われてもタバサにはよくわからなかったが、とりあえず話の流れから、彼が一応治療できるようであるのは理解できた。

「そう、ならよろしく頼む。」

「はい。」

この後、4人で朝食を食べ、早速タバサの母親の治療を開始したのであるが、始めた早々から苦労の連続となった。なにせ簡単な検査をしようとしても、彼女は錯乱して暴れ回るのだ。こちらから質問しても、訳の分からないことを言うだけで埒があかない。仕方がないので、一端鎮静剤を打って眠らせる事になり、3人がかりで彼女を押さえつけることになった。

初っ端からの悪戦苦闘に先が思いやられると思われたが、このあと驚くべき結果になることに、この時は誰も気付かなかった。

とにかく、タバサの母親が眠っている隙に進められる事は進める事にした。検温、採血などの簡単な検査から、MRIを使つての脳の精密検査まで、色々やってみた。

しかしその結果はというと・・・

「だめだ、何も異常はない。」

横山が首を傾げる。

「やっぱり魔法って言うのは、根本的にこちらの世界の物とは違うようだな。」

今までに出会った事のない相手を前に、横山は舌打ちした。

「けど、そうなるかどうか治療すればいいのかな？」

ストークが横から言う。

「うーん・・・とにかく、もう1度起きた時に調べてみよう。もしかしたら見落とした何かがあるかもしれない。」

結局、横山の判断で彼女が起きるまで一端治療を中止する事にした。

「すみませんタバサさん、結果を出せなくて。」

治療が進展しない事に付いて、横井がタバサに謝った。もともと、タバサも相手が特殊な魔法薬であり、一筋縄ではいかないことぐらい承知していた。

「気にしていません。」

と素っ気無く行った。

その後、麻酔薬が強かったのか、タバサの母親は中々起きず、タバサらはただひたすら彼女が起きるのを待つ事になった。

いつもこうした時は本を読んで暇を潰すタバサであったが、生憎

とこの時手持ちの本はなかった。そこで、この時手が空いていたストークに何か読める本がないか尋ねた。

地球訪問 1日目治療編 上(後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

外伝のアイデアがストップしています。どうしようかな・・・

地球訪問 1日目治療編 下

暇な時間を潰すために、何か読む物がないかタバサは横山医師に尋ねた。しかし、彼は忙しいので、その役目を息子のストークに任せた。

「本ですか？あるにはありますが、あなた日本語を読めますか？」

ストークからされた質問に、タバサは首を横に振った。

「それじゃあ意味ないんじゃないですか？」

すると、タバサは表情1つ変えずに言った。

「これから自分で学ぶ。」

最初ストークは彼女が冗談を言っているのかと思ったが、その表情は至極真面目なもので、とても冗談を言っているようには見えなかった。

「まあ、そこまで言うなら止めませんが・・・とりあえずこちらへどうぞ。」

ストークはタバサを病院の隣にある住宅の一室へと案内した。

「さ、どうぞ。」

その部屋に通されて、タバサは目を見張った。部屋の四方に本棚があり、その中には所狭しと本が並んでいた。図書館と言うには大

げさであるが、それでもその量はタバサが学院に持ち込んだ量の数十倍はありそうだった。

「右半分は主に医学書ですから、読んでも退屈でしょう。左半分は僕の漫画や好きな推理小説ですから、そっちの方が読みやすいと思いますよ。」

ストークの言葉を受けて、タバサは部屋の左側の本棚に近づいた。そして、その中から一冊を取り出してみる。

手にとった途端、タバサはまたも内心驚いてしまった。別に本の表紙の題名を見てとか、作者名を見てそう思った訳ではない。表紙にされたカラー印刷と、紙の質の良さに驚いたのだ。

タバサはパラパラと内部をめくって見てみるが、やはり日本語で書かれているのでチンプンカンプンだった。

「どうです？」

ストークが後ろから聞く。

「読めない・・・教えて。」

タバサのその言葉に、ストークは苦笑しつつ、彼女に日本語を教える事にした。

日本語の文字は、知っての通り平仮名、片仮名、漢字で構成されている。ストークはとりあえず彼女に平仮名と片仮名を教え始めた。

1つの言葉に対して3種類の文字を併用するなどクレイジーだと

言う外国人もいるのであるが、実際外国人が平仮名と片仮名は覚えられても漢字は中々覚えられないと言うケースはあるらしい。特に日本語の場合漢字に音読みと訓読みがあるから余計に厄介である。

「あ、い、う、え、お。これが基本的な母音と呼ばれる言葉です。次の行からは子音と言って、か、き、く、け、こで……」

2人は一端別室に移動した。椅子に座り、ストークがノートに平仮名と片仮名をそれぞれあからわ行までを書いて、隣に座るタバサに鉛筆で指差しながら教えていた。

驚くべき事に、タバサの学習能力はかなり高いレベルにあった。何せストークが1回説明するだけで、もう覚えているのだ。そんなわけで、1時間もしない内に彼女は平仮名を完全にマスターしていた。

そして次の片仮名も同様で、彼女は2時間もしない内に平仮名と片仮名をマスターしてしまった。これにはもうただ驚くしかない。

「すごいね、こんなに物覚えが良い人はじめて見たよ。」

ストークが賞賛の言葉を送るが、それに対してタバサはいつもどおり表情1つ変えることなく、ただ一言。

「別に大したことじゃない。」

これを嫌味と受け取るべきか、それとも謙遜と受け取るべきかは人それぞれであろうが、ストークは謙遜と受け取った。

「自分のことを誇らないなんて、あなた中々の人ですね……まあ

いいや。それじゃあ今度は・・・」

平仮名と片仮名はとりあえずこれで良かったが、問題は漢字である。日本で使われている漢字の数は凄まじい。常用だけで2000字近く存在する。しかも先ほども書いたとおり音訓読みの2つがある。中には特殊な読み方をする物もある。

これを1つ1つやっていたら切りがない。そこでストークは先ほどタバサが取った推理小説を、一緒に読みながら漢字を教えていく事にした。

ちなみに、ストークはアメリカ人とのダブルでアメリカでの生活は長かったが、定期的に日本の書物を読んでいたから、日本語の読み書きは完全にマスターしている。

2人は少しずつ小説を読み進めていった。もともと、タバサはハルケギニア人であるから、地球の風習などはほとんど知らない。だから例え平仮名や片仮名で書かれた読める単語であっても、意味を理解できないと言う物は沢山ある。そうした単語に当たるたびに、ストークは懇切丁寧に教えていった。

そんな感じで読み進めていくのだから、1ページ進むのにも時間をかなり喰う。だから、大して読み進めない内に時間は夕方になってしまった。

ようやく5ページ目を読み終えたとき、突然部屋の扉が勢いよく開いた。

「お嬢様！！シャルロットお嬢様！！」

飛び込んできたのは執事のベルスランだった。

「何？・・・まさか、お母様に何かあったの？」

尋常でない老執事の様子に、タバサの顔が青くなった。しかした
いするベルスランの表情はどちらかというと、上気しているよう
であつた。

「何かあつたどころではありません、とにかく急いで来てください。」

ベルスランはそれこそ有無を言わずという感じで、タバサの手
を引いて彼女を連れ出した。

「ちょ、ちよつと！？」

1人訳がわからないまま取り残されたストークが慌てて2人を追
いかけた。

2分後、3人の姿は病院の、タバサの母親が寝かされている病室
にあつた。病室では、横山がベッドの側に立ち、上半身を起こして
いるタバサの母親となにやら会話している所であつた。

「ああ、シャルロットさん、来たかね。」

横井が振り返りながら、タバサに向かって言った。

「あの、お母様に何が起き「シャルロット！？」」

タバサの言葉を遮るように、彼女の本名を言ったのは、横山でも、

ベルスランでも、ましてや少し遅れて入ってきたストークでもなかった。声の主は、あきらかにベッドの上にいる女性、タバサの母親だった。

それがわかった瞬間、タバサはベッドの側に駆け寄った。

「お母様、私のことがわかるんですか？」

タバサが問い掛けると、彼女の母親はタバサの顔を一瞥して言った。

「ええ、わかるわ。ちょっと大きくなっているけど、その髪と目はシャルロット以外ありえないわ。あなたは間違いなく私の娘のシャルロットね。」

母親の心が元に戻った。それがわかった瞬間、タバサは他人に見られているのも気にせず、泣き始めた。

「良かった・・・本当に良かった。」

タバサは母親の体に抱きついていていた。それはタバサにとって待ちに待った真の母親との再会であり、家族としての絆を取り戻した瞬間だった。

一方、横山はただただ首を捻るだけだった。

「なんで治ったんだろうな？特に治療らしい治療なんかしていないのに・・・不思議だ・・・」

彼は知らなかった、地球という魔法が存在しない世界に来た事に

より魔法薬の効果が薄まり、そこへ化学薬品で調合された麻酔薬を打たれた事によって完全にその効果が消えてしまったということに

この事実は、彼が数年後にハルケギニアで水魔法などの魔法治療の研究でようやく発見することになるが、この時点では全く理解不能な出来事だった。

何はともあれ、タバサ親娘を長年に渡って苦しめた魔法は、科学が支配する地球で完全に消し去られたのであった。

地球訪問 1日目治療編 下（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

さて、地球から異世界へ様々なものを送っているこの作品ですが、
実はこの設定はある市販の作品をモデルにしています。

地球訪問 2日目平和公園編

才人とルイズが広島へ行き、ウェールズ夫妻が東京を観光し、タバサが母親との絆を取り戻し、その他のメンバーが秋葉原などを観光した1日目が終わわり、ハルケギニアからの御一行様の地球訪問2日目となった。

この前日、才人は才蔵の友人である大学教授の亀山という人物に会ってきた。彼は才人の予想したようなマッドサイエンティストではなかったが、異世界や魔法の存在については非常に興味を持ったらしく、是非向こうに行きたいと申し出た。別にそれ自体は本人が良ければ構わない事なので、才人は承諾した。

ところで、この时才人も予想していなかったあることが起きた。それは亀山に是非とも魔法を見せて欲しいといわれたルイズが、軽い『エクスプロ ジョン』を実演した時のことだ。呪文を詠唱すると、『虚無』魔法は発動され、亀山が標的として差し出した灰皿は確かに割れたのであるが、その直後にルイズが倒れた。幸い彼女はまもなく意識を回復したが、彼女が才人に向けて言った言葉は。

「最初に使った時（タルブでの戦闘）並に疲れた。」

だった。

この時、才人とルイズは地球で魔法が使えないこと、厳密には使えてもハルケギニアの数十分の一の威力を発揮するのが精一杯であるのを理解したのであった。

実際ルイズと前後するかたちで、東京にいたギーシュやタバサた

ちが魔法を使おうとしたところ、ほとんど発動せず、大きな衝撃を受けている。いくら異世界とはいえ、魔法が使えなくなることには衝撃を受けるのは当然と言えた。

こんなアクシデントが起きたものの、とりあえず才人たちは才蔵からの頼みをこなし、1日目は広島駅近くのホテルに一泊した。

そして翌朝、才人はルイズと広島観光でもしようと考えたのであるが、ここで再び驚くべき事態に直面した。

「なんでウェールズ国王とアンリエッタ姫、それにコルベール先生が広島に来る事になったんだよ!？」

2日目の朝10時半、広島駅の新幹線用改札の前で、ウェールズ国王夫妻とコルベールを連れてやってきた才蔵と才助に会うなり、才人は複雑そうな表情で言った。

この前の晩、ウェールズとアンリエッタの2人は横浜のホテルに宿泊している。事前に聞いた計画なら、今日は箱根の温泉街に行ってる筈であつた。

「いやね、昨日の夜、お2人にお前たちが行った広島はどんな町なのかと聞かれてだな、日本人にとっては絶対に忘れてはいけない町ですって言ったら、是非とも見てみたいと言われてしまった。しかし、新幹線の席に空きがあつて良かったよ。」

そう説明したのは、ウェールズたちを案内していた才蔵だ。その隣には奥さんの礼子も立っている。

「コルベール先生も是非以前映像で見た広島を見てみたいと言つてね。彼には多くのことを学んで欲しかったから。」

そう言うのは、コルベールとともにやってきた才助だ。

別に才人としては、ハルケギニアから来た一行に日本のいろいろな部分を見てもらうのは悪い事ではない。しかし内心彼は不機嫌だった。それはルイズと2人きりでの旅行が完全に御破算になってしまったからだ。だから先ほどの複雑な表情になっていたわけである。

一方のルイズも、2人きりが邪魔されるのは嫌そうであつたが、親しい同郷の人間と旅する事の嬉しさの方が勝つたらしく、今もウエールズ、アンリエッタとお喋りをしていた。

まあなんにしろ今更追いつ返すわけにもいかない。特に相手は王様と姫様である。才人は自分自身をそう納得させた。

「わかつたよ。それで、どこへ行くの？宮島？呉？平和公園？」

才人が周辺の観光スポットを挙げる。

「まあ、時間的に見て今日観て回れるのは平和公園と宮島だな。」

腕時計を見ながら才蔵が言った。

「じゃあまずは平和公園へ行くか。」

父親の言葉を引き継ぐ形で才助が言った。

「それでは皆さん移動しますよ、離れないで付いてきてください。」

才蔵を先頭にして、一行はまず平和公園へと向かうことになった。前日才人とルイズがそうしたように、路面電車に乗り込んで行く。さすがに2日目となると、驚きは大分少なくなってくるが、それでもハルケギニアの面々は、車窓からの町並みを興味深げに見ていた。

広島市の平和公園は、繁華街から見えて少し西側にあり、平和記念資料館を中心にして広がっている。公園内には緑が生い茂り、有名な原爆の子の像が立ち、また敷地内のあちこちに様々な慰霊碑が置かれている。

資料館の建物の前には広大な芝生が広がり、本当に綺麗に整備されている。ウエールズやアンリエッタ、ルイズといった何も知らない面々は、電停を降りて直ぐにある原爆ドームに最初驚きはしたが、すぐに美しく整えられた公園の方に意識を移していた。

そんな姿を見ていると、才人はこの人たちに平和資料館を見せるべきかどうかという迷いが生まれた。

「ねえ父さん、コルベール先生はともかく、ルイズたちに平和資料館を見せる必要があるもんかな？」

才人自身は、修学旅行で既に館内を見ているから内容は知っている。そしてそれが恐ろしい物である事も。

だが才蔵も才助も才人の意見を一蹴した。

「才人、確かに恐ろしいことを知らないにこしたことはないかもしれない。けど、折角ここまで来ていただいたんだ。あの人たちには

是非とも、俺たち地球の人間が戦争で犯した愚を、知ってもらいたいと思っている。そしてそれは、いずれハルケギニアのためになると信じている。」

「俺も才助の意見に賛成だ。これから発展するであろうハルケギニアの人々に、同じ失敗はして欲しくないからな。」

こうして一行は平和資料館へ歩を進めた。

資料館に入ると、才人らは窓口で頼んで音声式の解説機を借りた。これはハルケギニアから来た面々が、日本語の会話は出来るが読む事が出来ず、館内の案内やパンフレットを読めないからだ。

資料館に入る前、ルイズたちは遠足にでも来た子供のように楽しそうにお喋りしていたが、それが逆に才人には可哀想に見えた。そして彼は思った。あんな状態で館内に入ったら、受ける衝撃も数倍になるかもしれないと。

そして一行は入館した。平和資料館の館内を1つ1つくまなく見ると、通常2時間ほど掛かるとされている。

2時間後、一行は出口から外へと出てきたが、案の定入った時とは全く違う表情をしていた。特にアンリエッタとルイズの2人は顔が青ざめ、今にも泣きそうな表情をしていた。

「アンリエッタ、大丈夫かい？」

「ルイズ、大丈夫か？」

ウェールズと才人が2人を支える。

「ええ。」

「なんとか。」

答える2人だが、その声は弱々しい。その他の面々の表情も厳しい物だった。

「いやしかし、以前見せられた映像でわかっていたつもりでしたが、先ほど見てきたのはより痛々しい。いやはや信じられない。人が人にあんなことを出来るなんて。」

そう言うのはコルベールだ。彼は昔、村1つを住民ごと焼き払ったが、それでも最終的には良心から任務を途中で放棄した。しかし今見てきたのは、それとはスケールも何もかも桁違いだった。

「ですが、あれが現実です。我々地球の人間は科学を進歩させ、あのようなことが出来るようにまでなってしまったのです。」

隣に立った才助が言う。

「しかしなんの罪もない女子供を万単位で殺すなんてありえない！」

そう強い口調で言ったのはウェールズだ。

「しかし我々、この星の人間はやりました・・・人と言うのは、力を持つとそれを使いたがるものです。それは科学も魔法も関係ないことだと考えています。それが平和な目的であるなら良いです。し

かし、先ほどのように戦争に使われるような事があれば・・・今後ハルケギニアでも同じような事態が起きないと誰が断言できましようか？」

才助にそうわれたウェールズは、それっきり口をつぐんでしまった。

こうしてウェールズたちの平和記念公園見学は重苦しい物になってしまった。これが後にどのような影響が出るのか、この時点で見える者は1人としていなかった。

地球訪問 2日目平和公園編（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

地球訪問 3日目呉編

ハルケギニアから一行が来て3日目、才人とルイズにウェールズ、そしてアンリエッタたちのグループは、この日広島から少し離れた呉の町へとやって来ていた。呉は軍港や造船所があることで有名な町であるが、近年は観光都市としても成長していた。その目玉とも言えるのが、駅から歩いて5分、港が見える場所にある大和ミュージアムと海自史料館である。

大和ミュージアムは、その名前の通り旧日本海軍の戦艦「大和」に関する資料が展示されている博物館で、その他にも呉の港の歴史や旧日本海軍に関する展示もたくさんある。開館当時公開された映画のおかげもあって、多くの人が訪れている。

昨日は広島の平和資料館と宮島にある厳島神社を見た一行であったが、やはり平和資料館で見たものがショックであったのか、才人はともかく、他のメンバーは午後もずっと表情が冴えなかった。だから宮島観光も、どこか重苦しい物となってしまった。

しかし一夜明けたこの日は、皆とりあえず気持ちも落ち着き、再び観光旅行を楽しむこととなった。そして大和ミュージアムに入るなり、狂喜乱舞する人間がいた。

「いやすごい！！すごい！！」

年甲斐もなく一人はしゃぎ騒いでいるのは、コルベールだった。彼が今見ているのは、エントランスに飾られている戦艦「大和」の10分の1の模型である。10分の1と言っても、26.3mの長さがあり、わざわざ造船所で造られた物であるが。

もつとも、コルベールにとってここは宝の山であった。戦艦「大和」をはじめとして、様々な展示がされているのは先にも述べたが、その中には技術関係の物もたくさんある。恐らく1日いても飽きはないだろう。

ちなみに、今この場にいるのは才人、コルベール、ウェールズ、そして才助の3人で、ルイズとアンリエッタは駅近くのショッピングモールで買い物をしていた。才人の祖母である礼子が、「女性に2日間も、戦争に関する物ばかりを見せるのはどうか？」と言われて2分したのである。

そう言うわけで、才人は久しぶりにルイズとわかれて行動する事となった。もつとも、ウェールズやコルベールの側にしつかりとついていなければいけないが。

さて、大和ミュージアムの展示には、コルベールのみならずウェールズも興味を示していた。

「これが君たちの世界の戦艦？」

ウェールズが才人の隣に立ち、大和の模型を眺める。

「ええ。もつとも、60年以上前の戦艦ですけど。」

「60年・・・君達の感覚は確か僕達と違うんだったね。つまり、この戦艦は君たちからすれば大分昔の戦艦ということかな？」

「そうですね。」

「しかし、それでもこれだけの戦艦を造る技術が君たちの世界には60年前に既にあったんだね。・・・本物はこの10倍の大きさということは、263マイルか。桁違いの大きさだ。」

地球でのメートルがハルケギニアでのマイルにあたることはすでにウェールズは説明されていた。だからすぐにどれほどの大きさか理解できた。

「「ロイヤル・ソプリン」級よりも2回りも大きいことになる。しかもこれが全て鉄で出来ているのだから恐れ入るよ。」

長く中世レベルで科学技術の進歩がストップしていたハルケギニア世界では、まだ鉄製の船はない。

「けど、空は飛べませんよ。」

才人は笑いながらそう言うが、ウェールズは真剣な表情を崩さず続ける。

「空を飛べなくても凄い。我々の世界の軍艦では、空から束になって襲い掛かってもこの戦艦を沈められないんだろ？・・・これが1隻あればハルケギニアを征服出来るよ。」

ウェールズの言葉は少しオーバーであるが、確かにもし「大和」がハルケギニアに現れたら1つの国ぐらいなら屈服させられるかもしれない。

「君達は魔法を使うことは出来ないが、本当に科学技術を発達させているんだね。」

「けど最近はトリステインやアルビオンも大分進んできたと思いますよ。」

ウェールズの言葉に、才人はそう返した。実際彼の言葉に嘘偽りはない。これまでほとんど進歩していなかった反動からか、トリステインでは科学研究所のkolべールを先頭にして次々と新技術の開発を短期間の内に成功させている。例を上げれば、艦船用の蒸気機関、ガソリンを使った小型発電機、電信機、新型の大砲などである。これらのほとんどは、地球から設計図が持ち込まれて、アルビオン解放戦争前から水面下で開発が始まっていた物ばかりだが、それを差し引いても短期間で試験段階とは言え成功にこぎつけたのは恐れる。

「確かにね。今度トリステインがゲルマニアに発注した「ビフレスト」級装甲巡洋艦は、最新式の蒸気機関と大砲を積むと言うし、アルビオンの科学技術研究所ではラジオ試作に成功したらしいね。それでも、君たちの世界のレベルに追いつくまでにはまだまだ時間が掛かりそうだよ。」

最近になって様々な近代的な発明に成功しているハルケギニアではあるが、それを多くの人々が享受できる段階にはまだない。これまで大量生産という概念がなかったハルケギニアでは、1個、2個の試作品を作るのは容易だが、数をそろえる体制や人々の意識を作るのは今しばらく時間が掛かると思われている。しかしながら、才吉が地球から製造用機械や工具を持ち込んで銃弾やロケット弾、手榴弾の製造をはじめているから、大量生産という概念が根付くのはもしかしたら意外と早いかもしれない。

ちなみに、「ビフレスト」級装甲巡洋艦に搭載される砲は、すべて後送式の新型砲となる予定である。これも地球から持ち込んだ設

計画をもとに、短期間でハルケギニアの人々が開発に成功させた物の1つである。

さらに付け加えるなら、「ビフレスト」級3番艦はコルベール他研究者たちの意見が実つて、武装を減らし「オストラント」と命名されて探検船として用いられる予定である。

「我々は魔法という力に頼りすぎていたんだな。この世界に来て本当にその事を自覚させられたよ。」

「でもウェールズさん、科学だってただ発展させれば良いっていうわけじゃありませんよ。」

才人が真剣な表情で言った。科学の発達は人にとって良い事ばかりとはならなかったのが地球なのである。

「それは君の曾おじいさんやお父さんから何度も聞かされているから重々承知しているよ。特に、昨日行った資料館を見て思い知らされたからね。」

ウェールズも広島の平和資料館で見たものに対して大きなショックを受けていた。

「・・・」

その表情に悲しみを見た才人も、表情を暗くする。

「おっと、暗くなっちゃったね。すまない。さ、見物を続けようか。才人君、案内をしっかり頼むよ。」

「はい。」

2人は順路に従って歩き始めた。

この後一行は午前中一杯呉で見物や買い物を楽しんだ。余談であるが、才人たちと別行動を採ったアンリエッタとルイズの2人は、案内人がいるという条件付だったものの、久しぶりに幼馴染として過ごした時間を大いに楽しんだらしい。

その後、才人たちとルイズたちは合流すると一端広島へと戻り、そこから新幹線に乗って東京へと戻った。

そして東京へ戻った才人たちに、驚きの事実が待ち受けていた。

地球訪問 3日目呉編（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

地球訪問 最終日

3日目の夕方、東京の平賀家に帰ってきた才人たちは、驚きの光景を目の当たりにした。

「うわ、なんだよこの荷物？」

才人はリビングの片隅に置かれた荷物を見て言った。

「やあ才人、お帰り。陛下たちもお帰りなさい。」

ギーシュがまず才人に、続いて後ろから入ってきたウェールズたちに挨拶した。

「おいギーシュ、あの荷物はいったい何だよ？」

「ああ、あれは街で買ってきた物だよ。ハルケギニアに持って帰るからあそこに集めてあるんだ。」

「ふーん、それにしてもすごい量だな。」

才人は荷物に近づいて、それがなんであるか見てみる。

「これだれの？」

才人は化粧品がたくさん入れられた紙袋を取り上げる。

「ああ、それは私。」

キュルケが答える。

「この国はすごいわね、化粧品の種類がすごく多いし、それに値段もお手頃だったわね。石鹸とかもいっぱいあって、ハルケギニアにもこれくらいあったらいいのに。」

現在の日本には、それこそ化粧品は腐る程種類があり、さらに100円ショップで買えるくらいに安い物さえある。ハルケギニアから見たら驚くほどの量だろう。

「じゃあ、これは？」

才人が次に持ち上げたのは、飲み薬、塗り薬をはじめとして様々な種類の薬が一杯に入ったビニール袋だった。

「それは私のよ。」

口を開いたのはモンモランシ だった。

「なんで薬ばかり？」

「ハルケギニアじゃ水魔法で作った薬がほとんどじゃない。けどこの国の薬は魔法を一切使ってないんでしょ？一体何で出来ているか気になるじゃない。向こうに持って行って今後の薬作りの参考にしたいの。」

さすがモンモランシ、よく薬を作っているだけある。才人は感心しつつ、その袋を置いて別の袋を見た。

「うん！？おいおい、これって絶対にマリコルヌのдарろ！？」

才人が持ち上げたのは、秋葉原でも有名な同人ショップの袋だった。中にはアニメキャラのフィギュアやら、画集やらが入っている。

「うん、そうだよ。いやあ、この国は本当にいい所だね。特にアキハバラやナカノっていう場所に案内してもらったけど、本当に天国みたいな場所だったよ。」

笑顔で言うマリコルヌ。よっぽど嬉しかったようだ。

「ハハハ・・・けど、お前日本語がわからないけど良いのかよ？」

才人は袋の中に漫画など日本語がわからないという意味がないものが含まれているのを見て言った。

「ああ、それはがんばって覚えるよ。本当ならあの、DVDとかCDとか言った物が欲しかったけど、見たり聞いたりするのに特別な機械がいるらしいからね。ハルケギニアにもあつたら良いのに。」

本当に嬉しそうに言うマリコルヌ。この調子だといつか萌え文化万歳！！とも言つかもしれない。

（こいつその内二次元にはまりこむんじゃないのか？）

本気でそんな心配をする才人だった。

マリコルヌの袋をおいて、今度は服が一杯詰まった袋を持ち上げた。

「これはギーシュのだよな？」

「おや、よくわかったね。」

「だってこんな派手な服を買うのお前しかないだろ？」

才人が呆れたように言った。袋の中に入っている服は、どれもこれも派手なデザインの物ばかりだった。

「お前こんな服をハルケギニアで着る気かよ？」

いまだ中世レベルのハルケギニアでは、現代地球の服は普通の物でも奇異な物である。そんな所で地球でも変わったデザインの服を着たら、すごく変わっていると思われるだろう。

「別に僕の勝手だろ？」

「ごもつともな意見だ。別にハルケギニアでギーシュが笑われようが、なじられようが、才人の知ったことではない。」

「まあ、そうだな。」

3日目の夜はこんな感じでふけていった。

そして全員がハルケギニアへ帰る日である4日目。この日は才助の勧めで、才人を除く全員がハルケギニアに帰るのに備えてじつくり家の中で休む事とした。

才人だけは1人出かけたのは、彼がある一つの決意をしたからだ。それは高校へ行って休学届けを、退学届けにしてもらうことだった。才人はここに来て、ようやくハルケギニアで生きていくことを決めたのだ。

高校へ行つて、担任の教師とその手続きを行なった才人は、その帰り道で久しぶりに顔見知りの同級生の1人と会った。

「よう才人、久しぶり。」

「おう。久しぶり。」

数ヶ月ぶりの再会である。2人はそのまま歩きながらお喋りをはじめた。

「いきなりいなくなつたと思ったら、休学届けを出したって聞いたから、皆心配していたぞ。」

「ごめんごめん。」

その後、友人とたわいもないことを喋っていた才人であったが、ある奇妙な事実を告げられた。

「いやあ、それにしても同じクラスで2人も行方不明者が出るなんて思いもなかったよ。」

「2人？」

才人は首を捻った。1人は才人で間違いないだろうが、もう1人誰が行方不明となっているようだ。

「ああ。高風春名。お前も知っているだろ？学級委員長の。」

高風春名は、才人も顔見知りの女子生徒だ。その彼女が行方不明だという。

「一応知ってはいるけど、彼女も行方不明だつて？本当かよ？」

「うん、2週間前から。なんでも下校中にいきなり消えたらしいんだ。家出する理由とか何もなかったらしいし、お前もいなくなつたもんだから、クラス中その噂でもちきりさ。お前何か知らないか？」

「知るわけないだろ。」

ずっとハルケギニアにいた才人が知っているはずがなかった。

「そうか。ところで、今日は何しに来たんだ？」

「退学届けを出しに来た。」

その友人は才人がさりと云つたその言葉にギョツとした。

「え！？お前良いのかよそれで？将来困るんじゃないか？」

「ああ、どうせ学歴なんか全く関係ない所で暮らすことになるからな。」

その言葉に、友人は不思議そうな表情をしていたが、それ以上は何も聞いてこなかった。その後2人は駅でわかれ、才人は1人家路に就いた。

電車に乗り込んだ才人は、先ほど友人から聞いた行方不明の同級生のことを考えていた。

「いきなり消えたか・・・まさかな・・・」

才人の頭の中に、あることが思い浮かんだが、すぐにそんなことあるはずがないと振り払った。

そしてこの日の夜、一行は再び飛行機に乗り込み、新月を使ってハルケギニアに戻った。ちなみに、タバサとその母親は治療を続ける必要があるために、地球に居残った。その代わり、才助の友人であり物理学者である亀山をはじめとして、数人の人間が乗り込んでいる。

一行は何事もなくハルケギニアに到着し、ウェールズとアンリエッタはアルビオンへ、ルイズは王宮へ、その他のメンバーもそれぞれ帰っていった。こうして地球への旅行は事故もなく終わった。そしてこの旅がどんな影響をハルケギニアに及ぼすか、この時点でわかる者はいなかった。

地球訪問 最終日（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

次回からハルケギニアへと舞台が戻ります。オ人とルイズの間をもつと縮めても良かったのですが、それはもう少し後にしました。

そしてゲームのキャラである高風春名の名前も出してみました。ただし、自分このゲームやったことないんですよね・・・どうしよう・・・

ルイズと才人のある日（前書き）

読者数が7万人を突破しました。感謝します。

ルイズと才人のある日

地球からハルケギニアに戻ってきた一行の中で、王族の3人は留守にしていた4日間の内に溜まった仕事に追われることになった。特にルイズは夫妻で仕事を分担できるウェールズ国王、アンリエッタ姫と違って全てのことを1人でこなさなければ行けないので大変であった。

ちなみに、スキルニルを置いてきたのになんで仕事が溜まったかというと、これはスキルニルに対して重要な書類については帰って来てからやるつもりで、何もしないように言っておいたからだ。いくらんでも重要な仕事を分身と言えど、任せるわけにはいかない。だいたいスキルニルを置いた目的は、自分がトリスタニアにいたいということを強調するためであったのだ。

というわけで4日分の仕事をルイズは格闘するはめになった。もっとも、それでもかたつてアンリエッタが女王として働いていた時よりも仕事の量は少ない。これはトリステインでもアルビオンに続いて政治権限の一部移譲を段階的に行なっているからであった。しかし、やはりルイズにしてみれば仕事が多いのに変わりはない。

「新しい法律の制定と施行・・・ラ・ロシエールとの間の街道の再整備・・・近衛部隊の編成替えとそれに伴う予算の計上・・・もう嫌になるわよ！！」

地球から戻って数日後、王宮の代王用執務室で、積み上げられた書類を前にしたルイズが叫んでいた。その様子を見たマザリ二枢機卿がたしなめる。

「代王殿下、そのようにすぐに叫ばれては体が持ちませんよ。それに、アンリエッタ様の頃に比べて殿下にかかる負担は少なくなっています。」

「わかつているわ枢機卿。わかつてはいるけど。」

実際マザリ 二の言うとおりであり、ルイズもそれは重々承知していた。しかし、ルイズもまだ17の少女であり、しかも公爵家出身とはいえないだまで魔法学院の一生徒に過ぎなかった。それが短期間の速成教育だけで王室に入り、しかも代王という地位に就いているのだから、まだまだ体と頭が今の状況に慣れてはいない。

さらに、ルイズのストレスを増大させている物があつた。それは才人との結婚に関する物だった。ルイズと才人が親公認の婚約者である事は、周知の事実である。しかし、ルイズが代役とは言え王の地位に付いたために、問題が起きた。

「男爵とはいえ、異国の平民出身者を王室に迎え入れるのはどうだろうか？」

アルビオンとの戦いを通じて意識に変化が見られているものの、良く言えば伝統を、悪く言えば過去の栄光と面子に固執するトリステイン貴族らしい意見であつた。

現在彼に対する意見は王宮内でも真つ二つにわかれていた。一つは前記したとおり、彼が異国の平民出身であることを理由にルイズとの婚約を解消させるべしという意見。もう1つは彼のこれまでの功績を評価して王室に迎えるのを容認する意見であつた。

これに関する議論はルイズが王宮に入つてすぐに始まったが、一

行に結論が出る兆しがない。そのおかげで、ルイズが才人と結婚に
関しての話し合いを進めることも出来なかった。それどころか、才
人と会う時間さえ極端に減った。最近彼と会える時間といえば、週
1回義勇軍の報告書を連絡士官として彼が持つて来る時や、月に1
回あるかないかのお忍びでルイズがトリスタニアを始めとして各地
を視察目的で回る時ぐらいである。

「仕事は多いし、才人には会えないし・・・もう本当に憂鬱だわ。」

弱音を吐くルイズに対し、彼女の事をアンリエッタから任された
マザリ　ニが喝を入れる。

「殿下！！とにかく目の前の書類だけでもかたづけてください！！
じゃないといつまで経っても終わりませんよ！！」

と、その時。コンコンと部屋のドアがノックされた。

「お入りなさい。」

ルイズが答えると、扉が開いて侍従の1人が入ってきた。

「失礼します、代王殿下、ロマリアの教皇陛下からお手紙が届きま
した。」

「え？」

「なんだと！？」

ルイズ以上に驚いたのは、ロマリア出身であるマザリ　ニだ。
このハルケギニアではブリミル教のみが信仰されており、その総本

山であるロマリアの権威は絶大だった。だからロマリアからの手紙は重要である。

ルイズは手紙を受け取ると、机の上に置かれていたハサミで封を開け、早速中の手紙を読み始めた。そして読み終わると、表情を真剣にしてマザリーニに言った。

「枢機卿、すぐに御前会議を招集して頂戴。教皇陛下が2週間後トリスタニアを訪問したいと書いてあるわ。」

「なんと！？わかりました。では早速。」

マザリーニは答えると、大臣たちを招集するべく出て行った。そして部屋にはルイズだけが残された。

自分以外誰もいなくなった部屋で、彼女は一言呟いた。

「また仕事が増えたわね。」

ルイズが王宮の執務室で呟いていた頃、その婚約者である才人はラ・ロシエールの港にいた。もともと、港と言っても飛行船の方ではなく、海上を走る通常船（飛行船と区別するために便宜的につけられた呼称）の方ではあったが。

ハルケギニア世界においては、飛行船を多用しているために海上を走る船舶の利用は少ない。主に漁業や飛行船ではコスト・パフォーマンス的に不利な沿岸部における近距離移動の手段としてのみ用いられている。

しかし飛行船には風石が必要であり。その結果航続距離は海さえあればどこまで行ける通常船に比べて短い。それが地球で起きた大航海時代の発生を阻害していた。ある意味飛行船という存在が、ハルケギニアという地域単位で他の地域との繋がりを断ってしまっていた。

これまではその状況が別段問題になったことはないが、本当にごく少数のフロンティア・スピリッツ溢れる人たちにとっては、未知の世界への冒険は興味をそそられる物だった。

トリスティン科学研究所所長のコルベールもその1人だった。彼は異世界から現れた才人を通じて、東方への探検を夢見ていた。

そして彼にとって幸運だったのは、才人の曾祖父である才吉たちから大量の資料が供与されたことだった。その中には彼が初步的な実験を続けていたガソリン機関や船舶、蒸気機関に関するものも多数含まれていた。特に船舶に関しては、ハルケギニアには存在しない遠洋航海可能な船の設計図まであった。

そうした資料を参考にして現在ゲルマニアで建造中なのが、遠洋航海可能な装甲巡洋艦の「ビフレスト」級なのであるが、その3番艦は「オストラント」を命名されて探検船に転用される事が決定していた。

これらの艦船は、ハルケギニアの海運にとってまさに革命的とも言うべき影響をもたらす可能性がある船であった。しかし船というハードを操るには、人というソフトが必要である。乗員の養成が急がれた。

そのため、建造されたのが実験船兼練習船の「スピカ」だった。

スピカは旧日本海軍の水雷艇を参考にして建造された排水量が120tという小型船であった。しかしながら船体は鋼鉄製であり、機関には蒸気機関を採用した、ハルケギニア世界では超近代船だった。

そしてこの日が、その「スピカ」の試運転の日であった。

「いやあ才人君、ようやくここまでこぎつけられてよ。これも君たちの協力のおかげだ。本当に感謝している。」

剥き出しのブリッジに立ったコルベールが、隣に立った才人に言う。

「俺はなんにもしていませんよ。けどこっちこそ驚きました、設計図と冶金技術を向上させる製法を教えただけなのに、1ヶ月もしないうちに造り上げちゃったんですから。」

才人が驚きを隠さずに言う。このハルケギニア世界は科学技術では地球のヨーロッパレベルだが、魔法という存在が、大型の船や建物を短期間で建造させられるのに役立っていた。

「しかしまだまだだよ。ガソリン機関や強力な発電機とかは開発の初期段階だからね。今後も我々は一層の努力をしなければいけない。」

コルベールがそう言って間もなく、部下の声が届いた。

「所長！ボイラーの圧力が定格値に達しました。いつでも動けます。」

「ようじ。それでは、機関始動だ!!」

コルベールの命令とともに、エンジンが動き始めた。

ルイズと才人のある日（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

移りゆく時代の中で

試験船「スピカ」号の公試運転は特に異常もなく終わり、それによつてハルケギニア製船舶用蒸気機関は実用に耐えられると証明された。

「最高速力24ノット（約44km）、悪くない数字ですね。実用性にも問題なさそうですし。」

才人が今日の試験で得られた最高速力の数値を見て満足げに言う。

「ああ。これで懐疑的だった役人や軍人も蒸気機関の有効性を認めるだろう。しかし今回ミス・ツエルプストーには本当に世話になってしまったよ。」

「ええ。キュルケの家には本当に感謝です。」

この2人の会話の内容の意味することとは？

実はこれまでも蒸気軍艦の発注をゲルマニアに委託していると書いてきたが、実はその全てはキュルケの実家たるツエルプストー領に対して行なわれていた。

蒸気機関の生産は、才吉たちがハルケギニア世界に來たかなり初期の段階からコルベールとともに画策していた。しかし、調査の結果トリステイン内の冶金技術ではどうしても生産できるようになるまで時間が掛かりそうだった。その後、調査の網をハルケギニア各地に広げた結果、ゲルマニアのしかもツエルプストー領内であれば技術力、生産力を満たしていることが判明した。

しかしながら、ゲルマニアは仮想敵国とも言える国である。そんな国に技術力を渡してしまつて良いのか議論の対象となつた。しかもツエルプストー家は義勇軍と繋がり深いヴァリエール公爵家のライバルと言える存在であつた。これにはさすがの才吉も頭を悩ましてしまつた。しかし、他に条件が良い所はなく、トリステインやアルビオンで造ろうと思つたら最低1年は待たなければいけなかつた。

結局、ヴァリエール公爵と協議して事態の打開を図ることとなつた。

案の定、才吉からこの話を聞かされたヴァリエール公爵は渋い表情をした。自分の義理の息子（これはもちろん才人のこと）になるはずの人間の所属する軍隊が、先祖代々の仇敵であるツエルプストーに頭を下げるというのはやはり彼にとって面白くない話だつた。しかし、ヴァリエール公爵もけつして頭が堅いだけの古い人間ではない。特に地球製の近代兵器の力を知っている彼にとって、それを早期実用化するというのは魅力的な話だつた。

余談であるが、ヴァリエール公爵領には義勇軍から小銃や手榴弾などの近代兵器が供与されているが、それらは定期的に整備、訓練しないと実戦では役に立たない。だからこれまでのような諸侯軍では使えない。そのためヴァリエール公爵は王室の許可（アンリエッタ女王時代のこと）をとり、公爵領内で常設軍を設置した。

諸領内で自前の衛士を持つことは普通だが、数百人単位の常設軍を持つのは異例である。そしてこの部隊こそ、後にハルケギニア戦役で常勝部隊の異名をとる『ケンプ大隊』だつた。

話を元に戻すが、そういうわけでヴァリエール公爵も蒸気機関の

ツエルプストー領への生産発注に魅力を感じてはいた。しかしながらやはりこれまでの軋轢に見合う成果がないと、面子が保てない。そこで、彼はある条件をつけた。それはヴァリエール公爵領とツエルプストー領の間の不可侵条約締結の仲介をとってもらったことだった。

この不可侵条約について言えば、ヴァリエール公爵は別にツエルプストー家と仲良くしようなんて考えて思いついたわけではなく、あくまでツエルプストー家はヴァリエール家に対して今後ちよっかいをかけるなどという意味で考えたらしい。さらに、この条約の効力を戦時でも発揮できるようにして、もしトリステインとゲルマニアの間に戦争が勃発しても隣接する両家間では戦端を開けないようにした。つまりトリステインという国単位でも利益があるようにしたのだ。そしてまたこれは、比較的各領主への自治権が大きいゲルマニアだからこそ飲めるような条件だった。

ついでに、トリステインからゲルマニアへ責める際には不利な条件となるが、そもそもトリステインがゲルマニアに自分から戦争を吹っかけることなど有りえないというのがトリステイン政府の意見であるから、この条約については黙認された。

そしてこの条約は表向き義勇軍側が提案、その調印を斡旋したこととなる。それによってヴァリエール家もツエルプストー家も互いの面子が守られるからだ。

こうして紆余曲折の末、ヴァリエール家、ツエルプストー家間でエメン条約が結ばれ、艦船用蒸気機関はゲルマニアのツエルプストー領で生産されることとなった。ちなみに、この条約はその後ゲルマニアがトリステインに侵攻したさいも遵守され、ツエルプストー公は度重なる帝室からの要請にも関わらず、帝軍の領地通過を認め

ず中立を守った。

さらに付け加えると、同地の冶金技術はすばらしく、また合理主義のゲルマニアの技術者たちは短期間で大量生産方式を取り入れた。そのため後に新型大砲の製造も委託されている。もちろん、それら製造方法は絶対に外部には漏らさないという条件付ではあった。ツエルプストー側は最初これに不満だったようだが、才吉が軍需とは関係ない民需品の製造方法や技術を引き渡してお茶を濁した。

そういうわけで、現在ゲルマニア、ツエルプストー領の各港では最新鋭の蒸気軍艦の建造が進められていた。

「さて、才人君。仕事も終わったことだし、一緒にお昼でもどうかね？」

コルベールが才人を食事に誘う。すでに正午を大分回っていたが、2人は早朝から「スピカ」号に乗り込んでいたために、まだ昼食を採っていなかった。

「ありがとうございます先生、けどこれからちよつと飛ばなきゃいけないので。」

「うん？・・・ああ、そう言えば朝そんなこと言ってたね。それじゃあ仕方がないね。」

「ええ。またの機会にお願いします。」

才人はそこでコルベールとわかれ、町外れへと向かった。現在そこには義勇軍が王室に要請して作ってもらった簡易飛行場が設置されている。飛行場と言っても整地した短い滑走路代わりの平坦な土

地と、簡単な燃料・物資集積用のバラックが立っているだけの貧弱な物だ。

こうした簡易飛行場は現在タルブなど数箇所を設置されており、万が一ミライやシティ・オブ・サウスゴータ等の拠点基地が潰された場合の避難基地、また今回才人が使ったような短距離移動の着陸基地、さらに不時着用の基地として機能していた。それらの基地には数名の整備兵と警備兵が詰めており、常に1・2機の飛行機を運用することが可能となっている。

今回才人はミライからここら・ロシエールまで零戦を借りて飛んできた。その後はアルビオンのシティ・オブ・サウスゴータへ向かう予定であった。

飛行場へ着くと、才人は早速零戦に乗り込みエンジンを掛けた。

「少佐、エンジン機体共に異常なしです。天候も特に問題なさそうです。」

明らかに才人より若い、現地採用の整備兵が声をかけてきた。

「ありがとう。」

「お気をつけて。」

整備兵が敬礼をした。

「ああ。」

才人も答礼する。すると、その整備兵がサイダーの瓶を渡した。

「今日の朝届いた補給品です。途中でお飲みください。」

「じゃあ遠慮なくもらうよ。」

そして2人は互いに敬礼する。

暖機運転が済むと、才人はアルビオンへ向けて飛び立った。

移りゆく時代の中で（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

作者近況。夏休みなので久しぶりに提督の決断をやっております。

そのせいで小説書く時間が短くなっています。すいません。

次回は外伝を更新予定です。

未来を作る者たち

シテイ・オブ・サウスゴータ郊外にある義勇軍基地に才人が到着したのは、ラ・ロシエールの飛行場を飛び立つてから3時間後のことであった。

『東方義勇軍』アルビオン方面軍総司令部を兼ねているこの基地は、現在トリスタニア郊外にあるミライの基地と同じく整備されている。滑走路は舗装こそされていないがしっかりと整地され、その周りには格納庫や兵舎が幾つも立ち並んでいる。また少し離れたところには、陸上部隊用の練兵場も整備されており、そこでは時々トリステイン方面軍との共同訓練も行なわれている。

才人は着陸すると、整備兵の誘導に従って機体を格納庫の手前まで持っていく。そしてエンジンを止めて、荷物を持って機体から降りた。

「お疲れ様でした。飛行中になんらかの異常がありましたか？」

地面に降りた才人を出迎えたのは、整備用のつなぎを来て、丸い眼鏡を掛けた若い女性の整備兵だった。明らかにラ・ロシエールで才人を見送った兵士と同じく現地採用の兵である。

「いいや、特になかった。けど帰りも乗るから、整備のほうはしっかり頼むよ。」

「了解しました。少佐殿。」

その少女の整備兵は敬礼して、早速他の整備兵と共に機体を格納

庫内に入れ始めた。その整備兵たちも彼女と同じく、現地採用と思われる若い少年兵だった。

「アルビオンでも最近本当に増えたな、現地採用の兵士。」

才人がきびきびと動く整備兵たちを見ながら呟いた。

アルビオン解放戦争が終わって約2ヶ月。それ以前から『東方義勇軍』では兵士の募集を始めていたが、アルビオンでの募集が始まったのはトリスティンよりも当然遅かったわけで、ついこの間までは現地採用の整備兵などはまだまだめずらしい存在だった。それが短期間で随分と増えたように才人は感じていた。

『東方義勇軍』に志願してくるのは主に平民である。メイジもいなくはないが、貴族はいない。これについて、彼らはそもそも義勇軍を胡乱な存在として見る風潮があるから、当然といえば当然である。

義勇軍では男女関わらずに門戸を開いているのだが、募集を始めた当初から定員に勝る数の人間が志願してきた。そのほとんどは農家出身の少女や次男三男である少年たちであった。彼らにとって、戦争に出る可能性は高いものの、定期的に高い給与が貰えて3食付きという義勇軍の報奨制度は、魅力的通り越して夢のような物であった。

しかしながら、現実には過酷で体力検査や学力検査でかなりの数が落とされる。体力はパスしても学力で落とされるというパターンが多かった。元々文盲が多い土地柄であるのは義勇軍も重々承知であるから、かなり甘い審査基準にしていたのだが、それでもかなりの数に昇った。この時期のハルケギニアの平民の教育レベルがどの程度のものであったかよくわかる。

そうして入った兵士達も、入隊してから最近までは様々な基礎教育を受けてきた。特に、これは才人はあまり好きではなかったが、国や郷土、そこに住む人々を守るための気持ちを持たせる精神教育は重要だった。余談であるが、この精神教育には地球から持ち込まれた映画などが随分と使われている。特に某知事が作った特攻映画はかなり効果があったとか、なかったとか。

閑話休題。

とにかく、そんなわけで最近はこちらアルビオンにおいても現地採用の兵士が表立って働くようになり、そうして数に余裕が出ることで、小規模な飛行場を増やすことができるようになった。

才人はそんな現地採用の兵士達が忙しく働く飛行場の一角から兵舎に移動し、そこで茶色の士官用制服に着替えた。その胸には白い四角形を模ったアルビオン戦役従軍章と、飛行機を模った航空兵徽章が付けられていた。

最近になって各種軍規律やこうした略章や徽章、勲章についても正式に制定され、才人もそれに従った物が与えられていた。

身なりを整えた彼は、そのまま才吉の屋敷に向かうつもりだった。そこで、今日の早朝に才助から渡された情報を才吉に引き渡すことになっていた。

基地から才吉の屋敷までは約1km。才人は自転車を借りることにした。自転車はバイクや自動車と同様地球から持ち込まれた物かハルケギニアと地球で作られた部品を併せた物だ。最初の頃、才吉や才助も自転車ぐらいならハルケギニアでも作れるのではと思って

いたがこれは甘い予測で、実際はタイヤに使うゴムがこちらでは調達できず、仕方がなく部品の一部は地球からの調達となった。

未だ外部との貿易が限られているハルケギニアにおいて、ゴムは希少性の高い物のようで、服などの使用量が少ない物には用いられているが、タイヤなどに使用するだけの量を手に入れようとすると、かなりの額になった。もっとも、才人の父親の才助はそこに着目して、地球から持ち込む品のひとつにゴム製品を入れて儲ける事に成功していた。

そんないろいろな事情をもつ自転車であつたが、義勇軍の兵士達からは気軽な乗り物として重宝されていた。

才人が手続きを取って自転車を借りて基地を出ようとしたところで、声を掛けられた。

「才人。」

「うん？」

才人が声のしたほうに振り向くと、そこには1人の顔見知りのハーフエルフの少女と、見知らぬ義勇軍大尉の青年が立っていた。ただ才人には、その青年が日本人であることは外見から一目でわかった。

「やあテファ、こんにちは。」

才人がテファにあいさつをする。テファは義勇軍に所属してはいない民間人であるが、救護などをはじめとして様々な仕事を手伝ってくれていた。だから着ている服はズボン形式の義勇軍女性兵用制

服であつたが、階級章はなく、またその腕には民間人（つまり軍属）を示す青い腕章が巻かれていた。

「こんにちは才人。アルビオンに来ていたのね。」

「うん。ちよつと曾爺ちゃんに届ける物があつてね。ところで、その人は。」

才人は見知らぬ青年の方を見ながら言った。そして質問したテファではなく、その青年自身が質問に答えた。

「はじめまして。君の噂は耳にしているよ。俺は葛西豊。君と同じ日本人だ。もつとも、君がいた日本とは違う日本から召喚されたんだけど。」

「召喚？それじゃあテファがあなたを？」

そう言つと、テファがどこか遠慮したように。

「ええ。」

と言つた。どうやら罪の意識を感じているようであつた。

すると豊が彼女に優しく言つた。

「テファ、そのことについて俺はもう気にしてないから、君も気にするな。・・・失礼した。そう言えば、君のほうで階級が上だったね。それでは改めて、義勇軍大尉に任官しました葛西豊です。」

そう言つて彼はピシッと敬礼をした。すぐに才人も返礼する。

「義勇軍少佐の平賀才人です。よろしく願います。それと、あまり階級のことには気にしないで下さい。世界は違って、同じ日本の出身です。あなたの方が年上でしょ？」

「ありがとうございます。けど、一応基地内では規律の面もあるので。」

すると、テファが彼の腕を引っ張った。

「豊、そろそろ行かないと。」

「ああ、そうだった。それじゃあ平賀少佐、こっちも用事がありますから。また今日の夕方にも話をしましょう。俺も、君の曾お爺さんの屋敷で厄介になっていますから。」

「ええ、楽しみにしています。」

こうして才人は2人とわかれ、自転車に乗って才吉の屋敷へと向かった。

未来を作る者たち（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。アイデアなども受け付けているので、よかったらどうぞ。

真実に近づく

「平賀大将！」

警備係の1等兵が才吉の部屋の扉を開いて言った。

「うん？何かな？」

それまで書類に目を通していた彼は顔を上げた。

「トリステインから、平賀才人少佐がお着きです。」

「そうか。わかった、通してくれ。」

「は——！」

警備兵は敬礼して一端部屋から出て行った。そしてそれと入れ替わる形で才人が入ってきた。

「よう才人、ごくろうさま。それとシャルロット殿下の母上の救出作戦とウェールズ国王たちの案内もよくやってくれた。2日前、お2人から正式に感謝のお手紙がこちらに届いたぞ。」

「どういたしまして。けどまず、これを先に渡しておくよ。」

才人は肩から掛けていた鞆の中から、一通の封筒を出した。その封筒の表面には日本語とハルケギニア語で、開封厳禁と書かれていた。

才吉はそれを受け取ると、念のため裏表を見た。

「ああ。確かに受け取ったぞ。わざわざアルビオンまで来させてしまったが、こればかりは信頼出来る人間に運んでもらわないと困るからな。」

そう言いながら、彼は封筒の封をハサミで切りはじめた。

「その封筒の中身は一体何？」

「知りたいか？ 教えても良いが他言無用だぞ。」

才人はその言葉に頷いた。

「こいつはガリア各地のスパイからの報告を纏めたものだ。」

才人はある程度予測していたこともあり、その言葉に驚きはしなかった。

アルビオン解放戦争に前後して、才吉はトリステインとアルビオンの両王室に働きかけてガリアやゲルマニアなど大国をはじめとして、各国にスパイを送り込む機関を設置している。メイジ、平民問わずに編成されたこのトウ機関は構成員の練度も大分上昇し、最近はかなり情報の情報を集められるようになった。そして特に才吉はその情報の中でも、大国ガリアの物に注意していた。

こうした情報はこれまで、現地の反国王派等の地下組織から手に入れるのが常であったが、最近は市中での情報収集も積極的に行なわれていた。

市中での情報収集の方法は、主に王室に努める衛士や平民などが集まる飲み屋などで行なわれ、客や店員に扮したスパイがさりげなく客から聞き出すという方法が主流であった。そうした話の多くは、他愛のないものや噂程度にすぎないものばかりだが、そうした情報を1つ1つ吟味し、あるいは組み合わせる重要な情報が混じっていないのか調べるのである。また、大胆にも臨時雇いの小間使いやメイドとして城に忍び込む者もいた。

一番効果を上げるのは直接潜入であるが、これが後にハルケギニアの運命に大いにかかわることとなる。

例えばエルフ諸国と国境を接しているガリアでは、細々ではあるがエルフと貿易が行なわれている。そのため以前から王室でエルフを見たという噂が絶えないが、最近にナッテそのことが話題に上がる回数が増え、さらに実際に確かに見たという者まで出るようになった。これらから、ガリア王室がエルフとなんらかの交流を積極的に行なうようになったという推測が出来る。

こんな感じでスパイたちが根気強く集めた情報は、一端ミライの義勇軍基地に集められ、コピーが取られる。そして現物はそのまま保管され、コピーがトリステインとアルビオン王室、さらに才吉など義勇軍幹部に回される。

今回才吉が受け取ったのも、そうしたコピーの1つだ。

彼は封筒から書類を出すと、さっそくパラパラとめくり始めた。そしてあるページで止めた。

「うん!？」

彼はそのページの内容をじっくり読み始めた。

「曾じいちゃん、何かあったの？」

「ああ。興味深い内容だな・・・ガリアのジョゼフ王についてだ。」

ジョゼフという言葉に、才人の顔に緊張が走った。タバサの母親の一件以来、才人にとってジョゼフという単語は悪魔と同義語だった。

「一体どんな内容なんだよ？」

「うん・・・こいつを見る限りだと、ジョゼフって男はよくわかん人間だな。」

「え!？」

才吉は才人に書かれている内容を説明し始めた。それを聞いて、才人も驚いた。というか啞然とした。

報告書に寄れば、ジョゼフはあまり政治や社交、さらには家族にさえ興味を持っていないようで、1日中1人で特注した箱庭のある部屋に籠っていることが多いという。大臣と会うことも自分の命令を一方的に伝える時だけで、細かいことはすべて丸投げしていると思われること。さらに最近はそのジョゼフのもとに、ハルケギニア（特にメイジに）では嫌われているエルフ、そして謎の女性がよく出入りしている話もあるという。

これらの話の多くは噂話や又聞きの話などもその情報源のソースにしているから、信憑性は必ずしも高くないものも混じっている可

能性がある。しかしながら、多くの人間が話していることや目撃者が多いことも考えると、決して与太話で片付けられるものでもない。

「しかもだ、それに加えてこっちはシャルロット殿下がお聞きになったらお怒りになるかもしれないな。」

才吉は、続きを読んで言った。そこに書かれているのは、ジョゼフの弟にしてタバサの父親であるシャルル・オルレアン公の暗殺に關してのことだ。その時シャルルに向かって毒矢を放ったのは他でもないジョゼフだという。

この情報はジョゼフ自身が話していたのを複数の人間が聞いたことで掴んだらしい。

「本当にこれが王様のやることかよ・・・」

才吉から書類を渡され、読みながら才人はそう呟いた。

「うーん、ワシは専門家じゃないからなんともいえないが、もしかしたらジョゼフは一種の精神病にでも罹っているかもしれないな。」

「精神病？」

「ああ。精神病っていつでも別に気が狂っているとかそう言う類いじゃないくてな。なんというか、そう・・・一種の欲求不満とか。まあこれはさらに調べていかないとわからんから今断定するのはやめておこう。」

才人は才吉が言いたいことがなんとなくわかるような気がした。人間表面上は冷静に見えても、内心ではすごく不安定であることな

どよくある。最近地球でも意味もなく大量殺戮を町のと真ん中でやる人間がいるのだ。

才吉はこれ以上この話をするのは嫌なのか、そこで話題を変えた。

「そう言えば、地球に留まったシャルロット殿下はどうされているかな？」

「昨日来たメールを見る限りじゃ、特に異常はなさそうだったよ。お母さんの方も今は大分よくなって、リハビリに励んでいるって。」

才人が書類を才吉に返しながら言った。

「それは結構なことだな。・・・さて、ちょっと話は変わるが。才人、今晚ゆっくり休んだら、今度はハシラ島に飛んでくれんか？」

「え！？いいけど、どうして？」

「向こうでまた地球製の物が見つかったらしい。それを見てきて欲しいんだ。ついでにハシラ島に泊まっている海上自衛隊の艦船も見て来い。」

才人は別に今の所用事もないし、別世界の海上自衛隊の艦も見ても良かったから、その提案をすんなり受け入れた。

「わかった。そうするよ。」

真実に近づく（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

次回が次々回では地球製の新しい船と機体を出すつもりです。

ハシラ島へ

才吉とガリアからもたらされた情報について話した日の夜、才人は屋敷に帰ってきたテファと豊の2人とお喋りをしていた。

「へえ、それじゃあ子供のころからレジスタンスに？」

「ああ。10歳の時に初めて銃を握って、12歳の時に初めて人を殺した。」

どこか遠い所を見るように言う豊に、テファが目丸くして言う。

「それ本当？」

3人で会話をしているが、同じ日本人のせい才人と豊がする日本についての会話が自然と多くなっていた。

「それにしても、同じ日本でもこんなに違うとはな。」

才人は多次元宇宙の恐ろしさを実感していた。豊の話に寄れば、彼のいた日本は太平洋戦争が起こらず、日中戦争に日本が勝利したという。その後の歴史は才人の世界とは大きく違い、彼がいた2005年時点では軍国主義日本を中心としたアジア圏、ドイツ第三帝国を中心としたヨーロッパ圏、ソ連を中心とした社会主義圏、アメリカと南米を中心とした自由主義圏の四極構造だったという。

「才人のいた日本はそれなりに平和で良かったみたいだな。」

豊にそう言われて、最初才人は返答に困ってしまった。毎日TV

のニュースで流されていた殺人事件や様々な汚職事件を思い出していたからだ。しかし、それでも銃を握らなければいけないほどに政治的・思想的弾圧が行なわれていたわけではない。そう考えれば平和で幸せであったことに違いはないだろう。

「そうだね・・・けど、豊さんもよく俺たちに協力してくれる決心してくれたね。」

「まあ、この世界じゃ俺も根無し草だからな。それに働くなら同じような人間が集まっているような所のほうが安心できるし。」

「そつえば、菅野大尉の時もそうだったよな。」

実際、彼と同じように身寄りがなく、異世界から流れてきた集団という事で義勇軍に参加、協力してくれる人は多い。

「それと、テファは使い魔の契約は結んでいないみたいだけど、それで良かったの？」

才人は彼の手にルーンが出ていないことによようやく気付いて聞いた。

「うん。別に私は豊を縛るようなことはしなくなかったから。信頼できる友達であってくれればそれでいいわ。才人、あなたみたいにね。」

そう笑顔で言われて、一瞬我を失いそうになる才人であったが、すぐに心の中で自分に言い聞かせる。

（いかん、いかんぞ！俺にはルイズっていう婚約者がいるんだ！！）

「どうした？」

「どうしたの？」

才人の怪しい動きに対して、2人が怪訝な表情で聞いてきた。

「なんでもない、なんでもないんだ。」

「「？」」

才人の答えに納得したわけではなかったが、それいじょう2人は追求しなかった。

「ところで才人、お前明日はどうするんだ？」

「明日はまたゼロ戦でハシラ島まで飛ぶ予定だけど。」

すると、豊はすこし残念そうな表情をした。

「そうか、折角だから一緒に射撃訓練でもしたかったんだがな。」

「それはまたの機会に。」

そんな感じで、この夜は更けていった。

翌朝才人は再び飛行場からゼロ戦に乗り込んで、ハシラ島へと向かった。

アルビオンからハシラ島へのこの日の距離（アルビオンは常に動

いている）は約700km。巡航速度400kmで飛べば2時間も掛からない。しかし下は海であるから下手すると方位を失い迷う可能性もある。

義勇軍では事故や遭難で貴重な機体とパイロットが失われる事を非常に恐れている。そのため、各機には誘導電波の受信装置と方位指示器が搭載されている。この装置は、各地の飛行場で独自に設定されている発進電波の周波数を受信する事で、正しい方向へ方位指示器の針が動くようになっていた。

この装置のおかげで、現在のところ方位を失って遭難したという機体は出ていない。今回才人も装置のおかげで迷わず最短距離でハシラ島へ飛んでいく事が出来た。

ハシラ島は外洋諸島進出の基幹基地として日々開発が進められていた。才人が到着した時には飛行場も簡易ながら整備され、また立ち並ぶ建物の数も増えていた。

才人はゼロ戦から降りると、早速港へと向かった。

港の方も開発が進み、桟橋や物資を集積するための倉庫の開発が急ピッチで進められていた。トリストインやアルビオンから派遣されてきたであろう土系統のメイジたちがゴーレムを作り出して、そうした作業に当たっていた。

その光景を横目に見ながら、才人は湾内を見渡した。

現在湾内には、話に聞いていた通り4隻の艦艇の姿があった。いずれも第二次大戦時の艦型である。才人はそれら4隻を持ってきた双眼鏡でさらによく見てみる。

艦首のポールには一応こちらの世界での識別のためか、トリステインの百合の旗が掲揚されているが、艦尾のポールにはまぎれもなく海上自衛隊の自衛艦旗が揚がっている。また艦体には白い文字でそれぞれの艦名が記されていた。

才人はさらにそれらの艦艇をじっくり見てみる。

大型の巡洋艦は間違いなく、第二次大戦中に日本海軍が竣工させた軽巡の「大淀」だ。潜水艦隊の旗艦として建造され、一時期は連合艦隊の旗艦としても使われた。軽巡としては巨大な1万t近い排水量と、魚雷発射管が全くなく、巨大な水上機格納庫が特徴である。

しかし目の前にある船は艦橋や煙突は同一だが、主砲や高角砲、機関銃は全てアメリカ製の物であるように見え、また後部にも水上機格納庫が縮小された代わりに主砲が1基設けられていた。

駆逐艦も同様で、「陽炎」型と思しき艦も主砲や武装がアメリカ製に変わっているようだった。ただただ1基だけある魚雷発射管はどうやら旧海軍の物のようだった。

「松」型と思しき艦も似たり寄ったりであった。それと全艦共通としてレーダーアンテナの数が極端に増えていた。

才人の世界で旧日本海軍で使われた艦艇は戦争が終わると、軒並み解体されるか、賠償として外国に引き渡された。この中で台湾に引き渡された「丹陽」こと「雪風」は有名であるが、その「雪風」が目の前に停泊していた。

「大淀」にしても彼の歴史では昭和23年に解体されている。海上

自衛隊に引き継がれたのは少数の小艦艇と、引き上げて修理された駆逐艦「梨」だけであつた。

そうした艦艇が目の前に浮かんでいるのだから、誰だつて不思議な気持ちになるだろう。実際才人の気持ちも複雑であつた。嬉しさや不安、ある種の恐ろしさのような感覚も覚えていた。

そんな不思議な感覚にしばらく陥っていたが、湾口から響いてきた汽笛で我に歸つた。

「なんだ？」

才人が音のした方に目をやると、見慣れた「にぎつ丸」の艦影が見えた。しかしそれだけではなかつた。その「にぎつ丸」の真後ろに、見慣れない船が見えた。

「あれは？」

才人は双眼鏡でよくその影をしてみる。そしてその正体がわかると呟いた。

「リバティー船だ。なんでこんな所に？」

リバティー船とは、第二次大戦中にアメリカで量産された貨物船である。その貨物船が突然目の前に現れたのであつた。

ハシラ島へ（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

リバティ―船を登場させましたが、一応予告して言うておきます
と、この船自体よりも積み荷が重要です。

思いがけないプレゼント 上(前書き)

読者数が8万人を突破しました。本当にありがとうございます。

思いがけないプレゼント 上

戦時標準船という種類の船がある。文字の如く、戦時に大量生産するために設計を簡易化して、建造する船型を統一した船のことである。

日本でも第二次大戦中にこの種の船は多数建造され、最短2ヶ月以内に完成した船もある。当時の日本では深刻な船舶の不足に悩んでいたために、こうした船は必要不可欠であったのだ。

もともと、日本の戦時標準船は本来2重底にするべき所を1重にしたり、乗員のために設けるべき設備を削除するなど、船としての機能は最低ランクの物であった。なにせ当時国が造船所に示した設計方針自体が2〜3年使えば良いというものだった。さらに、動員学徒や囚人を建造に動員したために出来の悪い船がほとんどで、船員からは「腹痛船」と呼ばれて嫌われた。そしてこうした船も容赦なく次々と沈められた。

日本の敵国であるアメリカやイギリスでもこうした戦時標準船が建造されたが、日本の船が租税濫造で、出来上がったらずぐに乗員による修理を要するような船であったのに対して、両国の船は設備や船型の一部を簡易化した以外は平時の貨物船となんら変わらぬ性能を発揮した。

その中でもアメリカで造られた戦時標準船はリバティー船と呼ばれ、すさまじい数が建造された。なにせ沈められる数よりも出来上がる数の方が多いくらいであった。最高速こそ11ノットと低速であったが使い勝手もよく、そのため、戦後すぐになると各国に売却され、さらに日本人の外地から内地への復員輸送にもかなりの数が

動員された。

そのリバティー船が「にぎつ丸」に引つ張られて湾内に入ってきた。船体はしばらく放置されていたのか赤錆びているが、船としての形はしっかり保っている。

「にぎつ丸」はそのまま湾内の空いている所に投錨した。

才人はすぐにその船の正体を確認するべく、棧橋まで走って行き、止まっていた停泊する艦船との連絡船に乗り込んだ。そして操船係の兵士に命じて、「にぎつ丸」に向かわせた。

連絡船は動力のない帆船であつたために、「にぎつ丸」に到着するまでかなり時間を要した。不便極まりないが、こうした小船にまで動力が付けられるのももう少し後のことである。才人は連絡船が「にぎつ丸」に横付けすると、早速ラッタルを駆け上がって乗り込んだ。

船上は兵士たちが走り回って、てんてこ舞いの状況だつた。まあ船1隻を曳航してきたのであるから当然と言えば当然であるが。才人はその中を艦橋へ向かつて上がっていった。走り回っている兵士たちからすれば邪魔でしようがないだろうが、才人が着ている少佐の士官服と階級章おかげで文句を言う者はいなかった。

（すいません、ほんとうに邪魔してすいません。）

才人は心の中で謝りながら、艦橋へと向かった。

艦橋へ入ると、安田艦長が部下と何やら打ち合わせをしていた。才人は彼が話を終えるのを艦橋の隅で待っていた。そして、彼と話

していた部下が出ていった所で声を掛けた。

「安田艦長。」

「おお、君は総司令官のお孫さんの才人君じゃないかね。いつこちらに来たのかね？」

才人はこの船に乗船していたことがあるので、安田に顔を覚えてもらっていた。また少佐という階級であるおかげで、こうして話も出来る。あまり階級には拘らない彼だが、こういう時は本当に便利な物である。

また才人がタルブの戦いとアルビオン解放戦争における英雄であることも一因である。

「そんなことよりも、あの後ろの貨物船はなんですか？どうみてもアメリカのリバティー船にしか見えませんけど。」

すると、安田は驚きの表情をした。

「ほう、では君はあの船のことを知っているのかね？」

「ええ、まあ。本で少し読んだだけですけど。確かあの船はアメリカの戦時標準船です。」

「そうかね。そうか、あの船はやはりアメリカの船か・・・あの船は一昨日、新しく発見した島の海岸に座礁していたんだ。見ての通り錆が大分回っているから、7・8年は放置されていたようだ。早速兵士を派遣して調べてみたのだが、人は誰も乗っていなかった。救命ボートが降ろされていて、救命胴衣もなくなっていたからどう

やら乗員は既に脱出していたようだ。船長室に残されていたボロボロの航海日誌から、船は1943年の4月ごろからやってきたようだ。」

「すると、船だけが残されていたんですか？」

「ああ。ついでに艦内を簡単に調べてみたが、積み荷や装備されていた砲やレーダーもそのままだった。船体も錆びてはいるが、調査の結果ちゃんと整備さえすればまた使えそうだ。エンジンも無事だったしね。」

安田が吉報ともいうべきことを言った。たった1隻とはいえ、近代的な貨物船が手に入ったことの意味は深い。もつとも、修理や乗員の手配など問題も多いが、それは追々解決していくことになるだろう。

ちなみに、この船のことを安田は無電で報せようとしたらしいが、生憎と故障を起していて報せられなかったそうだ。

そして才人には、彼が言ったある言葉が非常に気になった。

「積み荷はなんだったんですか？戦車とか銃とかですか？」

すると、安田はニヤツと笑った。

「いいや、もつとすごい物だよ。」

「え？」

才人が怪訝な表情をしたが、安田は笑ったまま言った。

「自分の目で確認すると良いよ。乗艦許可書は私が出すから。早速見てきたまえ。」

結局、安田は才人に積み荷のことは教えてくれず、彼から許可書を貰った才人は直接自分の目でそれを確認することになった。

才人は待たせていた連絡船で、今度は「にぎつ丸」が引つ張ってきたりバティー船へと移動した。そして乗り込むと責任者の士官に許可書を見せて、早速積み荷を見せてもらうことが出来た。

船倉内に積み込まれていた積み荷はいずれも大型で、シートが掛けられていた。そしてその正体は一発でわかった。

「飛行機!？」

普段から飛行機によく乗っている才人には、シートが掛けられていてもわかった。またシートから若干でいる部分を見ると、特に損傷などは見受けられなかった。船自体は潮風にさらされて錆びだらけになっていたが、積み荷はシートのおかげで無傷だった。そして才人はその中身を確認して狂喜乱舞した。

「こ、こいつは!？」

それらの荷物にはこう書かれていた。United States Marine Corps (合衆国海兵隊)

「すげえ!本物は初めて見た。けど、これ飛べるのかな?・・・とにかく、急いでトリステインとアルビオンの基地に連絡して整備兵を寄こしてもらおう!」

才人は早速今言ったことを行動に移すべく、船倉を出て行った。

そして翌日、彼の要求通り早速アルビオンから整備兵の第一陣が派遣されてきた。そしてリバティー船から降ろされた積み荷である航空機の組み立てと整備に取り掛かったのであった。

思いがけないプレゼント 上（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。それとネタやキャラ、兵器に関する意見もドシドシどうぞ。

思いがけないプレゼント 下

才人がハシラ島へやってきた2日後、島の飛行場にエンジンの爆音が鳴り響いた。ゼロ戦よりも重々しい音を発しているその青い機体は大きさも一回り大きく、特徴的な逆ガル翼を持っていた。

「どうですか？」

テストパイロットとしてコックピットに座った才人に、トリステインから派遣されてきたベテランの整備兵が声を掛けてきた。

「快調です。エンジンの機体ともに異常なし。」

才人が笑顔で整備兵の方へ顔を向ける。

「一応こちらでも万全の整備を行ったつもりですけど、慣れない機体でしかも数年ぶりに動かしている筈ですからあまり無茶しないでください。」

「わかっています。」

だが彼らの心配を他所に、エンジンは特に異常もなく動いている。機体も才人がフットバーや操縦桿を動かして見てみたが特におかしな所はない。

「ようし。エンジンの機体ともに異常なし。発進します。」

「了解。くれぐれもお気をつけて。空中でなんらかの異常が発生したならすぐに脱出を。」

「わかっています。」

才人が敬礼しながら笑顔で返事を見ると、整備兵は短く返礼して翼から降りた。そして才人は両手を振って車輪止めを外させる。

「それじゃあ行きますか。」

ゴーグルを付けて、スロットルを入れていざ出発である。発信位置につくと、そのままスロットルを全開にした。

その途端、ゼロ戦ではありえないすさまじいパワーによって機体が引っ張られた。

「すげえ！」

機体が空中に浮かびあがると、才人は操縦桿を引いて急上昇に入った。改良が加えてあるゼロ戦でも出来なくはない動作だが、元から2000馬力の高出力エンジンを載せてあるこの機体は一味違った。

「すごい！さすが「コルセア」だけあるぜ！！」

先日発見された貨物船の積み荷は飛行機、しかも戦闘機であった。ヴォートF4U「コルセア」がその戦闘機の名前だった。旧日本軍のパイロットからはシコルスキーとあだ名されたこの機体は重馬力のエンジンに似合わぬ細い胴体と、V字に折れた逆ガル翼が特徴的である。

最高速度は670km、武装は12.7mm機銃6基と強力で爆

弾も900kgまで搭載可能である。太平洋戦争中盤から登場し、日本のゼロ戦と幾多の戦いを繰り広げた。当初は空母用の艦上戦闘機として計画されたが視界が狭く、着陸速度も速いために当初は海兵隊用の戦闘機として就役した。終戦間際には艦上機として日本本土空襲にも加わり、その後の朝鮮戦争ではジェット戦闘機のMiG15を撃墜するなど、第二次世界大戦から朝鮮戦争の時代に活躍した名戦闘機の一つである。

その「コルセア」が合計12機、発見された貨物船には積まれていた。いずれの機体も主翼の一部が解体されていたため、組み立てる必要があったが、船倉内にあり、なおかつカバーを掛けられていたおかげで機体の劣化は最低限度で済んでいた。

才人は早速アルビオンとトリステインに連絡を取って、整備兵とテストパイロットを寄こすよう要請し、さらに島の開発のために派遣されていた「土」系統のメイジに頼んで陸上に揚陸した機体から順次固定化の魔法を掛けてもらった。

そうした作業に2日ほど掛ったが、ようやく1機目の組み立てと整備が終わって、才人はテスト飛行を行うことができた。ちなみに整備された機体は胴体のマークをトリステイン王国所属を示す白百合のマークに変えている。

「こちら地上班、平賀少佐、機体に異常は見られますか？」

高度3000mに達したところで、地上から無線が入ってきた。

「こちら平賀少佐、エンジン、機体ともに異常なし。現在高度3000m。速力450km。」

才人は無線機のスイッチを入れてすぐに返信した。

「それでは少佐、予定通り着陸してください。」

地上の整備兵がそう指示してきた。出発前の打ち合わせでは、今日のテスト飛行は機体が飛行に支障がないかを調べるだけであった。しかし、やっぱり一旦上がるともっと飛んでいたいのが人の性分と言うものである。

「もうちょっと飛んじやだめかな？ 最高速度や急降下のテストもしたいんだけど？」

すると、それまで話していた整備兵とは別の声が無線に割り込んできた。

「才人、命令だ降りろ！」

「げ！ 曾じいちゃん。」

才人からの連絡を聞きつけ、整備兵らとともにやってきた才人の曾祖父であり義勇軍最高司令官の才吉だった。どうやら曾孫の行動を読んでいたようだ。

「今日はあくまで簡単な試験飛行なんだ。それに、燃料だってそんなにに入れていないんだ。だからとっとと降りて来い！」

才吉の言うとおり、テスト飛行のため燃料は半分も入れていなかった。これでは全力飛行するには心もとない。才人は才吉の言葉に従うしかなかった。

「了解。」

結局予定通り、才人は基本的な動作確認だけして「コルセア」を着陸させた。ちなみに、「コルセア」はゼロ戦よりも着陸速度が速く、スピードも速かったが『ガンダールヴ』の力のおかげで才人は危なげなく着陸できた。

着陸すると、すぐに才吉がやってきた。

「こら才人！貴重な機体なんだぞ。無茶しようとするんじゃない！」

案の定お説教となった。

「ごめんごめん。」

「まったく、それにお前が試験飛行する機体はまだあるんだぞ。」

そう言つて、才吉が視線を向けた先には「コルセア」とは別の機体が止まっていた。実はリバティー船に積まれていた飛行機は「コルセア」だけではなかった。もう1機種あった。

そっちの機体もやはり機体は海兵隊用の青色に塗られていたが、形状はごく普通で、キャノピーの形から二人乗りであるのが一目瞭然であった。

「わかってるつて。そういえば、「ドントレス」は2人乗りだけださ、誰か一緒に乗ってくれるの？」

「安心しろ。アルビオンから来てくれた元陸軍パイロットの若井少尉が同乗してくれる。」

ダグラスSBD「ドントレス」。それがもう1つの機体の名前である。性能は至って平凡なアメリカの艦上爆撃機であるが、ミッドウェー海戦で日本の主力4空母全てを屠ったことでミリタリーファンなら知らない人はいない機体である。

今回その「ドントレス」も合計12機積まれており、こちらも「コルセア」同様に組み立てと整備を行っていた。

「いやあ、それにしても合計24機の飛行機が一気に手に入るなんてな。神様にでも祈りたくなるよ。」

才吉が嬉しそうに言う。

「けど曾爺ちゃん、飛行機は手に入ってもパイロットが足りないよ。」

才人の言葉通り、一気に20機近い飛行機が手に入っても、それを操縦するパイロットは未だに不足していた。菅野中佐がどんなにがんばっても、練習機が不足しているために養成に限界があったからだ。今に至って単独飛行に成功したのはたった4名だった。

しかし、才吉は笑いながら言った。

「ああ、才人はまだ聞いていなかったのか。実はな、地球にいる才蔵からメールがはいってな……」

「!？」

彼の言った内容は、才人を驚かすに十分の物だった。

思いがけないプレゼント 下（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

作者近況。パソコンの調子がおかしく、他のシリーズの更新が滞っています。そしてこの第3シリーズが予想以上に長引いていて、第シリーズに中々進めません。

戦力拡充（前書き）

読者数が9万人を突破した。もう、本当にありがとうございます。

戦力拡充

昼食を挟んで、才人は今度はSBD「ドントレス」の試験飛行を行った。なお、「ドントレス」は2人乗りの飛行機であるから、後部座席にアルビオンから派遣されてきた旧陸軍出身の若井少尉が乗り込んだ。

旧陸軍と書いたとおり、彼は「にぎつ丸」とともにやってきた人間で、本来は99式襲撃機のパイロットであつた。

今年36歳になるという彼は才人よりもずいぶん年上のパイロットであるが、年下の上官である才人に対して嫌な顔一つせず乗ってくれた。

試験は飛行は午前の「コルセア」の時と同様何事もなく終了した。

才人は「ドントレス」から降りると、若井と簡単な試験飛行の結果に関する会話をした。それが終わると、少しばかり最近のことを話し合った。

若井は戦争が終わった現在、他の搭乗員とともにアルビオンでの新兵教育に携わっているらしいのだが、トリスティンの菅野中佐同様色々苦勞が多いらしい。

「新兵の教育でまず困るのは文盲の多さなんだよね。比較的文字が読める人間を選んでいるんだけど、それでも今は半々つてところかな。けど、例えば文字が読める人間でも今度は機体の計器読めるようにしなくちゃいけないからね。文字を教えるだけで1カ月は潰れるよ。」

文盲が多いことは、別に飛行部隊だけの問題ではない。歩兵、戦車、水上どの部隊でも必ず問題となる。この内歩兵はもとも文字を読む機会が少ないこともあって、その教育は最低限のものとなっている。一部では旧ソ連軍がやっていたように、絵マンガを用いた取扱説明書も存在する。

しかしそれ以外の部隊では、その程度の教育では足りないために1ヶ月はみっちり文字の勉強を行う。飛行部隊ではこれに加えて計器の読み方についても教えなければいけないから、厄介であった。一応計器盤のハルケギニア語版に交換しつつあるが、いまだ全面交換には至っていない。

もつとも、この問題は最近になって教える側が慣れたこともあって、大分改善されている。菅野中佐や若井少尉たちにとってそれ以上に頭が痛い問題があった。

「とにかくさ、機材の不足が深刻だよ。まさかいきなり練習生を単座の戦闘機にさせるわけにはいかないし。まあ例え副操縦装置付きの99襲にさせるってわけにもいかないけどね。」

若井がそうぼやいた。彼らにとってなにより頭の痛い問題が練習用機材の不足であった。

これは旧日本陸海軍でのことであるが、当時の航空機パイロットは練習生になるとまず地上での訓練や講義を受ける。これは義勇軍でも同様である。

その後、練習機での実習に入るわけだがこの時使うのは初等や中等と頭についた練習機であった。これらは概して複葉の低速機であ

る。練習生たちはとりあえずこれらの翼で空を飛ぶ勘を掴むのである。

そして飛ぶということに慣れたところで、高等練習機や2線級に格下げされた実戦機に乗り込んでより本格的な訓練を行い、晴れて一人前のパイロットになったのである。

しかし義勇軍には現在のところ初等練習機はトリステインの飛行場に配備されているP o - 2型複葉機1機しかない。(T 6型機を初等に位置付けるなら2機) しかも使い勝手が良いことから、現在は臨時雇い飛行兵と言うべきシエスタ特務兵長の事実上の専用機となっている。

なおこの機については、その後シエスタが転科訓練を受けて愛機をゼロ戦に変えたので練習機の任務に復帰したが、それでも1機では出来ることに限度がある。

かと言って、副操縦装置が付いているとはいえいきなり高速の9式襲撃機や今回手に入れた「ドントレス」を使ったら、それこそ事故を起こしかねない。

現在はグライダーなどでお茶を濁しているが、早く本格的な初等練習機が欲しいのが、教官任務に就いている者たちの本音であった。

才人は若井に、先ほど才吉から聞いた話をしたい衝動にかられたが、軍機密と言われたので何とか思いとどまった。だから、彼の言葉に対して「そうですか。」とか「なんとかしないとイケませんね。」と答えるしかなかった。

さて、才吉が才人に言った話とは一体どのようなものであったのか？時系列は数時間ばかり遡る。「コルセア」の試験飛行を終えた才人は、その話を突然聞かされた。

「実はな地球の才蔵からメールが来てな、以前から頼んでいた飛行機の発注に成功したらしい。」

その言葉に、才人はそれこそ飛び上がらんばかりに驚いた。

「は！？飛行機の発注！？一体どうやってそんなことしたのさ！？もしかして前に零戦を造ってくれたところ？」

最近になって、自分の身内が随分非凡であることはわかっていたつもりだったが、まさかそんなことまでしているなど、全く想像すらしていなかった。しかも自分の気付かない間に。

「いや、そこは大企業だから機密保持の点から今回はやめた。」

「じゃあ、どこで？」

才人は首を捻った。

「そう驚くことじゃないぞ。大分落ちぶれてはいるが、日本の航空技術産業は死んではない。ジェット戦闘機は無理でも、旧式のレシプロ機を製造できるくらいの会社なら探せばそれなりにある。今回製造を引き受けてくれたのもそういう会社でな、元々はセスナ機をライセンス生産したりしとったらしいんだが、最近は不況で経営が危なくなっとならしい。だから今回の発注に関しても喜んで引

き受けてくれたそうさ。」

才人は啞然としてしまった。

（俺の知らないところで、この人たちは一体何をやっているんだ！？）

以前から自衛隊の中古武器を手に入れてくるなど、かなり怪しい人たちとは思っていたが、まさか自前で飛行機を発注するなど予想外もいいところである。

「曾爺ちゃん。いまさらながら聞くけど。あんた何者？」

すると、才吉は不敵な笑みを浮かべた。

「ただの爺^{おや}だよ。ちょっとばかしフロンティア・スピリットを持っ
たな。」

才人はそれ以上聞くのはやめることにした。というか聞いても無駄
と思ったのだ。だから話題を変える。

「ところでさ、その会社大丈夫？まさか情報が漏れたりしないよね
？」

「安心しろ。しっかり守ってくれるそうさ。それどころか俺たちに
積極的に協力してくれるそうだな。自分たちで新しい飛行機を設計
したいとまで行ってきたぞ。」

（うわーお・・・）

才人はもう呆れてしまった。世の中物好きな人もいるものだ。

「それでどんな飛行機を何機発注したの？」

「ああ、一応まだ予定の段階だが、ゼロ戦の52型を4機と、93式中間練習機、つまり「赤とんぼ」を4機だ。」

その答えに、才人は拍子抜けしてしまった。

「え？ たった8機だけ？」

「まあ、飛行機の製造会社と言っても町工場に毛が生えた程度の所だからな。それに10機も20機も発注してみる、製造会社はともかく、外部から怪しまれるだろうが。今回の発注だって、表向きはアクロバットチーム用の機体ということにしているんだぞ。」

「ごもつともな話である。」

「なるほどね。」

「まあ、そう言うことだ。とりあえず、「赤とんぼ」の生産を優先してもらうことにしたから、来月にはこっちに運んでこれると思うぞ。そうすれば、パイロットの養成もかなり進捗するはずだ。」

実際、彼の言う通りになるのだがこの時点ではまだ未来の話であった。

「とにかく、戦力の整備を急がないとな。最近ではガリアだけではなく、ゲルマニアやロマリアの動きも気になる。」

才吉がいつになく真剣な表情で言った。

「やっぱり戦争になるのかな？」

才人が疑問形で言うと、才吉は断言した。

「なる。今の状況が劇的に変わらない限り、絶対にな

戦力拡充（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

さて、この小説は一応ゼロの使い魔とその他のファンフィクションになっております。実際、他の作品をモチーフにしている点は多々あります。例えば、地球から断続的に物品と技術を持ち込むのは、佐原晃先生の「迅雷計画」を元にしています。また、破天荒老人才吉は林譲治先生の「興国の楯」に登場するキャラクターをモデルにしています。

さて、次回は2週間後に話が飛ぶ予定です。いよいよ現在原作でいろいろとやっているあの人が登場します。

ヴィットーリオ来訪 1

その日、トリステイン王国首都のトリスタニアは久しぶりの熱狂に包まれていた。なぜなら、ハルケギニアの最高峰の地位にいと見える現ロマリア皇国教皇のヴィットーリオが訪問してきたからである。

正午過ぎ、船の着いたラ・ロシエールからやってきたヴィットーリオを、ルイズは初めて着る代王用の正装を着こんで出迎えた。彼女の正装は基本的にアンリエッタが着ていた物と同じだが、ただ1つだけ違って王家の百合の紋章と並んで、ヴァリエール家の紋章が入っていた。

かつてのヨーロッパ同様に一神教であるハルケギニアでは、ブリミル教のみが信仰され、その総本山であるロマリアと教皇が何者よりも強い権威を持っている。そのため代王であるルイズも彼を城の上座に迎え、恭しく接することとなる。

音楽隊が音楽を奏で、近衛各部隊が整列して出迎える中、ヴィットーリオを乗せた馬車が城内に入る。彼が馬車から降り自分の所までやってくると、ルイズは礼法に則って挨拶する。

「ようこそ聖下、トリステインへ。全ての国民を代表して、このルイズ・フランソワーズ・ラ・ヴァリエール、心より歓迎申し上げます。」

ルイズにとって初めて接待することとなった人間は、ハルケギニアでもっとも偉い人間であった。そのため、ルイズは内心これまでにないほどに緊張していた。

「歓迎感謝いたします。代王殿下。」

未だ30にもいかない若い教皇は、まるでルイズの内心に気づいているかのように笑顔で優しく言葉を掛けた。

「それでは、こちらへ。」

ルイズはヴィットーリオを城の中へと案内した。この後彼を迎える様々な式典が行われることとなっていた。ルイズはヴィットーリオの前を緊張しながら歩く。

その後ろを歩くヴィットーリオの後ろにはお付きの人間が何人もついて歩いて行くが、その中に護衛にも雑務を行うとも思えない青年が1人いた。

ヴィットーリオが彼に何事か囁いた。まるでルイズ、それどころか他のお付きの人間にも気づかれないように。

「彼女がそうなのか？」

「はい。情報に寄れば、彼女の使い魔は『ガンダールヴ』に間違いありません。ですから彼女は十中八九『虚無』の担い手です。」

ルイズが聞いたら目をひん剥きそうな会話をする2人。

「なるほど。しかし、その使い魔の姿が見えないようだが？」

彼の言うとおり、ルイズはこのとき使い魔（才人）を連れていなかった。

「実は今回の『ガンダールヴ』は平民で、しかもあちらの世界の者だそうです。」

その青年、チェザーレは今日トリスティンの熱心なブリミル教の信者（あるいは工作員とも言う）から手に入れた情報をヴィットーリオに喋った。

その言葉にチェザーレが少しばかり怪訝な表情をして言った。

「それと使い魔の姿が見えないことに何の関係があるのだ？」

「実は・・・あ、それについては後ほどお話します。」

チェザーレが急に会話を打ち切った。もともと、ヴィットーリオもその理由をすぐに理解できた。だから一言彼にこう言った。

「ああ。よろしく頼む。」

2人の会話が終わらぬうちに、一行は式典の会場となっている部屋に着いていた。そしてルイズが彼らの方へ振り返った時には、チェザーレは既にヴィットーリオの傍を離れていた。だからルイズが彼らの会話に気づくことはなかった。

「さあ聖下、こちらへどうぞ。」

「ええ。」

先ほどの会話の事など億尾にも出さず、彼はルイズに促されて部屋の中へと入っていった。

さて、ハルケギニアの権力を持つ人物に噂されていた才人はと言つと、コルベールとともに、ミライの街にいた。

義勇軍の基地の傍につくられたミライの街は日々発展を続けている。何せ他の領地に比べて遙に安い税金で、さらに平民とメイジを平等に扱っているのだから人気があつて当然だった。さらに地球から持ち込まれた物品の取引や、義勇軍用の工場もあり、それらが新たな雇用を創出していた。人が集まらない筈がない。その街の外れに2人はいた。

「いやあ才人君、ついにここまで来たね。」

久しぶりにトリステイン国内へ帰ってきたコルベールが感無量で言つた。

「ええ。けど、たった2ヶ月で造り上げてしまうなんて、魔法の力もすごいですね。」

先日ラ・ロシエールで船舶用蒸気機関の成功を祝つた時と同様、満面の笑みを浮かべてコルベールに言う才人。

彼らの目の前にあるのは煙突から煙を吐き出し、レールの上に乗せられた鉄の塊だった。それはまさしく地球で言う所のSL蒸気機関車だった。もちろん、ハルケギニア最初の鉄道である。

ハルケギニアでの蒸気機関車の開発は、才吉の提案の元かなり早い時期から始められていた。しかしながら、その後は本格的な開発

には着手できないままだった。模型レベルでの実験は比較的早く終わったが、その後鉄道して開通させるまでが大変だったのだ。未知の交通手段には誰もが拒否反応を示したからだ。

ミライの街からトリスタニアまでの路線を敷くことになったが、トリスタニア付近の土地は王家直轄領で許可が必要だった。しかし、政府の役人達は色々な理由をつけて建設を許可しなかった。才人は映像や模型を使って根強く役人達を説得し、さらにアンリエッタ女王の協力もあって、なんとかトリスタニアとミライの間5kmの敷設許可を得たのだった。

ここまでの過程はそれこそプロジェクトX並だった、と言うのは才人の後日談である。

その後レールの敷設や機関車の製造が急ピッチで進められた。機関車の製造は地球から図面を取り寄せて造ったから比較的簡単であった。モデルとなったのは日本の9600型蒸気機関車だった。

レールの敷設に関してはもちろん重機械など用いる事が出来ないから、王宮に仲介を依頼して土系統のメイジに協力してもらった。そこでわかったのは、盛り土などの作業においては重機械よりも魔法の方が効率が良い部分もあるということだった。

約5kmの線路を敷設するのと駅の建設工事などに2ヶ月掛け、そして今日まで試運転を繰り返していた。

ちなみに今回造った鉄道は広軌で、単線である。中間地点に交換所を兼ねた駅が設置され、機関車、貨車、客車合わせて30両ほどの車両が造られた。

「この鉄道がハルケギニア中に広がれば、人々の生活は大きく変わることになるんだろうね。」

今まさに出発しようとしている1番列車を見ながら言うコルベール。その言葉に才人も頷いた。

「地球でもそうでした。鉄道の発明は物流に革命をもたらしましたから。けど、本当の始まりはここからです。」

才人とコルベールは鉄道の価値をわかっているから良いが、ほとんどのハルケギニア人にとって鉄道など未知の物体である。そうした人々に理解してもらい、鉄道を広げるにはかなり時間を要するかもしれない。

「ああ、だが苦勞するだけの価値がある物と私は信じているよ。」

コルベールが目を輝かせて言う。実際、鉄道がハルケギニア中に広がれば、馬車が主流のハルケギニアの交通に革命を起こすことはまず間違いなかった。

ここの所、蒸気船の運転やら鉄道の試運転の監督やらと、かなり忙しく動き回っているコルベールであったが、疲れなど全く見せず、その目は常に未来へと向けられていた。

と、そこで才人が腕時計を見て言った。

「時間です先生。」

「おお、それじゃあ我々も乗り込もう。」

2人はトリスタニアへ向かう一番列車に乗り込んだ。

ヴィットーリオ来訪 1（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

今回鉄道に関する描写を入れましたが、これは作者がミリタリー
おたくであり、さらに鉄道おたくでもあるからです。

ヴィットーリオ来訪 2（前書き）

読者数が10万を突破しました。本当にありがとうございます。

それと、2人のキャラがなんか変わってしまったてすいません。

ヴィットーリオ来訪 2

王宮での歓迎式典の間に設けられた休憩時間、あてがわれた豪華な部屋の椅子に座ったヴィットーリオは、昼間廊下で話を聞いた男、厳密には青年から話の続きを聞いていた。

「なるほど。その使い魔、『ガンダールヴ』は『東方義勇軍』で働いているのか。」

「はい、聖下。しかもタルプにおける戦い、ならびにアルビオン解放戦争においても武勲を立てたそうで、前女王陛下から男爵の爵位を送られています。ちなみに父親と曾祖父も同様に戦功を上げたので、それぞれ伯爵と公爵です。」

青年、ヴィットーリオの使い魔である『ヴィンダールヴ』ことチエザーレはトリステイン内に潜らせている情報員からの報告を伝えた。

「それだけの功績を立てておきながら、平民出であることを理由にルイズ代王との結婚が認められていない。それどころか、使い魔として城内に入ることさえ難しい。というわけか。」

ヴィットーリオがチエザーレの言葉を引き継ぐ形で言った。彼がルイズや才人に関する情報に触れるのは何も今回が初めてではない。既に数回ロマリアで、情報員からもたらされた情報を聞いていた。

しかしながら、『東方義勇軍』とトリステイン、アルビオン両政府が肝いりで作った諜報機関であるトウ機関に比べて、ロマリアの諜報組織は規模も小さく（厳密には組織としての完成度が低いとい

うこと）、またハルケギニア全体に網を広げているが、情報伝達のスピードが悲しいほど遅かった。だからヴィットーリオが今までに聞いた情報も、内容的にはバラバラだった。

それが今回、彼がトリステインを直接訪問することで大量かつ確度の高い情報が得られたのであった。

「それで、その『東方義勇軍』は我々に協力して戦ってくれそうか？」

その質問に、ジュリオは首を振った。

「残念ながらその望みは薄いです。彼らはトリステインとアルビオン両政府と協定を結び、両国が侵略を受けるか、災害に遭うなどして要請が来ないと戦わないそうです。現に彼らはその協定を忠実に履行しています。我々が聖戦に協力せよと言っても、協力はしないでしょう。」

その言葉にも表情一つ変えず、ヴィットーリオは続けて言う。

「だが彼らの武器はいずれも強力なのだろう？」

「はい聖下、私自身彼らの観閲式に出席して見ましたが、どれもすばらしいものばかりでした。風竜より速く飛び、なおかつ魔法以上の射程を持つ銃を装備した飛行機械。厚い鉄板に覆われ、ゴーレムを一撃で吹き飛ばすであろう大砲を持つ鉄の車。さらに歩兵の装備も我々とは比べ物にならないほど強力です。平民の兵士でも、十分メイジと戦えるでしょう。」

ジュリオの言葉に、ヴィットーリオは少しばかり呻いた。

「君の私見で良い。もし彼らと戦ったら勝てるかね？」

すると、またもジユリオは首を振った。

「最終的に勝てると思います。しかしながら、それはこちらがいかなる犠牲も厭わないならばです。彼らは詳しくは知りませんが、大量に弾丸や砲弾を製造して備蓄しております。例え我らに『虚無』の力があつたとしても、あれだけの力を行使されれば危険です。・・・やはりなんとか懐柔するのが得策かと思います。」

ロマリアにしてみれば、『東方義勇軍』に攻撃を仕掛けるだけの理由を挙げるだけなら、すぐにでも出来る。なにせ彼ら自身が異世界からの人間だから、始祖を信じず冒涇しているなど言えば良い。しかし、義勇軍の戦力が充実しつつある現在、そんなことするのは無謀であつた。なにせ使っている兵器の多くが、魔法とは比べ物にならない威力を持っているのだ。

ヴィットーリオは報告を聞き終えると、しばらく何かを考えていたようだが、不意に何かを思いついたようであつた。

「とにかく、せつかくトリステインに来たのだ。ここは・・・」

翌日、ヴィットーリオは予定されていたトリスタニア各所にある教会や修道院を一日かけて回ることを、半日で切り上げた。そしてその後向かった先はというと・・・

「いやあ、このように教皇聖下と御一緒出来るなんて、大変光栄です。」

トリステイン科学技術研究所所長であるコルベールが笑顔でそう言つと、ヴィットーリオの方も満足そうに返した。

「いえいえ、こちらこそ急な頼みにもかかわらず、答えていただき感謝しています。」

ここは昨日開通したばかりのトリステイン―ミライ間の鉄道、そのトリステイン発ミライ行きの混合列車（旅客と貨物が同時に連結されている列車）の2等車の車内である。

現在このトリステイン中央鉄道トリスタニア本線の旅客列車には3等と2等の客車しかない。いずれも固定クロスシートの向かい合わせ型座席で、3等が木製、2等がカバー付きとなっている。その1席にヴィットーリオ、チェザーレが、その向かい側にコルベールとルイズが座っている。また通路を挟んで反対側の席には才人が茶色の義勇軍の制服を着込んで座っていた。

なんで今このようなことになっているかという、これは昨日にまで話を遡らせなければならぬ。

昨日の昼、ジュリオからの報告を聞き終えたヴィットーリオは、そのまま予定通り次の歓迎式典に参加した。しかし、その終わりにルイズに次のように頼んだ。

「明日の教会や修道院の視察を予定より早く切り上げ、『東方義勇軍』の基地を視察し、出来るなら責任者と話をしたいのですが。」

最初この提案に、ルイズは不信感を持った。確かに『東方義勇軍』は先のアルビオン解放戦争で大活躍はしている。しかしその実態は外国人を中心に編成された、まだまだ規模もそんなに大きくない傭兵部隊みたいなものだ。彼らの活躍を直に見たトリステインやアルビオン政府の重臣ならともかく、本来ハルケギニアのトップであるロマリアの教皇がわざわざ見たがるとは思えない。

だからルイズは彼に問うた。

「別に宜しいですが、ロマリアの教皇聖下がたいして規模も大きくない一軍隊の基地を、わざわざ訪問する理由をお聞かせ願えるでしょうか？」

すると、ヴィットーリオは笑って答えた。

「何も私はただの好奇心や下心からこのようなお願いをしているわけではありません。聞くところによれば、タルブにおける『レコン・キスタ』迎撃戦やアルビオン解放戦争において、『東方義勇軍』は決定的な働きをしたといえます。つまり始祖より賜りし尊い王権を守りきることが出来た立役者となります。その彼らに、私自身訪問してお礼を言うのが、道理だと思ったのです。」

なるほど、確かに十分な理由である。しかしながら、ルイズの心の中には何かしら引つ掛かるものがあつた。

彼女自身は別にブリミル教を貶めたり、批判するような考えはない。だが、才人らと付き合い、地球へ行ったこともある彼女には、最近宗教に対する疑念のような気持ちが生まれつつあつたのだ。

しかしながら、別に断る理由もないのも事実である。

「分かりました。急なことではございますが、やれるだけやってみます。」

「よろしく願います。」

その後ルイズは、重臣たちを集めて至急明日のスケジュールを変更するよう命令した。また、『東方義勇軍』に電話して（基地内で用いられているのを除けば、トリステインに存在する今のところ唯一の電話）ヴィットーリオからの要請を告げた。

応対した才人の父親である才助はこの申し出に驚きはしたが、受け入れた。そして先ほどのシーンに戻るわけである。

ちなみに、馬車ではなく列車で移動しているのは、これもヴィットーリオがジュリオから話を聞いて興味を持ったからである。

ヴィットーリオ来訪 2（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

夏休みが残り2週間を切り、復習に入ろうかなと思つ今日この頃。

ヴィットーリオ来訪 3

「なるほど、この列車という乗り物は魔法ではなく、水と火の力で動いているんですね？」

ヴィットーリオが向かい側の席に座ったコルベールの説明を聞いて尋ねると、コルベールは頷く。

「その通りです聖下。この水と火の力、我々は蒸気機関と呼んできますが、この仕組みは試験段階ですが船にも使っております。また車輪の下に敷かれているレールの上を走るおかげで、馬車とは比べ物にならない量の荷物を一気に運ぶことが出来ます。レールの上しか走っていけないというのが欠点ですが。」

コルベールが自慢げにヴィットーリオに蒸気機関車や鉄道の仕組みについて説明していた。ヴィットーリオは最初蒸気機関車魔法の力を一切使っていないことに驚いていたが、コルベールの説明を受けて納得していた。

「しかしこれだけの物を造り上げるとは、トリスティンの技術力は中々素晴らしいようですね。」

「実はこの鉄道の技術はそちらに座っている才人君ら『東方義勇軍』の協力で完成したものです。彼らの国の技術力は本当に驚くべきほどレベルが高いのです。」

コルベールが視線を才人の方へ向けながら言う。

「ほう、そうだったんですか。いやはや、『東方義勇軍』の武器は

大変強力という噂はロマリアにいた時にも耳に入ってきましたが、
どうやら事実であったようです。彼らの指揮官に会うのが楽しみです。」

笑顔を崩すことなくそう言ったヴィットーリオを、才人はちらつと見た。

才人は彼がただ義勇軍の基地を見学しに行くとは考えていなかった。その笑顔の奥底に、何かとてつもなく大きな野望を持っているように感じていた。彼もルイズと同じく、どうして彼のような人間が急に『東方義勇軍』を訪れるのか不審に思っていた。

もつとも、そんなことを考えているとは表情に出すことはせず、才人はただじつと窓の外に広がる車窓を見ていた。

ミライ到着まで後数分となった時、彼の隣に一人の人間が座った。

「やあ、さつきからずっと黙っているけど、どうかしたのかい？」

才人は声を掛けてきた人物を見る。視界内に入ってきたのは、自分やルイズと同じ年ぐらいの青年だった。端正な顔立ち、そして両目の瞳の色がそれぞれ違うのが印象的である。

「君は確か聖下のそばにいた？」

するとその青年は頷いて言った。

「僕はジュリオ・チェザーレ。ジュリオって呼んでくれ。君の言うとおり、一応神官で聖下の付き人みたいなことをしている。以後よろしく。」

ジュリオがまず名乗る。才人もすぐに名乗り返した。

「俺は平賀才人。見ての通り『東方義勇軍』の軍人さ。こちらこそよろしく。」

才人が無愛想に言う。

「随分と無愛想だな君は、何か僕に気に入らないことでもあるのかい？」

（ああ、そもそもあの聖下につかず離れず立っている人間に警戒心を抱くなつて方が無理だぜ。）

心の中でそう呟く才人。

「まあ気に入らないなら気に入らないで結構だけど、会話ぐらいなら別に良いだろ？」

「ああ。」

それくらいなら付き合っても構わないだろうと思い、才人は彼の会話の相手をすることにした。

「ありがとう。君は東方から来たんだよね？どうしてトリステインとアルビオンのために戦っているんだい？」

いきなりされた予想外の質問に、才人は少し戸惑ってしまった。

「は？・・・え、そりゃあまあ、トリステインとアルビオンには色

々と世話になっているし、守りたい人もいる。だからかな？」

実際この言葉に嘘偽りはない。才人を含めて『東方義勇軍』じゃトリステインとアルビオンの政府に随分と助けてもらっているし、また才人はルイズをはじめこちらの世界で出会った人を、いざとなったら守ってやりたいと考えていた。

「なるほど。どうやら、ただの使い魔としての忠誠から戦っているのではないことは本当のようだね。」

彼のその言葉に、才人はギョツとした。

「お、お前どうしてそのことを！？誰かに聞いたのか？」

才人に親しい人間はともかくとして、初対面でロマリアから来たジュリオが、才人が使い魔であることを言ったのである。才人が驚いて当然だった。

「いいや。聞かなくてもわかるよ。君の左手を見ればね。」

ジュリオが才人の左手の方を見ながら言った。

「左手・・・そうか、ルーンか。」

と才人は自分で言ったものの、どこか引つ掛かるものがあつた。だが口にも表情にもそれを出さなかった。

「そういうこと。僕も一応神に仕える者の端くれだからね。古い書物なんかも観たりするから、君のそのルーンを見てすぐに君が使い魔であることはわかったよ。」

「ということは、俺のルーンの意味も知っているってことだな？」

今度は才人が聞き返す。

「ああ。君のルーンは『ガンダールヴ』。あらゆる武器を使いこなした始祖ブリミルの伝説の使い魔と同じだ。」

ここでようやく、才人はヴィットーリオとジュリオの今回の行動の真意が少しばかりわかったように思えた。才人は彼らの今回の訪問は、『虚無』目当てでないかと考えたのだ。

「もしかして、聖下とお前が基地に行くのは俺目当てか？」

才人が質問すると、ジュリオは不敵に笑いながら言った。

「おやおや、今回の『ガンダールヴ』は中々感が良いようだね。けど、それは半分正解で半分外れだよ。」

「何？それはどういう意味だ？俺以外に何が目的なんだ・・・まさか、いや、けどそんなこと！」

才人はジュリオの言葉で、彼らのもう半分の目的に思い至った。つまりは、彼らが『東方義勇軍』の力を求めているのではないかと。

実際、これまでもトリステインやアルビオンの貴族や役人が『東方義勇軍』に接触し、その力を頼ろうとしたことはあった。現にヴァリエール公爵や、銃士隊に対して義勇軍は支援している。

だが、それらはあくまでトリステインとアルビオン内でのことだ。

外国であるロマリアの人間がそんなことを考えるなんて、如何に才人でも考えもしなかった。

ちなみに、彼が随分と頭を巡らせられるようになったのも、才吉や才助の教えの賜物だ。

「じゃあ、それなら・・・」

才人が再びジュリオに話しかけたとき、列車が速度を落とし始めた。才人が外を見ると、今まさにミライの駅のホームに入線したところであつた。

「どうやら時間切れのようだね。・・・けど安心するがいい、会話をするぐらいの機会ならすぐにまたやつてくるさ。」

そう言うとは彼は立ち上がり、ヴィットーリオの方へと移動した。まもなく列車は完全に止まり、ヴィットーリオとジュリオはコルベールに案内されて車端部にある扉のほうへと歩いて行った。

才人も少し遅れて歩き始めたが、彼らを見る目は険しいものへと変貌していた。

（もしかして、ロマリアの方がガリアより強敵かも。）

才人の心中に、そんな考えが芽生えていた。

ヴィットーリオ来訪 3（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

ヴィットーリオ来訪 4

「ロマリア教皇、聖エイジス32世聖下に対して、捧げ銃！！」

指揮官である士官の命令によって、純白の礼装に着替えた兵士たちが直立不動の姿勢のまま、義勇軍正式装備のT1型小銃を両手で持ち上げる。

「敬礼！！」

小銃を持っていない兵士たちは、一斉に敬礼をした。その兵士たちの前を、『東方義勇軍』トリステイン方面軍司令官、平賀才助中将に案内されたヴィットーリオが歩いていく。

この少し前、彼はミライの駅で才助の出迎えを受けていた。そして今、義勇軍将兵の歓迎を受けて基地の中へ入ってくるところであった。

義勇軍では王族や外国からの来賓を見越して、こうした歓迎の式典に対するマニュアルは準備されている。だから昨日ルイズから才助に急な要請があったにもかかわらず、スムーズにことを進めることが出来た。もちろん、こうした任務を行うのは各部隊から選抜された優秀な兵で、この頃はまだ彼らにはその意識は小さかったが、この後この任務に就けることは非常に名誉なことでとされるようになる。

その歓迎を受けて基地に入ってきたヴィットーリオの後ろには、トリスタニアからついてきたルイズと才人が歩いていた。

「それじゃあ、やっぱりこの訪問には裏があつたのね？」

ルイズが才人にしか聞こえないよう、小声で言った。才人もそれに対して小声で返答する。

「ああ、あの教皇聖下は俺とお前の力や、この義勇軍の力を頼りたらしい。けど、一体どうしてだ？なんでロマリアの人間が俺たちに頼ろうとするんだ？」

その答えは、ハルケギニア人であるルイズはすぐにわかった。

「多分聖戦のためね。」

「聖戦・・・なるほど。」

才人もこの世界に暮らして既に8ヶ月近くたっている。だからブリミル教の教えにある聖戦の意味ぐらいわかる。すなわち、聖地とされる場所のエルフからの奪回である。

「虚無の力に、圧倒的な軍事力である俺たち『東方義勇軍』が加われば、噂に聞くエルフの力にも対抗できるってことか。」

「多分そうだと思うわ。じゃなきゃ、平民軍隊って今でもバカにする人がそれなりにいるこの軍をロマリアの教皇聖下が見に来るなんて有り得ないわよ。」

才人の言葉に、ルイズが頷きながら言った。

「けどどんなに聖下が頭を下げた所で、俺たちは動かないよ。」

しかし、ルイズはそれに対して異議を唱える。

「それはどうかしら。もし聖下御自身のお願いを無下に断るなら最悪異端と見なされるわよ。もつとも、この軍隊ならハルケギニア中の軍隊と戦っても勝てるかもしれないけどね。」

ルイズの言葉に、才人は苦笑いした。

「いくらなんでもそれは無理だつて。」

才人の言つとおり、現在の義勇軍の戦力ではハルケギニア中の軍隊相手に勝てるはずがない。

現在義勇軍が持っている戦力はトリスティンとアルビオンの全部隊あわせても3000名弱である。いくら近代的な兵力を有していても、これだけではいずれ物量に押される。もつとも、敵に大出血を強いることだけは確実であるとは言える。

ちなみに、最近になってガリアとの関係がきな臭くなっていることと、アルビオンの政情が安定したために、義勇軍はさらなる拡張と改変に当たっている。

その目玉といえるのが砲兵とロケット砲兵の編成で。前者はゲルマニアで製作中の75mm野砲を専門的に扱う部隊、後者は旧ソ連軍のカチューシャロケットと、旧日本陸軍の対地用ロケット弾を参考にして開発中の多連装（場合によっては単装）対地ロケット砲の運用部隊である。

才吉たちがハルケギニアで最初に作ったのがロケット弾であったために、こちらの研究は比較的容易に進んでいた。

こうした兵器開発等の拡張は、義勇軍にとって大きな戦力増強となったが、一方で管理監督面での人材の不足を招いていた。これは、才吉や才助の領地の管理面でも起きている頭の痛い問題であった。特に最近になって人口増加が著しいミライの街の行政管理と、開通させた鉄道会社の運行ならびに運営に必要な人材確保は急務だった。

一応このハルケギニア世界にも、そうした人材はいないわけではない。特に商会にはそう言ったことに長けた人材はそれなりにいた。だが逆に言えばその貴重な人材をそうそうに商会が手放すはずがなかった。

才吉も才助も高給を出すなどして呼び込もうと必死だが、教育環境が整っていないこのハルケギニアでいきなり供給量が増えるはずもなく、この問題に取り組み始めた頃は本当に深刻な問題であった。

その後、地球からそうした人材をスカウトすることで、この問題は全面解決こそしなかったが、大分緩和している。こうしてスカウトしてきた人材には、定年退職やリストラによって第一線を退いた銀行の会計係とか、元国鉄の機関士だった人間がいる。また借金苦などで地球では生活していけない人もいた。というか、そうした人のパーセンテージはかなり高い。

才人は一体どこから、どのような方法でこうして人材を確保してくるのか最初気になった。明らかに曾祖父や父親の人脈では手に入れないと思える人がいたからだ。

そこで才人が才吉に聞いた所、以下のような方法を探っていると聞かされた。例えば、借金苦の人材を発掘する場合、まず地球にいる才人の祖父である才蔵か、少なくとも才吉の協力者が金融会社の

広告を出す。もちろんこの会社は偽装会社で本気で金など貸しはしない。そしてやってくる人間の中で、比較的方向こうに連れて行ける条件を含み、必要な能力を持っている者の場合には真実を話してスカウトするのである。もつとも、本当に困窮している人にもスカウトを行ったりした。

こうした人たちは大概追い込まれていて、生きていくためならなんでもする系の人だったから、スカウト率はほぼ100%だった。

また才吉や才蔵らの巧妙な所は、警察やライバル業者（つまり本当の闇金業者）に嗅ぎ付けられてもバレないように、役所や広告会社への書類提出をわざわざハルケギニアから来てもらった人間にやってもらっていたことだ。その中には地球観光をしていた菅野中佐も含まれていた。

だからそれからしばらくして闇金業者の摘発のために、役所に書類を提出した人間を警察官が役人に訪ねて似顔絵を描いたところ、太平洋戦争中に戦死した人間にそっくりだったために警察を困惑させたという笑い話もあった。

ちなみにこの時のことを、本人は後に「ボロが出ないかひやひやしたよ。」と語っている。

他の方法も大同小異で、かなり反則的なものであった。そして才人はそれ以上詮索するのをやめた。

閑話休題。

基地内へ入ったヴィットーリオは、車に乗せられて広大な基地内を見て回った。飛行機が納められている格納庫や、戦車やトラック

が並ぶ駐車場、そして演習場では迫撃砲や機関銃の試射を見た。

それら装備一つ一つを見せられるたびに、彼は使い魔のジュリオとともに、表情こそ変えることはなかったが、熱心に説明を聞き、質問をしていた。

その様子を後ろから才人とルイズはただ黙って見ていた。

そして、一通り見終わると、ヴィットーリオは才助と1対1で話がしたいと申し出た。

ヴィットーリオ来訪 4（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

ヴィットーリオ来訪 5

義勇軍司令部にある貴賓室。その椅子に5人の人間が座っていた。『東方義勇軍』トリスティン方面軍総司令官の義勇軍中將の平賀才助。トリスティン王国代王のルイズ。その使い魔であり、才助の息子であり、義勇軍中佐である才人。ロマリア皇国教皇ヴィットーリオ。そしてその使い魔であるジュリオだ。

最初は才助とヴィットーリオの2人のみでの会談になる予定であったが、その後ヴィットーリオがジュリオから進言を受けて、才人とルイズも急遽参加することになった。

全員が椅子に腰掛けたところで、まずヴィットーリオが口を開いた。

「まず、会談の場を用意していただいたことに感謝いたします。平賀將軍。」

彼は頭を下げた。

「いいえ、聖下。こちらこそ、あなたのようなお方と面と向かってお話できる機会が得られたこと、非常に光栄に思っております。」

出だしはどちらとも、常識的な社交礼儀の挨拶からであった。両者とも笑顔を絶やさずにいる。しかしながら、ルイズと才人の表情は険しいとまでも行かないが、少しばかり緊張したものとなっていた。ヴィットーリオが一体どんなことを言い出すのか気が気でないのだ。

その後行われた数分間の話し合いは核心に触れるようなものではなかった。主にアルビオンでの戦闘に関する感謝や、先ほどの基地見学に対する感想であった。

そして会談が始まってから10分後、ついに才人とルイズが恐れていた話題になった。

「ところで平賀將軍。」

「なんでしょうか、聖下？」

出されていた紅茶のカップを置き、表情ひとつ変えずに才助は答えた。

「あなた方は外国人と聞いておりますが、よくこのハルケギニアのために働いているようですね。そこで、全ブリミル教徒を代表してお願いがあります。」

その言葉に、才人とルイズは一気に緊張した。

「聖地奪回の聖戦への協力ですね？」

ヴィットーリオの氣勢を遮るかのように、才助が先に言った。すると、ヴィットーリオは小さく笑った。

「あなた方はすばらしい武器もお持ちだが、頭も大変よろしいようですね。」

「お褒めの言葉をいただき、大変恐縮です。」

「しかしそれなら話が早いです。平賀將軍、是非とも我々とともに聖地をエルフより奪回してもらいたいです。これは全ハルケギニアの民が6000年間抱いてきた悲願なのです。」

冷静だが、先ほどより少しかり力をこめて訴えるヴィットーリオ。しかし、もちろん才助は首を縦には振らなかった。

「残念ですが聖下、我々は聖戦に協力することは出来ません。もちろん、私とて宗教にとつての聖地の重要性は良くわかっているつもりです。聖地とはその宗教を信仰する人にとつての心の拠り所です。その場所を異教徒に支配されているというのはやるせないことです。よう。」

その答えに、ヴィットーリオは表情一つ変えずに反論した。

「そこまでわかっていながら何故ですか？・・・そう、あなたの言うとおり、聖地は我々にとつて心の拠り所です。そしてそれがなき今、信仰は地に落ちようとしているのです。」

その言葉に、才人とルイズは顔を見合わせた。

「平賀將軍、あなたもロマリアに来ればそれを実感できるはずですよ。いまやブリミル教の教えを説き、それを守るはずのロマリアの腐敗は目を覆わんばかりです。神官たちは自分たちの立場を使い、ひたすら権力と富を貪るばかりです。また教徒たちもその神官たちに失望を覚え、信仰の心を失い始めている。その現況は一体どこにあるのか？それはあなたが言った心の拠り所を失っているからに他ならないのです。」

ヴィットーリオは机を乗りださんばかりに・・・と言ったら誇張

になるが、先ほどよりもかなり強い口調で言った。

「その通りかもしれませんが、しかしながらそのために戦争を起すというのは我々とは受け入れられる姿勢ではない。・・・我々がいた世界、おそらくあなた方は我々の正体を多少なりとも知っているでしょう？」

すると今度は才助以外の全員が同時に目を見張った。

「我々の情報収集能力を侮ってもらっては困りますな。あなた方が各地に密偵を差し向けていること、さらに『虚無』について極秘裏に調査していることはすでにお見通しです。」

きつぱりとそう言い切った才助に対して、ジュリオは明らかに困惑した表情を見せていた。常に飄々としている彼にも、あまりにシヨクなことであつたようだ。しかしながらヴィットーリオの方はすぐに表情を元に戻した。

「なるほど、あなた方はとても良い耳もお持ちのようだ。・・・どうぞ、続けてください。」

ヴィットーリオに促されて、才助は話を続けた。

「我々のいた世界では、ユダヤ教という宗教がありました。その教徒たちは聖地を含む元々住んでいた土地を失い、流浪の民となりました。そしてようやくその地に戻ったときには、すでにそこには後から来たイスラム教の人々が住んでいました。その結果発生したのが数次にわたる戦争です。その歴史こそ60年と短いですが、既に数え切れない数の人々が死んでいます。恐らく数万では納まらない数の人々です。その中には何の罪もない女子供が多数含まれていま

す。そしてその争いはいまだに終わっていません。」

「・・・」

才助の言葉に、ヴィットーリオは無言になっていた。

「今話したのはほんの一例です。我々の世界にはその他にも沢山の宗教による戦争が発生しました。ついにはエスカレートして、異教徒に対する自爆テロを始める者までいました。これは自らの体に火薬を巻きつけ、異教徒の中に突っ込み、火薬に火をつけるという物です。」

その説明に、才人は嫌なものを思い出した表情をし、ルイズは想像してから恐怖に襲われた。いくら熱心なブリミル教徒でも自らの死を前提に異教徒に突っ込むことなど有り得ない。

「我々は恐れているんです。この世界は我々のいた世界とは大きく違いますが、歴史の流れなどで類似性のあるところがあります。もしかしたら我々の世界での悲劇がこちらの世界でも現出するのではないかと。・・・宗教は人を救い、その心を安らぎへと導くものかもしれません。しかし、宗教のために人が死ぬようになったらそれは一体何なのでしょう？ 私たちの世界では、宗教をアヘンだと言った人もいます。アヘンとは吸えば心地よく感じますが、吸い続けると中毒症状を起こし、人を廃人にしてしまう薬のことです。・・・私はブリミル教を尊重しますし、否定するつもりはありません。しかしながら、その教えによって多くの人を死に至らしめることになれば・・・それはアヘンと同じではないでしょうか？」

才助の言葉を、才人とルイズは冷や冷やしながら聞いていた。特にルイズは、本気でヴィットーリオが怒り出し、異端詰問をするの

ではないかと思った。

それに対して、ヴィットーリオはしばらく何か考えていたようだが、おもむろに口を開いた。

「いやはや、中々面白いことを聞かせていただきました。やはり異世界の人間の考えることは、我々とは一味も二味も違う。そうは思わないかね、ジュリオ？」

「え！？はい、聖下。」

ジュリオは少しばかり困った表情をしながらも、相槌を打った。

「平賀將軍、中々面白い話でした。ところで、先ほどあなたの世界の歴史と我々の世界に似ている部分があるといいましたが、そのことについてもっと詳しくしりたいのですが、よろしいかな？」

すると、今度は才助が困った表情になった。

「よろしいですが、数時間は掛かりますよ？」

「結構です。是非ともお聞かせ願いたい。」

この後、才助、さらに一部才人も混じっての地球に関する説明は2時間にも及んだ。

ヴィットーリオ来訪 5（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

作者近況。ようやく13巻を読破し、明日ぐらいには14巻を読破する予定。既に15巻も買いました。しかしながら明日から大学もスタートします。作者としては既にこのシリーズの読者数が11万人を突破している状況から頑張りたいところですが、そろそろスキルも限界に・・・誰か助けてください！！

ヴィットーリオ来訪 6（前書き）

唐突ですが、第3部はここで切ります。以降は第4部に切り替えます。

ヴィットーリオ来訪 6

才助と才人の話を一通り聞き終えたヴィットーリオは、特に感想などは言わず、ただ「大変興味深い話でした。」という簡単な感想と、礼を言ったのみだった。結局、その後彼は特に何かを要求することもなく、時間が来ていることもあり、宿泊地であるトリスタニアに戻ることもなった。

「それでは聖下、この先の道中の無事をお祈りさせていただきます。

「
ヴィットーリオ一行は、帰日も鉄道を使う。馬車がないためだった。」

往路の列車は急だったこともあり、定期列車に乗ってきたが、復路は彼のために一編成の臨時列車（お召し列車）が仕立てられた。

その列車の窓越しに、敬礼しながら才助が言った。その隣には同じように敬礼する才人の姿もあった。

「こちらこそ、今回は大変有意義な時間を過ごせました平賀將軍。あなたとはまた会いたいものです。それに、アルビオンで指揮を執っていらっしゃるあなたのお爺様にも。」

そう彼が言った直後、車掌が笛を鳴らし、汽車が汽笛を鳴らした。発車の合図である。

「
それではルイズ殿下、コルベール所長。聖下のことお頼みします。」

「はい。」

2人は才助の言葉に頷いた。

まもなく、列車が動き出した。才人と才助の2人は列車が駅の構内を出て見えなくなるまで何も言わずに見送った。

そして列車の姿が完全に見えなくなり、汽笛も聞こえなくなったところで、才人が口を開いた。

「父さん。」

「何だ？」

「聖下は俺たちの話をただ黙って聞いていたけど、結局どう思ったのかな？」

ヴィットーリオとジュリオは才助と才人の話をただじつと聞いてただけで、意見も感想も言わなかった。その一方で、自分たちの聖戦についてもその後は何も言わなかった。才人にはそれが気になつて仕方がなかった。

「さあな、何も感じなかったのかもしれないし。感じてても考えを変えなかったのかもしれない。もしかしたら自分の考えを変えたかもしれない。俺にもわからない。ただわかるのは、彼らがすぐには敵にならないということだろう。」

それについては才人も同意見だった。今日の基地見学でヴィットーリオは義勇軍の持つ武器の力を改めて認識したはずだ。今すぐに

こちらを敵に回すような愚は犯さないだろう。

一方で、宗教に関して今日あれだけのことを言ったのである。その中には彼らの言うところの異端詰問に掛けられてもおかしくない内容が混じっていた。彼らが自分たちを異端であると明言してもおかしくないことだった。

しかしながら、これは前々から才人たちも感じていたことであるが、プリミル教は自分たちの中にいる異端には容赦しないが、ハルケギニアの外から来た外国人の異教徒に対する扱いがよく定まっていないことだった。今回この事を才助がヴィットーリオに聞いただしたところ、実際のところそうであった。

このお陰で、才人ら『東方義勇軍』はこのハルケギニアの地に溶け込めることが出来たのだろう。また、今後もその立場はよっぽどのがないかぎり安泰とも思われた。そしてそれはロマリアがこちらを異端とみなして手を出すことを防ぐ一手となる。

「まあ、とにかく今回の件でロマリアが本気で聖戦を考えていることがわかった。また、油断ならない相手であることもな。」

「ああ、あいつらは『虚無』のことも、俺たちが異世界から来ていることも知っていたからね。それに、あの聖下自身が『虚無』の担い手みたいだったし。」

そう言った才人の脳裏に、いけ好かないジュリオの顔が浮かんでくる。もちろん、彼はすぐにそれを打ち消した。

「確か以前ウエールズ国王と会談したとき、『虚無』に関する伝説について聞いたが、それによれば4つの『虚無』が揃ったときに、

『虚無』の本当の力があらわれるとか。今のところその内の2つがわかったことになる。残り2つをロマリアが見つけたら、俺たちのことを無視して本気で聖戦を始めるかもな。」

「そんなことになったら嫌だな。」

もし聖戦など起きれば、『虚無』の力を持つルイズと、その使い魔『ガンダールヴ』である才人は嫌でも戦いに巻き込まれるだろう。こちらの世界に来てからお世話になっているトリステインやアルビオン、そしてそこに住んでいるルイズをはじめとする人々を侵略者から守るならともかく、信じてもない神様を崇める宗教の戦争に巻き込まれ、ルイズをその道具にされるなど、才人は真つ平御免である。

「もちろん俺だって嫌だよ。大切な息子とその嫁さんを理不尽な戦いに出させてたまるか。しかしただ妨害するだけじゃ本当にロマリアを敵に回すからな・・・何か正当な理由を見つけないとな・・・そうなると聖地に関する情報をまず集めて、さらにその地を占拠しているっていうエルフに関する情報も同様に収集する必要があるしうだな。」

才助は早速今後の策を考え出していたが、そこに才人が横槍を入れる。

「父さん、曾爺ちゃんや幹部の皆に相談しないとだめだよ。」

才助が考えているプランを実行に移そうとするならば、義勇軍の^{スパイ}情報収集機関であるトウ機関の大幅な編成替えが必要となる。それは一司令官の裁量で決めてよいものではない。総司令官やその他の司令官たちの同意を取り付ける必要があった。

「ああ。そうになると早めが良いな。早速アルビオンに緊急電を打とう。それに直ぐに向こうへ行けるようにしておかないとな。」

ハルケギニアに直通電話などないから、情報の伝達スピードは現代日本に比べればお話にならないほど遅い。もっとも、ハルケギニアにあるその他の情報伝達手段よりはかなり早いが。

とにかく、こうして義勇軍は新たな目標を定めて動き始めた。それが、ハルケギニアどころかエルフなどを含むこの世界を大きく変えることになるとは知ることもなく。

ハルケギニアは、今は平穏であった。しかしその内部では、各国がそれぞれの思惑を秘め動き始めていた。そしてそれはハルケギニアに鉄の嵐をもたらそうとしていた。

ヴィットーリオ来訪 6（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

4部は作中で何度か出てきたロマノフ公国と「オストラント」号の邂逅、もしくは才人とルイズの結婚式から入る予定です。まだどちらにするかは決めておりません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2884e/>

ゼロ戦才人 第3部 鉄の嵐

2010年10月10日15時07分発行